

血清「コロイドラビリテート」トノ關係、以上二篇より成る、獨文、參考論文、(1)馬腎臟酒精越幾スト豚血清ノ前處置ニヨル異種發生杭血清ノ産出ト該免疫血清、二、三性状ニ就キ、(2)血清反應ニ及ボス「サボニン」ノ影響、(3)「デー」ニヨル實驗的腫瘍發生ニ際シ生體ノ反應力ニ就キ、他に七篇あり。

### 後藤爲次

△金澤市野町五丁目後藤内科醫院あり、院長後藤爲次博士の經營也、嘖々たる打診の好評は、隱然たる一勢力を示すの概あり。學系は新潟醫大の出身にして、内科を以て立ち、金澤醫大にて腸結核の研究を完成して、學位を得たる少壯の名醫博也。研鑽多年の經驗に富み、臨床的手腕圓熟して今は最も得意の時代に在り。

△博士は大正十五年新潟醫大を卒へ、一年志願兵として入營、昭和二年除隊後、金澤醫大内科に入り、大里教授に師事研究すること約六ケ年、昭和七年十二月同大學にて學位を受け、昭和八年一月より開業今日に至る。

△主論文は「腸結核ノ研究」にして、參考論文としては「高山環境並ニ温泉ノ研究」其他五篇あり。

△感想に曰く「現今我國の衛生保健上結核對策程重要なるはなし。但し豫防施設を如何に完全に立案するも、財政之を許るざる時は遂に其効果を收め難し。今此見地に立ちて、比較的實施の可能性に富めるものを求むれば、次の如きか。

- 一 公衆に結核に對する一般的知識を習得せしめ、殊に患者自身に豫防の觀念を深むるの方策を講ずること。
- 一 現在の市町村立の傳染病院を可及的擴張して、平時結核患者を收容する方法を考案すること。
- 一 公立療養所に收容洩れの貧困患者には、其經費の一部を公共團體に於て負擔し、公私立の病院に收容するの案を立つること。

一 貧困なる結核患者に限り、市町村は實費診療程度の救護治療券を發行して、治療を可及的完全ならしむること

一 完備せる國立結核研究所を造り、熱誠なる犠牲的學者を養成し、其生活を保證し、以て結核の治療及豫防方法に専念せしむること。

一 結核研究の犠牲者には國家の名に於て、相當の經濟的及精神的慰安表彰の道を講ずること」云々。以上。

△博士は富山縣の産、明治三十二年生る、當年三十有七歳也。少壯氣鋭、溫厚の紳士にして、學究的好箇の臨床家たり。其の臨床に立つや、終始仁術を以て任じ誠實と親切とを盡す、其の篤き人望を博するも手腕と相俟つて、眞摯なる博士の性格の反映と見るべし。

### 高楠了超

△神戸市平野町三條六六ノ三に自宅開業せる高楠了超博士は、富山縣射水郡榑田村故寺島周山の二男、明治二十二年生にして現姓を冒す。四高を経て、大正六年京都帝大醫科を卒へ、直に助手として島蘭内科に勤め、八年神戸市私立杉田病院長として就任、十年之を辭し京都帝大大學院入學、再び島蘭教授指導の下に内科學を研究し、十四年大學院卒業により母校にて學位を受領す、同年和歌山縣新宮町共立新宮病院内科部長として就任し、次で同病院長たりしが昭和二年病氣の爲辭職す、爾來神戸市に於て開業今日に至る。

△學位主論文「アドレナリン」及「ピロカルピン」注射ニ因ル神經節細胞ノ變化並ニ臟器内神經節細胞ノ交感神經及ビ副交感神經ニ對スル配屬ニ就テ」、參考論文、(1)「マウス」「ヴィタミン」B 缺乏症ニ於ケル神經細胞ノ變化、(2)脚氣並ニ鳩白米病ニ於ケル神經節細胞ノ變化、(3)「ニコチン」注射ニ因ル神經細胞ノ變化等。

### 中山元太郎

△静岡縣大宮町岳南堂病院長中山元太郎博士は、東京市芝區兼房町に本籍を有し、中山弘毅の長男、明治二十六年生れにして、一高を経て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き稻田内科に入る、同十二年十



一月まで勤務、辭職後岳南堂病院長として今日に至る、斯間大正十四年東京帝大より學位を受領す。  
△學位主論文、「糖排出閾ニ就テ」、參考論文、(1)横隔膜「レラクサチオ」ノ發生ニ關スル實驗的研究、(2)線狀體症候ヲ呈スル症例補遺、(3)糖尿病患者ノ糖排出閾ニ就テ。

山縣健二

△宮崎縣肥前町に鈴木病院あり、當地方診療界に於ける隱然たる一大勢力を有す。院長は山縣健二博士にして、其の最も得意とする内科を擔任し、圓熟せる手腕は益々遠近の人氣を吸収して嘖々たる評判を擅にす。加ふるに外科部長として萩崎爲行博士あり。山縣博士は、大正十五年東京帝大醫學部の出身にして、卒業後直ちに同醫學部吳内科教室に入り、昭和七年三月迄研究す、同年四月鈴木醫院に赴任して今日に至る。學位論文「葦皮症ノ發生機轉並ニ其「ピロカルピン」療法ニ就テ」を母校に提出して、昭和七年十二月學位を授與せらる。

△博士は宮崎縣南那阿郡細田村の出身、明治三十三年生る、當年三十有六歳也。少壯氣鋭にして好箇の臨床家たり、其の打診の評判に至りては既に其の地方に喧傳し、今や壯來圓熟の域に入りて益々特技を發揮するの全盛時に在り。賦性濃厚篤實、清淡にして名聞を求めず、謙抑克己己を持し人を愛す、其の態度の紳士的にして眞摯なるは、人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。

大平 昂

△郡山市太田病院に大平昂博士あり内科を擔任す。仙臺市八幡町士族大平一之三男、明治二十九年生にして、宮城縣立仙臺第二中學を経て、大正六年東北帝大醫學專門部を卒へ、直ちに同大學附屬病院醫員被命、加藤内科勤務、十年同大學副手囑託となり加藤内科教室に勤続す、同年森林主事體格検査委員囑託、十年より十四年まで附屬醫院衛生係兼寄宿舎々醫被命、十四年東北帝大にて學位受領、十五年東北帝大醫學部講師囑託、附屬醫院臨

床検査課主任被命、其後健康を害し岩手縣遠野町に轉地靜養後、頭書の病院に在り。

△學位主論文「瓦斯代謝並ニ毎分血流量ニ關スル研究」、參考論文、(1)脚氣並ニ「ピタミン」B 缺乏症ニ於ケル動脈血並ニ靜脈血ノ酸素不飽和度赤血球ノ呼吸作用及ビ毎分血流量、(2)靜脈内ニ投與セル二三ノ中性鹽溶液ノ血液豫備「アルカリ」量ニ及ボス影響、(3)臨床上並ニ實驗的貧血ニ於ケル血液ノ豫備「アルカリ」量並ニ酸素解離曲線ノ變化、(4)實驗的腸閉塞ニ於ケル血液酸素解離曲線ノ變化「アチドージス」及ビ其レニ對スル二三ノ所置ノ效果他八篇あり。郡山市原田町一〇に住む。

北村信治

△兵庫縣御影町立診療院長ドクトル、メヂチーネ北村信治博士は、大阪府泉北郡踞尾村の人、明治二十五年生にして、大正四年京都府立醫專を卒へ、同年日本赤十字社大阪支部病院勤務、六年大阪市新町緒方病院勤務、九年九州帝大醫學部小兒科介補、十一年瑞西、獨逸に留學し、主として生理學、藥物學研究、十二年京都帝大醫學部藥物學教室専修科生となり研究を續け、大正十四年京都帝大にて學位を受領す、爾來頭書の現職に在り。釣魚を趣味とす。△學位主論文「浮腫發生ニ對スル種々ナル藥物ノ影響ニ就テ」參考論文、(1)蛙後肢人工灌流ニ於ケル浮腫發生並ニ流出液量ニ就テ、(2)氣候ト體溫、他に歐文數篇あり。神戸市石井町三ノ三に住む。

柳澤德義

△新進の細菌學、病理學及び内科學者にして、特に呼吸器系及び消化器系の内科を最も得意とする柳澤德義博士は、昭和二年以來傳染病研究所に於て研究に精進し今猶續行中なり。博士は金澤醫專出身、稀に見る篤學者にして、母校の恩師山田詩郎博士に就き内科學を、大阪の石神研究所長松田毅博士の許に呼吸器科を、東京帝大教授兼傳研所員田宮猛雄博士に就きて細菌學を研究し、東京帝大より學位を獲得せる近來の少壯醫博也。その鴻大



なる學位論文は、如何に精研の明快なるかを物語りて餘す所なし、而かも未だ少壯にして研究心に燃え、孜々として研鑽に餘念なき前途は、颯て那邊に展開するかを大に待望せらる。

△顧みて其の今日ある博士の略歴を概説すれば、大正十年金澤醫專卒業後、直ちに同校第一内科教室にて研究、同十一年三月大阪府下濱寺公園石神研究所附屬醫院醫長就任、昭和二年三月より傳染病研究所にて研究、今日に至る、同七年十二月學位を受領せり。

△學位主論文は「腸管粘膜炎ニ及ボス細菌性毒素ノ影響ニ關スル實驗的研究、殊ニ腸管粘膜炎ニ於ケル「アレルギー」反應ニ就テ」にして、外に參考論文四編あり。

△感想の一片に曰く「仕事は正確にして迅速、且つ仕上の端麗なるを以て要訣と爲す」云々と、其の態度の眞摯にして周到なる、又以て博士の爲人を窺はる。長野縣小縣郡西鹽田村柳澤源兵衛の長男にして、明治三十一年生る。年齢漸く三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして、研學切磋、不倦不體の精進を續けつゝある元氣と、向學の精神に燃ゆる熱心にして眞劍なるとは、眞面目なる學究的研究家として甚だ多とすべく、又後進學徒の範とすべき也。人と爲り穩健にして篤實、志操堅實にして功利に拘泥せず、謙遜にして己を衒はず、人を愛し人に親まるゝ徳を有し、事を處するに嚴正にして、濫容の内に侵し難き尊嚴を具備す。將來有爲の新人物として茲に推奨し、敬意を表す。横濱市鶴見區東寺尾町一、三七四に住む。

川井銀之助

△京都府立醫大助教授にして附屬醫院胃腸科部長たる川井銀之助博士は、大阪府三島郡三宅村竹原信芳六男、明治二十九年生れ、川井菊太郎の養嗣子となる。大正六年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校助手として醫學化教室へ勤め、八年同校附屬療養病院醫員として胃腸科在勤、十一年特許登載胃液酸定量計（農商務省特許局）、十

二年任京都府立醫專助教授、同年同校附屬療養病院胃腸科部長代理、次で副部長任命、十三年京都府立醫大講師囑託、同年同大學附屬醫院胃腸科副部長任命、十四年京都府立醫大にて學位受領、十五年任京都府立醫大助教授、同年京都市計畫臨時委員囑託、胃腸科部長任命、以て今日に至る。洋畫を能くし、又た旅行を好む。

△學位主論文は「膽汁酸鹽類ノ一新呈色反應、附、該反應ヨリ見タル膽汁及ビ十二指腸内容液中ニ於ケル該鹽類ノ存在状態ニ就テ」にして外に參考論文としては、(1)十二指腸内溶液中ノ「アマミラーゼ」ニ就テウオルグムト氏法ニヨリ「アマミラーゼ」ヲ定量スル際ニ發見スル異常沃度反應ニ就テ、(2)十二指腸内溶液中ノ「アマミラーゼ」ニ就テ隣「アマミラーゼ」(アマミロブシン)ノ澱粉消化ニ及ボス「グリコロール」酸曹達ノ影響ニ就テ、(3)十二指腸内溶液ニ關スル知見補遺、(4)胃液中ノ鹽酸ト血液中ノ鹽化物トノ關係ニ就テ外三篇あり、他に論著夥多。京都市下立賣紙川詰南側に私宅あり。

池田東洋

△長崎縣島原町音無川内科専門池田東洋博士は、長崎縣南高來郡布津村池田兵馬長男、明治二十四年生にして、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同大學附屬醫院内科助手として十一年四月迄勤め、それより更に大學院に入り戸田教授指導の下に衛生學研究、十三年四月退學と同時に、大阪市立衛生試驗所技師に任命、同十四年辭職、再び助手として京都帝大附屬醫院内科に勤む、同年京都帝大にて學位受領、十五年右囑託を辭し、山口縣岩國病院内科部長に就任す、昭和三年之を辭し頭書に開業今日に至る。

△學位主論文「上皮細胞及細胞膜ニ對スル遊離造鹽素體ノ親和力ノ比較並ニ其殺菌及殺蟲作用ニ就テ」、第一篇「ハロゲン」體ノ溶血力ノ比較研究、第二篇、昆蟲及ビ幼蟲類ニ及ボス「ハロゲン」體ノ撲滅作用並ニ其表皮ニ對スル親和力ノ比較研究、(1)上皮細胞及ビ細胞膜ニ對スル遊離造鹽素體ノ親和力ノ比較並ニ其殺菌及ビ殺蟲作用ニ



就テ、第三篇「アルゲ」屬ニ對スル比較研究外五篇あり。

鯛瀬國一

△衛生技師として群馬縣廳に在勤中の鯛瀬國一博士は、熊本醫專出身の篤學者にして、東大派の少壯醫博として其の存在を認めらるゝ、内科學及び細菌學者たり。學究生活より展開して地方の醫事衛生界に躍進し始めて以來、拮据勤勉、未だ日尙淺きも斯道の發達普及に勵精努力し大に將來に俟つあらんとす。年齒少壯にして潑刺たる研究心を有し、精研に餘念なき前途は今後の活躍と相俟つて更に期待せらる。

△學歴よりすれば、大正十二年熊本醫專を卒業し、同十五年三月より昭和七年六月迄、東京帝大傳染病研究所囑託として勤務の傍ら研究に没頭し、昭和七年六月群馬縣衛生技師に任ぜられ今日に至る、斯間同八年一月東京帝大にて學位を授與せらる。主として傳研の西澤行藏及び宮川米次兩博士の指導を受くる所多く、細菌學及び内科學を專攻せり。△主論文は「南京鼠腹腔液中ニ出現スル鼠咬症「スピロヘータ」ニ就テ」にして、參考論文は「トリバノソーマ、タイレリー」の研究」なるが、他にも論著夥多あり。本籍は熊本縣宇土郡戸馳村、鯛瀬一郎の男にして、明治三十二年生る。博士も亦た篤學力行の人にして、其の異彩に富む閱歷は能く之を語りて餘蘊なきを見る。研究以外、スポーツに趣味を有し、元氣旺盛にして常に健康に留意す。其の人に接すれば謙讓にして、敢て學者たる尊大の態度を現さず、克く自抑して禮意あり、性溫情に富む。群馬縣前橋市榮町六に住む。

藤原政雄

△神戸市元町通四丁目藤原内科院長藤原政雄博士は、岡山縣赤磐郡佐伯村藤原代吉長男、明治二十三年生にして、岡山縣立岡山中學を経て、大正二年岡山醫專を卒へ、引續き岡山縣立病院島蘭内科に於て翌三年三月迄内科學研修、同年三月より五年二月迄神戸市谷内科病院勤務、同三月より十二月まで京都帝大中西内科に於て見學、六年一月より十三年三月迄神戸市に於て内科専門開業、同年三月より十五年四月迄岡山醫大病理、及醫化學教室に於て研究、十五年岡山醫大にて學位受領後、神戸市に於て再び内科専門開業今日に至る。多年の聲望は今や圓熟せる手腕と相俟つて、内科の大家と仰がれ牢固たる地盤を有す。圍碁を趣味す。△學位主論文「消化管粘膜炎ニ於ケル糖原生成ニ關スル研究」(英文)、參考論文、(1)哺乳動物ニ於ケル非經口的輸入糖ノ運命ニ就テ(獨文)、(2)睪「リパーゼ」ノ機能ニ關スル研究(英文)、(3)「ステアブシン」作用ニ對スル「アルコホル」及「レチチン」ノ影響ニ就テ(獨文)、(4)白鼠ニ於ケル消化管及四肢骨ノ生後發育ニ關スル研究、(5)糖燐酸「エステル」ノ骨酵素ニ因ル分解並ニ該「エステル」骨折ニ及ボス影響ニ就テ(英文)。

鈴木憲二

△臺灣總督府嘉義醫院長として多年の聲望を博しつゝある鈴木憲二博士は、福井縣遠敷郡雲濱村鈴木重憲次男、明治二十八年生にして、大正八年南滿醫學堂を卒へ、直ちに滿鐵大連醫院へ勤務し病理研究部員を命ぜらる、十年滿鐵より内地へ留學を被命、同年五月より京大病理學教室にて藤浪、速水兩博士指導の下に病理學並に病理解剖學研究、十四年九月滿鐵大連醫院へ歸院し内科勤務被命、十五年京都帝大にて學位受領、昭和二年臺灣總督府醫院醫長に任じ、花蓮港醫院長を命ぜられ、次で頭書の現職に就任今日に至る。△學位主論文「十二指腸蟲病ニ關スル實驗的研究」、參考論文、(1)出血性痘瘡ノ病理解剖學的研究、(2)「アンチモン」劑ニ因ル日本住血吸蟲病ノ治療並ニ豫防實驗、(3)「アンチモン」劑ニ因ル肝硬變樣變化ニ就テ、(4)家鷄腸内ニ寄生セル鞭蟲樣一新線蟲ニ就テ。臺灣嘉義市北門町七ノ一七に住む。

箱崎孝平

△生命保險界に多年活躍して健康、保健の増進上多大の業績を挙げ、其の大なる存在を認められ



今猶帝國生命保險會社の健康増進部長として最高幹部に列し、斯道の振興啓發の爲め勵精努力しつゝある箱崎孝平博士は、秋田縣鹿角郡尾去澤村の出身、明治二十年生にして、明治四十五年東京市本郷日本醫學校を卒へ、大正二年醫術開業免狀を得、三年東京帝大醫科大學内科選科修了、四年六月迄同學附屬醫院三浦内科介補、十二年五月より十五年五月迄北海道帝大醫學教室にて、太黒教授指導の下に研究、十五年北海道帝大より學位を受領す、爾來頭書の要職に就任し今日に至る。子福者にして團樂たる家庭は常に朗かなりと云ふ、いゝババとしての博士も年壯漸く熟して、今や知命に達せんとし元氣益々旺盛也。

△學位主論文「蛋白質ノ物理化學的性状ヲ決定スル「フアクター」ニ就テ」、參考論文、(1)「ヘモグロビン」ノ電離恒數ニ就テ、(2)「ゲラチン」ノ膠質金ニ對スル作用、(3)「ゲラチン」ノ膠質鐵ニ對スル作用、(4)膠質金ノ膠質状態ヲ決定スル恒數ニ就テ、(5)膠質鐵ノ「コロイド」状態ヲ決定スル恒數ニ就テ、(6)「コロイド」金ノ沈澱諸現象ニ關スル研究補遺。他に歐文の論著夥多あり。東京市淀橋區下落合四ノ一七七八に住む。

山本徹雄

△高松市西新通町に新裝せる山本内科病院あり、山本徹雄博士の診療所にして、開業早々、自己の地盤を開拓すべく其の第一歩に入れり。博士は愛知醫大出身の新進にして、恩師たる現名古屋醫大内科學教授勝沼精藏博士、同衛生細菌學教授大庭士郎博士に就て内科學及び血清學を研究し、特に呼吸器病科及び血液病科を最も得意とせる近來の少壯名醫博也。今や診療界に精進して益々其の特技を發揮せんとし、打診の好評は博士の長所たる忍耐謙讓の性格と相俟つて漸次独自の領域を獲得し、輝しき前途の成功は期して待つべきものあらん。

△博士は愛媛縣立今治中學校を経て、陸軍士官學校へ入學せるも病氣の爲め中途退學、愛知醫大豫科を経て昭和三年本科を卒へ、直ちに同大學附屬内科學教室に入る、同五年六月更に同大學研究科入學、同七年六月卒業、同八年二月

名古屋醫大にて學位受領、同九年四月開業せり。

△主論文は「家兎ニ於ケルA標識(A-merkmal)ノ發生學的並ニ遺傳學的研究」にして、參考論文は、(1)人尿中ニ於ケルA-merkmalニ就テ、(2)人同種血球凝集素ノ凝集價ニ就テ、(3)家兎諸臟器ニ於ケル血型物質ノ存在ニ關スル實驗的批判、(4)家兎胃粘膜ニ存スルA物質ノ抗原性ニ就テ等。

△感想に曰く「我國現下の醫界は全く混亂状態と云ふべく、一日も速に醫業統制の實施されん事を望む。敢て淺學菲才を顧みず、之れが實施に關する具體的意見を概説すれば、醫業は之を國營とし衛生省の統轄のもとに病院、醫院、分院或は派出所を設くる事、恰も現在我國の警察制度に於ける署、駐在所、派出所の如くし、之に適材適所に醫師を分布すれば最も理想的なる醫療衛生設備を實現し得らるべしと思惟す」云々。

△愛媛縣越智郡大井村山本一清の長男にして、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歳也。少壯の意氣に燃え、事を處するに周到にして、一度び事を成さんとするや忍耐に強く、徹底的に成し遂げずんば止まぬ所に、博士の性格を窺はれ、殊に其の長所を見出さる、強めて言はしむれば、やゝもすれば頑固に過ぎる嫌なきか。讀書家にして、専門以外には哲學書及び經濟學書を愛讀す、嗜好にては茶食を好む。

上野俊昌

△大阪高等醫學專門學校に内科教授兼附屬醫院内科醫長として上野俊昌博士あり。千葉醫專出身の内科學者にして、豫備陸軍三等軍醫正の印綬を帶び、久しく軍醫界に活躍する所あり、特に熱帯病及び熱帯衛生學を得意とし、又京大教授戸田正三博士に就き衛生學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。由來建築材料に就て氣濕と材料との吸濕性、並放濕性に關して詳細に研究闡明したる實驗報告を觀ず、建築材料の吸濕性と放濕性とは獨り空氣の濕度の調節に重要たるのみならず、索いては建築材料の熱傳導性に影響を及ぼし、煖房



及冷房と關係するところ頗る廣汎なり、依つて大正十二年以來之れが性質を調査し衛生學の立場より研究せるもの、即ち博士の學位論文なりとす。其の學問的價値は既に學界に定評あり、如何に精研の該博なるかを語るものとして博士の評價は定まる。

△博士は明治四十二年千葉醫專卒業、同四十三年六月任陸軍三等軍醫、同四十五年十二月任二等軍醫、大正四年十二月任一等軍醫、同十二年七月任三等軍醫正、同年八月豫備役に編入せらる。斯間明治四十三年六月より大正三年二月迄甲府衛戍病院及臺南衛戍病院にて内科學研究、同三年三月より四年十月迄陸軍々醫學校にて醫化學研究、同四年十月より九年四月迄東京第二衛戍病院にて内科學研究、同九年四月より十二年一月迄臺灣軍々醫部にて熱帶病及熱帶衛生學研究、同十二年二月より十四年三月迄京都帝大衛生學教室にて研究、同十四年四月より十五年六月迄大阪市立衛生試驗所細菌血清室主任勤務、同十五年三月學位受領、同年十一月大阪市にて開業、昭和二年春大阪高等醫學專門學校教授兼附屬醫院內科醫長に就任今日に至る。

△學位主論文は「建築材料ノ吸濕性放濕性ニ關スル衛生學的研究」にして、參考論文は、(1)光ノ衛生學的研究概論、(2)赤外線ノ性質ト保溫ノ關係ニ就テ、(3)養衆ノ研究補遺、(4)眼瞼閉鎖時ニ於ケル光感ト睡眠時ニ於ケル遮光方法ニ就テ、(5)余ノ考案セル光神計ニ就テ、(6)病室ノ溫度及汚度ニ就テ等なり。著書「熱帶衛生並ニ熱帶病」々に論著夥多。△博士曰く「感想感志としては何にもありません、醫博の多いのは慶賀に堪へないが、非難の多いのは如何云ふものであるか、何事も物質か精神か、茲に現世の鬭争起點か發生せられてゐる。云ふ人、云はるゝ人、何れも時は流れに乗つてゐるのだ、世相が斯くするのだと云ふより外はない。只然し醫者は精神の修養だ、人格者仁者が必要だ」云々。至言と謂ふ可き也。

△博士は、東京市豊島區高田町に本籍を有す。學究的濃厚の紳士にして、醫學者として其の今日あるは、既に氏が關

歴に燦とし輝き、博士の面目を語るに充分也。年壯氣鋭にして研究心に富み、專念醫育と診療に精進して倦むことなく猶精研に餘念なし。今は分別盛にて學識、手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に入る。福々しき風貌は其の性格を表示して餘蘊なく、志操堅實にして學者らしき態度に威嚴を存す、而かも人と接するに親切克く同情を以てし、能く學生を愛撫す。大阪府茨木町茨木島屋垣内七八三に住む。

◇ **羽鳥重郎** △東部臺灣花蓮港に於て開業の羽鳥重郎博士の嘖々たる名聲を、臺灣診療界に聞くや既に久矣。博士は醫術開業試驗出身の篤學者にして、内科を専門とし特に熱帶病及び熱帶衛生學の造詣深く、嘗て東大教授青山

及び入澤兩博士に就きて内科學を專攻し、臺灣總督府在任中、熱帶病研究或は調査の爲め屢々香港、馬來半島、瓜哇、スマトラ、濠洲、南米、北米、英、獨、佛、瑞、伊諸國等々へ出張し研鑽大に得る所あり「臺灣の恙蟲病に關する研究」を學位論文として、新潟醫大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。六篇より成る鴻大なる學位論文は、如何に精研の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に定評あり。臺灣診療界の爲に多年盡瘁せる功績は言はずもがな、今や熱帶病醫學界に於ける權威として其の大なる學識を認められ、剩さへ立志傳的篤學者としての典型たるは特筆すべき也。

△博士は明治二十六年醫術開業前期試験に、同二十八年同後期試験に及第、醫術開業免狀下附、同二十九年一月より五月迄群馬縣監獄醫、同年九月東大醫科大學選科入學、青山、入澤兩教授に師事す、同三十年五月任同大學助手、附屬醫院勤務翌年十一月に至る、同三十二年一月日本郵船會社船醫となり翌年五月に至る、同三十三年八月臺灣總督府製藥所(後に專賣局)事務囑託、同三十七年九月同府醫學校講師囑託、同三十九年三月任同府海港檢疫醫官、同四十年二月同府醫院醫員兼任基隆醫院長、同四十二年三月任同府防疫醫官、臺灣地方病及傳染病調査會臨時委員、同四十



五年一月香港出張、第二回極東熱帯醫學會參列、大正九年六月多年臺灣に於て「ペスト」防遏に従事し盡力不尠に付單光旭日章を被授、同年九月同府州技師、兼研究所技師に被任、臺北州警務部衛生課長を被命、同年十月馬來半島、瓜哇、スマトラ及濠洲へ出張、十三年九月外務省事務囑託せられ中南米諸國へ出張、序を以て歐洲及北米へ出張、熱帯病研究に關する視察をなし翌十四年七月歸朝す、同十五年三月任同府醫院醫長、臺南醫院勤務、同月陞叙高等官二等依願退官、陞叙從四位勳四等たり、同年四月臺北市立稻江醫院院長兼臺北仁濟院醫員の職に就き、同十五年七月學位受領、次で臺南市濟生醫院に轉ぜしが、昭和六年九月關係深き花蓮港街に開業今日に至る。

△學位生論文は、「臺灣ノ恙蟲病ニ關スル研究」にして、(1)臺灣ニ於ケル發疹性腺腫熱ニ關スル第一報告、(2)同上第二報告、(3)同上第三報告、(4)臺灣ノ恙蟲病ニ關スル第四報告、(5)同上第五報告、(6)臺灣ノ地方性恙蟲病ニ就テ第六報告の六篇より成れり、參考論文は、(1)大正四年澎湖島ニ於ケル「マラリア」流行ニ就テ、(2)大正五年臺東廳下紅頭島ニ於ケル流行病ニ就テ、(3)二三動物傳染病ノ細菌學的研究、(4)臺灣産毒蛇追加——蠅蛇、(5)臺灣ノ征患事業、(6)臺灣ノ黒水熱、(7)明治三十年東京ニ流行セル赤痢ノ病原ニ就テ、(8)「ペスト」屍ニ檢出セル一病原菌ニ就テ等なり。他に論著夥多。著書、(1)「マラリア」病論(共著)、(2)臺灣通俗衛生(合著)、(3)中南米諸國ノ衛生狀態及施設一斑、(4)ラテンアメリカの旅日記等最も顯はる。

△博士は群馬縣勢多郡富士見村の出身、明治四年生る。稀に見る篤學者にして、其の今日ある閱歷は博士の六十有五年史に輝きて光彩陸離たるものあり、尠くとも其の向學的堅忍不拔の精神と、不撓不屈の努力とは頂門の一針として學ぶべき也。眞面目なる學究的温厚の紳士として氣品を備え、學者タイプの風貌は凛々として威嚴あり、廣き額は天才的なるを表示して餘蘊なし。老齡今や六十有五歳、矍鑠として元氣甚だ旺盛なり。其の専門に亘る學識は勿論、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、老熟せる手腕は益々其の特技を發揮して餘す所なし。當世博士界中、博士の如きは最も異彩に富むる老大家として茲に推獎し、其の高邁なる人格を敬慕すべき也。花蓮港廳花蓮港街黒金通に住む。

田中吉左衛門

△多士濟々たる京都醫療界は、近時競争激烈にして群雄割據の觀あり、此間に介在して獨自の専門を標榜し、卓然として群を抜き、田中血管病醫院長として悠々獨歩の概あるは田中吉左衛門博士也。博士の診療所は目黒區上目黒八丁目五六四(大阪上)に在りて結構宏大ならざるまでも、内部の設備整ひ、博士自ら診療に勵しみ日々忙殺されつゝあり。博士は金澤醫專の出身にて、九州帝大より學位を獲得せる内科學者にして、特に細小動脈及毛細血管の生理病理を研究し、臨床上には特に是を血管病と命名して其研究結果を實際に應用し居れり。此の方面の領域に就ては、多年の經驗に富み、獨特の手腕を有す。今や斯界の第一人と仰がれ、益々民衆の人望を博し、繁榮歳と共に成功の地盤を築きつゝあり。

△博士は大正二年金澤醫專を卒へ、同五年より九年迄帝國生命保險會社醫員として勤務、同十年一月九州帝大醫學部專攻生、第三内科醫員となり、同十五年九月九大を辭し釜山高橋病院長として赴任す、同年十一月學位受領、昭和二年四月現住地に於て開業今日に至る。

△主論文は「毛細血管並ニ小血管ニ關スル研究」にして、第一篇實驗的研究、第二篇臨床的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)夏期海濱「テント」生活ノ血液像及毛細血管ニ及ボス影響ニ就テ、(2)流行性感胃ト氣象トノ關係等なり著書「黃帝内經素問靈樞」其他論著夥多あり。

△感想に曰く「最近數年間を漢方の研究に没頭して居る。漢方は經驗の結果を集成し是を陰陽五行說で統一して一つの治療大系を作つて居るが常に事實を基礎として居る事と人體の生活相に靈を認めて靈肉相對の見地より治病の原則を築いて居る點に現代の唯物的科學に基く醫學の企て及ばざる點があると思ふ。其論述は極めて抽象的冥想的である



が、其内容を深く玩味すると學論としても決して現代の科學的醫學に劣つて居らぬ。將來大に研究を進むべきものと考へる」云々。

△博士は長野縣上高井郡仁禮村の出身、明治二十年生る、十三歳にて父を夫ひ母の手に育つ、其の今日ある篤學と成業とは博士の前半生史に盡きて躍如たるを見る。眞面目なる學究的紳士にして、臨床家として今は手腕、人格共に圓熟して一般の重望を加ふ。殊に臨床に熱心にして眞劍なると、誠意親切を以てする點は氏の性格の然らしむ所にして其の態度の悠揚として迫らず、熱情あり溫味あるは博士の長所と見るべき也。賦性謹直にして潔白、恬淡として功名榮達を求めず、同情に富み能く人を愛す、若し強ひて言はしむれば正直過ぎて或は短氣の嫌ひなきか。其の高邁なる人格は敬慕すべき也。文學趣味豊かにして山秀朗を號とす。年齒不惑に入る九歳、元氣益々壯也。近年漢方の研究に興味を有し、黃帝內經素問靈樞の翻譯註釋に勵力を注ぎ精研に餘念なし。

### 瀨木嘉一

△東京市神田區東今川町五に、レントゲン科、理學的療法科、内科専門を以て著聞する瀨木醫院あり、斯科界現代の大家瀨木嘉一博士の經營にして、開業既に十有餘年を閱し、今や牢乎拔くべからざる地盤を有すレントゲン科装置としては高壓レントゲン深部治療装置(ケノトロン全整流式)一般レントゲン診断、寫眞用装置携帶用レントゲン装置等あり、其他ラヂウム、デアテルミ、四肢浴、人工太陽燈、平流、感傳電氣等一般物理的治療科の設備あり。博士は愛知醫專出身の篤學者にして、レントゲン科の權威藤浪剛一博士に就きて斯科の蘊奥を究め東京帝大總長長與博士及び傳研技師三田村博士の指導を受けて病理學を研究し、後に京大教授藤浪鑑博士に就きてレントゲン學的、病理組織學的檢索に従事し、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博なり。  
△博士は大正四年愛知醫專卒業後、同年六月より同五年八月まで横濱市西川病院勤務、同五年八月より同八年十一月

まで順天堂醫院レントゲン科勤務、藤浪剛一博士の指導を受く、同八年十一月より同十一年六月まで傳研研究生として長與所長及び三田村技師に師事す、同十一年六月より同十四年十一月まで帝大整形外科教室、レントゲン教室にて藤浪鑑教授の指導を受く、同十四年十月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。期間昭和六年十月内務省囑託により海外醫事視察の途につき、翌七年四月歸朝せり。

△學位主論文「レントゲン」線ノ腦下垂體又ハ生殖腺放射後爾餘ノ内分泌腺諸臟器又ハ生殖器ノ受クル二次的影響(1)雌性家兔腦下垂體放射實驗、(2)雄性家兔腦下垂體放射實驗、參考論文、(1)内臟全轉錯症ノ一例(2)頸肋骨ノ二例、(3)内臟全轉錯症ノ追加二例、(4)慢性腹膜結核ノ「レントゲン」放射治療ニ就キテ、(5)「レントゲン」放射線並ニ紫外線ノ蠶種ニ及ボス生物學的作用ニ就キテノ實驗的研究、(6)高壓「レントゲン」深部療法ノ概念、(7)家兔骨發育ノ「レントゲン」像、(8)「オステオゲネーシス、イムペルフエクタ」ノ「レントゲン」像等。

△博士は明治二十四年三重縣桑名郡古美村古野に生る、亡父岱輔は蘭漢醫にして勳八等たり、その三男也。學界の肅正と、醫師の社會的地位の向上を高調する熱心家也。年齒漸く不惑に入る五、年壯氣鋭、體軀偉大にして學者タイプの風貌に威嚴を存し溫容を藏す。趣味は寫眞と旅行とにあり。瀨木本雄醫博は長兄にして、瀨木本立醫博は長兄の長男也。

### 阿部政三

△市立札幌病院神經科精神科醫長兼市立札幌病院附屬靜療院長として、内外の信望を博し、札幌診療界の爲め努力精進しつゝある阿部政三博士は、東大系の神經科及精神科學者にして、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。研鑽多年、田澤鏞二博士、木村徳衛博士、三宅鏞一博士、富士川游博士等の指導を受けて造詣する所深く、今や壯齡漸く熟して學識、手腕、人格共に玉成の域に達す。其の蘊蓄せる實際的手腕を發揮して、北海道



の精神衛生運動に貢献する所あらんとす。静療院は市立札幌醫院の附屬病院として、昭和九年十月新築落成と共に創設せるものにして、従來の我國に見る精神病院とは異なり、即ち精神病者もなるべく開放的療法に進まんとする輓近の趨勢に基きて、監置的病室は少くし、開放的病室を多くし、更に又神經症を收容すべく快適なる病室をも作り、この病室たるや恰も旅館又は別荘に靜養せるの感あらしむべく、特に入念に純和風の御殿式氣分をあらはしたる病室にて、かゝる病室の存する事は未だ我國の精神病院にはあまり類を見ざる所也。静療院の位置は、札幌市を去る約二里の東南方の高臺にて、市街と眞駒内牧場とを坐しながら眺め得る景勝の地（札幌郡豊平町平岸）にて、定山溪電車の沿線にあり。氏は即ち市立札幌病院（院長林敏輝博）に於て新設の神經科精神科長並に静療院長として招聘せられ赴任せるものなり。博士の責任の重且つ大なると共に將來博士の力に俟つもの益々大なるものあらんとす。

△博士は大正十一年東京帝大醫學部卒業、東京市療養所醫局、泉橋慈善病院内科醫局等を経て、同十五年東京帝大助手となり精神病學教室勤務、次で東京府立松澤病院醫員となり、昭和六年三月長崎醫大助教授として同校精神科高瀬教授洋行中を代つて講義を擔當し、同七年五月同校を辭し、廣島養神館醫長となりしも、昭和九年四月より札幌市立札幌病院に於て神經科精神科を新設するに及び招かれてその醫長として赴任す、次で同年十月その附屬病院なる静療院の新設と共に其院長を兼任す。

△學位主論文は「燈用瓦斯中毒ノ研究」にして、副論文は「慢性ニ硫化炭素中毒」なり。

△博士は靜岡縣庵原郡庵原村の出身、明治二十七年生れにして當年不惑に入る二歳也。少壯の意氣益々壯にして、精衛衛生と國運隆盛とを常に念願として、自己の職務に勵精奮盡し亦他事を顧みざるの概あり。性格より言はしむれば熱情と潔癖とを共に有するものならん、言換ゆれば神經質者の有する長所もあれば又短所もなしとせず。而かも人に對して恬淡として爾は吾、人を愛し人に親しまるゝの徳を有す、又能く監答禮を厚らして對手に好感を生じしむるは

篤實にして高邁なる其の人格を敬慕せしむ。趣味としては音樂を愛し、又散歩を好む。札幌市北一條西八丁目札幌市立札幌病院神經科精神科又は札幌市外、豊平町平岸市立札幌病院附屬静療院。

### 田中一雄

△愛知縣犬山町田中内科病院長としての、田中一雄博士の隆々たる名聲は既に江湖に著聞す。慈惠醫專出身の逸才にして、多年米國に遊學して研鑽大に得る所あり、殊に肺結核の造詣に至つては他の追隨を許さず歸朝後、北海道帝大より學位を獲得せる名醫博として其の大なる存在を認めらる。今や斯科の大家として大衆より多大の信頼と尊敬とを受け、打診の好評と相俟つて當地方療養界に於ける名實相伴ふ一流病院として一勢力を占む。

△博士は東京府立青山師範を経て、大正五年東京慈惠會醫專を卒へ、同年九月米國ポストン市ポストン大學醫科大學へ入學、十月文科入學、七年六月文科、八年五月醫科を卒へ、同年六月同市ハーバート大學大學院へ入學し、九年四月卒業す、十年十月英佛を約三ヶ月巡視して歸朝す、十四年北大今教授教室に入り研究、十五年九月退學し、昭和二年學位を受領す、斯間在米中、大正五年九月ポストン大學名譽教授ホーレス、バカード博士を通じ同學病院助手となりウラター教授に師事して臨床血液學を修む、六年四月上級助手となりトーマス教授に師事して内科病室を擔當す、七年九月ポストン市立病院内科に轉ず、翌年三月マサチューセツツ、ゼネラル、ホスピタルの呼吸器病内科病理實驗室へ轉じて、サウサード教授に師事して細菌血清病學を修む、九年四月バカード博士の紹介を通じジト、クレマー博士の推薦により紐育市立病院肺結核サナトリウム病理實驗室主任に奉職し、一方紐育ベルビュー病院レントゲン實驗室ハイシ博士に師事して、レントゲン學教室助手として勤務す、十一年九月歸朝後、十四年より北大にて研究を續け、十五年九月退學後、郷里愛知縣に内科診療所、及び入院所を設け、昭和二年一月學位を得、同年十月田中内科診療所を新築開院し、内科（特に結核病、肺結核早期診療）及び小兒科（特に腺病質百日咳）一般の診療に従事し今日に至



れり。

△學位論文「肺結核ニ於ケル血像の診斷、豫後及ビ療法ニ對スル其ノ關係ニ就テノ研究」參考論文、(1)小兒ノ炎症性鼻咽喉ニ於ケル細菌學的觀察ト其等ノ扁桃腺炎及ビ「デフテリア」ニ對スル關係ニ就テ(英文)(2)臟器毒ノ血液及造血臟器ニ及ボス影響(英文)。其他内外にて發表せる論著夥多あり。

△博士は岐阜縣加茂郡峰屋村堀部小右衛門の三男、明治二十一年生にして、大正十一年五月愛知縣丹羽郡犬山町田中円藏の娘民子と結婚し田中と改姓、分家創立す。學究的温厚の紳士、熱心なる研究家にして、刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、臨床の餘暇を以て今猶肺結核の研究に餘念なし。趣味としては運動、殊にゴルフ、室内では圍碁を好む。其の専門とする肺結核に至つては、研鑽多年、學術の探研と共に臨床の經驗に富み、圓熟せる手腕は愈々其の特技を發揮して餘す所なし。その今日の位地と聲望とを贏ち得たるもの近來の成功家と云ふべき也。賦性温厚篤實眞摯なる臨床家としての人格者たるを慶ぶ。



### 皆見規夫

△東京市品川区五反田一ノ二五九に、内科殊に神経系統専門を以て獨立開業せる皆見規夫博士は岡山縣吉備郡水内村の出身、明治二十八年生れにして、岡山縣立高梁中學、六高を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、同時に慶大醫學部附屬病院内科助手に任ぜられ西野教授に師事す、其間十一年十一月より十三七月迄、同年學部生理學教授加藤博士の指導を受け、十五年三月慶大にて學位を受領す、爾來頭書の現住地に内科開業今日に至る。

△學位主論文、(1)神經ノ興奮ハ其ノ強度ノ大小ニ關セズ、麻酔部位ニ於テ同時ニ消失ス、(2)神經ノ興奮傳導ニ關スルエードリアン氏實驗批判、(3)神經麻酔部位ノ長サト筋攣縮高ノ變化トノ關係ニ就テ、參考論文、(1)神經小興奮波ノ麻酔部位傳導狀態ニ就テ、(2)筋肉ノ麻痺時間ト麻酔部位ノ長サトノ關係ニ就テ、(3)神經ノ麻痺時間ト麻酔部位ノ長サト

ノ關係ニ就テ、(4)白米病雞神經ノ電氣的抵抗並ニ其ノ血清ノ比傳導度ニ就テ、(5)日本食品ノ「ビタミン」B含有量ニ就テ。讀書家にして文雅に趣味あり、號して朝山、極光といふ、また音楽、芝居を好み、圍碁を居常の樂しみとす。開業既に拾有餘年、牢固たる地盤を有し、日々繁榮を極む。



### 五井義雄

△三重縣桑名市清水町に内科専門を以て著名なる五井病院あり、院長五井義雄博士の經營にして今や當地方を風靡せんとするの盛況を呈す。氏は當町の出身にして、明治二十二年生る。一高を経て、大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、四年同大學附屬醫院三浦内科副手勤務、七年副手を辭し、廣島縣立廣島病院内科第二部長就職十年辭して東京帝大細菌學教室にて竹内教授の下に細菌學の研究に従事す、十四年退きて桑名町に歸り開業す、十五年六月母校より學位を受領す。篤實温厚なる紳士にして、眞摯なる臨床家として信望厚し。

△學位主論文「細菌「アミラーゼ」ノ性状並ニ其產生要約ニ關スル研究」參考論文「芽胞ノ染色ニ就キテ、簡短迅速ナル一方法」。



### 岸田 徵

△朝鮮道立醫院長として滿洲國間島龍井咸鏡北道立龍井醫院に勤務中の岸田徵博士は、長崎醫專出身の内科學者にして、細菌學の造詣深く、殊に北研の泰博士に就て研鑽大に得る所あり。

△學位主論文は「ワツセルブラウ」ヲ以テセル腸内病原菌分離用培地」にして、參考論文は、(1)赤痢菌分類ニ關スル生物學的免疫學的研究、(2)茶ノ殺菌力ト毒素破壊力ニ就テ、(3)「コレラロート」反應及「インドール」反應早期檢出ノ培養要約ニ就テ、(4)細菌瓦斯發生ノ要約ト之が検査法等なり。今や豊富なる學識と、多年鍊磨せる臨床的手腕とを發揮して、拮据勤勉、不斷の努力精進により篤き信望を得て、當地診療界の爲め力を盡しつゝあるは多とすべき也。



△學歷よりすれば、明治四十一年長崎醫專卒業後、母校にて内科研究の後北里養生園にて細菌學研究す、次で、東京瀨川昌耆博士の江東病院、東京小兒科病院醫員として勤務の傍ら内科、小兒科研究、大正二年朝鮮道立醫院に奉職、爾來道立醫院醫官として各地に歴任、其間大正十年北里研究所に於て細菌學研究、再び昭和五年より七年に至る間北研にて研究に従事し、昭和八年二月慶大にて學位を授與せらる、現在肩書地醫院長として在勤中なり。

△出身地は島根縣美濃郡豊田村横田にして、明治十九年生る。當年當に五十歳也。元氣益々旺盛にして、勵精恪勤の聞え高く、久しく朝鮮治療界の爲め奮盡し、多年の功績は言ふまでもなく、至誠一貫、今猶仁術の爲め貴き使命を盡して以て吾志達せりと爲す。而かも其間に於て不屈の精神を貫き、克く學位論文を完成せる興學心と、不斷の努力とは特筆すべきに値す。濃厚の紳士にして、恭謙禮讓に篤く、學に職に忠なると共に人に親切を盡し、後進を待つに頗る情味あり、人格高潔也。滿洲國間島龍井道立醫院官舎に住む。

薄元茂夫

△津山市津田町二〇に内科、レントゲン科専門を以て有名なる薄元病院あり、院長は九州帝大派の名醫博にして、斯科の大家として篤き信望を博しつゝある薄元茂夫博士也。氏は岡山縣苦田郡津山町の出身にして明治二十六年生る。年齒不惑に入る三歳、漸く壯熟して最も得意時代に在り。

△岡山縣立津山中學、三高を経て、大正六年九州帝大醫科大學へ入學し、十年卒業、直ちに同學第一内科教室副手を拜命、吳建博士指導の下に内科學を研究し、十四年吳教授東大へ轉任後引續き金子廉次郎博士に師事す、十五年六月母校にて學位受領、第一内科教室を辭して、福岡縣飯塚病院長兼内科部長として就任す、其後職を辭し現住地に開業今日に至る。弓術を趣味す、九大時代には弓道の師範たり。

△學位主論文「横隔膜「シラクサチオレ」ニ就テ」參考論文、(1)肺動脈狹窄ノ「レントゲン」像ニ肺動脈弓影隆ノ理由ニ就テ、(2)肺動脈狹窄ノ臨床的研究、(3)肺動脈瓣閉鎖不全症ニ就テ。

小松原謙三

△大阪市住吉區長崎町四六に内科を標榜して獨立開業せる小松原謙三博士は、兵庫縣多可郡比延庄村小松原梅藏の男にして、明治二十八年生る。大阪府立今宮中學を経て、大正十年大阪醫大を卒へ、同年東京帝大法醫學教室に入り、三田教授指導のもとに血清化學を三ヶ年研究、十三年大阪醫大附屬醫院醫員に任ぜらる、十五年六月東京帝大にて學位受領、其後現住地にて開業今日に至る。多年聲望を扶植し、今や悠々たる位地を占め多大の信望を博す。一路は其號にして、多趣味の人也。殊に俳句を能くし玉突、繪畫、狩獵を好む。

△學位主論文「血球沈降現象ノ本態ニ就テノ研究」參考論文、(1)植物性血球凝集素ノ研究、(2)「フォルモール」反應ノ本態ニ就テ、(3)寒冷ニ依リテ發見スル健常自家同種血球凝集素ニ就テ、其他論著夥多あり。

勝田功夫

△臺灣嘉義市南門町七ノ二勝田病院副院長にして、兼ねて臺灣電力株式會社囑託醫たる勝田功夫博士は、日本醫專出身の篤學者にして、内科、小兒科、産婦人科に通じ、特に内科、胃腸科を最も得意とし、又た寄生蟲學の造詣深し。同病院は兄弟三人にて醫務に従事し、長兄之を経營す。病床二十、内科、小兒科、産婦人科、理學的治療科、レントゲン科の各科あり、當地診療界に於ける私立病院中一流の位地を占む。博士の感想に曰く、「特に感想として述ぶる事なし。然し近代醫學の隆昌は殊に眞面目なる研究業績で各醫學會雜誌上に充滿し多忙の爲め讀破盡し得ざるは研究者に對して實に相濟まぬと常に思つて居る。更に吾々は研究的態度を持續し學術の偏見を遁れ無意義なる傳統と横倣を捨て醫學窮極の主題なる治療的方面の研究に醫學界の貢獻を希む」云々。

△博士は明治大學政治科三年修業後、大正九年日本醫專卒業、直ちに同校附屬病院西川内科に入る、更に慶大川添産



婦人科勤務、十三年任臺灣總督府技手、南支那廈門病院内科醫長、十四年英領香港並南支那に熱帯病視察、十五年臺灣總督府屏東醫院内科醫長、昭和五年任臺灣總督府醫學教授、横川寄生蟲學教室に轉じ熱帯病寄生蟲病理學を專攻す、同八年三月岡山醫大にて學位を受領せり。斯間の指導教授は西川義方博士、川添直道博士、横川定博士なり。

△主論文は「臺灣ニ於ケル半鹹水産魚類殊ニ鱒ノ中間宿主トスル吸蟲類ノ研究」(五編)、參考論文は、(1)惡阻ノ生理的食鹽水靜脈注射療法、(2)代償性月經ノ異例ニ就テ、(3)膀胱内異物ニ就テ、(4)人工榮養幼生兒ノ乳腺腫脹並ニ分泌ニ關スル臨床的觀察、(5)黒水熱ノ統計的考察、(6)「ストラントカスミス」屬吸蟲ノ特徴トスル腹吸盤生殖盤裝置並ニ附屬器ノ構造ニ就テ、(7)臺灣ニ於ケル半鹹水産貝類中ニ寄生スル「センカリヤ」殊ニ「チストフアロス、レルカリヤ」ノ一種ニ就テ、(8)肺「ヂストマ」ノ治療等なり。出生地は福島縣東白川郡棚倉町新町にして、明治廿六年生れ也。多趣味の人にして、笑酔と號す、園藝、テニス、ゴルフ、俳句、繪畫を能くし、支那料理、高級煙草を嗜む。

田中健吉

△岐阜縣郡上郡八幡町殿町一八私立郡上病院長として、多年地方診療界の爲め努力精進しつゝある田中健吉博士は、和歌山縣東牟婁郡新宮町の出身、明治十五年生にして、和歌山中學、第三高を経て、四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、續て二ケ年間附屬病院にて内科研究、大正元年岐阜縣八幡町に私立郡上病院經營、大正十三年京都帝大大學院に入學、内科一般を研究、十五年六月京都帝大にて學位を受領し、愛媛縣宇和島市立病院長として招聘せられたるも、辭して歸郷再び八幡町に於て開業今日に至れり。學識、手腕、人格共に圓熟の域を超越して一段の貫祿を備え、今や内科の老大家として近郷より多大の信望と尊敬とを受けつゝあり。濃厚篤實、人格崇高也。

△學位主論文「腸管ニ於ケル色素ノ吸收並ニ排泄ニ關スル研究」、參考論文、(1)腎臟ノ色素排泄ニ就テ、(2)ワイル氏病ノ統計的觀察、附 *Horpos Tubarius* ノ臨床的意義ニ就テ。

湊川孟猷

△神戸市須磨浦療病院にて専ら結核病患者の診療に従事しつゝある湊川孟猷博士は、長崎醫專の出身にして、大正十年卒業後、同校附屬醫院内科、長崎市療養所、同傳染病院等に勤務、大正十四年九月以降恩師山田基博士に従ひ、須磨浦療病院に勤務す、昭和八年五月長崎醫大にて學位を受領今日に至る。斯間昭和四年十一月より同八年三月迄長崎醫大にて、竹内清教授及び林郁彦教授に就て病理學を專攻せり。

△主論文は「結核菌ト肺結核組織的病型トノ關係」(二篇)、參考論文は「結核肺ニ於ケル各組織病變ノ成立機轉ニ關スル考察」(三篇) 其他三、四篇あり。

△感想を寄せて曰く「恩師山田先生に従ひ、結核患者の診療に従事すること十餘年に候へども天資愚鈍未だこれなら確實に結核病を治すべしと思ふ自信なく醫者たるの難きと使命の重きとを痛感致すのみにて候。診療に専念する外他の趣味嗜好無し」云々。以て氏の熱心振りを察せらる。沖繩縣首里市の人、明治廿七年生の年壯也。兵庫縣垂水町東垂水三〇三に住す。

池上芳次郎

△松本市大名町に内科専門を以て獨立開業せる池上芳次郎博士は、東北帝大派の名醫博として其の手腕を認められ、今や當地方診療界の重鎮たり。氏は當市の人、明治二十五年生にして、八高を経て、大正八年東北帝大醫學部を卒へ、同年七月より九年四月迄同大學細菌學教室に助手として研究し、同年四月より熊谷内科に副手として勤務し、十一年一月より再び助手に任ぜられ、十五年六月迄研究を續く、同月東北帝大を辭し直ちに宮城縣氣仙沼町外七ヶ村公立病院長として赴任す、十五年七月母校にて學位を受領、其後辭職以來郷里松本市に於て開業今日に至る。實踐躬行を主義として、一意専心、仁術以て其の天職を樂しむ、好個の臨床家たり。



△學位主論文「淋巴清並ニ腦脊髄液ノ殺菌力ニ關スル研究」(獨文)、參考論文、(1)血清ノ耐熱性殺菌物質ニ就テ(獨文)、(2)發疹室扶斯ノウイル、フェリックス氏反應ニ就テ、(3)發疹室扶斯ノウイル、フェリックス氏反應及診斷液ニ就テ、(4)變形菌ノ溶血力ニ就テ(獨文)、(5)「バラチフス」A類似菌ニ就テ(獨文)、(6)「バラ」室扶斯ト族特ニ「バラ」室扶斯ト菌ト肉類中毒源菌トノ鑑別方法ニ就テ、(7)胃癌ヲ合併セル「アカントーデス、ニグリカンス」ニ就テ。

佃 毅

△岡山醫大稻田内科教室にて、昭和八年七月迄研究に没頭しつゝありし佃毅博士は、昭和二年岡山醫大の出身にして、卒業後母校にて研究の結果、昭和八年五月學位を受領せり、教室を勇退して以來、現在は鳥取市中町四三に住す。年齢未だ少壯、軀て展開せんとする前途は大に注目せらる。

△學位主論文は「大脳皮質及間腦ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)肺結核患者ノ血液所見、(2)「ビタミン」B缺乏時ニ於ケル吸收障、(3)中樞神經系統ノ血清無機物質ニ及ボス影響なり。他の論著中の「中樞神經系統ノ水分並ニ含水炭素代謝ニ及ボス影響」は博士會心の作と見るべき也。香川縣香川郡鹽江村の人、明治三十七年生る、年齒未だ三十有二歳の少壯也。

伊藤久榮

△造幣局病院長として令名ある伊藤久榮博士は、大阪醫大系の錚々たる内科臨床家として既に定評あり、當世浪速診療界に逸すべからざる名醫博たる一人物也。氏は長野縣諏訪郡豊田村の出身にして、明治二十八年生る。大正九年大阪醫大を卒へ、直ちに同學副手囑託を兼ねて、附屬病院醫員として楠本内科勤務、十年十一月任助手、十一年八月同大學研究科入學、十五年四月迄病理學專攻、同年七月母校にて學位受領、同年七月より再び楠本内科勤務、昭和二年以來造幣局病院長として今日に及ぶ。寫眞を趣味す、温厚の紳士にして、學究的眞摯なる臨床家として徳望あり。

△學位主論文は「家兎鳩及家鶏ノ脚氣様疾患ニ關スル研究」にして、參考論文なし。本論文は家兎及鳥類の脚氣様疾患に就て、五編に分ちて研究し「ヴァイタミン」B需要量及消費量の根本問題を解決し、進んで人類脚氣の病原論に及ぶべきものなり。大阪市北區新川崎造幣局官舎九〇に住む。

向野定一

△福井縣敦賀港末廣四八に向野醫院あり、一般内科、理學的診療及レントゲン科を専門とす。院長向野定一博士は金澤醫大派の名醫博たる新人にして、母校の恩師たる現金澤醫大教授山田詩郎、行徳健助、谷野富有夫博士等指導の下にて研究せり。

△主論文「胸腔内吸入瓦斯ノ變化ニ就テ知見補遺」及び參考論文、(1)肺結核ノ人工氣胸療法及二三ノ知見補遺、(2)肺結核ノ赤血球速度ノ知見補遺、(3)肺結核ノ氣胸療法經過中ニ於ケル血液像及赤血球沈降速度ニ就テ、(4)陰道内ニ起レル急性煤煙中毒例、(5)實際的人工氣胸ニ於ケル血液像ニ就テノ補遺、(6)「アミーバ」赤痢ノ地方的散在性ニ就テ、(7)閉鎖性氣胸ノ胸腔内症ノ變化、(8)「バラ」K菌ニヨル症例を完成して金澤醫大より學位を獲得せり。

△博士は大正十二年金澤醫專卒業後、金澤醫大第一内科にて研究、昭和二年四月福井縣敦賀町敦賀病院副院長兼内科主任勤務、同六年以降金澤醫大内科にて研究、同八年六月學位を授與せらる、同十年三月敦賀病院を辭し現地にて開業今日に至れり。

△福井縣敦賀郡栗野村金山の人にして、明治三十二年生る。研鑽多年の後、漸く學究生活より離れて以來、診療界に進出して開業日尙淺きも、拮据勉勵、孜々營々として獨自の地盤を開拓するに餘念なく、手腕、聲望相俟つて益々人氣を獲得し、堅實なる發展と共に日増盛況を呈しつゝあり。



西田芳雄

△埼玉縣熊谷市熊谷に内科専門を以て著聞する西田病院あり、院長西田芳雄博士の診療所なり。開業古く、圓熟せる手腕は、多年の聲望と相俟つて益々遠近の人氣を吸収し、今や牢固たる地盤を有し一流に在り。氏は現住地の出身にして、明治二十四年生る。埼玉縣立熊谷中學を経て、大正三年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに東京慈惠會醫院外科助手を被命、高木喜寬博士に就き修業、四年同醫院を辭し、埼玉縣熊谷市に開業、同年十二月北里研究所第一回講習修了、六年同所研究生として志賀潔博士に就て細菌學を專攻す、七年九月渡米、直ちにシカゴ、ホスピタル、カレツヂ、オブ、メヂシンに入學、八年四月同校よりドクトル、オブ、メヂシンの稱號を授けらる、同年五月ミシガン大學にて血清學を專攻す、同年十二月ニューヨーク州ドルドゥ、サナトリウムに於てペトロフ博士の下に結核免疫學を專攻す、次で北米、カナダの諸醫大を見學し、續て歐洲に渡り英、佛、獨諸醫大學を見學し、九年十一月歸朝す、爾來再び開業、十一年東京慈惠醫大醫化教室研究生として永山武美博士に就き醫化學を專攻し、十五年八月慈惠醫大より學位を受領す、爾來専ら診療に従事し今日に至る。

△學位主論文「「ヒヨリン」ノ生化學的研究」參考論文、(1)微毒血清診斷ニ於ケル永室應用法ノ價值、(2)腦脊髄液検査ニ於ケル膠様金試験及「マヌチツク」試験ノ價值。

村木金之助

△太陽生命保險株式會社醫務課主任にして、傍ら東京市神田區東今川町一に於て自宅開業し、村木十善醫院長たる村木金之助博士は、東京慈惠醫專出身の内科學者にして特に心臟、腎臟を最も得意とし、又藥理學の造詣深し、斯間主なる指導教授は松山陽太郎、石川雄三郎、板倉武等の諸博士にして、慈惠醫大より學位を獲得せる新科近來の名醫博也。今や獨特の新手術を發達して診療に最善を盡すに餘念なし。其の最も得意とする心臟、腎臟、の領域に就ての打診振は特に好評にして、益々大衆の人氣を吸収し、堅實なる發展と共に日増盛況を呈しつゝあり。

△博士は東京海城中學校を経て、大正十四年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに東京慈惠會醫大内科助手拜命、傍ら同年五月日本橋區濱町見龍堂内科醫院(矢尾板四郎博士院長)醫員に就職、次いで翌十五年四月東京慈惠會醫大内科教室より同大學藥理學教室に轉勤、同教室助手拜命、昭和七年二月太陽生命保險株式會社醫務課主任就職、傍ら頭書の醫院開業今日に至る、同八年六月教授會通過、八月慈惠醫大より學位を授與せらる。

△主論文は「「ピラツロン」誘導體ノ止血作用ニ關スル實驗的研究」にして二篇より成る。參考論文は、(1)諸種内分分泌腺製劑ガ甦生臺肝臟血管並ニ分泌ニ及ボス影響ニ就テ、二篇、(2)「ピツイトリン」ノ肝臟血管並ニ分泌ニ及ボス研究知見補遺二部より成る。

△感想に曰く「現代の醫學に對しては特筆すべき感想なきも、近時非醫者の治療、醫師類似の行爲盛となり、爲めに正規の治療を亂し救はるべき人命をも救へざる事往々あり、寒心すべき事なり、醫師界に於ても特に熟慮を願ふ」云々。近來同感の士頗る多く、醫師會廓情の叫び、漸く酣ならんとする秋、傾聽すべき清涼劑として特に注意を可要也△三重縣一志郡戸木村村木常吉の三男にして、明治三十三年生る。年齒未だ三十有六歳、少壯の意氣益壯んにして研究心に富む、物事に熱心にして一度び思ひ立ちたる事は、萬難を排しても徹底的に目的を貫徹せしむる點は、博士の長所と見るべき也。而して其の診療振りの忠實にして熱誠克く親切を盡す所は篤き信望を博す。若し強ひて其の短所を指摘せしむれば、性來の短氣は醫師として又現代社會人として時に或は自己の損失を招く嫌なきか。研究以外の趣味としては歌舞伎見物、散歩、旅行等を好む。

富澤 鍾

△名古屋市東區杉ノ町三ノ一内科専門富澤醫院長富澤鍾博士は、今や中京診療界に於ける内科の



大家として矚目せらるゝ逸物也。氏は長崎縣東彼杵郡大村の人、明治二十一年東京にて生る、明治四十三年愛知縣立醫  
專を卒へ、直ちに縣立愛知病院神經精神科に入り北林博士に師事して神經精神病學を研究し、大正二年九月同院の命  
に依り九州帝大第二内科に入り、武谷廣博士に就き神經病理及び内科一般を研究す、三年十一月歸院し、五年三月辭  
職開業す、十年五月より愛知醫大勝沼内科教室に入り勝沼精藏博士の指導の下に實驗病理の研究に従事す、十五年九  
月愛知醫大にて學位受領、同年五月より歐洲を漫遊諸國大學病院を歴訪し見學する事七ヶ月、昭和二年歸朝以來専ら  
診療に従事し今日に及べり。

△學位主論文は「心囊腔ノ吸收ニ關スル實驗的研究」なり。研究と醫療そのものは、博士の最も趣味とする處にして  
終始克く其の事に勵精して亦他事を顧みず、以て醫師の本分として自ら樂しむの人也。



幸島春夫

△北海道根室町字綠町二丁目有光病院内科に在る幸島春夫博士は、千葉醫大派の新手腕家として  
の聞え高く、今は最も努力奮闘を要する時に在り。學歷よりすれば、二高を経て、昭和三年同大學を卒業するや、直  
ちに母校の佐々内科に勤務の傍ら佐々貫之教授指導の下に研究、同八年十二月名古屋市愛知診療所（現在名古屋病院  
と改稱）院長に就任、同九年六月北海道根室町有光病院内科に勤務今日に至れり、其間昭和八年十月母校より學位を  
受領せり。

△學位論文は「壁反射ニ關スル研究」にして、參考論文なし。蓋し本論文は氏が論著中の傑作にして、氏が會心の著  
と見るべきもの也。千葉縣香取郡東條村船越幸島清治の二男にして、明治三十三年生る。學究生活より離れて診療界  
に躍進せる博士や、日々孜々として臨床に勵精し希望ある將來に期する所あらんとす。年齒未だ少壯、發刺たる意氣  
と共に前途の活躍を矚目せらる。スポーツに趣味を有し、音樂を愛好し、又た盆歌に親しむ。北海道根室町字清隆町

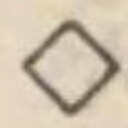
一に住む。



吉川新次郎

△大阪市東區淀川區十三東之町一四二吉川内科病院院長吉川新次郎博士は、和歌山市十二番町の出  
身、明治二十六年生にして、大正六年府立大阪醫大を卒へ、同時に大阪市立刀根山療養所醫員を被命、約五年在職の  
後同十一年辭す、斯間主として肋膜炎の研究に従事す、同年大阪醫大研究科に入り村田教授指導のもとに病理學の研  
究に従事す、同十五年研究科を退學して、大阪市に開業診療に従事す、同年五月大阪醫大より學位を受領す。開業既  
に十有餘年を閲し、多年の聲望、手腕と相俟つて今や堅實なる地盤を有し、好評嘖々の裡に抜くべからざる繁昌を極  
む。文藝趣味の人也。

△學位主論文「硅酸鹽或ハ硅酸ノ試食及ビ注射ニヨル實驗的「アミロイドセ」ニ就テ」參考論文、(1)咯血ノ副因ニ  
就キテノ新知見、(2)肋膜炎ノ病理ニ關スル實驗的研究、(3)肋膜炎ノ病理ニ關スル實驗的研究、(4)肋膜炎ノ病理ニ關ス  
ル實驗的研究、(5)薰灰飼養ニヨル家兔「アミロイドセ」ニ就テ。



桑野 佐源太

△東京市京橋區木挽町南胃腸病院副院長桑野佐源太博士の名聲は、胃腸病の大家として世人の既  
に周知する所也。氏は福島縣安達郡杉田村大字館野の人、明治二十四年生にして、東北學院普通部、二高を経て、東  
京帝大に進み、大正八年醫學部を卒へ、九年同學衛生學教室に入り細菌學專攻、次で稻田内科教室に轉じ副手となり  
内科學專攻、十三年七月任同學助手、十四年四月同教室を辭し直ちに東京市南胃腸病院副院長に就任し、現在に及ぶ  
其間昭和二年四月東京帝大より學位を受領す。繪畫、旅行、乘馬を趣味す。南大曹博士は妻の叔父なり。

△學位主論文「「バクテリオファージ」ニ關スル研究、(1)所謂 *Mischbacteriophage* ニ就テ、(2)定量諸法ニ對ス

醫科續篇(内科)



ル批判、並ビニ余ノ定量法ニ就テ、(3)「バクテリオファージ」増殖作用ニ關スル知見補遺」參考論文は、(1)口唇「ヘルペス」病原體ニ關スル實驗的研究、(2)「プロタミラーゼ」ノ「バタテリオファージ」誘發作用ニ就テ。麴町區上二番町四に自宅あり。

大井 司

△臺灣高雄醫院長兼内科醫長大井司博士は、宮城縣桃生郡和淵小池千代治の三男、明治十八年生にして、後ち同縣黒川郡吉岡町醫師大井胤七の養嗣子となる。仙臺二中を経て、仙臺醫專に入り、明治四十四年之を卒へ、直に公立登米病院醫員、次で大正二年東京帝大青山内科介補を経て、臺灣總督府醫院に入り、臺中、臺南醫院に勤務し、同十三年醫院醫長となり花蓮港醫院長に補せられ、昭和二年依願免官、直に熊本醫大明石内科に入り研究、次で東北帝大に轉じ、加藤内科に研學、同年三月九州帝大にて學位受領、同三年再び任臺灣總督府醫院醫長、嘉義醫院長拜命、次で現職に赴任今日に至る。多趣味の人にして和歌、讀書、實生流謠曲、碁、カルタ、寫眞、何れも大好き、殊に運動は最も好む所にして、野球、庭球は自らやり、其他の運動何んでも好まざるものなし、鵬洋は其號也。

△學位主論文「バラランチヂウム」腸炎及び大腸「バラランチヂウム」ノ形態並ニ發育ニ關スル研究」參考論文、(1)臺灣人ニ於ケル鉤形口蟲ノ寄生ニ就テ、附鉤形二口蟲第二中間宿主ノ追加、(2)肥大吸蟲ノ日本人寄生例ニ就テ並ニ人體及豚ニ於ケル本蟲ノ感染徑路に就テ、(3)「マラリア」ニ對スル「アンチモン」劑ノ治効ニ就テ、(4)「アムーバ」嚢子ノ簡單ナル染色法ニ就テ。臺灣高雄市山下町四ノ二に住む。

中村善雄

△神奈川縣七里ヶ濱惠風園療養所長として命名ある中村善雄博士は、神奈川縣鎌倉郡腰越津村の人、明治二十五年生にして、第一高校を経て、大正十一年九州帝大を卒へ、任九州帝大助手、十三年依願免本官、同學大學院入學、後藤教授、小野寺教授の指導を受く、同年八月副手囑託、十五年五月大學院退學、引續き小野寺内科教室にて内科學研究、昭和二年依願副手解囑、同年二月母校にて學位受領、次で實父經營の七里ヶ濱惠風園療養所に入り副長に次で所長として今日に至る。泰典は其號にして、謠曲、狩獵を趣味す。篤實温厚の紳士にして、肺結核治療界に逸色せる斯科の大家として既に定評あり。

△學位主論文「脂肪類ノ運命ニ關スル肺臟及肝臟ノ機能ニ就キテ」、參考論文、(1)肺臟「リパーゼ」ニ就キテ、(2)「キニーネ」ニ對スル血清「リパーゼ」敏感度ニ關スル疑義、(3)縦膈竇ニ發生セル皮囊腫ノ一例、附摘出セル内容ノ化學的分析成績、(4)血液及臟器ノ脂肪類微量定量法。神奈川縣鎌倉郡腰越町三三九に自邸あり。

平井 進

△高知市帶屋町にて内科専門を以て開業せる平井進博士は、京都府立第一中學校、第八高等學校を経て、大正七年十一月京都帝大醫科大學卒業、同八年一月同大學醫學化學教室助手、助手となり、同十三年同大學辻内科副手勤務、同十四年六月學位受領、同十五年一月高知縣宿毛町宿毛病院長に就任す、次で高知縣須崎町昭和病院、高知市片山病院を経て現地に開業今日に至れり。

△主論文「米胚子中ノ脂肪研究」、參考論文、(1)米糖中ノ糖類ニ就テ、(2)米胚子ノ「プリン」鹽基ニ就テ、(3)「デザミノ」及「ヌチリールテカゼイレ」ノ素分布ニ就テ。

△高知縣安藝郡奈半利町の人、明治二十五年生る。自己の才學を衒ひ、傲慢の態度見ゆ、自己の人物を過信して人を責め、己が非を知りて後も猶且つ反省せざる人の様に思はる。

佐々木謙

△多士濟々たる帝都診療界を睥睨して、各科博士に就ての専門的認識を得んとするも又た容易な



らんや、茲に物色打診して品階を試みんとする佐々木謙博士は如何なる人物なるか。東京市本所區東兩國一ノ二〇に佐々木病院あり、内科、外科、呼吸器科、小兒科に別れ、内部の設備整ひ、隔離室完備す。院長は佐々木森男醫學士にして内科、外科を擔任し、佐々木謙博士は副院長として氏の最も得意とする呼吸器科を擔任す。其の玲瓏たる打診の好評は、博士獨特の手腕と相俟つて益々人氣を集中し、院長多年の聲望と共に日々繁榮を持續しつゝあるもの、博士の負ふ所又た大なりと云ふべし。

△博士は東京帝大醫學部の出身にして、大正九年卒業後、恩師稻田龍吉博士及び三田定則博士指導の下に、内科學及び血清學を専攻し、又た嘗て獨逸に留學して研鑽大に得る所あり。歸朝後、學位論文「血液、肝臟及び脾臟「エステラーゼ」ノ特異性ニ關スル血清化學的研究」を完成し、母校へ提出して昭和四年六月學位を受領せり。

△博士は東京市の人、明治二十六年生れにして、當年不惑に入る三歳、學究的濃厚の紳士にして、眞面目なる臨床家としての人格者也。其の専門的學識の該博なるは言はずもがな、臨床的多年の實驗に富み、今は年壯の意氣と共に學識、手腕、人格揃つて圓熟の域に入り、篤實敦厚なる性格と相俟つて一段の貫祿を加え、最も腕の冴え盛りにて活動の盛期にあり。久しく前記の佐々木病院に精勤して、克く院長を補佐し唯だ院是を是事として誠心誠意以て仁術の最善を盡すに餘念なし。古き歴史と共に同病院の今日の隆盛を見るも其の由つて來る所以を首肯せしむ。

### 小泉 透

△京都醫博界は多士濟々として頗る人物に富む。茲に品階せんとする小泉透博士は、京都市左京區田中馬場町一に自己の診療所を設け、其の専門とする内科、小兒科を標榜して日々診療に勵しみつゝあり。博士は京都府立專出身の内科及び小兒科医者にして、特に呼吸器病を最も得意とし、京都府立醫大より學位を獲得せる斯稗界近來の名醫博也。嘗て瑞、奥に留學し、研鑽多年、既にして該博なる學識を有し、臨床にも其能にして永年の經驗に富む、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、打診の好評と相俟つて日増盛況を呈しつゝあり。

△博士は明治四十四年京都府立醫專を卒へ、卒業後同附屬病院内科勤務、大正十二年一月より同十四年一月迄歐洲留學、主として瑞國ベルン大學細菌學教室にてゾーベルハイム教授指導の下に研究、同年ドクトル、メヂチーネの稱號を授與せらる。次で奥國維納、血清治療研究所にてレーウエンスタイン教授に師事して研究す、歸朝後京都府立醫科大學微生物學教室へ入室、常岡教授に師事す、昭和三年より現住地開業、翌四年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は「ヂフテリ」菌屬ノ生物學的研究」にして、參考論文は、(1)異性抗原及抗體ニ關スル知見補遺其一 粘液性連鎖球菌ノ異性抗原性ニ就テ、(2)其二フ氏抗原ノ血清耐性ニ關スル實驗、(3)抗酸性菌ノ「アルカリ」耐性ニ就テ、(4)血行中ニ於ケル抗酸性菌ノ運命ニ就テ、(5)膽汁中ニ於ケル結核菌ノ排泄ニ就テ、(6)實驗上「クリスオルガン」ノ治療機轉ニ就テの六篇なり。

△感想に曰く「現今醫學博士濫發の非難ありて廢止論改正論等論議せられつゝあれど、今日日本の醫學の進歩が先進國を凌駕する勢だ、畢竟之學位制のある賜だ、教授たる者宜しく公平に論文を審査し、惜まずドシノ學位を授與すべきだ、唯博士が今日普通開業醫に比べて兎角世間の非難を受けるのは、非人格的の者や又學位の肩書をのみ利用するからだ、依りて博士たる者人格を重じ、人並以上の専門科目を修得し、然後開業すれば世界は博士を要望する事請合だ」云々。

△博士は京都府與謝郡西辻小泉詠歸の二男、明治十九年生る、當年取つて五十歳也。年壯の意氣益壯んにして、手腕愈々圓熟の域に達して一段の重望を加ふ。殊に博士の特徴とする所は、學位に伴ふ人格の向上尊重を高調する一人者にして、常に徳操の堅持を志して克く自ら品性の陶冶に勉むるの點にあり、好箇の臨床家として其の人格を敬慕すべき也。趣味として特記すべきものなしと雖も、「醫は仁術也」をモットーとして終始醫療に専念勵精し、以て自己の



天職として趣味とするの概あり。春秋猶豊富にして洋々たる前途は、博士の將來を語るに綽々として餘裕あり、幸に健康と共に益々發奮活躍あらん事を切望す。

齋藤 齊

△大阪市東區京橋二ノ三五にて内科専門を以て獨立開業せる齋藤齊博士は、大正四年京都帝大醫科大學を卒業後、暫く朝鮮兼二浦三菱病院に勤務せしが、後京都帝大藥物學教室に入りて研究の結果、『卵黃性腎炎並ニ「アルカリ」ノ影響ニ就テ』を完成し、大正十三年二月學位を受領す。學位受領後、大阪慈惠病院勤務の後大阪市現住所に開業今日に至れり。

△福井縣の人、明治二十年生る。信義に缺け、誠意なき人に非らざるか。一言録して博士の反省を促すと共に、諸賢の批判を求めんとす。

豊島勝夫

△札幌市北八條西一丁目内科、小兒科を標榜して、大正十二年獨立開業せる豊島勝夫博士は、東北大系の内科、小兒科學者として錚々たるもの、母校の恩師熊谷岱藏博士の愛弟子にして、研學多年、北海道帝大より學位を得たる新進の名醫博として知らる。今や該博なる學識と共に臨床的經驗に富み、打診の好評は博士の性格と相俟つて益々人望を博し、日増繁榮の盛況を呈して一流に在り。

△博士は大正五年東北帝大醫學專門部卒業後、直ちに附屬醫院熊谷内科に勤め、同七年より日赤北海道支部病院に轉勤、同十二年札幌市にて開業、昭和三年より北海道帝大醫學部專攻生として法醫學教室及び小兒科教室にて研究、同六年九月北海道帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は「一新寒性溶血毒ノ研究」にして、參考論文は、(1)諸種色素ノ血球凝集性ニ就テ、(2)諸種全屬膠質及二三

膠質ノ血球凝集性ニ就テ、(3)化學的並ニ植物性血球凝集ニ對スル「ヘモアグルチノイド」ノ態度ニ就テ、其他三篇あり。△感想に曰く「輒近經濟界の不況は我が醫業界を壓迫し、吾人開業醫の生活は日に日に脅威を感じつゝあるが、更に他方には官公立の實費診療所、相談所、治療病院、其他産業組合法による病院等の施設が簇出し、又政府は數年前より健康保險法を實施して醫業を壓迫し、然も次期議會に於て現行健康保險法の範圍に大擴張を行ひ、又新に職員健康保險法を制定せんとして居る。斯くなりては現在の窮狀に更に拍車を掛けることとなり、吾々開業醫の診療する患者の大半は保健被保險者となると云ふ奇現象を呈し吾々の生活は根本から破壊せらるゝこととなる譯である。吾人醫師が社會に於て、重大なる責務を帯び寢食を忘れて日夜社會衛生の爲めに活動し居る以上其の大半を占むる開業醫を斯くまで壓迫することは政府當局者が社會政策的見地のみより見たる偏見と云ふべく九千萬國民の保健上由々しき問題である。而してこれが現在の社會制度に於て己むを得ざる趨勢なりとせば茲に考ふべきは醫業國營論である、吾人は將來醫業國營の實現を望むや切なるものである。敢て當局者の一考を求む」云々。

△博士は宮城縣仙臺市の人、明治二十七年生る、當年不惑に入る二歳、手腕漸く壯熟して獨特の異彩を放ち、最も奮闘活躍の時代に入る、醫業國營論者の一人にして、多大の抱負を持し該博なる識見を有す。平生刀圭甚だ多忙、誠意親切を以て終始し奮闘的努力も日尙足らざるの概あり。學究的温厚の紳士にして、臨床家として良醫たるの特徴を具備す。治療界の前途暗澹たるの秋、幸ひ健康にして、爲斯界益々健闘奮盡あらん事を囑望して止まず。

田村實眞

京畿道立水原醫院長として勵精しつゝある田村實眞博士は、慶大派の少壯醫博にして内科臨床家として錚々たる者也。學歷より見れば、大正十五年三月慶大醫學部卒業、直ちに朝鮮總督府醫院第一内科に入る、昭和二年六月京城帝國大學醫學部助手、岩井内科勤務、同六年十一月慶大にて學位受領、同七年一月朝鮮道立醫院醫官



京畿道立水原醫院拜命今日に至る。斯間京城帝國大學醫學部第一内科講座教室岩井誠四郎教授の指導を受け内科学を専攻す。年齒未だ少壯にして潑刺たる前途を有し、將來有爲の臨床家として頗る春秋に富む。

△學位主論文は「肝臓ノ食鹽及水分代謝調節機能ニ關スル研究」にして、其一及其二の二篇より成る。参考論文は、(1)「アドレナリン」及「インスリン」ノ血液内鹽素及水分ニ及ボス影響、(2)腸「チフス」患者ニ就テノ研究、(3)體温上昇ト血液内水分及鹽素ニ關スル臨床的及實驗的研究、(4)體温變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ體温下降トノ關係、(5)體温變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ解熱トノ關係、(6)體温變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ皮膚ニ於ケル變化ニ就テ、(7)體温變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ外氣温變化トノ關係、等なり。

△出身地は廣島縣豊田郡大崎南村にして、田村和一の二男、明治三十四年生る。スポーツを趣味する丈に健康にして少壯の意氣益々壯也。性來几帳面にして意志強く、事に當るや熱心克く勉め徹底的に貫行する人也。向後一層の努力を要するや益々切なるの秋、折角の奮闘活躍を囑望して止まず。朝鮮京畿道水原邑山樓里官舎に住む。

### 海輪 十二

△秋田縣横手町四日町下に内科、レントゲン科、理學的治療科を専門とする海輪醫院あり、院長海輪十二博士の經營にして、開業拮据拾年餘、堅實の地盤を有し、當地方診療界に於ける斯科の大家と仰がれ、多大の信望を博す。氏は秋田縣師範講習科修了、其後六ヶ年間小學校教員となり獨學にて二高へ入學、次で京都帝大醫科大學を明治四十四年卒業後、引續き同大學内科副手として三ヶ年間勤め、其後秋田縣公立横手病院勤務の後、現住地にて開業今日に至る、斯間昭和六年十二月京都帝大にて學位を授與せらる。

△學位論文は「ケダニ」病ニ關スル研究」なるが、本研究に就ては「ケダニ」病本邦の權威田中敬助博士の親しき指導を受け研究大に得る所あり。専門は内科を以て立ちたるも、最も得意とするは「ケダニ」病及び急性腫瘍なりとす。

氏は秋田縣平鹿郡横手町の出身、海輪利道の四男にして、明治十二年生る。稀に見る篤學者にして、氏が小學校教員より奮起して獨學獨行を貫行して終に克く學位を獲得せる經歷は燦として輝き、立志傳的篤學者としての範を示すに足り、頂門の一針として後進誘掖の活資料とすべき也。博士の年齒今や知命に入る七歳、益々元氣にして日々診療に勵み、業餘猶研究に趣味を集中して精研大に勉むる所あり、學究的臨床家として茲に推獎する所以、著者は更めて敬意を表する者也。

### 工藤 文雄

△滿洲國熱河省在承德、承德國立醫院長として多大の信望を博し、滿洲國診療界の爲め努力貢獻しつゝあるは工藤文雄博士也。博士は南滿醫學堂出身の篤學者にして、京都帝大より學位を獲得せる内科界の名醫博たるに耻ぢず、特に滿洲醫大教授戸田茂博士に就て研究せる結果、醫化學の造詣深く、又新陳代謝に關する研究に多大の興味を有し獨特の手腕を有す。今や多年蘊蓄せる臨床的手腕を發揮して益々人望を博し、至誠以て不斷の努力精進を續けつゝあるは甚だ多とすべき也。

△博士は大正十四年南滿醫學堂卒業後、直ちに滿洲醫大醫化學教室に副手として勤務、同十五年二月任同學助手、昭和四年同大學専門部講師兼務、同五年滿大講師兼同専門部助教授を命ぜらる、同七年二月學位受領、同年四月大連醫院内科勤務、次で現職に轉じ今日に至る。

△學位主論文は「チアン」ノ生化學的研究」にして七篇より成る。参考論文は、(1)「ロダン」ニ關スル研究(二篇)(2)膠質性「パラヂウム」ノ生化學的研究、(3)鮫魚精蟲ノ脂肪酸ニ關スル研究、(4)酵母ノ脂肪及ビ類脂肪新陳代謝ニ就テ等なり。氏の論著中「チアン中毒時の血糖誘出機轉」に關するもの又は「脂肪酸の研究」は氏が最も熱心に研鑽せるものにして氏が會心の著作と見るべき也。



△博士の感想に曰く「臨床醫師界に入ると自己の研究課目など全く眇たるもので、大海に投じた石の様なものである。智識の淺薄さを嘆くのみ、更に更に勉強しなければならぬ、せいたくを言ふと、も少しのんびりと研究三昧に入りたく思ふのです」云々。又謙遜なる博士の書簡の一節に曰く「大事業の御完成を祈り上げます。醫博は澤山で嘸御苦勞と存じます、雨後の竹の子の様で、井關先生の「博士録」に掲載せられた方が羨ましい時代がありました、今は實際自分の貧弱さが耻かしい位です、先賢諸學者と一緒にされましては。終りに御成功を祈り上げます」云々、以て博士の爲人を窺はれ、著者は更めて敬意を表する者也。

△氏は長野縣小縣郡富士山村戸主藤文太の長男にして、明治三十二年生る。學究的温厚の紳士、年齒未だ三十有七歳、熱心なる研究者にして、平生刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、臨床の餘暇讀書精研日も猶足らざるの概あり、又音樂を聴くことを趣味とす。賦性眞面目にして、人に對するに甚だ親切なり。精研に餘念なき前途は猶頗る春秋に富む、折角の努力奮闘を祈るや切也。

### 荒川信次

△名古屋市市民病院内科副部長として内外の信望を博し、日々診療に勵精しつゝあるは荒川信次博士也。博士は愛知醫大出身の内科學者にして、内科界現代の權威勝沼精藏博士の愛弟子として知られ、恩師指導の下に多年研鑽の結果、名古屋醫大より學位を受領せり。學究生活より巢立ちて未だ日尙淺く、診療界に躍進して以來、拮据勵精、今や獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在り、向後の活躍と相俟つて有爲の前途を大に囑目せらる。

△博士は大正十一年五月愛知醫學專門學校卒業、直に同校勝沼内科勤務、同年九月愛知醫科大學入學、同十五年三月卒業、直に同校勝沼内科勤務副手拜命、昭和六年五月名古屋醫科大學助手拜命、勝沼内科勤務、同六年七月名古屋市技師拜命、名古屋市民病院内科勤務を命ぜらる、同七年二月學位受領、同八年二月同病院内科副部長を命ぜられ今日に至る。

△學位主論文は「網狀赤血球ニ關スル知見補遺」にして、參考論文は、(1)脊髓癆ト全髒トニ就テ(近藤新一共著)、(2)慢性「モルヒネ」中毒症ノ禁斷症狀ニ對スル硫酸「マグネシウム」靜脈内注射ノ觀察、(3)慢性酒精中毒症ニ對スル硫酸「マグネシウム」靜脈内注射ノ觀察等なり。

△氏は名古屋市中區南園町二丁目荒川鉞三郎の長男にして、明治三十年生る。少壯の意氣益壯にして研究心に富む、年齒漸く三十有九歳、今は勳盛にて手腕壯熟と共に最も活躍の時代に入り、診療と研究とに趣味を集中して努力奮勉倦むことなし。學究的臨床家としての前途や頗る春秋に富む、幸ひ健康にして、益々精研活躍あらん事を囑望す。名古屋市中區南園町二ノ一三に住む。

### 野島泰治

△香川県木田郡庵治村大島療養所長としての野島泰治博士の嘖々たる名聲は既に天下に著聞す。博士は大阪醫大系の名醫博にして、癩病の權威として其の大なる存在を認められ獨特の手腕を有す、特に其の最も得意とする癩及び癩の内外一般に渉る領域に就ては他の追隨を許さず、斯科界獨歩の觀あり。既に久しく斯界に忠勤を擢んで、癩療養の爲め懸命の努力精進を續け貢獻する所多し、多年の功績は言はずもがな、斯道の振興啓發上將來博士の力に俟つもの益々甚大なるを痛感するの秋、折角の奮盡活躍を囑望して止まざる也。

△博士は大正十年三月大阪醫科大學卒業、阪大産婦人科、大阪市立桃山病院醫員、大阪商船醫師、阪大實驗診療科、阪大醫學等の醫員、副手、助手を経て、第三區府縣立外島保養院勤務、昭和二年六月第四區大島療養所に轉じ今日に至る。斯間昭和七年二月大阪醫大より學位を受領せり。斯間阪大緒方、古武兩教授、有馬賴吉、木内幹兩博士に就て指導を受くる所厚く、産婦人科、細菌血清學、傳染病、癩病を専攻し、特に癩及び癩の内外一般に長ず。

△學位主論文は「癩ノ血清反應ニ關スル研究」にして、五篇より成る。參考論文は、(1)煮沸血液ニ依ル疾病早期診斷



法ノ二方法(二篇)、(2)處女反應、(3)煮沸血液ニヨル癌腫ノ早期診斷反應、(4)癩ノ「リドノール」療法、(5)癩患者ニ行ヘル交感神經切除例、(6)癩患者ノ腦脊髓液ニ就イテ、(7)培養上ヨリ見タル癩菌ノ抵抗ニ就イテ、等なり。就中「煮沸血液ニヨル疾病ノ診斷法」は特に得意のものとするべき也。

△感想に就て二三を披瀝して曰く、(1)恩師である島瀉教授が「治療のための醫學、醫學のための治療」と云ふことを常に唱導されて居りましたが現今の醫學教育に更に力強く反影せしめたいものであると痛感します。(2)開業醫として苦い経験のある學者を大學教授たらしめたら、(3)内科醫たり得る婦人科醫外科醫は多いが時に應じ外科醫たり得る、内科醫は少い。外科醫たり得る内科醫養成に醫育教育の主眼を置いてもらひたいものです。

△廣島縣深安郡神邊町の出身野島德磨の二男、明治二十九年生にして、現在は大阪市北區絹笠町一四に本籍を置く。學究的温厚の紳士にして、熱心なる研究者として其の今日あるは氏が面目を物語りて餘蘊なし。今や年齒漸く不惑に達して氏が腕は益々冴え、研究と癩療養に興味を集中して他に何等の道樂を有せず、一意専心、唯だ誠意誠實を盡して貴き使命を果たさんとする至誠の士たるを見る。賦性敦厚篤實、信義に篤く人に親切なり、又能く後進を愛し能く指導に力む。現代博士界に矚目すべき醫博人物として敬意を表し、茲に推奨す。香川縣木田郡庵治村大島療養所官舎に住む。

大庭榮雄

△北海道廳衛生技師大庭榮雄博士は、東北帝大の出身(大正十二年)にして、大正十三年北海道廳衛生技師拜命、北海道帝大教授井上善十郎博士の指導を受け、北海道帝大より學位を得たる内科學者にして、細菌學、免疫學を得意とす。

△學位主論文は「Upon the Formation of the Bacterial (aerobase)」にして、参考論文なし。「簡明傳染病解説」は博士會心の著作と見るべき也。福島縣若松市榮町の人、大庭榮太郎の二男にして、醫學博士大庭眞映の實弟なり。明治三十一年生る、當年三十九歳の少壯者、元氣潑刺として研究心に燃ゆ。萬事几帳面の質にて事務に缺くる處なし將來有爲の博士の前途や頗る春秋に富む、折角の努力奮闘を望むや切也。札幌市外圓山町四三三ノ四に住む。

櫻井虎雄

△樺太惠須町王子製紙工場附屬病院に在る櫻井虎雄博士は、大正七年新潟醫科大學卒業、直ちに同校醫化學教室にて研究「副交感神經毒ノ血糖ニ對スル作用ニ就テ」を完成し新潟醫科大學に提出して、昭和二年十一月學位を受領せり。福島縣須賀川病院内科、樺太豊原、豊生病院内科等に歴任し次で現職に就任す。△群馬縣の人、明治二十九年生る。博士に對する紛々たる世論の喧しき秋、博士の如きも三思反省の要なきか、著者は博士の爲め其の人格を甚だ惜む者也。

島誠郁

△金澤市石屋小路十八に自己經營の診療所を設け、内科特に呼吸器を標榜して独自の領域に一路邁進し、年々歳々堅實なる發展を遂げ、今や抜くべからざる地盤を獲得して一流の位地を占め、悠々たるは島誠郁博士也。氏の學歴より見れば、明治三十五年十月金澤醫學專門學校卒業、同三十六年九月金澤醫學專門學校講師、同三十八年十月任陸軍二等軍醫(豫備)、同年十一月叙從七位勳六等單光旭日章、其後金澤醫科大學生理學教授上野一晴博士指導の下に研究し、昭和七年二月金澤醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「呼吸ノ變化ニ伴フ心搏頻度ノ變化ニ關スル研究」にして、参考論文は「兒童生徒ノ身長發育型ノ分類ニ就テ」外六編あり。氏は現住地たる金澤市の出身、島元恭の長男にして、明治十三年生る。温厚なる學究的紳士にして、篤學者也。殊に特筆すべきは、氏が開業拮据幾星霜かの間、研學の念に燃え、診療の餘暇常に學を鍊り腕を



磨くに餘念なく、研鑽努力の結果、終に克く其の初志を貫徹せる點に在り、其の向學的精神と不撓の堅志、不屈の精力とは立志傳的篤學の士として、後進誘掖の爲め範を示すに足る。博士の齡今や知命に入る六歳、元氣益々旺盛にして、老熟せる獨特の手腕は一段の光彩を添ゆ。

吉田元昭

△佐賀縣東松浦郡有浦村吉田病院院長吉田元昭（舊名善晴）博士は、佐賀縣東松浦郡入野村大字鶴牧六五九吉田淺太郎の次男にして、明治三十六年生る。佐賀縣立唐津中學校、佐賀高等學校を経て、昭和三年四月九州帝國大學醫學部を卒業、直ちに同學部武谷内科教室副手及醫員となりて研究、竹谷廣博士の指導を受け七年五月學位を受領す、六年十一月私立吉田病院を創設し一般内科特に呼吸器病の治療に獨特の手腕を有し一流を占む。

△學位主論文は「結核ノ一新特殊診斷法ニ就テ」にして、參考論文は、(1)隨意性眼球震盪症ノ一例ニ就テ、(2)「AO」注射ニヨル末梢毛細血管内白血球ノ消長ニ就テ、(3)余ノ結核診斷法ノ特殊性ニ就テ、(4)「ツベルクリン」皮内反應ト余ノ結核特殊反應トノ比較成績ニ就テ等なり。

△感想に曰く、一、市或は市を有せざる郡には各科を綜合する市立或は郡立病院設立の必要あり。之により市或は郡内開業醫は相互に醫療の經濟化をなすことを得。二、醫療の普及平均化といふ立場より觀察して各村落には各々適合する條件のもとに村立病院或は醫院を設立する必要あり、或る地方には國庫補助の必要をも起るとしても實現したる。三、農村民の健康保健、能力増進といふ點より日本に極めて多い腸内寄生蟲の驅除を徹底せしむること。それにはA現在の便所を内務省獎勵の改良便所に改設するかB村費を以つて檢便しその結果驅除をなすこと。四、小學校中學校の學校衛生に努むること。五、一般人民に衛生思想普及の目的より小學校及中學校に衛生學の簡單なる學課を設けその教官には學校醫を當つること。六、結核性疾患殊に肺結核に對する理解が少いため患者及其の家族に對する周

圍の人々の態度は極めて非人道的である、故に本疾患に對する法令を設くる必要あり。

△年齒未だ三十有三歳、少壯の意氣に燃え、診療に熱心なり。性格より打診すれば、親切にして同情厚い長所のある反面に決斷力に乏しいといふ短所なしとせず、又負け嫌にて自己の主義主張を貫徹するといふ長所の反面には妥協性に乏しいといふ短所なしとせず。趣味としては寫眞を能くし、繪畫を好む。春秋猶頗る豊富にして、將來有爲の臨床家として向後の活躍を期待せらる。九州帝大教授岡田亮次博士とは親戚也。

於保泰造

△競争激烈なる帝都の診療界に割據して獨立開業せる於保泰造博士は、四谷區新宿二ノ五に診療所を開設、私立醫院としての内部を新裝整備し、博士自ら日々診療に勵精努力して治療界の爲め大に將來に俟つあらんとす。開業拮据日尙淺くも、氏が熱心なる活動振りと、博士獨特の手腕は打診の好評と相俟つて漸次独自の地盤を開拓し、益々人氣を吸収しつゝあり。博士は岡山醫專系の内科學者にして多年の經驗に富み、大阪帝大より學位を受領せり。光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放ち、向後の活躍と相俟つて前途の發展を大に囑目せらる。

△博士は大正八年五月岡山醫學專門學校卒業、岡山市麻植内科病院、大阪市高安病院内科、神戸市天兒病院等に勤務大正十四年四月より昭和六年八月迄神戸市立救護院長として奉職、昭和四年二月より同七年三月迄兵庫縣立神戸病院醫化學研究室に於て研究に従事、同七年八月學位授與、同七年四月より同年九月迄大阪帝大醫學部小澤内科に於て内科學研究、同七年十月佐賀市にて内科開業、同九年八月上京現住所に開業今日に至る。斯間神戸の竹田正次博士、大阪帝大教授小澤博士、神戸の田村利雄博士の指導を受くる所多し。

△學位主論文は「尿中胆汁酸排泄ニ就テ」にして、(1)尿中胆汁酸測定方法ノ比較、(2)實驗的各種黃疸及ビ肝臟機能障礙ニ於ケル胆汁酸ノ尿中排泄ニ就テの二篇より成る。參考論文は、(1)血壓ト腦脊髄液壓トノ關係ニ就テ、(2) Deber



Diegalleinsäurenbestimmung im urin durch salagometer (3) 動脈硬化症ト「アチッド」鹽類等なり。

△佐賀縣小城町の人亡於保平三の四男にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達し、濃厚篤實なる少壯の紳士也。内科學者として立てる博士は、特に醫化學の造詣深く、診療界に躍進して以來も醫化學及び生理學方面に關する検査と研究とに多大に興味を有し、今猶刀圭多忙の業餘此方面の研究を怠らず精研に餘念なきが如し。禁酒禁煙家にして格別趣味を有せず、唯だ診療と研究とに熱中して今も尙昨に渝らず、努力勵精日も尙足らざるの概あり。資性眞面目にして誠實を以て終始し、人に對して快活能く愛し同情に富む、又能く應答禮を重ずる禮儀正しき人也。學究的臨床家として將來の大成を囑望して止まず。

### 西郡彦嗣

△第一師團司令部軍醫部に在勤中の陸軍一等軍醫西郡彦嗣博士は、先年(昭和七年十二月以來)第六師團衛生班附として滿洲に派遣中活躍する所ありしが、今は内地に歸還して其の職務に勵精努力し、至誠報公の念に厚く大に將來に俟つ所あらんとす。氏は京都帝大出身の内科學者にして、母校より學位を獲得せる少壯醫博なるが、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、陸軍々醫となり、其後京大大學院に入學、内科學專攻、昭和七年十一月學位受領、歩兵第九聯隊附(伏見)、次で陸軍一等軍醫として、昭和七年十二月以來滿洲に派遣せられ、第六師團衛生班附として功績を擧げ、次で内地歸還以來東京第一衛戍病院附を歴て現職に在り。

△主論文は「有毒瓦斯ノ循環器ニ及ボス影響」にして、本論文は鹽素「クロールビクリン」、燈用瓦斯及一酸化炭素、硫化水素瓦斯等の吸入が健康並に逃走神經切斷家兎の血壓並に電氣心動圖には如何なる變化を及ぼすかを檢索せるものなり。副論文は、(1)迷路刺戟ト電氣心動圖(四篇)(戸田古一郎醫學博士と共同)、(2)結核性疾患ト電氣心動圖(二篇)(玉田政助醫學博士共著)、(3)電氣心動圖第二誘導ノ診斷學的價值、等なり。

△氏は千葉縣の出身、明治三十七年生る、年齒未だ三十有二歳の少壯也。熱心なる研究家にして、氏が三十歳未滿の年少を以て學位を獲得せるは、頭腦の明晰を物語るに足り、氏が躍如たる面目を此間に窺はる。性來謹直にして濃厚、謙遜にして誇らず、淡々として己を虚ろし腰の低い人也。春秋猶頗る豊富にして、向後の活躍と相俟つて一層の努力を要するや益々切なるを思ふの秋、折角の精研奮勵を望む。東京市世田谷區太子堂町七〇に住む。

### 宮本 延

△大阪市西成區千本通三ノ二に内科、小兒科専門を以て擡頭せる宮本醫院あり、院長宮本延博士の私立醫院にして開業古く、内部の設備を整へ感じを好くす、多年の聲望は博士獨特の手腕と相俟つて益々人氣を博め、堅實なる地盤の上にも年々歳々繁榮を増し、今や成功の位地を獲得して悠々たり。博士は大阪醫大系の錚々たる内科學者にして、母校の恩師楠本長三郎博士、小澤修造博士、故中川知一博士等に師事し造詣する所深く、大阪帝大より學位を受領せる名醫博としての手腕を認められ、浪速診療界に囑目せらるゝ一人物たるを失はず、其の今日あるも亦偶然ならざるを思ふ。

△博士は大正五年七月府立大阪醫科大學卒業後、引續き同大學内科及び生理學教室に各々一ケ年間研究に従事す、其後開業今日に至る、斯間昭和三年九月より同七年九月に至る間大阪帝大醫學部小澤内科に専攻生として研究に従事し同七年十一月學位を受領す。

△學位主論文は「臟器「リパーゼ」ノ固有性ニ就テ」にして、參考論文は、(1)各種動物赤血球ノ種屬固有性ニ就テ、(2) Note on the Permeability of the Red Corpuscles for Amino-Acids. (3) 胃及十二指腸潰瘍ノ統計的觀察等なり。

△出身地は長崎市油屋町にして、明治二十四年生る。幕末の國學者にして後伊勢神宮皇學館最初の教頭たりし敷田年治の生家豊前宇佐郡敷田、宮本家の出にして、外科の宮本哲博士の實弟也。年齒不惑に入る五歳、濃厚篤實なる年壯



の紳士、學究的臨床家として多年の經驗に富み、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮して多大の信望を博す、殊に特筆すべきは、氏が開業の傍ら懸命の努力精進を續けて研鑽克く學位を獲得せる點に在り、今や輝しき學位は氏の人格と相俟つて一段の貫祿を加え、氏が前半生史をして光彩陸離たらしめたり。研究は氏の最も趣味とする所にして業餘克く讀書精研に勉め、又時に謠曲に親しみ、圍碁を樂しむの餘裕を有す。

園田幸雄

△東京市向島區吾嬬町西六ノ九一に内科特に胃腸科を以て著聞する園田醫院あり、斯科の新進大家を以て名聲を馳せたる園田幸雄博士の經營せる診療所にして、内科及びレントゲン科に適切なる内部の裝置を完備す。開業拮据日尙淺くも、博士獨特の打診的確にして親切なると、氏の熱心振りとは好感を以て迎へられ、好評嘖々の裡に益々人氣を吸收し、今や堅實なる独自の地盤を獲得して日々繁榮を極めつゝあり。氏は千葉醫專の出身にして、千葉醫大派の名醫博たる新進人物也。

△博士は大正十一年千葉醫專卒業、直ちに同附屬醫院助手となり第一内科勤務、同十四年千葉醫科大學副手となり、藥物學教室に入る、昭和五年一月再び第一内科に入局、同七年十一月學位を受領せり。斯間千葉醫科大學教授竹村正博士及び同病理學教授石橋松藏博士に就て研究す。内科を専門とし、特に胃腸科を得意とす。

△學位主論文は「胃官能ニ對スル「アルカリ」劑作用」にして、參考論文は「脾臟製劑「ミルツシン」ノ胃酸度ニ及ボス影響」なり。

△感想に曰く「己れが研究せんと欲せば必ず研究のみに邁進せざるべからず、片手間に醫科大學に在席して研究するは餘りに學問を輕視するものなり。學位所有者は學位所有者らしく人格知識共にすぐれざるべからずと思考す」云々、至言なる哉、學位に伴ふ人格の向上尊重を高調するの今日、尤に人意を強からしむるの感を深うす。鹿兒島縣鹿兒島

郡伊敷村小山田の人、明治二十八年生る、故醫師園田戸兵衛の長男、兄弟四人皆醫師なり。光る學位は博士の人格と相俟つて博士の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。博士の年齒今や不惑に入る一歳、壯熟せる手腕は益々其の特技を發揮して最も得意時代に入る、猶春秋に富む前途の大成や更に大に囑望せらる。愛讀家にして讀書精研大に修養に勉むる所あり、又野球を趣味とす。生來正直生一本にして短氣の嫌なしとせざるも、眞面目なるところに氏の長所を窺はる、學究的臨床家としての人格者たるを敬慕す。

猪原清

△金澤醫科大學助教授猪原清博士は、大正十三年金澤醫大附屬専門部の卒業生にして、同十四年同大學助手、昭和六年同學講師囑託、同七年同學助教授に任ぜられ今日に至る。此間松原(三郎)教授、早尾(虎雄)教授の指導を受け、昭和七年十二月學位を受領す。精神、神經病を最も得意とす。

△學位主論文は「腦栓塞ニ因ル臨床的所見並ニ病理組織學的變化ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)腦軟化ノ實驗的研究、(2)諸種精神病患者ノ去勢丸組織ノ比較的研究、(3)血液腦脊髓液間關門透過性ノ研究、(4)實驗微毒(神經組織)ノ研究等なり。

△富山縣西礪波郡鷹栖村六三五の人、猪原清太郎四男にして、明治三十二年生る。年齒未だ三十有七歳にして少壯の意氣潑刺たり。讀書に趣味を有し研鑽怠るなし、意志強固にして思ひ立つた事は是が非でもやり通すと云ふ人なり。春秋猶頗る豊富、將來有爲の資に富む學究として、洋々たる前途を囑目す。金澤市河内町十一ノ四に住む。

古屋貞造

△京都市下京區室町綾小路下ルに内科、小兒科、外科、皮梅毒専門を以て著聞する古屋醫院は、院長古屋貞造博士の經營にして、内科、小兒科を博士自ら擔任し、外科及び皮梅毒は別に擔當醫を置く、大正二年以



來開業拮据今日に及び、多年の努力勵精の効果空しからず、既にして抜くべからざる牢乎たる地盤を築き、圓熟せる博士獨特の手腕は益々其の妙技を發揮して餘す所なく、打診の好評は歳と共に繁榮をいや増し、今や悠々たる位地を占めて成功の域に在り。現に京都醫師會副會長、京都府工場衛生會幹事、京都市學校醫會幹事たるの肩書は、氏が社會的地位を表徴するもの也。

△博士は五高を経て、明治四十四年十一月京都帝國大學醫科大學醫學科卒業、同年十二月より大正二年迄同大學副手を拜命、大正二年一月現住所に開業、大正六年十一月京都府醫師會理事に選任せられ、同八年醫師法改正後再選せられ引續き重任今日に及ぶ、同九年京都府工場衛生會幹事に選任せられ重任今日に及ぶ、同十一年京都市學校醫會幹事に選任せられ重任今日に及ぶ、昭和三年京都市醫師會理事に選任せられ、同六年京都市醫師會副會長に選擧せられ現任、爾來京都帝大戸田教授指導の下に衛生學を研究今日に及ぶ、昭和七年十二月京都帝大にて學位を授與せらる。斯間內科學は中西龜太郎教授に、小兒科學は平井毓太郎教授に指導を受け、次で衛生學は戸田正三教授に指導を受けたり。專攻學科は內科、小兒科にして、特に肺炎カタル、肋膜炎を最も得意とす。

△學位主論文は「兒童ノ服裝ト其氣候調節力ノ適否並ニ發育上ノ關係ニ就テ」にして、(1)中等氣溫ノ場合、(2)低氣溫ノ場合、(3)高氣溫ノ場合、(4)服裝ガ兒童ノ發育及ビ一般代謝ニ及ボス關係ニ就テ、の四篇より成る。參考論文は第一「和洋兩服ノ保溫力ニ對スル姿勢別觀察」にして、(1)中等氣溫無風並ニ有風ノ場合、(2)低氣溫、無風並ニ有風ノ場合(3)高氣溫、無風並ニ有風ノ場合(以上三篇)、第二「本邦兒童服ノ衛生學的研究」にして、(1)京都市ニ於ケル各小學校兒童ノ服裝ノ推移ト其季節、年齢並ニ社會別觀察、(2)小學校兒童服ノ形状ノ差違ト身體發育ニ及ボス服裝上ノ疑義、(3)兒童ノ體格ト衣服重量トノ關係ノ三篇より成れり。

△山梨縣東八代郡御代村古屋逸齋長男にして、明治十六年生る、當年知命に入る三歳、學究的年壯の紳士にして、

圓滿なる人格者也。氏の今日ある篤學と其の成業は、氏が前半生史これを物語りて餘蘊なく、殊に氏が開業の傍ら春風秋雨の努力研鑽を續け、終に克く其の堅志を貫行して學位を獲得せるは特筆に値し、臨床家としては稀に見る篤學の士として範を示すもの也。平生刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、今猶研究に餘念なく、業餘克く精研修養相俟つて勉むる所あり、甚だ多とすべき也。研究以外の道樂としては觀劇を趣味す。親戚中に醫博古屋清、同藤森鶴龜齋、同成島正等あり。

### 林 芳 信

△東京の郊外、東村山の癩療養所たる全生病院々長としての林芳信博士の名聲は餘りにも有名な。而かも正式の學歷を有せざる氏が、醫師試驗出身の身を以て、大正三年前記の癩療養所に入所して以來、當時の全生病院々長たりし現岡山國立癩療養所長光田健輔氏を常に補佐して、共に俱に恵まれざる人々の友として二十年來終始し、或時の如きは癩を嫌ふの餘り醫師が一人残らず辭任したる際なども、氏は獻身的に不幸なる病人達を慰め居りしが、昭和六年光田院長が岡山に榮轉するに及び、其の後を襲つて全生病院長となり、其間幾星霜かの間、努力研鑽、終始獨學貫行の後、未だ曾て何人も手を染めざりし一大業績たる論文、即ち「癩病患者骨變化ノ「レントゲン」線ニヨル研究」といふ學位論文を完成の上、慶大醫學部へ提出せる結果、藤波教授主査の下に見事教授會を通過して、昭和八年十月學位を受領せり。要するに氏の此の研究に依つて、從來癩では骨に變化が來ないと信じられる定説を覆へして、梅毒と同様癩も重症になれば骨に變化を及ぼすことを「レントゲン」にて確め、不治の難症として見離されたる癩の治療上に一大福音を與へ、學界に著しき貢獻をなしたるものと云はれ、其の學問的價値は既に學界に認められたり。氏は東京の人、明治二十三年生れにして當年不惑に入る六歳也。人格高潔、篤學者にして學者としての權威は既に早くより學界に認められ、同僚より多大の尊敬を受けつゝありしが、學位に光る研究は又一層その精彩を放て



り。東京府北多摩郡東村山村全生病院官舎に住む。

高文龍

△滿洲國四平街北三條通三十七番に於て外務省囑託醫官として開業し、當地方診療界の爲め奮盡活躍しつゝある、内科の新進大家高文龍博士は、朝鮮貴族にして京城醫專を優等にて卒業せる秀才として知られ、恩師たる現京城帝大教授徳光福博士に師事して病理學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる内科界近來の名醫博也。研鑽多年の學殖と共に卓越せる臨床的手腕を有し、今や研究室を離れて實地診療に精進して獨特の手腕を揮ひ、殊に朝鮮人居留民保護の爲め、渾心の至誠と親切とを以て力を盡し、大衆より多大の信頼と尊敬を受けつゝあるは大に人意を強からしむる所にして、博士の熱誠努力に對しては深甚の敬意を表すべき也。

△博士は大正九年京城醫專卒業後、引續き朝鮮總督府醫院内科にて研究し、後引續き京城帝國大學附屬病院にて研究し、昭和四年三年同大學病理學教室に轉じ、徳光教授の元にて内分秘學を專攻し、同八年十二月京都帝大より學位を授與せらる、同九年一月より外務省囑託醫官として四平街にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「モルヒネ」習慣及禁斷症狀ノ成因ニ關スル一新考察」にして、參考論文は、(1)脾臟ノ赤血球ニ及ボス影響、(2)甲狀腺機能ノ尿血清診斷法、(3)植物神經ト甲狀腺トノ關係、(4)腦下垂體前葉ト甲狀腺トノ關係、(5)「バルトネラ」貧血ト脾臟トノ關係、(6)「アルカリ」鹽類ト甲狀腺トノ關係、(7)脾臟「ホルモン」ノ確定等なり。

△博士の感想に曰く「近來頻々として傳へらるる學界の怪聞は實に嘆はしき次第なり、殊に神聖なるべき學位問題に關する或一部の醜聞が世人をして學位全體に對する信念及尊敬の念を薄くし引いては最高學府に對する信任の度を減ぜし事多し、此の如き弊害は要するに近來餘りに西歐の唯物文明を輸入しすぎ東洋在來の美しき道德觀念の養成を忽にしたるに基因したるが如し今後大いに爲政者又は教育者の注意すべき點なりと思ふ」云々。

△博士は朝鮮貴族の出身にして、明治三十一年平南に生る。資性濃厚篤實、學究的真面目なる少壯紳士にして篤學者たり、其の今日あるは博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、殊に朝鮮出身者の爲め代表的學者として世界的に氣を吐けるは大に壯とすべく、博士の面目の躍如たるもの斯間に窺はる。年齒未だ三十有八、少壯の意氣に燃え、研究心潑刺たるものあり。凛々としたる風貌は學者としての威嚴を存し、溫容の裡に拘すべき愛情を表示す。今は分別盛にて學識、手腕、人格共に漸く壯熟の域に入り最も得意時代に在り。性來謙遜にして偏に恩師先輩の助力を説き、少しも自己の識學を衒はず、淡々として己れを虚うして克く人を愛し、人と接するに和氣溫情に富む、殊に臨床に熱心にして眞剣なると、患者に對するに飽くまで誠實と懇切とを盡す點は、博士の特徴として傳へられ篤き信望を博す。研究以外の趣味としては古書畫、骨董を愛し、スポーツはゴルフを好む。家庭には妻溫順との間に二男二女あり、清福にして團樂の裡に常に春風滿つ。幸に健康と共に永へに幸福を祈るや切也。自邸は四平街繁華街二丁目に在り。

關齊六

△千葉市井上病院(顧問井上善次郎博士、院長花岡和夫博士)に副院長たる關齊六博士は、千葉醫大出身の新進にして、恩師佐々貫之博士に就て深く造詣する所あり。學位主論文は「髓反射ニ關スル研究、髓反射刺戟閾ニ於ケル筋伸展速度ト作用時間トノ關係」にして、參考論文は、(1)遷延狀心内膜炎ニ就テ、(2)種々ノ異態を伴ヘル全内臟轉錯者(完全鏡像ヘ)ノ一例特ニ其「エレクトロカルデオグラム」ニ就テ、(3)電気心働圖心室合成曲線異型ノ臨床的意義ニ就テ、(4)心房「フリニマルン」ニ對スル「エチール」炭酸「キニヂン」療法ノ經驗、の外尙骨節筋「クロナギン」ニ關スル臨床的研究其他あり。

△博士は千葉中學(大正九年)、二高(大正十三年)を経て、昭和三年千葉醫大を卒へ、同年四月より翌四年一月迄陸軍衛生幹部候補生として歩兵第三聯隊に入營、同四年二月母校の佐々内科教室に入り、同八年十月迄研究を續け、同



年十二月千葉醫大より學位を授與せらる、先是同教室を去るや千葉市井上病院に勤務今日に至る。

△感想に曰く「將來一開業醫として社會大衆の吉凶に關與せんとする余は、内科の開業醫としては少くも西川博士著「内科診療の實際」中にある檢索の設備位は具有し度いと念願して居る。かくして醫師の良心がどうやら満たされ、醫師たる事に喜びを感じるだらう。但し開業の實際に當つて果してかゝる設備を具へて營業し得るや否や多大の懸念がある。少くも現行の報酬規定に於て、且又現在の大衆の常識に於ては、かゝる企圖は冒險に價するかも知れぬ。けれども一般大衆が先づ開業醫の手にかゝり、診斷不明の爲に更に大病院に赴き結局二重の負擔をなし、のみならず其間の時日の浪費が金錢に換へ難い結果を齎す事實は毎々目撃する所である。茲に余の企圖の核心がある。而して有害無益なる粗診粗療を避け得ば、大衆の利益、從つて開業醫への信頼自ら大なるものがあらう」云々。

△博士は千葉市に本籍を有し、齒科醫關藤治郎氏の養子にして、明治三十六年生の學究的少壯の紳士也。前記論文の外「心房「フリンメル」ニ對スル「エチール」炎「キニヂン」療法ノ經驗」、「骨格筋「クロナキニー」に關スル臨床的研究」、「バルキヲニスムス」ニ對スル「スコボニミレ」大量療法ノ一般臨床的觀察」等々あり、何れも博士會心の論著として既に學界に其の存在を認めらる。研究室を去りて日猶淺きも、少壯の意氣に富み、致々として診療界に精進し、精研に餘念なき前途は大に囑望せらる。スポーツに趣味を有し、患者に親切にして人に對するに温情味ある所に博士の特徴を見出さる。千葉市千葉六四四に住む。

### 中條元一

△大阪府泉北郡上神谷村字梅にて内科特に結核病を標榜して獨立開業し、牢固たる地盤を有する中條元一博士は、大正十五年大阪醫大の出身にて、昭和九年一月大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博也。學位主論文は「肺結核患者ノ新陳代謝ノ異常ニ就テ」にして、參考論文は、(1)肺結核患者ノ糖代謝ニ就テ、(2)肺結核患者ノ「マ

ソット」氏反應ニ關スル一考察等。前記現住所の出身にして、明治三十四年生る。俳句を能くし、芥汀と號す、又圍碁を趣味す。未だ少壯にして研究心に富み、學究生活を勇退して診療界に躍進するや、開業日尙淺きも、拮据勉勵、専門の旗色を鮮明にして、専ら肺結核診療の爲め努力精進する所あり。多年の經驗を有し、獨特の手腕は診斷の好評と相俟つて、益々人氣を吸収し年次堅實なる發展振を示しつゝあり。

### 大關幸一

△宮城縣若柳町學校通りに大關内科病院あり、名聲嘖々として當地方診療界を風靡す。院長大關幸一博士の開設せる私立病院にして、外に診療所(若柳町字川北中町四三)、分院(栗原郡尾松村)、坂口診療所等を設け副院長の外全科診療擔當醫あり。殊に内科領域に關する博士獨特の打診は益々遠近の人氣を吸収し、兩々相俟つて今や抜くべからざる地盤を有し、牢乎として一流の地位を占む。博士は元仙臺醫專出身の篤學者にして、研鑽多年の後、東北帝大教授熊谷岱藏博士指導の下に内科學の蘊奥を究め、特に呼吸器、泌尿器、血液疾患を最も得意とし、東北帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。學位論文は既に學界の定評あれば贅せずもがな、學殖と共に臨床に多年の經驗を積み、卓越せる手腕を有す。

△博士は明治四十四年仙臺醫學專門學校醫學科卒業後、多年郷里なる山村に全科を標榜して開業、其の間東京帝國大學醫學部に於て第十三、十四、十五回醫學講習科修了、郡内一流の流行醫たりしが奮然として門を閉じ、純然たる内科醫として後半生を送らんと、豫て聲望を慕ひつゝありし東北帝大熊谷教授の門下に入り、茲に内科臨床醫學を研究すること前後四年、患者の信望を一身に集めつゝ傍ら作り上げたる論文は、即ち主論文「紫外線ニヨル皮膚紅斑ノ臨床的意義ニ就イテ」にして、原著は獨逸文なり。外に參考論文として、(1)腎臟疾患ノ統計的觀察、(2)肺結核患者ノ血液像ニ就テ、(3)肺結核ノ豫後、の三篇あり、之を東北帝大醫學部に提出して昭和九年一月學位を獲得せり。其の篤學



は博士の面目を語るに充分にして、立志傳的博士の前半生史をして光彩陸離たらしめたり。

△博士の感想に曰く「今後内科一般の診療に従事するは勿論なれども就中肋膜炎の早期診断及び脱期性肺結核への遂進豫防に意を注ぎ社會に貢献せんとして居る」云々。

△博士は宮城縣栗原郡尾松村大關市郎右衛門の長男にして、明治二十二年生る。資性温厚篤實、學究的年壯の紳士にして、眞面目なる臨床家としての爲人を窺はる。今年齒漸く不惑に入る七歳、意氣益々壯にして研究心に富み、學識手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に入る、研究室を離れて以來診療界に進出するや、孜々として日々診療に勵み、熱心忠實に克く誠意親切を盡し、以て仁術の最善を務めつゝあり、蓋し其の篤き聲望を博せる所以亦實に茲に存す。平生人と接するに懇篤にして温情あり、快活にして能く人を愛す、又應答禮を重んじて時務を缺ぐことなく、自ら人に親しまれ其の高邁なる人格を敬慕せしむ。趣味として讀書以外になく。妻きん子との間に一女あり。

#### 山本 清太郎

△京都市下京區七條通千本東入内科、特に呼吸器専門醫としての山本清太郎博士は、學歴より見れば、京都市私立立命館中學を経て、大正十二年京都府立醫專卒業後、同年六月より市内大宮病院内村、小兒科勤務、同十三年十一月京都府立醫大内科勤務、小川、淺山兩教授の指導を受く、同十四年十月より大阪合同紡績勤務、昭和二年四月より現住地に開業、同四年十二月より京都帝大皮膚科教室勤務、松本教授の指導を受く、同九年一月京都帝大にて學位授與、今日に至る。内科特に呼吸器病を最も得意とす。主論文「Immunitätsforschung beim experimentellen Rekurvens」(三篇、全部獨逸文)、參考論文「Haematologische Untersuchung beim experimentellen Rekurvens」(獨逸文) 外、十一篇。滋賀縣栗原郡上田上村大字桐生山本清喜の三男にして、明治三十年生る。開業將に拾年に垂んとする今日、診療の傍ら研學切磋の功を積み、學位論文を完成せる業歳と共に篤學は、氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。性格は短氣の方なれども、未だ少壯にして大に奮闘努力を要するの秋、折角の自重加餐を祈る。西洋音樂殊にピアノに多大なる趣味を有す。長兄は郷里の小學校校長、次兄は陸軍三等主計正たり。京都帝大天文学教授山本一清理博は氏の従兄弟の息なり。

#### 堤 貞雄

△長崎縣嚴原町協立嚴原病院内科部長として新手腕を發揮し、内外の信望を博しつゝある堤貞雄博士は、熊本醫大派の新進にして、九州帝大より大學院卒業に依り學位を獲得せる少壯醫博としての手腕を認めらる。主論文は「緑膿菌毒素」ピオチアナーゼ」及「ピオチアノリジン」形成に關する實驗的研究」にして參考論文なし。他の論著中の「毒素及抗毒素及「ピオチアナーゼ」及「ピオチアノリジン」の本態」は、氏が會心の著作にして最も得意のものと見らる。感想としては「醫師界に對してはお互の品位を傷けることなく、社會大衆の爲め眞面目に盡したい」云々。以て氏の治療方面に對する態度の眞摯なるを窺はる。聞説、何れ近き將來に郷里入吉町に自宅診療所開設の豫定なりと。

△博士は熊本縣球磨郡人吉町堤友次郎の養子にして、明治三十二年生る。學歴より見れば、昭和四年三月熊本醫大に於て學士試験合格後、直ちに九州帝大醫學部副手拜命、武谷内科勤務、同六年五月九州帝大大學院に入學、同八年三月満期卒業、同年十一月協立嚴原病院に奉職し、同九年一月學位受領、以て今日に至る。大學院在學中は武谷廣及び小川政修兩教授の指導を受けたり。學究生活より診療界に躍進せる博士は、其の第一歩として現職に就任して以來日尙淺きも、氏がモットーとせる社會大衆の爲め眞面目に盡し度いとの信條の下に勵精し、希望ある將來に向つて修養と準備とに、おさく／＼餘念なき前途は更に大に期待せらる。性來眞面目にして言行を苟くもせず、人と接するに親切にして温情に富む、臨床醫家として相應しき性格の持主と見らる。讀書家にして精研修養相俟つて卷を放たず。時に



暇を獲れば圍碁に親しみ其の日の勞を忘る。年齒未だ少壯にして、春秋猶頗る豊富なるの秋、折角の努力活躍を望む。長崎縣下縣郡嚴原町今屋敷六九七に住む。

久野 順二郎

△熊本醫大講師より轉じて現在鐵道醫として活躍の時代に入れる久野順二郎博士は、北海道帝大派の少壯醫博にして内科専門を以て立てり。學歷より見れば、大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、海軍に出仕して昭和三年海軍々醫大尉に任ぜられ豫備役に編入さる、同四年より六年迄京都帝大醫學部副手、同六年より七年迄熊本醫大助手、同七年より十年迄熊本醫大講師たり、後鐵道醫に任ぜられ今日に至る、其間昭和九年一月北海道帝大より學位を受領せり。此間北大教授中川博士に就て内科學を、京大教授尾崎(良純)及び熊大教授尾崎(正道)兩博士に就て藥理學を專攻せり。主論文「水芭蕉ノ有毒物質ニ關スル藥理學的研究」、參考論文、(1)「ピツイトリン」ノ利尿作用ニ關スル研究、(2)腎臟血管ノ藥理等。大阪市東區淡路町一丁目九に本籍を有し、明治三十二年生る。音楽と繪畫に興味を有す。少壯の意氣益々壯にして、學究生活より展開せる今後の躍進は大に待望せらる。大阪女子醫專教授瀨戸文雄博士とは近親の間柄也。滋賀縣米原町鐵道官舎に住む

田原 利崇

△京都市上京區元誓願寺千本東入元四丁目内科専門醫として、京都帝大派の名醫博たる田原利崇博士あり。大正二年金澤醫專の出身にして、卒業後約半年間明石市湊内科醫院勤務、次で同三年十一月より九年九月迄約七年間滋賀縣大津市日赤滋賀支部内科醫局勤務、次で現住所に於いて開業診療に従事す、昭和四年三月京大醫學部法醫學教室に専修科生として入學、同六年助手任命、同八年十二月京大より學位を受く。

△學位主論文は「死後經過日數測定ニ關スル研究補遺」にして四篇より成り、參考論文は、(1)足跡ノ法醫學的研究、(2)食品中毒ニ關スル研究、(3)犯罪捜査ト紫外線應用外三篇あり。京都市の人、明治二十一年生れにして當年不惑に入る八歳也。開業の傍ら研學切磋、克く鴻大なる學位論文を完成せる篤學は特筆すべきに値し、氏の面目を語るに充分なり。今は平乎たる地盤を有し、手腕、聲望相俟つて年次堅實なる發展振りを示しつゝあり。

家坂 正清

△肛門病科、一般内科を専門として京都市淀橋區百人町一ノ一八に自宅開業せる家坂正清博士は縣立新潟中學(大正六年)に次で、四高(同九年)を経て、大正十三年六月京都帝大醫學部を卒へ、直ちに慶大醫學部内科教室へ助手として勤め、昭和元年同内科教室を辭して自宅開業、同三年再び慶大醫學部藥物學教室へ研究生として入室、同五年研究完了、同九年二月慶大より學位を獲得せる新進の少壯醫博也。

△學位主論文は「硫酸代謝ノ中樞性調節」にして、參考論文は、(1)硫酸代謝調節中樞ノ肝臟組織内硫酸量ニ及ボス影響、(2)自宰神經毒ノ硫酸代謝ニ及ボス影響、(3)硫酸代謝調節神經ニ就テ、(4)硫酸代謝調節中樞ニ對スル「アンチピリン」ノ影響等四篇なり。指導教授は慶大教授阿部勝馬及び西野忠治郎兩博士にして藥物學及び内科學を專攻せり。特に肛門病科及び一般内科を最も得意とす。

△博士は京都市淀橋區柏木三ノ三三三に本籍を有し、醫師家坂清次郎(同區百人町二ノ二〇〇居住)の長男にして、明治三十一年生る。嚴父は醫師として熱心なる研究家を以て知られ、往年居を新潟市より東京に移して以來、現住地に於て自宅開業に従事し牢固たる地盤を築き居れり。博士の今日ある素より明晰なる頭腦と百折不撓の努力の結果とは云へ、嚴父の指導宜しきを得嚴正なる薰育の然らしめし事實は見逃すべからず。博士の年齒未だ三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして、拮据勵精、日々診療に精進して獨特の手腕を振ひ、打診の評判は多年の聲望と相俟つて堅實なる發展振を示しつゝあり。趣味としてはスポーツを好み、業餘猶精研に餘念なきが如し。



### 山崎達男

△東京市小石川區表町五九に在る山崎内科醫院は、院長山崎達男博士の經營にして、開業拮据、拾有餘年に及び、玲瓏たる打診の好評は多年の聲望と相俟つて牢乎たる地盤を有し、繁榮歳と共に日増盛況に在り。學系は九大系の内科學者にして、恩師吳建博士に就きて斯學の蘊奥を究め、次で東大教授竹内松次郎博士の指導の下に臨床的細菌學及び免疫學を研究し、論文を東京帝大へ提出して學位を獲得せる名醫博也。研鑽多年の學殖は言はずもがな、實地の經驗に富み卓越せる手腕を有す。

△更にその略歴を概括すれば、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、引續き同學部第一内科教室に勤務、吳教授の指導を受け研究に従事す、同十二年十二月教室を辭して郷里千葉市寒川長洲に歸り、大正十四月二月上京現住所にて開業今日に至る、斯間東京帝大醫學部細菌學教室に於て研究の結果、同九年二月東京帝大より學位を授與せらる。主論文は「オツエナ」菌の研究」にして、参考論文は、(1)「エンテロコクケン」ノ研究、(2)結核菌ノ研究、(3)痘毒ニ就テ、(4)培養基ニ及ボス日光ノ影響等なり。

△千葉縣山武郡公平村道庭山崎玄達の次男にして、明治三十年生る。年齢未だ三十有九歳、少壯の意氣益々壯にして、學識、手腕、人格共に漸く圓熟す。賦性篤實温厚にして、人に對するに愛想よく、高邁なる品格を備ふ。趣味としては讀書、撞球、狩獵、園藝(朝顔)を樂しむ。

### 比企能達

△日本醫科大學教授として内科學を講じつゝある比企能達博士は、東大系の御大島蘭内科に巢立ちたる年壯の學者也。學歷より見れば、神奈川縣小田原中學、二高を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、引續き東大病理學教室及び島蘭内科教室に於て研究、東大醫學部副手、助手を経て講師となる、次で講師を辭し現職に任ぜ

られ今日に至る。其間昭和九年四月母校にて學位を授與せらる。指導教授は緒方知三郎教授、長與又郎教授、島蘭順次郎教授なり。

△主論文は「唾液腺ノ内分泌ニ就テ(唾液腺條紋部ノ構造並ニ機能ニ就テ)にして、参考論文は、(1)糖尿病ノ研究、(2)經皮膚性結核初感染ニ就テ、(3)肝硬變症ノ統計的研究、(4)心臟「プロック」ノ一例等なり。

△神奈川縣中郡旭村山下比企喜代助の長男にして、明治二十六年生る。年壯の意氣と共に研究心に富み、今や多年蘊蓄せる學識、手腕を以て彗壇に起ち、誠意誠實を盡して只管學生の指導に餘念なきが如し。醫育界の前途多事益々多望ならんとするの秋、幸に健康と共に折角の努力盡瘁を望む。東京市本郷區弓町二ノ一に住む。

### 野口憲三

△東京市淺草區壽町二ノ八(市電厩橋)に内科一般殊に呼吸器病科を以て、嘖々たる好評裡に斷然群を抜きつゝある野口醫院あり、院長野口憲三博士は斯界の大家として既に周知せらる。開業拮据歳を關すること二十有年餘、博士獨特の手腕は打診の評判と相俟つて益々人氣を吸収し、牢乎たる古き地盤は繁榮歳と共に擴大して今や抜くべからざる盛況を呈す。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、研鑽多年の後、千葉醫大教授松村肅博士指導の下に結核菌に就て研究し、論文を千葉醫大に提出して同大學より學位を獲得せる内科界近來の名醫博也。殊に特筆すべきは、社會の信用厚く且つ繁昌せる開業を殆んど中止状態に敢てなし、専心毎日研究に従事せり、且つ研究の目的として單に學位を得んが爲めの研究、即ち微々たる個人的慾望の爲めの研究にあらずして社會、人類の強敵結核を研究し、之れを征服撃滅せんとする目的を以て松村主任教授の快諾を得て教室に入り専心研究に盡瘁せしなり、以て學位論文を完成せる點にあり。而して其の鴻大なる論文は如何に學識の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、其の今日の成功を贏ち得たるもの、博士の面目の躍如たるものあるを見る。又一面には現



在淺草醫師會理事、府醫師會議員醫政調査委員、東京猪ノ鼻會評議員、健保審査員、千葉醫學會評議員等の公職に在りて斯道の爲め盡瘁する所あり。

△更に其の略歴を概説すれば、明治三十七八年戦役の際野戦近衛歩兵第一聯隊に屬し、最初より最終迄從軍各地に轉戦す、即ち明治三十七年三月十四日韓國鎮南浦上陸各地に轉戦、滿洲開原城西東馬家窩棚に至る、明治三十八年十二月三日屯營歸着す、越えて明治四十四年千葉醫專卒業後、母校井上内科にて研究、翌四十五年より京都帝大笠原内科にて研究、大正二年二月より東京帝大三浦内科にて研究、同四年五月より現住所に開業今日に至る、斯間同十五年十二月より千葉醫大衛生學教室にて研究を續け、昭和九年四月學位を受領せり。專攻は内科及び衛生學にして、特に呼吸器科を最も得意とす。

△主論文は「結核菌ノ濾過型ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文六編あり、(1)二三主要食料品中ヨリ分離セル同屬菌ノ比較研究、(2)各臟器培養基ニ於ケル結核菌ノ發育成績、(3)數種金屬ノ腸「チフス」菌、善通大腸菌、葡萄狀球菌ニ對スル「オリゴヂナミ」作用、(4)The Etiology of Beriberi(共著)、(5)Ueber Bacillus beriberie (共著)、(6)脚氣ノ原因ニ關スル研究、(共著)等。

△感想に曰く「世界人類は勿論其他動物の強敵結核に對しては古來之が撃滅を企圖し多くの學者其他一般人が努力せし事大なり。而して、獨逸の學者にして偉人コッホ先生今日迄の處にては其殊勳者なり、雖然其功績は結核菌體並に其毒力及び多少の免疫の點を發見せしなり、之れを戰爭に例すれば敵を發見し、其兵種並に其兵種特有の性能を知得したるのみなり、即ち偵察せしのみなり、即ち結核菌を撃滅するには尙前途遠し、余は想ふにコッホ先生若是日本人なりせば結核、撃滅に成功せられしならん、可惜彼は獨逸人にして日本魂を所有せざりしなり、故に結核菌は日本人に因てのみ征服し得るものと信じ而して結核菌も亦公明正大なる日本人に撃滅せらるゝを希望するものならん何んとなれば

彼は人類の病敵中の頭首なれば也、故に吾人醫士即ち日本醫士は大なる努力的な研究と不撓の攻撃と世界人類愛的精神とを以て一刻も早く結核菌を征服すべき也、是れ一則是人類幸福の爲め一則是結核菌の最終の満足の爲め也」云々。  
△博士は埼玉縣北埼玉郡種足村大字上種足に本籍を有し、野口百三郎の長男、明治十六年生る。學究的濃厚の紳士にして、其の今日ある閱歴は博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり、殊に開業の傍ら幾星霜の間、具に辛酸難苦を嘗めて懸命の努力精進を續け、終に克く學位を獲得せる篤學は推獎に値し、立志傳的典型たるを失はず、其の向學的精神と不撓不屈の努力とは後進の採つて大に學ぶべき也。今や壯齡知命に入る三歳、元氣旺盛にして學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域を超越して一段の貫祿を備ふ。殊に博士の長所として傳ふべきは歐米の蠻風、野卑を極めて嫌ひ、純日本主義を全く好み、明治大帝の軍人に下し賜はりし勅諭を遵奉す。約二十年來毎年年頭に伊勢神宮、橿原神宮、春日神社、桃山御陵、乃木神社、北野神社を參拜せり。是れ帝國國民として國運の隆盛、降て自家の安泰を祈ると同時に、醫師と云ふ貴き業務に従事する故特に清き心を以て、清き道を歩み、清き事を爲すべき爲めなり、則ち神の御心を以て人に接し、且つ事を處すべき爲めなりとす、以て其の爲人を窺知するに足る。強ひて其の短所を言へば世間にいふ生一本正直なれば或は短氣にあらざるか。讀書家にして研究は博士の最も趣味とする所、又擊劍を能くす。妻靜江との間に二男二女あり。

### 筒井龍雄

△九州帝大派の一勢力と見るべき新進の内科學者たる筒井龍雄博士は、現在臺北醫專講師として教壇に起ち、學生指導の傍ら自己の研究に没頭しつゝあり。年齒未だ少壯にして研究心に燃え、潑刺たる前途は臆て那邊に展開し來るや刮目を以て待望せんとす。

△氏は九州帝大醫學部の出身にして、昭和四年卒業後、引續き母校の武谷内科教室に勤務し、恩師指導の下に研究の



結果、昭和九年三月九州帝大にて學位を授與せられ今日に至る。學位主論文は「大腸運動及ツノ中樞性調節作用」にして、他にも論著あり。

△氏は香川縣の出身、明治三十七年生る。學究的温厚の紳士にして、年齒未だ三十有二歳の少壯也。謙遜なる氏の書簡の一節に曰く「未だ全くの若輩、何等特別の經歷とてもなく、自信ありと申すほどの業績とては一もなきを自ら遺憾といたして居ります。恩師武谷廣先生の御指導により漸く臨床醫家の末席に列り、内科醫としての第一歩をふみ出したるに過ぎざるものにて、今後の研究を期して居ります、幸にして將來御批判を蒙りうるに足る程の人たりうれば喜び之れにすぎたるものではありません」云々。以て其爲人を知り、今後一層の努力を要するや益々切なるを思ふの秋、將來有爲の資に富む博士や、著者は老婆心ながら、幸に自重加餐を祈ると共に、折角の努力奮闘を望むや切也。臺北市東門町一七八に住む。

◇  
持田治郎 △今治市今治腦病院長持田治郎博士は、日本醫專の出身にて、名古屋醫大派の名醫博として令名

あり、新進の精神病學者にして特に微毒性精神異常領域に就て、該博なる學識と共に獨特の手腕を有し、最も得意なるが如し。斯間指導教授は精神病學界の權威東大教授三宅鑛一博士、及び同杉田直樹（現名古屋醫大教授）博士にして、兩教授に就て斯學の蘊奥を究めたり。今や多年蘊蓄せる學理と相俟つて、實際的敏腕を發揮して内部の改善を行ひ、自ら臨床に當面して誠意誠實を以て仁術の最善を盡し、斯界の爲め至誠以て公に奉じ盡瘁する所あり。因に今治腦病院は愛媛縣立代用精神病院にして、定員百二十三名、近代的完備せる設備ありと。

△學歴より觀れば、博士は埼玉縣立熊谷中學を経て、日本醫大の前身日本醫專を大正十四年卒業して、母校病理學教室に二ヶ年助手勤務、次で東京帝大醫學部精神病學教室に入り、三宅教授の指導を受けること六ヶ年、同時に井ノ頭病院副院長を兼ね、昭和八年四月今治腦病院院長として赴任す、同九年四月學位を受領せり。  
△主論文「人ノ間腦部ノ研究」、(1)人ノ間腦部ノ生後ノ發達ニ就テ、(2)麻痺性癡呆症並ニ早發性癡呆症ノ間腦部ニ就テ。參考論文、(1)ジェリノー氏「ナルコレプシイ」ノ十六例、(2)「インドラミン」注射ニヨル接種「マラリヤ」ノ臨床的並ニ顯微鏡的觀察外五篇。他の論著中の「麻痺性癡呆症ノ「マラリヤ」療法」は氏が最も得意の傑作と見るべき也。

△感想に曰く「昔のお醫者様が現在醫者と大衆から謂はれる様になつたことは、醫師が醫道から醫術にだした結果である、現在の保健、簡易保健が吾々の醫道を金で制限することは醫道の冒瀆と謂はざるを得ない、吾々は醫術から眞の醫道に立ち歸り、非醫者の制覇から離れた眞の國民保健を吾々醫師會の手から編み出すことだ」云々。埼玉縣大里郡深谷町大字西島の人、明治三十四年生る。少壯氣鋭にして、研究心に富む、熱情の人にして人に厚く、同情と理解とを以てし、温情の拘すべきものあり。運動に興味を有し、殊にテニスと野球とを好む。從兄に醫師三名、内氏と共に醫博三名あり。

◇  
大山恭次郎 △秋田市秋田腦病院長として大山恭次郎博士の名聲は、既に精神病界に喧傳し、新進大家として

の新手腕を認めらる。氏は北海道帝大派の少壯醫博たる新人物にして、母校の恩師内村祐之教授に就て精神病學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せり。學歴より見れば、昭和四年北海道帝大醫學部を卒へ、卒業後昭和九年五月迄同學部精神病學教室に勤務の傍ら研究に従事し、昭和九年五月學位を受領するに及び、教室を辭し現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「ヘス氏示差瞳孔鏡ニヨル瞳孔反應ノ研究」にして、(1)ヘス氏示差瞳孔鏡ノ精神病學、神經病學的應



用ニツイテ、(2) Ueber die Beeinflussbarkeit der Pupillenstörung der progressiven paralyse durch die Malariabehandlung (3) 諸種鎮靜催眠劑ノ瞳孔對光反應ニ及ボス影響ニツキテの三編より成り、参考論文としては、

(1) 「マラリヤ」療法ノ血液腦脊髄液諸反應ニ及ボス影響、(2) 流行性腦炎後遺症ニ對スル「アトロピン」高量療法ノ經驗、(3) 腦炎性視症ノ臨床的觀察等三篇あり。

△出身地は東京市神田區錦町三ノ十九にして、明治三十五年戸主大山猶次郎の長男に生る。年齒未だ三十有四歳の少壯にして、潑刺たる意氣と共に研究心に富み、今は本職の爲め多年蘊蓄せる學識と、臨床的手腕とを發揮して斯界の爲め懸命の努力精進を續けつゝあり、斯道治療界の爲め將來博士の力に俟つものあるを囑望せらる。其の人醫人としての特質を具備し、溫恭にして情味掬すべきものあり、人格又た高邁なるは心強く思はる。春秋猶頗る豊富にして、分別盛なるの秋、折角の努力奮闘を望むや切也。秋田市牛島町に住む。

### 若林 宏

△東京帝國大學醫學部附屬病院吳内科に新進の若林宏博士あり。氏は東大系の出身、内科界現代の權威吳建教授門弟中の新人として知られ、内科學及び細菌學を專攻し、特にレントゲン診斷學及び結核病學を得意とす。斯間傳研の佐藤秀三教授、河本禎助教授及び帝大の吳建教授の指導を受け、東京帝大より學位を獲得せり。年齒未だ少壯にして、不斷の精研精進を續けつゝある前途の躍進は大に期待せらる。

△博士は昭和二年東京帝大醫學部を卒業、直ちに傳染病研究所に入り細菌學血清學を研究、昭和七年四月同所を辭し東京帝大附屬醫院吳内科に入り内科學を研究現在に至る、昭和九年五月學位受領。學位主論文は「脂肪酸類ノ結核菌發育ニ及ボス影響ニ就テ」にして、参考論文なし。「脂肪酸類ト結核菌トノ關係ニ就テ」は博士會心の論著と見るべき也。

△博士の感想に曰く、「將來の醫療の制度は如何になりゆくか、殆んど豫斷を許さず、現在は之に至る過渡期として醫人、一般人皆落つかざる状態にあり、然りと雖も如何に社會が變遷するとも醫人としての社會に對する奉仕精神には何等の變更もなく又醫人がその最大の努力を盡すに對して社會の人が之を遇する事吝かならざる事も、又當然の事なるべしと思はる」云々。

△氏は徳島市富田浦町宇東富田、若林虎吾博士の二男、明治三十六年生にして意氣益々壯也。熱心なる研究家にして切磋卓勵の氣象に富み、意志強固にして努力研鑽倦むことを知らず、聽て診療界に躍進せんとする修養を積みつゝあり。趣味としては蝶類學の研究に多大の興味を有し造詣する所あり。年齒未だ三十有三歳にして、學生氣分髣髴として未だ去らず、恬澹として朗快なる態度は人に親しまるゝの徳を有す。佐藤久醫博、高田眞醫博、入澤達吉醫博とは親戚の間柄也。東京市中野區昭和通一ノ五に住む。

### 室 勇 三

△京都市方京區田中野神町一五に新興せる内科、小兒科を専門とせる室醫院あり、院長室勇三博士の新設經營せる診療所也。開業早々新装せる内部の設備を整へ、博士自ら日々診療に當面して倦むことなく、孜孜營々「醫は仁術也」をモットーとして努力勵精する所あり、學究生活を奠立ちて今や獨特の手腕を發揮するに独自の立場に在り、今後の躍進と相俟つて將來の發展を囑望すべき也。

△博士は昭和二年朝鮮總督府立京城醫學專門學校卒業、同年一年志願兵として歩兵第七聯隊へ入隊、同三年除隊、同年京城帝國大學醫學部副手囑託、同五年任陸軍三等軍醫、叙正八位、同年任京城帝國大學醫學部助手、同六年同助手依願免官、同年京城齒科醫學專門學校講師、同八年同講師辭任、同年京都帝國大學醫學部松尾内科入局、同九年同學部副手囑託、同年六月京都帝大にて學位授與の後、現住所にて開業せり。



△學位主論文は「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」性ノ本態ニ就テ」にして、(1)「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」性ト網状織内皮細胞系ノ機能トノ關係ハ血管内ニ注入セラレタル「サルヴァルサン」ノ體內保有量ノ如何ニヨリテ左右セラルムヤ、(2)血管内ニ注入セラレタル「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」力ニ及ボス脾臓及ビ網状織内皮細胞系統ノ影響ニ就テ、(3)回歸熱「スピロヘータ」感染「マウス」ニ對スル余ノ所謂特殊物質ノ治療効果ト夫レニ及ボス脾臓及ビ網状織内皮細胞系ノ機能ノ影響ニ就テノ三篇より成る。参考論文は、(1)球菌毒素ト「ボルモリン」トノ關係、(2)非特異性細胞賦活作用ト「ホルモリン」トノ關係、殊ニ「カゼリン」ノ白血球喰嚥機能ニ及ボス二、三内分泌腺トノ關係ニ就テ、(3)巨大ナル脾腫ヲ伴ヘル浙巴肉腫症ノ一剖檢例、(4)朝鮮人ニ發生セル「ヘパトーム」ノ統計的並ニ組織學的觀察、(5)白血球ノ喰嚥作用ニ及ボス脾臓機能並ニ墨汁注射ノ影響ニ就テ等なり。

△氏は福井縣の出身、明治三十六年生にして、年齒未だ三十有三歳の少壯也。眞面目なる學究の人として多年臨床の経験を積み、手腕漸く壯熟して開業と共に活躍奮闘の時機に入る、將來有望の臨床家として、折角の努力奮勵を望むや切也。賦性濃厚にして謹直、人に對し患者に接するに、親切朗快にして眞摯なるは甚だ多とすべき也。

### 宮地伸一

△東京市中野區昭和通二ノ四〇に内科特に呼吸器科専門宮地醫院長として、近時著るしく名聲を揚げ、好評嘖々の裡に刀圭常に多忙を極めつゝある宮地伸一博士は、愛知醫專出身の内科専門家として知られ、臨床の傍ら研鑽多年、慶大教授阿部勝馬博士に就て専ら藥物學を研究し、天稟の才能と不斷の精進により、論文提出の結果慶大より學位を獲得せる名醫博として其の篤學を稱せられ、氏が前半生史をして一層光彩あらしめたり。内科特に氏の最も得意とす呼吸器に至りては、多年實地の經驗に富み、博士獨特の手腕は玲瓏たる打診と相俟つて極めて評判良く、多年の聲望と共に今や牢固たる地盤を有し、悠々として扱くべからざる地位を占む。

△學歷より觀れば、氏は東京市本所區江東橋四丁目五十番地に本籍を有し、明治二十九年生れにして、東京府立第三中學校(大正三年)を経て、大正七年愛知醫專を卒へ、翌八年より小石川病院内科に二ヶ年在職、次で東京市技師に就任、大正十五年より慶大醫學部藥物學教室に入り、阿部教授指導の下に藥物學研究の傍ら診療開始、慶大醫學部へ論文提出の結果、昭和九年六月學位を受領せり。

△主論文は「「ピツイトリン」ノ血糖及ビ「アドレナリン」過血糖ニ及ボス影響」にして、参考論文は、(1)「エゼリン」寡血糖に就て、(2)「サントニン」ノ家兎血糖ニ及ボス影響並ニソノ減血糖作用機轉ニ就テ、(3)「ヴェラトリン」ノ家兎血糖ニ及ボス影響等なり。

△氏の年齒今や不惑に達す、氏が診療の傍ら多年努力研鑽不撓不屈の精神を貫徹したる篤學は特筆すべきに値す。氏は性來克己心に強く、一度信じたことは徹底的に成し遂げずば已まず、また猪突的に活動する素質の人なれば、却つて後に悔をのこすことも屢々あらん。若し夫れその職務に對しては至誠勤勉無類といふ活動家にして、又情誼に厚過ぎるほど人情味ある人也。従つて人と接するに快活にして朗かなる態度は人に親しまるゝ徳を有す。讀書家にして精研修養相俟つて業餘の楽しみとす。

### 福原文雄

△吳海軍病院部員たる海軍々醫少佐福原文雄博士は、廣島一中より二高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、同年六月海軍に入籍今日に及ぶ。斯間母校の大學院在學中、恩師金子廉次郎教授及び小川政修教授の指導を受け、大學院を卒業して昭和九年六月九州帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は「脚氣並ニ「ヴァイタミン」B缺乏症ト蔗糖分解性大腸菌簇トノ關係ニ就テ」にして、参考論文は、(1)耐寒水泳者ニ就テ二、三ノ觀察、(2)肝臓「ヂストマ」ニ併發シタル原發性膽管上皮細胞癌ノ一例、(3)重症脚氣恢復期



ニ現ハレタル一種ノゴードン氏症候ニ似而非ナル防護反射様現象ニ就テ、以上三篇なり。感想に曰く「終始平凡に過したいと思つてゐる」云々。

△廣島縣尾道市福原純造の三男にして、明治三十一年生る。多年海軍々醫界に努力盡瘁せる功績は言はずもがな、今は分別盛にて年齒漸く三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして、至誠一貫、盡忠以て國家に奉ぜんとする熱誠努力は甚だ多とすべき也。賦性穩健篤實、眞面目にして寛厚能く人を容れ後進を愛撫す。尺八、麻雀を趣味とす。吳市神田町十丁目九ノ四に住む。

山口夷甫

△小樽市住之江町財團法人北海道社會事業協會病院内科醫長たる山口夷甫博士は、北海道帝大出身の新進にして、恩師有馬英二博士指導の下に内科學を研鑽し、更に細菌學教室に至り恩師中村豊博士の指導をうけ、母校より學位を獲得せる少壯醫博として其の將來を囑目せらる。學位論文に對する學問的價値は既に學界に定評あれば贅せすもがな、久しく内科教室に止まりて研學切磋、精研に餘念なかりしも、曩に學究生活を脱して以來、現職に赴任するや、多年蘊蓄せる臨床的手腕を發揮して拮据勵精、打診の好評と相俟つて、益々内外の信望を博しつゝあり。博士の感想に曰く「現代の醫師に缺くものは人格の陶冶である、故に吾々は學術的研究と共に、人格の陶冶に心懸けねばならない」云々。以て博士の爲人を知ると同時に、博士の言や至言といふべく、學位と共に人格の向上尊重を高調するの秋、折角の修養と共に常に徳操の堅持を心懸けることは、最も緊要なるを痛感す。

△更に學歴より見たる博士は、北大豫科を経て、昭和三年北海道帝大醫學部を卒へ、引續き同學部第一内科教室並びに細菌學教室に入り、有馬教授並びに中村教授指導の下に研究に従事し、昭和九年六月母校にて學位を授與せらる、次で教室を辭して現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「痘毒補體結合反應並ニ沈降反應ノ特异性ノ吟味」にして、參考論文は、(1)實驗的尙癩病家兎ト過敏症ニ就テ外四編あり。

△出身地は茨城縣稻敷郡大須賀村市崎にして、明治三十二年山口太助の次男に生る。年齒未だ三十有七歳にして、少壯の意氣に燃え、研究心潑刺として尙禁ぜず、今や診療界に躍進して「醫師自ら人格者たれ」をモットーとして、勵精奮闘常に學を鍊り腕を磨くに餘念なきが如し、將來有爲の新人物として最も囑望せらるゝも亦首肯するに難からず。頭腦明晰、志操堅實、眞面目にして飽迄成し遂げずんば止まぬ意志に強き人也。而かも人と接するに快活にして能く人を愛し、人に親しまるゝ徳を有す。趣味としては讀書、登山、テニスを好む。東北帝大理學部教授山口彌輔理博は叔父なり。小樽市入舟町七ノ十一に住む。

吉野高善

△沖繩縣八重山郡石垣町に内科、小兒科、外科、耳鼻咽喉科より成り、レントゲン並に入院室の設備、其他内部の設備を遺憾なく整へ、名實相伴ふ南島唯一の治療機關として有名なる南島病院あり、院長吉野高善博士の獨力經營せる私立醫院にして、開業拮据十年餘に垂んとし、博士自ら内科を擔任して診療に當り、各科擔任の専門醫と協力して當地方診療界の爲め努力貢獻する所あり。多年の聲望と博士獨特の手腕とは、好評噴々裡に隆々たる繁榮を持續し、今や牢乎拔くべからざる地盤を獲得し私立病院中の王座を占む。

△博士は大正十二年五月臺北醫學專門學校卒業、直ちに同校研究科(内科學)入學、同十四年六月臺灣總督府花蓮港醫院勤務、昭和二年本籍地に於て開業、同六年五月臺北醫學專門學校研究科(寄生蟲學)入學、同九年七月岡山醫大より學位受領、爾來現住所に於て醫院を經營す。斯間横川定博士指導の下に寄生蟲學を専攻せり、専門は内科を以て立てり。



△學位主論文は「有鉤條蟲ノ後胚發育ニ關スル研究」にして、(1)有鉤條蟲卵ノ孵化機轉ニ就テ、(2)有鉤囊蟲ノ最幼若型及「オンコスハエラ」ノ中間宿主體內移行経路ニ就テ、(3)中間宿主體內ニ於ケル有鉤囊蟲ノ發育ニ就テノ三篇より成る。参考論文は、(1)東部臺灣ニ於ケル小兒「マラリア」ノ流行學的並ニ臨床學的觀察、(2)八重山群島ニ於ケル「ストロンギロイデス、ステルコラーリス」症二十五例ニ就テノ臨床學的觀察、(3)劇烈ナル發作性直腸痛ヲ原因セル蟻蟲症ノ二例、(4)鉤蟲驅除ニ對スル「アスカリドール」ノ應用ニ就テ 附、鉤蟲ノ種別並ニ性ト驅除効果トノ關係、(5)有鉤條蟲ノ頭節形成ニ關スル實驗的研究、(6)有鉤條蟲ノ離脫受胎片節ノ排卵狀況並ニ同蟲ノ卵ニ就テ、(7)有鉤條蟲ノ寄生ニ因ル自覺症狀及同蟲ノ人體内發育ニ就テ等なり。

△沖繩縣八重山郡石垣町字大川、吉野高知の長男にして、明治三十一年生る、學究的少壯の紳士也。其の今日ある篤學と成業とは、博士界中異彩に富む醫博人物として特筆に値す。熱心なる研究家にして、又稀に見る讀書家たり、研究と醫療との外別に何等の道樂を有せず、今は唯だ誠意親切を以て仁術の爲め最善を盡し、刀圭甚だ多忙にして席を温むる暇なく、勵精努力日も尙足らざるの概あり。賦性濃厚篤實、謙讓にして誇らず、人に對し患者を待つに懇切同情をを以てす。好箇の臨床家としての特徴を具備する人格者たるを尊ぶ。

### 駒井 一雄

△滋賀縣栗太郡常盤村在住の駒井一雄博士は、新進の鍼灸醫學の根本たる經穴の科學的研究を完成したる内科、小兒科學者にして京都帝大生理學教室に籍を置き、大阪府立盲學校及び愛知鍼灸學校に教鞭を執り鍼灸醫學を講じつゝあり。博士は昭和二年京都府立醫大第一回の出身にして、鍼灸醫學の研究を志し、京都府立醫大生理學教室及び京都帝大生理學教室に於て教授石川日出鶴丸博士指導の下に斯學の蘊奥を究め、論文を京都帝大に提出して學位を獲得せる斯學界近來の名醫博也。學位論文は鍼灸醫學の實驗的研究にして、既に學界に定評あれば贅せず

もがな、如何に精研の該博なるかを語り、我國に於ける斯學研究の嚆矢として大に氣焔を吐けるは學界の爲め慶幸とする所也。

△博士は昭和二年京都府立醫大卒業後、母校生理學教室に於て越智眞逸教授の指導により鍼灸術治效本質の機構を究むるため研究を開始せり。翌昭和三年三月より同學小兒科教授三浦博士につき小兒科學の知見を究め、他日の斯學の臨床的實驗に資せり。昭和五年十一月更に鍼灸術の根本原理闡明のため本邦生理學界に於て神經生理の泰斗たる石川日出鶴丸博士について、從來斯學の研究者の看過せし經絡及び經穴の純學術的研究に手を染めたり。之れ本邦に於いて前人未踏の境地を開拓せしものと云ふべく一般鍼灸界及び治療醫界のため益するところ大なるものあるべし。

△學位主論文は「鍼灸醫學ノ實驗的研究」にして八篇より成り。参考論文は、(1)膽囊ノ自律神經求心性中樞ノ存在部位ニツイテ、(2)灸ノ生理學的研究第一回及び第二回報告の二篇なり。學位は昭和九年八月京都帝大にて授與せらる。幾多論文中の「灸治の科學的研究と其の學說」は實踐醫學誌上にて發表せるものにして、博士會心の著作と見らるべき也。

△感想に曰く「餘は鍼灸を家業とせる漢法醫家にして三百八十年の歴史を持てる家に生を享けたため京都府立醫大を卒へるや斯業の根本的研究に乗り出せり。鍼灸術は過去四五千年の歴史を有せるものにして今日に至るも治效本質に衰兆なく益々人々に喧傳せらるゝは、蓋し今日の科學を以つてして尙ほ窺知し得べからざる神祕の存んすが故ならんと信ず。その神祕の鍵鑰は經穴と經絡に存するものと考へ之れを徹底的に研究して、日本醫學建設のために資するとともに斯術の長と洋醫學の長との融和を圖らんことを期せり。今日其の業の端緒を得後來益々努力斯學のため献身の奉仕の任にあたらんことを決せり。しかもかかる事業は唯一人にてよく成し得べからざるところにして多數の有識有能の士の協賛助力を要するところなれば先づ斯學の研究團體を創立し雜誌を發行して醫家と鍼灸家の提携研究機關た



らしめたり誌名を大日本經穴治方學會と稱し名譽會長に石川日出鶴丸博士、會長に不肖就任現在に及べり」云々。博士の伯父は彼の滿洲帝國建國の創業に參劃せし駒井徳三氏にして博士の意氣の壯たるやけだし宣べなる哉。

△滋賀縣栗太郡常盤村大字穴駒井晴雄の長男にして、明治三十一年生る。學究的温厚の紳士にして、年齒未だ三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして研究心に燃ゆ、其の今日あるは博士の學歴に盡きて餘蘊なし、殊に本邦最初の根本的鍼灸研究醫學者として前人未踏の分野開拓てふ、一大業績を完成せるは萬人の敬服するところにして一度博士の學説の發表さるゝや、學界に一大センセーションを興し、本邦治療界革新のために一大警鐘となるに至れり、博士の面目の躍如たるものあるを見る。而かも猶研究を續け、精研に餘念なき前途は更に將來の大成を期待せらる。頭腦明晰にして志操堅實、研究に對する態度の熱心にして眞劍味あるは將來の成功を語るに足る。賦性穩健にして篤實、謙遜自抑して偏に恩師先輩の助力を説き、人と接するに少しも自己の學識を衒はず、淡々として只管己れを虚らする奥床しさは、學究の人としての敬慕の念を深からしめ、其の高邁なる人格を尊ばる。趣味としては音楽、寫眞、文藝等にして狂灸と號す。猶春秋頗る豊かにして、洋々たる前途を有す、幸に健康と共に、斯學振興の爲め益々精研盡瘁あらん事を切に祈る。滋賀縣栗太郡常盤村に住む。

#### 柳澤朝一郎

△東京市淺草區北清島町四一に内科、外科を標榜して既に堅實なる地盤を有し、好評噴々の裡に多大の信望を博しつゝある著名なる柳澤醫院あり、院長柳澤朝一郎博士の經營拮据、開業既に二十年餘の歴史を有する私立醫院也。多年の聲望を扶植して今や一流の地位を占め、打診の好評と相俟つて門前常に市をなすの盛況を呈しつゝあり。博士は愛知醫專出身の内科、外科學者にして、細菌學の造詣深く、特に内科を得意とす、學位は千葉醫大より獲得せる斯科界の名醫博として既に斯界に定評あり。

△博士は大正二年愛知醫專卒業、直ちに縣立愛知病院外科にて研究、大正四年横濱監獄醫となり、後鈴木外科病院に勤務、三井病院にて内科見學、大正五年現住所に開業今日に至る。其間東京帝大醫學講習科にて小兒科内科を習講する事二回、大正十三年醫學研修會に入會、昭和六年迄東京帝大鹽田教授及稻田教授の基講義を受くる事毎週二回缺席せしことなし。昭和六年千葉醫大衛生學教室に入り豫防醫學を研究す、同九年八月學位受領。主論文は「腸内嫌氣性腐敗菌ニ對スル研究」にして參考論文なし。

△感想に曰く「醫業難が叫ばれるが醫業のみならず、何の業務でも困難だ、役人ならいざ知らず他の人々は出来るだけ努力する事だ、働くことだ、是で醫業難も何もかも解決するのである、僕は二十年間働いた、朝は五時半から六時迄には必ず起きる、大學の研究の時も常にこの一番に登學した、それで朝一といふ名を貰つた、夜は十一時から十二時に寝る、夜中に時々起きる、然し病氣など少しも知らない、毎朝劍道、ラヂオ體操をする、酒、煙草は用ひない、然し金はたまらない、されど生活難もない、社會に對する不平不満は無い、只感謝々々で楽しい日を送つて居る」云々。△長野縣北佐久郡協和村の出身、明治二十四年生る、年齒不惑に入る五歳、年壯の學究的紳士也。殊に特筆すべきは、氏が開業幾星霜かの間、臨床の傍ら學術の研究を捨てず、不倦不怠の努力研鑽を續け、終に克く其の堅志を貫行して學位を獲得せる點にあり、尠くも此の厚志篤學は立志傳的範を示すに足らん。劍道二段にして剛健の氣象に富み、常に健康にして精力主義を以て終始し、意志強固にして沈着なる態度は悠揚として迫らず、人に對するに懇篤にして温情あり、患者を待つに誠意誠實を以てす。趣味としては劍道の外、筑前琵琶を愛好し旭朝を號とす、又角力好き也。好箇の臨床家として敬意を表し、茲に推獎す。

#### 谷澤貞次郎

△茨城縣結城郡絹川村大字小森に内科、小兒科特に呼吸器を以て著聞する谷澤醫院あり。院長谷

醫科續篇(内科)



澤貞次郎博士は東北帝大の出身にして、呼吸器病現代の權威たる恩師熊谷岱藏博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる所謂東北帝大派の名醫博なるが、更に其の學歷を討檢するに、二高を経て、大正十三年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部井上博士の醫化學教室に入り同教室副手を囑託され、同十五年同教室助手に任ぜられ、昭和四年醫化學教室を辭し熊谷内科教室に入り専ら肺結核に就て研究し、同五年七月同教室を辭し原籍地なる現住所に開業して今日に至る、其間昭和九年八月東北帝大より學位を受領せり。主論文は「組織臟器ノ含窒素化合物ニ就テ」にして、参考論文は「肝臟ノ自家融解」外三篇あり。

△感想に曰く「我が國の死亡率を見るに肺結核その第一位を占む、而して歐米諸外國に於ては肺結核患者年々減少すれども、我が國に於ては却て年々増加す、これ國民保健上誠に由々しき問題にして、吾人醫業に携る者結核の撲滅に向つて進まれんことを望む」云々。博士の原籍地は現住地茨城縣結城郡絹川村大字小森なり、明治三十年生れにして當年漸く三十有九歳、學識、手腕、人格共に壯熱の域に入り、少壯の意氣と共に最も活躍の時代に在り。殊に其の最も得意とする肺結核領域に至りては、研鑽多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して療養界の爲め盡す所あり、其の玲瓏たる打診の好評は益々遠近に喧傳し篤き信望を博す。讀書家にして書見を業餘の趣味とす。

### 鈴木三郎

△從五位勳四等豫備陸軍二等軍醫正鈴木三郎博士は、二高醫學部の出身にして、明治三十一年卒業後、一年志願兵に次で軍醫として奉職し、近衛師團、第一師團等に勤務、累進して大正十年陸軍二等軍醫正となり、同年十一月現役を退き豫備役となる、斯間陸軍々醫學校にて前後二回内科を研究し、陸軍に於ても主として内科を擔當し居れり、戰役には日露役及び大正三年十二月青島戰爭に参加せり、現在にては仙臺市花京院通七七自宅診療所に於て一般内科の診療に従事し居れり。

△博士の感想に曰く「開業醫師に對し世人種々の惡口を弄し居るも、之等は皆患者本位の言にして誠に面白からぬことなり、醫師とても人間なり、宜しく醫師の立場をも顧みざるべからず、要するに醫師と患者間の空氣惡しきためなるが故に、此の惡氣を除くにあり、此の方法に就ては二、三意見あるも茲に省略す」云々。

△主論文は「血液中ニ於ケル尿酸代謝ノ研究」、(英文)にして、参考論文は、(1)眞鴨及家鴨ノ肝及筋肉ノ含水炭素(獨文)、(2)章魚ノ有機磷酸化合物(獨文)、(3)「バラチフス」ニ就テ、(3)我陸軍ニ於ケル主要ナル外傷性疾患ノ原因機轉及其豫防策 附歐洲強國トノ比較、(5)先天性遺傳性指間關節強剛ニ就テ、等なり。秋田縣由利郡矢島町故鈴木勇一郎の三男にして、明治九年生る、鈴木立男博士の弟也。人と爲り謹直篤厚、殊に同情心に富み、萬事に几帳面なり、その眞摯なる紳士的態度は多とす。

### 重信正道

△樺太大泊本町に於て内科及び耳鼻咽喉科を標榜して開業せる重信正道博士は、長崎醫專大正九年の出身にて、田中及び清川兩博士に就て内科學を專攻し、後ち慶大教授弘中及び小此木兩博士に就て耳鼻咽喉科學を學び、次で川上漸教授指導の下に病理學を專攻し、昭和九年九月慶大にて學位を授與せられたる少壯醫博也。

△學位主論文は「家兔ノ血球ヲ以テ免疫シタル白鼠ニ於ケル移植白鼠癌ノ生機ニ就キテ」にして、参考論文に、(1)榮養ニ關スル一般臟器ノ病理學所見、(2)鼻中隔ヨリ發生セル血管肉腫、(3)上顎性粘液裏腫ニ關スルモノ、等あり。

△感想に曰く「形而上上下下より事物の全體を觀じ、其局所に及ぼし歸向を察し、時中の處置を大自然の理法に準據して取り得る事を學ぶ事を希望す」云々。東京市の人、明治二十九年生、重信一華の二男也。錦戒、又は克道はペンネームにして、哲學を趣味す。正を愛し邪を惡み、至誠以て仁術の爲め人事の最善を盡し、以て天職と爲す眞面目なる臨床家也。



◇  
**武田 義男** △大阪市港區八幡屋大通二ノ七五に武田内科醫院あり、院長武田義男博士は大阪醫大系の内科学者にして、内科界の泰斗小澤修造博士の門弟として知られ、恩師指導の下に斯學の蘊奥を究め、學位主論文「胃液及十二指腸液内二、三酸素ノ實驗的研究」及び參考論文六篇を完成、大阪帝大醫學部に提出して學位を獲得せる新人也其の學歴よりすれば、昭和二年四月大阪醫大を卒へ、同年同月より五年四月迄三年間大阪帝大醫學部助手として勤め引續き同五年四月より九年四月迄四年間同學部助手として勤務す、爾來現住地にて開業、昭和九年九月學位受領今日に至る。

△滋賀縣甲賀郡石部町大字石部内貴又右衛門の二男にして、明治三十二年生る。母校の研究室を巢立ちて診療界に躍進するや、努力奮勵日も尙足らず、今や獨特の手腕を揮ひ、誠意誠實を盡して仁術の爲め大に將來に待つ所あらんとす、前途の發展や大に待望せらる。研究以外には端唄、長唄を趣味す。

◇  
**藤田 繁雄** △大阪市鐘紡淀川病院長として名聲を馳せ、斯界の爲め努力奮盡しつゝあるは藤田繁雄博士也。氏は長崎醫專の出身にして、内科を専門とし、特に結核病を最も得意とす、結核界の權威佐多愛彦博士に親炙して、恩師指導の下に多年研究して斯學の蘊奥を究め、大阪帝大より學位を受領せり。更に其略歴を概括すれば、明治四十二年長崎醫學專門學校入學、大正二年同校卒業、同年長崎縣警察醫に任命せられ、大正三年長崎縣立病院内科研究、昭和六年鐘紡入社、同九年九月學位受領、以て今日に至れり。

△學位主論文は「感染性ノ年齢ト結核性變化ノ特色」にして、參考論文は、(1)農村青春期男女ノ「ツベルクリン」反應ニ就テ、(2)純綿織維並ニ加工綿織維ノ結核性變化ニ及ボス影響ニ就テ、(3)結核過敏性ノ發生ニ關スル實驗的研究、

(4)高熱時ニ於ケル赤沈反應ト「ツベルクリン」反應トノ關係ニ就テなり。  
△佐賀縣東松浦郡鏡村半田の出身にして、明治二十三年生る、當年不惑有六歳、學究的年壯の紳士也。殊に篤學者としての輝しき閱歴は、氏が前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり。今尙結核に關する研究に余念なく、業餘故々として精研に倦むことなし。研究以外には佛教を趣味として造詣する所深く、信義を重んじ禮節に厚く、自ら克く品性の陶冶に勉め、人に對するに懇篤親切を以てす。大阪市旭區友淵町一二三に住む。

◇  
**本多 秀貫** △東京市四谷區永住町二に一般内科、レントゲン科特に呼吸器科、消化器科を以て著名なる本多内科醫院あり、一般内科の外特にレントゲン科を併置し、その他紫外線、赤外線、デアテルミーを設備す。院長本多秀貫博士は、愛知醫專出身の篤學者にして、名古屋醫大より學位を獲得せる斯科近來の名醫博なるが、開業拮据二十年の間、臨床の傍ら研學切磋常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、終に三井慈善病院放射線科保利清博士指導の下に「レ」線學を専攻して學位論文を完成せり。學位論文は既に學界に定評あれば言はずもがな、よくその學殖の豊富なるかを語るに足る。一面又臨床の經驗に富み、博士獨特の手腕は多年の聲望と相俟つて、好評噴々の裡に大衆の人氣を集申し、牢乎たる地盤は既にして抜くべからざるものあり。蓋し其の今日ある博士が、開業の傍ら學位を獲得せる篤學は立志傳的にして特筆に値し、博士の面目を語るに充分なり。

△博士は大正三年愛知醫專卒業後、同三年より十二年迄愛知縣碧海郡高濱町にて開業、同十二年九月より昭和三年十二月迄東京四谷區荒木町近藤内科療院副院長として就任、次で昭和四年二月以降現住所にて開業の傍ら、和泉橋病院放射線科にて研究に従事し今日に至る。其間、昭和九年二月名古屋醫大より學位を受領せり。

△學位主論文は「日本人下顎縫合癒合機轉ニ關スル「レ」線解剖學的研究」にして、參考論文なし。愛知縣碧海郡高濱



町吉濱本多秀賢の長男にして、明治二十一年生る。其の今日ある閱歴は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、殊に其の篤學は立志傳的にして特に異彩を放ちて見ゆ。壯齡今や不惑に入る八、元氣甚だ旺盛にして刀圭常に多忙の裡に今も猶日新醫學の研鑽に餘念なし。「日本獨特と思はれた所謂開業醫制度の破壊に傾かんとするを悲しむ。尤も大きな原因は蓋し全世界を風靡した經濟不況であらう、而し余は醫師の品格の低落と同時に醫業の何たるかを解せぬ一民衆や官僚の錯覺が今日あらしめたことを否定し得ないと考ふる者だ。此の際吾人は充分結束して、昔乍らの良風を固執し、醫業の發展を期せずんば蓋し國民保健の大業を完成し得ぬと確信する者である」云々、との持論者也。以上は博士の心境を語るものにして其の爲人を窺知するに難しとせず。讀書家にして殊に文藝趣味深く、音樂を愛し、運動を好む、時に又乗馬を樂しむ。家庭は妻禎子との間に子女無く、家庭的に恵まれざる丈け研究心一層強く、其の前途更に洋々たるものあり。

### 萱場次郎

△仙臺市東三番丁四五に内科特に呼吸器科を以て名聲を博し、好評嘖々の裡に年次堅實なる發展を遂げつゝある萱場病院あり。院長萱場次郎博士の經營にして、病床十三、レントゲン科、光線科、電氣治療科其他内部の設備全く成り、院長自ら日々診療に勵精して余念なく、博士獨特の手腕は氏が篤實濃厚なる性格と相俟つて益々人氣を集め、今や當市診療界に一流の地位を占む。氏は東北帝大（専門部出身）系の内科學者にして、特に呼吸器病科を得意とし、母校の恩師熊谷岱藏教授に就きて斯學の蘊奥を究め、東北帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。目下仙臺稅務監督局醫、私立吉田高等女學校醫、私立榴ヶ岡幼稚園醫等の囑託を受け公職にあり、氏が社會的聲望の歸する所亦以て知らる。

△博士は大正二年東北帝大醫學專門部醫學科卒業、直ちに新設熊谷内科に入り、大正三年一年志願兵として、仙臺歩兵第四聯隊入隊、大正四年再び同内科に復す、大正七年陸軍三等軍醫に任し正八位に叙せらる、大正九年現住地に開業、昭和五年熊谷内科教室に於て開業の傍ら研究、同九年十二月學位受領、現今に及ぶ。

△學位主論文は「蛄「エキス」ノ排膽及催膽作用ノ研究」にして、獨逸文の原著也。參考論文は、(1)「アミラーゼ」ノ絮條形成作用ニツキテ、(2)腦脊髓液検査上「アミラーゼ」測定ノ診斷的價値ニ就キテ、(3)人工氣胸療法ノ統計的觀察、(4)胸腔内壓殊ニ脚氣患者ノソレニ就テ、(5)胸腔内壓ニ就テ、(6)實驗的肺結核ニ對スル祛痰劑ノ影響、(7)實驗的肺結核ニ對スル紫外線、赤外線ノ影響等なり、主論文は黃疸に對する民間藥蛄が特有の排胆及催膽作用を營むことを新しき方法と見方とより研究し其の神經影響をも明かにし、逆に胆道系の神經主宰と肝分泌神經影響と機構とを知り得たり。參考論文中祛痰劑、紫外赤外線等の結核治療に新認識を與へたと胸腔内壓の研究は當時前人未踏の領域を探究せる點に寄與せるもの尠からず。

△感想に曰く「開業醫としての觀點よりせば從來の醫療機構を全革し一時的なりとも無統制に墮せしめ、然る後徐るに新らしき、より科學的なる機構を作るにあらずんば醫の往くところ、大衆の赴く所荆棘のみ、學界展望に至りては感想のみ徒に多くして謂ふべきを知らず唯だ Japan を排して Nippon 「イズム」に邁進せんことを望むや切なり」云々。氏は宮城縣宮城郡七郷村荒井宇畑中の人、萱場利兵衛の次男にして、明治二十一年生る。年壯にして手腕圓熟の域に入り多量の分別を有し、識見に富む、感想にもある如くニツボン、イズムの主論者也。性格より言へば、東北人の通有性を自覺しながら改め難く、肉體の頑健を過信、努力一點張り、従つて伸縮性なく、飽迄野人として立ち、唯だ誠意誠實を以て終始する人なるか、自ら氏の長短は此間に窺はる。「全部の日本人は皆親戚なる觀あるも、狹義の親戚中博士なるものなし」云々とは氏の談片なるが、亦以て氏の心境を物語りて余す所なし。趣味としては魚釣及びスポーツの見物を好む。



加藤清彦

△日赤秋田支部病院理學診療科醫長としての加藤清彦博士の名聲は、其の地方に喧傳し多大の信望を博す。氏は昭和二年三月慶應義塾大學醫學部卒業、同年四月慶應義塾大學醫學部理學的診療科教室助手となり、昭和七年六月日本赤十字社秋田支部病院理學診療科醫長として赴任し爾來同職に在り、昭和九年十一月慶大にて學位を受領せり。斯間藤浪剛一教授の指導を受け、理學的診療科を専攻せり。

△學位主論文は「レントゲン線ノ基礎代謝ニ及ボス影響ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)子宮筋腫ノ「レントゲン」治療ニ就テ、(2)「レントゲン」線ニヨル婦人去勢ニ就テ、(3)子宮及附屬器ノ「レントゲン」呼吸ニ就テ、(4)潜在性脊椎破裂なり。

△氏は愛知縣海部郡佐織村大字小津の人、加藤正名の次男にして、明治三十四年生る、年齢未だ三十有五歳也。研究心に富み、平生臨床甚だ多忙なるに拘はらず、今猶業餘克く勉めて精研に余念なし、潑刺たる前途は頗る春秋に富み大に將來の大成を待望せらる。秋田市保戸野北鐵砲町三九に住む。

細見新治

△神戸市湊川腦病院長細見新治博士は、明治四十三年醫師試驗合格、翌四十四年一月關東都督府醫務囑託、同年五月解囑、大正四年一月湊川腦病院長就任、昭和四年一月より同九年十二月迄京都帝大醫學部精神病學教室專修科に在學、今村新吉教授の指導を受け精神病學を専攻し、同九年十二月京都帝大にて學位を受領せり。主論文は「「サルヴルサン」ノ注入經路ト腦髓移行量ノ變化ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)麻痺性痴呆ニ對スル「マラリヤ」療法、(2)麻痺性痴呆ニ對スル回歸熱療法、(3)麻痺性痴呆ニ對スル「デアアテルミ」療法、(4)精神分擔症ニ於ケル神經病學的徵候ノ研究、(5)復生ノ臨床的研究(第一編)等なり。

△神戸の人にして、明治十九年生る。願ふに醫師試驗出身より奮起して興學の志に燃ゆる氏は、在職の儘京大精神病學教室に入りて、滿五ヶ年の努力精進を續け、日夜倦まざる奮闘的學究生活のうち終に克く、學位論文を完成せる天稟の頭腦と、百折不撓の努力とは、立志傳的篤學の士としての範を示せるものにして、我學界の一驚異たるに値す。今年齒當に知命に達す、現職に就任して以來二十有餘年の久しきに亘りて、至誠一貫、専心忠實に本職の爲め勵精努力し、多年貢獻せる功績は言はずもがな、院是に従ひ熱誠完く最善を盡し以て天職と爲すの概あるは、精神病界の爲め大に意を強からしむ。神戸市湊區湊川町三三に住む。

大竹藤一

△日本醫科大學講師として内科學を講じつゝある大竹藤一博士は、日本醫專出身の内科學者にして、金澤醫大より學位を獲得せる新博士中の一人物也。氏は愛知縣の出身、明治二十七年生にして、大正十五年日本醫學專門學校卒業、直ちに日本醫科大學附屬醫院行徳内科醫員を奉職し、昭和九年日本醫科大學講師に任ぜられ、同十年一月金澤醫大にて學位を授與せられ、今日に及ぶ。斯間行徳健助教授の指導を受けたり。

△學位主論文は「尿液分泌ノ研究補遺」にして、參考論文は、(1)胃液分泌ト反覆攝食トノ關係、(2)糖類ノ靜脈内注射ガ胃液分泌ニ及ボス作用、(3)食鹽ノ胃液分泌ニ及ボス影響等なり。

△眞面目なる年壯學者にして、熱心なる研究家を以て知られ、今や多年の蘊蓄を傾倒して母校の教壇に起ち、將又臨床に直面して學生指導の傍ら自己の研究に没頭し、誠意誠實を盡して希望ある將來に俟つあらんとす、潑刺たる其の前途は大に期待せらる。研究以外には旅行を趣味す。東京市本郷區駒込曙町一三に住む。

牧野寅三

△京都市本郷區駒込曙町一三に住む。

△京都帝大醫學部松尾内科に新進の牧野寅三博士あり。氏は大阪醫大出身の内科學者にして、母



校の恩師楠本教授の門下生として知られ、楠本内科を巢立ちて後、更に京大教授松尾博士に師事して研究を重ね、京都帝大より學位を獲得せる後、引續き今猶恩師指導の下に研究續行中にて、馳て診療界に躍進せんとする修養に餘念なきが如し。氏は昭和三年大阪醫大を卒業後、同年四月より昭和五年四月迄、同大學楠本内科勤務、昭和五年四月より京大松尾内科勤務今日に至る、斯間同十年一月京都帝大にて學位を授與せらる。斯間主なる指導教授は阪大總長楠本長三郎博士及び京大教授松尾巖博士にして、内科を専攻せり、特に消化器病科及び腎臟病を最も得意とす。

△學位主論文は「植物性神経ト實驗的腎炎」にして、第壹——六回報告より成れり。外に參考論文七編あり。氏の論著中「植物性神経ト實驗的腎炎」は博士會心の作にして最も得意のものと思ふべき也。

△感想に曰く「特に感想として申上げるものはないが、醫界は他の學界と異なり數多の研究者に依り貴重なる研究業績の續出は誇りを感じるものである」云々。氏は大阪府中河内郡布施町大字太平寺、亡牧野太吉の長男にして、明治三十五年生る。年齢未だ三十有四歳、學究的少壯の紳士、熱心なる研究家として知られ、今猶研究續行中にて修養の時代に在るが、馳て診療界に躍進せんとする前途の展開は頗る刮目に値す。今は唯だ研究に没頭して他事を顧みざる暇なく、努力研鑽日も尙足らざるの概あり。愛讀家にして書見を唯一の趣味として精神修養相俟つて克く勉む。人と爲り温厚にして人と争はず、書生氣分の明快さは人に親しまるゝの徳を有す、一面には又意志強固にして、研究に對する態度の眞摯なると、熱あり力ある熱心振りは、博士の將來を大ならしむる素質の人と見るべく、將來有爲の資に富む博士の前途や、多々益々努力奮闘を要するの切なるを思ふの秋、折角の自重加餐を祈ると共に、一層の精研奮勵あらん事を、老婆心ながら著者は更めて囑望して止まざる者也。大阪府中河内郡布施町大字太平寺に私邸あり。

渡邊 靜

△神戸市兵庫區水木通三丁目三ノ一に於て渡邊内科醫院を經營し、傍ら日本海員救濟會神戸病院

副院長内科醫長として、豊原副院長と共に診療に従事しつゝある渡邊靜博士は、長崎醫事出身の内科學者にして、特に呼吸器科に長じ最も得意とす。更に其の略歴を概説すれば、大正十二年長崎醫學專門學校卒業、直ちに長崎醫科大學副手囑託、内科學教室に入り研究、次いで二三病院を経て、現在日本海員救濟會神戸病院副院長内科醫長たり、昭和四年十一月より京都帝國大學松本信一教授指導の下に學位論文研究に従事し、昭和拾年壹月京都帝大にて學位を授與さる、現在京都帝國大學化學研究所研究員たり。又日本海員救濟會神戸病院副院長内科醫長として勤務し、傍ら現住所に於て渡邊内科醫院を經營し、診療に従事しつゝあり。斯間、長崎醫科大學前内科學教授山田基博士、京都帝國大學教授松本信一博士に就きて内科を専攻し、特に呼吸器科を得意とす。

△學位主論文は「膀胱腫瘍ノ實驗的研究」にして八篇より成る。參考論文は、(1) 微毒ノ免疫ニ關スル研究(四篇)、(2) 「テール」腫瘍ニ關スル研究(二篇)、(3) 「ラツテ」膀胱寄生蟲ナル *Trichosomoides Crassicauda* ニ關スル研究(二篇)、なり。膀胱腫瘍の實相を把握し得たる上掲の主論文並に微毒免疫の真相を追求し得たる參考論文中の微毒免疫に關する四篇は博士快心の論著なりとす。

△大分縣西國東郡田染村嶺崎、渡邊信十郎の二男にして、明治三十四年生る。多年鍊磨せる手腕は愈々壯熟の域に入り、今や其の特技を發揮するに自由の立場に在り、向後の活躍と相俟つて將來の發展を大に囑望せらる。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし業餘克く精研に勉むる所あり、又謡曲を趣味す。文才あり、無有を號とす。博士の年齢未だ三十有五歳、前途洋々たり。折角の努力健闘を望むや切也。

矢野 豊

△茨城縣土浦町三八平本内科醫院長矢野豊博士は、千葉醫大派の新進なる名醫博にして、内科を専門とし特に呼吸器科を得意とす。内科は母校の恩師岡田清三郎教授、及び柏戸留吉教授指導の下に研究し、又加賀



谷勇之助教授に就て血清學を專攻せり。學位論文は「各種細菌並ニ動物諸血球ト人血球トノ共通抗原物質ニ就テ」にして、學位は千葉醫大より獲得せり。

△博士は大正十四年千葉醫大専門部卒業後、千葉醫大附屬醫院第二内科に次で、千葉縣船橋町清川醫院に勤務し、翌十五年十月再び第二内科醫局に入る、昭和二年五月同醫局を去り再び清川醫院に勤務す、同五年一月更に千葉醫大法醫學教室に入り血清學の研究に従事し同七年七月同教室を去る、其間千葉市井上内科病院に勤務し、同七年八月より現住地にて開業す、翌八年十月母校にて學位を授與せられ今日に至る。

△千葉縣東葛飾郡入榮村大字夏見の人、矢野定吉の二男にして、明治三十二年生る。學究的温厚の紳士にして、年齢漸く三十有七、少壯の意氣に燃え研究心に富む。その今日ある輝しき閱歴は言はずもがな、多年の研鑽經驗と相俟つて今は手腕、人格共に圓熟し最も得意の時代に入る。研究室を去り愈々獨立の舞臺に立ちて以來日猶淺少なれども、誠實と親切とをモットーとして熱心に働きつゝある診療振りは、打診の好評と相俟つて漸次獨立の地盤を築き、年と共に向上發展の域に進み、日増盛況を呈しつゝあるは大に心強く感ぜらる。趣味としては俳句、圍碁、野球等を好み、業餘又克く讀書精研に余念なきを見る。春秋猶豊富にして前途洋々たれば、切に自重加餐を祈る。

### 叶山常吉

△慈惠醫大派の一新勢力と見るべき、神經及び精神病科の新手腕家として囑望せられつゝある叶山常吉博士は、目下東京府立松澤病院醫員として活躍し、内外の聲望を博しつゝあり。氏は大正八年三月慈惠醫專卒、同年六月海軍少軍醫に任官、大正十年三月 皇太子殿下御召艦香取の乗組員として歐洲を巡航視察、昭和五年十一月海軍軍醫少佐に任官、翌年三月退職、同年四月慈大研究生、同九年二月東大精神科入室、同年十月松澤病院勤務、同十年一月慈惠醫大より學位受領、今日に至る。斯間慈惠醫大教授浦本政三郎博士及び東大教授三宅鑛一博士に就き神

經、筋生理を專攻せり、特に神經及精神病科を得意とし斯科を以て立てり。

△學位主論文は「神經及筋ニ於ケル乳酸量ニ關スル研究」にして五篇より成り、參考論文なし。氏の論著中「神經及筋ノ化學的過程（綜説）」は博士會心の作と見るべく博士の最も得意とせる著作なりとす。

△富山縣東礪波郡井波町、梅崎喜八の五男にして、明治三十年生る。多年海軍に出仕して軍醫界に活動する所ありしも、退官以來其の専門とする神經及び精神病科を以て立ち、今は唯だ其の職務に勵精して猶其の研究を捨てず、讀書靜修、孜孜として精研克く其の領域に就て深奥の探究に勵しみつゝあり。たまゞ氏の感想の一片を寄せて曰く「知は名に相應しかるべし。徳は更に名よりも重かるべし」云々と、以て博士の心境を語るに足り、其の人格を窺はる。性來眞面目にして謹嚴、お世辭を云ふ事と金を儲ける事は至つて下手の方なり。而かも人に對しての温情と熱情とは人に親しまるゝの徳を有す。趣味としては書見を楽しむの風あり。東京市品川区東大崎三ノ二四六に住む。

### 松野孝一

△東京逓信局保険課濱松簡易保險健康相談所長として活動し、斯道の指導啓發の爲め努力貢獻しつゝあるは松野孝一博士也。氏は日本醫大派の新進にして、内科及び小兒科を以て立ち、特に乳兒疾患、消化器並びに心臟疾患に多大の興味を有し最も得意とす。研鑽多年の間、主として岡田清三郎教授、宇佐美助教授、藤井靜英教授等の指導を受け、最近名古屋醫大より學位を獲得せる新博士中の一異彩を以て注目せられ、光る學位の前途や氏が向後の活躍と相俟つて更に大に囑望せらる。

△博士は昭和五年三月日本醫科大學卒業、同五年五月愛知醫科大學副手を命ぜらる（小兒科學教室）、同七年一月名古屋醫科大學岡田内科教室に轉科を命ぜらる、同九年十二月學位論文通過、同十年一月學位を授與せられ、現職に在り。學位主論文は「水素「イオン」濃度ニ關スル知見補遺」にして、(1)果物ノ水素「イオン」濃度ニ就テ、(2)「ヂキ



タリス」葉ノ効力檢定ト水素「イオン」濃度トノ關係ニ就イテの二篇より成り、參考論文は「兩側性腰胸ノ一治癒例」なり。

△岐阜縣大垣市栗屋町、醫師松野熊轉の三男にして、明治三十三年生る。學究的少壯の紳士にして、年齢未だ三十有六歳、意氣潑刺として研究心に燃ゆ、學究生活を眞立ちて實社會に起つや、日尙淺きも、今は唯だ至誠以て公に奉じ、一意専心、其の職務に努力勵精致々として倦むことを知らざるの概あり。多趣味の人にして、就中讀書を唯一の樂しみとし精研修養克く勉むる所あり、其他柔道、ラヂオ、活動、角力、旅行等を好む、從つて話題に富み社交上利する所又尠からずとせず。人と爲り濃厚にして快活、能く人を愛し又能く人に親まる、常に徳操を重んじて自ら克く精神の修養に務むるの人たるを想はしむ。將來有爲の臨床家としての人格を尊重し、博士の春秋猶頗る豊富なるの秋、幸に健康にして、爲斯界益々奮盡健闘あらん事を、著者は更めて衷心囑望して止まざる者也。濱松市鴨江町一六八〇に住む。

石田 宏

△東京市淀橋區西大久保二ノ一九六をトして目下開業準備中の石田宏博士は、金澤醫專出身の内科學者にして、特に消化器病科を最も得意とする新進の大家たる一人物也。學位は京都帝大より獲得せるが、斯間内科界現代の權威京都帝大教授松尾巖博士に親炙して造詣する所深く、多年の蘊蓄を傾倒して聽て診療界に躍進せんとする前途の活躍や頗る囑目に値す。

△博士は大正三年金澤醫專卒業、其後金澤市金城病院、同市立櫻木病院、三重縣小林病院勤務、同五年末本籍地開業其間福井縣豊及吉野尋常高等小學校々醫、福井縣學校醫會評議員囑託、昭和四年より京都帝國大學醫學部醫院勤務、京都帝國大學專修科入學、昭和十年二月學位受領、目下現住所開業準備中。

△學位主論文は「腎臟障礙時ニ於ケル肝臟ノ尿素及ビ殘滓窒素排泄機能ニ關スル研究」にして、七篇より成る。參考論文は八篇あり。氏の論著中「尿素ノ微量定量」及び「肝臟ノ機能」等は博士會心の作にして最も重要なものと見るべき也。

△福井縣丹生郡吉野村芝原の出身、明治廿五年生れの學究的温厚の紳士にして、當年不惑に入る四歳也。氏は學校卒業後臨床家として立つて以來、地方二、三の病院に勤務し、或は自宅開業して多年實地の經驗を踏み、臨床に堪能にして獨特の手腕を有し、今や學殖と相俟つて愈々圓熟の域に入り、最も奮闘的活動を要するの時代に在り、近く開業と共に牙えたる腕の鳴る時を期待せらる。讀書家にして今猶精研に余念なく、書見を唯一の趣味とす。性來几帳面の實にして、事物の大小に關せず一づゝ整頓を好み、萬事正確に整理する長所を有す、以て其の爲人を窺はる。

城谷 文四郎

△山口縣技師にして、下關市立高尾病院に副院長として、尙市立衛生試驗所及び市立診療所兼務として内外の信望を博し、日々診療に勵精努力しつゝある城谷文四郎博士は、長崎醫大派の一新勢力と見るべき新進の内科學者にして、特に急性傳染病を最も得意とする少壯醫博として其の手腕を認めらる。氏は長崎中學校卒業後、大正八年官立長崎醫學專門學校に入學、同十二年三月同校卒業、直ちに軍醫生活に入りしも健康を害し、大正十三年六月豫備役編入、同年九月より下關市立高尾病院に奉職し現在に至る、尙、市立衛生試驗所、市立診療所に兼務す。昭和十年八月長崎醫大にて學位を授與せらる。斯間長崎醫大國友、影浦、辻三教授指導の下に研究せり。

△學位主論文は「腸「チフス」血液像知見補遺」にして四篇より成る、(1)赤血球並ニ血色素ニ就テ、(2)白血球像、(3)其ノ他ノ血液像、(4)有核赤血球出現ニ就テノ實驗的研究とす。參考論文は、(1)腸「チフス」經過中ニ於ケル血漿喰菌現象ノ臨床的觀察、(2)腸「チフス」豫防接種後ニ於ケル血漿喰菌現象ノ消長、(3)急性傳染病及其ノ他二、三疾患ニ於



ケル鹽基性顆粒赤血球ノ性状ニ關スル臨床的觀察、(4)バイフェル氏「インフルエンザ」菌腦膜炎ノ三例、(5)汎發性種痘疹四例、(6)猩紅熱ト月經トノ關係ニ就テノ小經驗、(7)多染色性、鹽基性嗜好顆粒及超生體可溶性網狀赤血球等ノ相互關係並ニソノ本態ニ關スル知見補遺、(8)鹽基性顆粒赤血球出現率ニ關スル私見等なり。

△長崎縣南高來郡北有馬村、城谷健閣の七男にして、明治三十三年生る。學究的少壯の紳士にして篤學者たり、氏が市立高尾病院に奉職の傍ら、春風秋雨の努力研鑽を續け、終に克く其の興學の初志を貫行せる跡は、氏が前半生史をして一段の光彩を放てり。今は熱誠以て公に奉ずるの念を以て、一意専心、唯だ其の職務に勵精して仁術の本分を盡しつゝあり。研究以外の趣味としては圍碁と俳句とを好む。賦性謹直にして至誠の士也。下關市東大坪町五に住む。

螺 良四郎

△東大派の名醫博たる螺良四郎博士は、内科醫として起ちて以來、大阪市北區堂島北町一一佐多醫院(院長佐多愛彦博士)に於て専ら内科を擔任し、勵精拮据十年一日の如く不斷の精進を續け、今や浪速診療界に於ける内科の大家として大衆より多大の信望と尊敬とを以て迎へられ、醫院の隆盛と共に嘖々たる名聲を博せり。博士は世人周知の如く、院長佐多博士の愛婿にして、嘗て獨、英に留學して内科學及び生理學を研鑽し、學識、經驗相俟つて獨特の手腕を有し、内外臨床醫家として今や一段の貫祿を備え、最も活躍の全盛時に在り。

△博士は大正七年十二月東大醫學部卒業、同年大學院入學、入澤内科(入澤教授)教室に於て副手勤務、大正十年九月より藥物學教室(林教授)に入る、同十二年二月渡歐ハンプルヒ市サン、ゲオルヒ病院及アルトナ市立病院に約五ヶ月、次で伯林シャリテール病院第二内科のブルグシュ教授の下に六ヶ月、次で英國に渡りサン、バソロメウ醫科大學の生理教授ロバットエバンス氏の下に約一ヶ年研究に従事し、大正十四年五月米國を經由して歸朝、同年七月より開業今日に至る、斯間大正十三年三月東京帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は「生殖腺内分泌知見補遺(第一及第二報告)」にして、參考論文は、(1)家族的遺傳性運動失調症ニ就テ、(2)甲狀腺變調性兒態症ニ就テ、(3)脚氣ニ於ケル植物性神經機能ニ關スル研究等、其他論著夥多。博士は栃木縣の出身、故笹川正男(元慶大教授)の弟にして、明治二十六年生る。スポーツと文藝とを趣味す。年齒不惑に入る三歳、學究的年壯の紳士、妻愛子は佐多愛彦博士の娘也。兵庫縣川邊郡立花村に住む。

荒井 惠

△侍醫として多年宮内省侍醫寮に忠勤を勵み、至誠一貫、奉公の念に燃えつゝある荒井惠博士は東大派の錚々たる内科學者にして、嘗て獨逸に留學して研鑽、歸朝後母校より學位を得、當世博士界の中堅にして内科の大家として矚目せらるゝ一人物也。博士は東京獨逸協會中學校、一高を経て、明治四十一年十二月東京帝大醫科大學卒業、同四十二年一月より大正元年八月迄東京帝國大學醫科大學助教故宮本叔博士に師事、其間陸軍一年志願兵服役し、終了後任豫備陸軍二等軍醫、大正元年九月より同十年七月迄、臺灣總督府に奉職、臺北醫院第二内科醫長、醫學專門學校講師、總督府防疫醫官、總督府技師等に歴任又は兼任、大正十年八月休職上京、東京帝國大學傳染病研究生となる、同十一年六月私費を以て獨逸國に留學、同國ハンブルク熱帯病研究所及エツペンドルフ一般病院に在學同十二年十月歸朝、同十三年六月侍醫に任ぜらる、同十三年四月學位受領、以て今日に至れり。

△學位主論文は「「バラチフス」B菌ノ排泄路ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)「バラチフス」B菌ノ經口の輸入ニヨル家兎ノ免疫及感染ニ關スル實驗的研究、(2)デウドレネ氏培養基ニ就テ、(3)臺北ニ於ケル腸「チフス」ノ疫學的觀察、(4)阿里山ニ於ケル二三ノ醫學的調査ニ就テ、(5)臺灣人ノ體格研究補遺、(6)「ザルコスポリヂア」ノ研究(獨文)等なり。其他論著夥多。

△東京市麻布區士族荒井信勞の四男にして、明治十七年生る、學究的温厚の紳士としての人格者也。啞雷山人は其號



にして、史論、地誌に多大の興味を有し、讀書を唯一の楽しみとす、又旅行に趣味を有す。東京市牛込區南山伏町一六に住む。

吾妻俊夫

△昭和醫專教授にして同校の中堅たり、内科界現代の大家として名聲を博せる吾妻俊夫博士は、東京市の出身、明治二十四年生にして、大正三年三月第一高等學校卒業、同七年十一月東京帝國大學醫科大學卒業、直ちに東大醫化學教室に入り柿内教授の指導の下に醫化學研究、同十二年七月東大稲田内科に轉勤す、同十三年十二月東京帝大にて學位受領、目下頭書の現職に在り。

△主論文は「血清脂肪酵素ノ研究」にして、原著は英文より成る。参考論文は「養育院入院者ノ營養研究」なり、此他論著夥多。學者肌の人にして、年齒漸く不惑有五歳、學識、手腕共に圓熟して才氣益々發揮せんとする時に在り。猶春秋に富む前途は大に期待せらる。東京市神田區岩本町二二に住む。

菊池武彦

△日赤香川支部病院長として内外より多大の信望を博し、當地方診療界の爲め努力貢獻しつゝあるは菊池武彦博士なり。博士は岡山中學校、六高を経て、大正八年十一月京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手囑託、同九年十一月任同助手、同十年十一月任京都帝國大學助教授、同十四年五月依願免本官、同十四年六月京都帝國大學副手囑託、次で京都帝國大學醫學部講師となり、同年三月京都帝大にて學位を授與せらる、目下現職に在り。

△學位主論文は「家兎摘出心臓ノ「アドレナリン」ト「アセチルヒヨリン」並「ピロカルピン」トノ作用ノ相互干涉」にして、参考論文は、(1)蛙及ビ家兎摘出心臓ニ於ケル「アドレナリン」ノ作用ニ及ボス葡萄糖ノ影響ニ就テ、(2)亞鉛及ビ「アドミウム」ノ藥物學的研究(第一)急性中毒現象ニ就キテノ研究、(3)同上(第二)循環系統ニ對スル作用ノ研究、(4)同上(第三)滑平筋及ビ骨格筋ニ對スル作用ノ研究等、其他論著夥多。

△岡山縣小田郡笠岡町大字笠岡の人、菊池於菟太郎の男、明治二十六年生る。學究的年壯の紳士にして、賦性篤實溫厚、臨床家としての特質を備ふ。年齒不惑に入る三歳、手腕圓熟、最も活躍の全盛時に在り。高松市天神前四八に住む。

柴田博衛

△岡山市弓之町七二にて内科専門を以て開業せる柴田博衛博士は、京大派の名醫博にして、内科臨床家として錚々たるもの也。今や超然たる位地を占め堅實なる地盤を有す。氏は岡山縣邑久郡行幸村服部の人、柴田倉造次男、明治二十九年生にして、岡山縣立岡山中學校、第六高等學校第三部を経て、大正十年京都帝國大學醫學部卒業、爾來同學部内科教室副手、京都市立京都病院醫員に歴任して、宮崎縣立病院内科部長となる、大正十五年三月京都帝大にて學位受領、次で現地開業今日に至る。

△主論文は、(1)局所免疫ニ關スル知見補遺、(2)細菌ノ組織親和力ニ關スル實驗的研究の二篇にして、参考論文は、(1)「チフス」凝集素ノ膽汁内移行ニ就テ、(2)ステツプ氏ノ所謂「チフス」中間排菌者ニ就テノ疑義、(3)「チフス」患者膽汁ノ分割的細菌検査、(4)急性傳染病患者膝液酵素ノ消長、(5)腸壁扶斯經過中ニ於ケル潜在性腸出血ニ就テ、(6)腸壁扶斯經過中ニ於ケル血液粘稠度ノ變化ニ就テ、等なり、其他論著多數あり。

△學究的溫厚の紳士にして、年齒漸く不惑に達し、少壯の霸氣に富み、獨特の手腕は壯熟して益々其の特技を發揮せんとする域に入り、努力勵精日も尙足らざるの意氣を示せり。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、折角の奮闘を望む

高崎文雄

△東京市澁谷區上通四ノ一〇に著名なる高崎内科醫院あり、院長高崎文雄博士の經營にして、開



業拮据十年餘に垂んとし、多年聲望を扶植し、今や堅實なる地盤の上に、打診の好評と相俟つて益々人氣を吸収し悠々たる位地に在り。略歴より言へば、博士は大正二年金澤醫專を卒へ、直ちに同校醫化學教室に入り醫化學を専攻し、同三年滿鐵奉天醫院内科に入り、同八年南滿醫學堂講師を命ぜられ、同十三年迄内科學を擔當せり、それより京都帝大清野教授の研究室に入り血清免疫學及細菌學の指導を受け研究に従事す、昭和二年六月京都帝大にて學位を受領す次で現住所に於て内科専門にて開業今日に及ぶ。

△學位主論文は「細菌凝集反應ニ及ボス色素ノ影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)網狀内皮組織系統機能異種赤血球貧食作用トノ關係、(2)二、三水溶性「カンフル」製劑並ニ「コラミン」ノ細菌發育ニ及ボス影響ニ就テ、(3)浸、滲出液ノ結氷點測定ト及ビ浸、滲出液穿刺前後ニ於ケル尿ノ結氷點測定トノ關係ニ就テ、(4)結核菌蛋白ノ沈澱元性ニ就テ、外三篇あり、其他論著夥多。

△大阪市東區空堀通三丁目の出身、明治二十一年生にして、當年不惑に入る八歳、學究的濃厚の紳士也。内科臨床家として立ちて以來、多年の經驗を踏み、臨床に堪能にして今や手腕圓熟の佳境に入り、徳操の修養と相俟つて一段の貫祿を備え、最も重望せらるゝ時代に在り、氏の得意や想ふべき也。讀書家にして今猶研究を捨てず、趣味としては紀行文、傳記、歴史物を特に愛讀す、時に又旅行を樂しむ。

◇ 豊島順吉

△京都帝大醫學部講師として松尾内科に新進の豊島順吉博士あり。京都帝大醫學部(大正十三年)の出身にして、内科を以て立ち、昭和三年七月母校より學位を獲得せる少壯醫博也。學位論文は「リチン」免疫ニ關スル知見補遺」にして、教授松尾巖博士指導の下に完成せるものなるが、今猶恩師に師事して研究に没頭しつゝあり、總て展開せんとする前途は大に囑望せらる。

△博士は本年(昭和十年)二月たま／＼自分自身の胃潰瘍のために研究を始め、獨國ストラスブルグ大學ワイス、アロン兩教授が動物實驗の結果により人工的に「アミノ」酸を作つて胃並に十二指腸の潰瘍に與ふれば治癒することを發見したるを知りたる博士は、爾來この「アミノ」酸の投與により何等の食餌療法も要せず、博士自身の難病のみならず、約五十名を完全に治癒することを得、これに依つて胃潰瘍のみならず、胃痛患者も減少させることが可能となり、學界の注目を引き、全國數萬の同病患者に新しき光明を與へたるは特筆すべきを要す。

△氏は秋田縣河邊郡新屋町の出身にして、明治三十二年生、年齒未だ三十有七歳、學究的少壯の紳士也。學者肌にして熱心なる研究家を以て知られ、今は母校の教壇に起ちて學生指導の傍ら、恩師指導の下に胃潰瘍の新療法に關する研究に没頭し、業績の發表と共に實驗上の研鑽に努力勵精日も尙足らざるの概あり、聽て該療法が氏の研究の進行と共に一般診療界に普及實施せらるゝの日を期待せらる。切に自重加餐を祈ると同時に、斯科界の爲め折角の精研盡瘁あらんことを。京都市岡崎町北御所町二〇に住む。

◇ 鈴木正彦

△名古屋市中區下茶屋町四二に鈴木内科醫院あり、院長鈴木正彦博士に就ての認識を得んとするも亦容易ならず。氏は愛知縣の出身、明治三十四年生にして、大正十二年愛知醫專卒業後、多年研鑽の後、學位論文「ワクチン」ノ研究」を完成、東京帝大醫學部へ提出して昭和五年十二月學位を獲得せり。自己の人物を過信する人か、或は謙遜家として然からしむる人かは知らざれども、自己の存在を公表するを避忌する風あるは、現代的臨床家として自己認識の不足ならずや、一言録して識者の批判を待たんとす。

◇ 日置陸奥夫

△金澤醫大助教授にして、兼ねて金澤市若松療養所長たる日置陸奥夫博士は、學系は東大派に屬



し、金澤醫大派の一勢力と見るべき内科界近來の少壯醫博にして、今や多年の蘊蓄を傾倒して金澤醫大の教壇に起ち學生指導の傍ら療養界の爲め自ら日々診療に直面して至誠公に奉じ、不斷の努力精進を續け大に將來に期する所あらんとす、而かも年齒未だ少壯にして常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、澁刺たる前途の大成は更に大に期待せらる。  
△博士は四高を経て、大正十五年東京帝大醫學部を卒へ、同年直ちに金澤醫大大里内科助手任命、昭和六年十二月論文通過、翌七年一月金澤醫大にて學位授與、同年五月金澤醫大助教任命、同年十二月金澤市若松療養所長囑託兼務今日に至る。斯間大里俊吾教授の指導を受け内科學を專攻せり、又細菌學の造詣深し。學位主論文は「脂肪代謝ニ關スル研究殊ニ組織脂肪ノ定量法ニ就テ」なり、其他の論著夥多。

△氏は金澤市の士族、明治三十六年生れの學究的少壯の紳士也。志操堅實にして、人と爲り穩健、寛厚能く學生を愛撫し、人を容れ又能く親しむ。研究以外の趣味としては謡曲と能樂を好む。將來有爲の學究として頗る春秋に富む、幸に健康にして益々精研活躍あらん事を望むや切也。金澤市味噌蔵町上中丁八に住む。

今川芳樹

△京都市上京區大將軍鷹司町三六にある今川内科醫院は、院長今川芳樹博士の經營にして、拮据艱勉、博士自ら診療に従事し日々刀圭甚だ多忙を極む、既にして牢乎たる地盤を獲得し、博士獨特の手腕は打診の好評と相俟つて益々人氣を吸収し、今や卓然として悠々たる位地を占む。氏は京大派（昭和四年卒業）の内科臨床家として知られ、學位主論文「燐酸「エステル」ノ「アルカロイド」酸類ニ就テ」を母校に提出して、昭和八年八月學位を得たる少壯醫博として名聲を馳せ、多大の信望を博す。

△氏は京都市の出身、明治三十六年生れの學究的少壯の紳士也。學生生活より離れて診療界に躍進以來日尙淺きも、努力主義をモットーとしての勵精振りは、氏が前途に光明を與へ、博士の將來を語るに餘裕綽々たるを想はしむ。氏

が趣味に就て言へば、三高時代柔道の選手として絞めが得意にて、一般からは今川絞めと稱せられ、試合の時は相手より強敵として仲々恐れられたるものなりしと聽く、然し今はもう練習する暇もなきが如し。室内娛樂は餘り好まざる方なれども、新聞の政治記事を読むのと、浪花節を聞くことは最も好きな方なり。有爲の資に富む博士の前途や、多々益々努力を要するの切なるを思ふ著者は、幸に博士の健康を祈り、折角の健闘奮勵あらん事を、老婆心ながら切に望む者也。

的場克己

△三重縣桑名町立診療所長として名聲を馳せ、當地方診療界に於ける内科の新進大家として囑目せらるゝは的場克己博士也。氏は名古屋醫大派の名醫博中の最少年にして、内科を以て立ち、殊に胃腸科學及び醫化學の造詣深く、胃腸病科に關する領域を最も得意とす。母校の恩師朝川順教授及び河本禎助教授等に師事して多年研鑽する所あり、學生生活を離れて診療界に躍進以來、日尙淺きも、氏が不斷の熱誠努力と、博士獨特の手腕とは極めて評判を博し、大衆より信頼と尊敬とを以て迎へられつゝあり。

△氏は昭和五年愛知醫大卒業、直ちに同大學朝川内科教室勤務、次で名古屋醫大醫學教室副手、名古屋市生駒泌尿科病院醫員、鶴天學友會名古屋支部理事を経て、昭和八年五月以來現職に在り。斯間昭和九年二月名古屋醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「リパーゼ」ニ關スル知見補遺』にして、(1)唾液「リパーゼ」量ニ及ボス食物ノ影響ニ就テ、(2)前房水「リパーゼ」ニ就テ、(3)硝子體「リパーゼ」ニ就テ、(4)筋肉勞作ノ尿「リパーゼ」ニ及ボス影響ニ就テの四篇より成る。參考論文は「酵母製劑ノ酵素量ニ就テ」なり。他の論著中主要なるものとしては、(1)運動競技ノ尿「リパーゼ」ニ及ス影響ニ就テ、(2)唾液「リパーゼ」量ニ及ボス味覺ノ影響ニ就テ等を擧ぐべき也。



△感想に曰く「本年夏から私は禁酒を實行してゐる、來年からは禁煙をする豫定で目下準備中である、私は元來小心中に若くて醫家として甚だ未熟だから、之に依つてせめて自分の心神を常に平靜にし度い自分が常に平靜だと言ふことが若干でも自分の足りない所を補つてくれることと思ふ、こう考へることが自分の醫家としての自責を少しでも軽減してくれる様に思ふ、私の様な小心な男が醫者になつたこと自體が現在の私には重荷である」云々、以て博士の心境を物語り、其の爲人を窺はる。氏は三重縣宇治山田市河崎町、的場常右衛門の長男にして、明治三十八年生の少壯也。年齒未だ三十有一歳、研究心に富み霸氣満々たり、親分肌の所ありて義侠心に富み、能く人を愛し後進を世話す、従つて財的には損する所少からず。現在にては特筆すべき趣味を有せざるも、學生時代には陸上競技部選手、講話部員たりしが故にスポーツを好み、講演、寄稿を樂めり、大學に短歌會並樹を興し、雑誌「並樹」の同人たりしことあり、目下も時々筆硯に親しむ。河川海、江澄はペンネーム也。三重縣桑名町外堀に住む。

## 戸木田 菊次

△東京市中野區神明町五九に内科、小兒科を専門とせる戸木田醫院あり、院長戸木田菊次博士經營の診療所也。氏は東大派の内科學者にして藥理學の造詣深く、内科及び小兒科を以て立てり。氏の學歴より見れば七高を経て、昭和二年東京帝大醫學部を卒へ、泉橋病院内科入局、同六年より東大藥理學教室入室、同九年十一月母校より學位を受領せり。斯間林春雄教授及び田村憲造教授に師事せり。學位論文は「「デギリタン」葉末及其ノ製劑ノ力價檢定方法ニ就テ」なり、參考論文なし。

△氏は鹿兒島縣薩摩縣上東鄉村字舟倉の出身、明治三十五年生る。學究的臨床家として診療界に進出して以來、拮据黽勉、努力勵精日も尙足らず。今や堅固なる獨自の地盤を獲得して益々發展の進境に在り。業餘圍碁、乘馬、撞球を趣味す。將來有爲の資に富む博士の前途や洋々たり、折角の努力奮闘を望む。

## 平田 梅治

△東京帝大醫學部講師として内科學を講じ、兼ねて泉橋病院に勤務の傍ら研究に没頭しつつある平田梅治博士は、東大系の内科學者として錚々たるものにして、熱心なる研究家として知られ、研鑽多年、孜々として倦まず、聽て診療界に躍進せんとする前途の展開は頗る刮目に値し、將來有爲の資に富む少壯醫博の前途や大に期待せらる。

△博士は大正二年七月金澤第四高等學校入學、同五年七月同校卒業、同五年九月東京帝國大學醫科大學入學、同九年十二月醫學部卒業、同十年一月東京帝國大學醫學部副手囑託、附屬醫院勤務囑託、同十三年六月看護婦及看護法講習科醫囑託、同年十一月依願解囑託醫、同十三年四月大學院入學、同十四年四月同院退學、同十五年五月任東京帝國大學助手、同十五年六月東京帝大にて學位受領、引續き東京帝國大學醫學部講師として現職に在り、兼ねて泉橋病院に勤務す。

△主論文は「「コフエイン」屬及其複鹽ノ溶血系ニ於ケル抗溶血作用並ニ此等藥物ノ過敏症防止作用ニ就テ」にして、原著は獨逸文なり。氏は「コフエイン」屬及其複鹽は何れも溶血素に於て抗溶血作用を有する事實を確證したるを以て更に此抗溶血作用に就て詳細なる研究を遂げたるもの即ち本論文の骨子なりとす。參考論文は、(1)筋萎縮側索硬化症ニ屢々見ラル、赤血球増加ニ就テ、附血管收縮ト赤血球數トノ關係、(2)筋萎縮側索硬化病ノ統計的觀察ニ就テ等なり、其他論著夥多。

△博士は富山縣婦負郡八尾町平田松太郎の三男にして、明治二十六年生れの學究的少壯の紳士也。學究肌の眞面目なる學者としての熱心振は同僚の間にて皆稱する處、生來几帳面にして物事を粗雑にせず、意志強固にして物に動せず功名榮達に恬澹たり、人に對して親切にして能く學生の提攜に務む。著者は更めて博士の健康を祈り、益々精研努力



あらん事を望む者也。東京市麴町區中六番町二に私邸あり。

渡邊 健太郎

△東京武藏野病院(板橋區茂呂町)に神經、精神科主任として活躍しつつあるは渡邊健太郎博士也。博士は愛知醫專出身の神經、精神科學者として錚々たるものにして、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。博士は私立明倫中學校を経て、大正四年六月愛知縣立醫學專門學校卒業、直ちに縣立愛知病院第一内科に入り内科學研究、同五年五月同院診察醫補、神經精神科勤務、同七年五月診察醫、同十二月愛知縣立醫學專門學校囑託教員、同十一年七月愛知醫科大學病院診察醫、同十二年三月愛知醫科大學附屬醫院看護婦養成所教員囑託、同十三年五月愛知醫科大學助手、精神病學教室勤務、附屬醫院勤務、同年六月愛知縣立愛知學園々醫囑託、同十五年五月任公立大學助教授、高等官七等待遇、補愛知醫科大學助教授、同十五年七月醫學博士の學位を受領す。其後濱松市腦病院長たりしが、目下現職に在り。

△主論文は「非經口的ニ注入セル隣臟細胞ノ含水炭素同化作用ニ及ボス影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)精神病患者ノ空腹時ニ於ケル血液含糖量ニ就テ、(2)睡眠障碍及ビ夜間ニ於ケル血糖量變化ニ就テ、(3)甲状腺「レントゲン」(ラヂウム)放射ノ含水炭素同化作用ニ及ボス影響(種村式共著)、(4)「アドレナリン」ノ蜘蛛膜下腔注射ニヨル血糖量ノ變化ニ就テ(種村式共著)、(5)流行性感胃ニ續發スル「ナルコレプリー」様症狀ノ一例、(6)精神病患者ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ等なり。

△名古屋市西區上園町、渡邊義一の二男にして、明治二十三年生る、學究的年壯の紳士也。臨床家として經驗豊富、手腕圓熟、今は最も活躍の時代にして一段の貫祿を備ふ。

津野田 誠吾

△臺灣總督府臺中醫院長として多年臺灣診療界の爲め努力貢獻しつゝある津野田誠吾博士は、九州帝大派の一勢力と見るべき内科界の名醫博にして、臺灣診療界に於ける重鎮として囑望せらる。博士は明治三十六年第二高等學校卒業、明治三十九年東京帝國大學獸醫學科卒業、同年十月警視廳屠畜検査技師、同四十一年京都府技師、同四十五年六月依願免官、大正五年九州帝國大學醫科大學入學、同九年六月卒業、同年七月同大學附屬醫院小野寺内科副手、同十四年十二月被任助手兼講師、同十五年五月被任同大學助教授、同年九月學位を授與せられ、昭和二年依願九州帝國大學助教授を辭し、臺灣總督府醫院醫長に任ぜられ、目下現職に在り。

△主論文は「水銀劑ノ吸收ニ關スル實驗的研究」にして、二篇より成る。參考論文は (1)動物組織并ニ尿中水銀比色法、(2)「アルカロイド」ノ電氣的導入法ニ就キテなり。宮城縣志田郡古川町大柿十日町の出身にして、明治十二年生る。當年知命に入る七歳、元氣旺盛にして老大家の域に入り一段の貫祿を備へ、學究的臨床家としての人格者也。賦性篤實濃厚、謙讓にして人に篤く、親切能く後進を愛撫す、又克く應答禮を重ずる誠實の仁也。趣味は謠曲と音楽とを好む。臺中市臺中醫院長官舎に住む。

新井 寛治

△神奈川縣鎌倉大町八八八にて内科専門を以て開業せる新井寛治博士は、東北帝大派の名醫博にして、内科の大家と仰がれ大衆より多大の信望と尊敬とを受け、當地診療界に於ける一流の位地を占む。博士は栃木縣立栃木中學校、第二高等學校を経て、大正九年東北帝國大學醫學部を卒へ、直ちに同大學助手に任じ病理學教室に勤務、同十一年十二月助教授に任じ、同十五年三月官を辭し、同大學熊谷内科教室に内科學を修め、昭和二年四月磐城共濟病院長就任、同年六月學位を授與せらる、其後職を辭し現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「末梢神經ノ形態的生物學的性情ニ關スル研究、第一末梢神經ノ腦内移植(獨文)」にして參考論文は(1)動



物腫瘍ノ腦内移植實驗(獨文及邦文)、(2)人間ノ頭蓋内腫瘍ニ關スル研究(イ)——(ホ)、(3)内分泌腺ノ萎縮ニ關スル研究 第一、所謂「多腺性内分泌機能不全症」ニ就テ 第二、腦下垂體ノ高度萎縮、(4)稀有ナル泌尿器發育異常等なり、其他論著夥多。

△博士は栃木縣下都賀郡野木村大字野渡の出身にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達し、少壯の意氣益壯にして、多量の分別を有し今は最も活躍の時代に在り、好箇の臨床家として敬意を表し、茲に推獎す。趣味としては寫眞を好む。

### 神座 李蹊

△東京市赤坂區青山南町五ノ四五に神座内科醫院あり、院長神座李蹊博士の經營にして、開業拮据十有餘年に及び既に堅實なる地盤を有し、好評噴々の裡に繁榮を持續しつゝあり。博士は第一高等學校を経て、明治四十四年東京帝國大學醫科大學を卒へ、同四十五年一月より四月迄、同大學病理學教室に研究、後轉じて同大學産科婦人科教室に勤務、翌大正二年八月に至る、大正二年九月英領新嘉坡三五公司醫務勤掌し、同十一年八月に至る、大正十一年十一月東大附屬傳染病研究所研究生となり、同十五年三月に至る、爾來私立醫院開設、内科一般の診療に従事し今日に至る、斯間昭和二年七月東京帝大にて學位を受領せり。

△主論文は「加里缺乏要約ニ因リテ起ル哺乳動物及ヒ鳥類ノ脚氣様疾患、附加里劑ノ脚氣患者ニ及ボス治療效果(第三報告)」にして、參考論文は、(1)加里鹽類缺乏要約ニ因リテ起ル哺乳動物ノ脚氣様疾患、附加里劑ノ脚氣患者ニ及ボス治療效果、(2)右上(第二回報告)なり。其他論著夥多。

△博士は山梨縣東八代郡黒駒村大字下黒駒の出身、明治十八年生る。學究的年壯の紳士にして、壯齡當に知命に入る一歳、手腕圓熟の域を超越して氏が仁術に一段の貫祿を備え、今は成功の位地を獲得して最も得意の時代に在り。

### 原田 三代三

△東京市澁谷區大向通二三に内科専門を以て開業せる原田内科醫院長原田三代三博士あり、氏は大正十三年東京帝大醫學部の出身にして、内科を以て起ち、學位論文「腦損傷並ニ疾患が糖代謝及ヒ體溫ニ及ボス影響ノ實驗的並ニ臨床的觀察」を母校に提出して、昭和九年五月學位を獲得せる少壯醫博也。山梨縣の人、明治三十年生、年齒漸く三十有九歳なれば、少壯の意氣を以て起ち、自己の存在を社會的に認めしめ、正々堂々と大に活躍を要する時代ならずや、況んや未知の患者は博士に就ての認識を得んとする要望の切なる秋に於てをや、而かも氏が之を避忌する風の見ゆるは、現代的臨床家としては餘りに時代錯誤の感なき能はず、獨り博士のみと言はず、一言附して一部學者の反省を促すと共に、識者の批判を仰がんとす。

### 石田 稻男

△岡山縣笠岡町に石田内科醫院あり、院長石田稻男博士は大正四年京都帝大醫科大學の出身にして、開業の傍ら岡山醫大にて研究を重ね、學位論文「「カロチン」ノ家兎石灰新陳代謝ニ及ボス影響」を完成、岡山醫大に提出して、昭和九年七月學位を獲得せり。蘊蓄せる多年の經驗に光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放ち、今や圓熟せる手腕と相俟つて最も得意時代に在り。氏は岡山縣の出身、明治二十一年生る。當年不惑に入る八歳、益々元氣にして、一意専心「醫は仁術也」をモットーとして、唯だ誠實に親切に、日夜診療に努力勵精するを本分とし、他に何等の道樂も趣味も求めず、拮据匪勉、精力主義を以て一始する熱誠の仁也。多年の聲望を扶植して、今や悠々たる位地を占め、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、好箇の臨床家としての氏が本分とする所にして、猶春秋に富む前途の大成を待望せらる。



**古澤平作** △東京市世田谷區玉川町一九〇に目新らしき精神分析學診療所あり、新興せる精神分析學の先驅者として起る古澤平作博士の經營にして、分析治療室其他新裝せる内部の設備を整え、精神分析學を主治療となし神經症を中心としてその他の疾患を治療するを目的とせり。博士は東北帝大派の一新勢力と見るべき名醫博にして、斯科界の一生面を展開せんとする新人也。開業日尙淺きも、多年の蘊蓄を傾倒して博士獨特の手腕を揮ひ、精神分析に相應しき玲瓏たる檢診は、博士がモットーとする誠意誠實と相俟つて益々信望を博し、遠近よりの外來患者日々輻輳して近來著るしく發展の傾向を示し來れり、斯界の振興啓發上欣幸とする處にして、將來博士の力に負ふ所益々大なるを思ふ。

△博士は二高を経て、大正十五年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部精神病學教室に入る、昭和六年十月同大學助教授に任ぜられ、同年十二月埃國に精神分析學研究の爲め留學、主としてウキーン大學精神病學教授 Otto Pözl 及びウキーン精神分析學研究所、Ty Brand 教授指導の下に研究、同八年歸朝、同年六月東北帝大より學位を受領、同年九月精神分析學診療所を開設、今日に至る。斯間母校の恩師丸井清泰教授の指導を受けて斯學を専攻せり。

△學位主論文は「Eine sehifphrene Gesichtshalluzination」にして、參考論文は Alternierende ebarapter-n-Symptomennurse その他四篇あり。氏の論著中の「自我の研究（強迫神經症に見られたる魔術的身振に就て）」は博士會心の作にして、最も重要なものと見るべき也。

△博士は神奈川縣愛甲郡南毛利村船子、古澤鷹太郎の五男にして、明治三十年生る。學究的温厚の紳士にして、年齒三十有九歳の少壯也。若し余の如き社會的經驗少なき盲蛇におぢざる者が思ひ切つて物を言ふとすれば、もつと日本人が科學的的生物學的になりきることである、そこには進歩があり發展があり行きつまりがない、研究は如何なる場合をも一つの現象として突破さしてくれる」云々と、感想の一片を述べて大に氣を吐けり、氏が研究に對する熱心振りを察せらる。生來眞面目にして自家宣傳的の事を好まず、又巧言令辭を嫌ひ、自分を本當に知つて來る人を相手にし、どこまでも「誠」を求めて行く所に博士の長所あり、又一面には餘りに一人で事物を背負ひ込む質の人なれば、強ひて言へば或はそれが短所ともならんか。人に對し患者に接するには誠意誠實を以てし、親切を盡す所に徳を有す。専門以外には寫眞の研究に興味を有す。春秋に富む少壯醫博、幸に健康にして、斯科界將來の爲め益々奮闘あらん事を、著者は更めて翹望して止まざる者也。

◇

**中山 幹**

△多士濟々たる浪速診療界に於て、呼吸器病科及び消化器病科を標榜して躍進せる新進の大家として推獎すべきは中山幹博士也。博士は現在大阪帝大醫學部竹尾結核研究所員として勤務の傍ら、大阪市住吉區王子町二ノ三に自己經營の醫院を主宰し、中山内科醫院長として活躍する所あり。醫院は一般内科並に小兒科、レントゲン科設置、其他充實せる内部の設備を新裝せり、殊に呼吸病科及び消化器病科に最も重きを置き、親切と誠意、誠實をモットーとして、博士自ら診療に勵精努力し甚だ多忙を極めつゝあり。開業日尙淺きも、氏の熱心なる經營振りに伴ふ應待と、博士獨特の打診の好評とは、益々民衆の信望を博し、近來著るしく院務の發展を示し、日増繁榮の盛況を呈しつゝあるを見る。

△博士は東京慈惠醫大の出身にして、大正十二年三月卒業後、直ちに東京慈惠會病院内科勤務、同十三年七月鹿兒島市山下町中山胃腸病醫院勤務、同十五年四月鹿兒島市電氣局醫員囑託、昭和三年一月東京市麴町區内幸町胃腸病醫院勤務、同四年四月鹿兒島市學校衛生醫員囑託、同年九月大阪帝大醫學部管理竹尾結核研究所に研究員として入所、同八年四月大阪帝大醫學部に學位論文提出、同年四月大阪市北區堂島佐多醫院勤務、同九年四月學位授與、同年六月現住所に於て内科醫院開業現在に至る。斯間、佐多愛彦博士、高木喜寛博士、松山陽太郎博士、今村荒男博士、谷口腆二



博士、谷村忠保博士等に師事せり。内科一般を専攻し特に呼吸器病科及び消化器病科を最も得意とす。

△學位主論文は「弱毒結核菌ノ病原性ト免疫力(實驗的研究)にして、(1)強弱諸株結核菌病原性ノ比較研究 附、試獸ノ年齢ニ由ル感染病變ノ差異、(2)弱毒結核菌ノ免疫力ニ就テノ實驗的研究の二篇より成る。参考論文としては(1)乾燥結核菌塗布免疫試験(實驗的研究)、(2)結核菌ノ累積的血流内注入ニ因スル結核病變ト菌量トノ關係ニ就テ、(3)強毒及び弱毒結核菌ノ單獨接種並ニ混合接種ノ結果ニ就テ、(4)各種結核菌ノ二次的睾丸内接種ニ基ク睾丸組織ノ病變ニ就テ、(5)「ピリルビン」ノ生理的作用(其一)自家造血「ホルモン」トシテ作用スルヤ、(6)腦廻轉狀頭皮ニ就テ等あり。

△感想に曰く「現代醫學界に就いて何か感想を……との事だが別段とりたてて新しい感想もありそうでない。だが、今や世界何れの國に比しても、亦あらゆる學術部門の角度から視ても、わが醫學界ほどの地歩と、その眞剣さとこれが業績の偉大さとに於ては(勿論質的、量的兩方面を考察しても)斷然他部門の窺知、追従をさえもゆるさない豪勢ぶりである。然かも研鑽探究のメスは遂日眞摯なる學者の輩出により各分野を通じて愈々深遠なる生命の零圍氣が克明に剔抉されてゆく。目覺しくも、心強い、わが醫學界の姿ではないか」云々。

△鹿兒島市上荒田町中山誠助の長男にして、明治二十七年生る、年齒不惑に入る二歳、學究的溫厚の紳士也。讀書家にして、璞山をペンネームとし、精研修養相俟つて書見を唯一の趣味とす、又スポーツを好み、園藝にも親しむ。學究方面に對する熱心さは今も猶變らず、診療に熱誠克く勵精すると共に日も猶足らざるの概あり。性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、又自己の長所を誇らず、功名榮達には恬澹として、一意専心、唯だ仁術是れ天職なるを以て任じ、且又自己品性の陶冶に力め、古い短所の芽はつぶして新しい長所の發芽を求むることに努力するの人也。以て其爲人を窺はれ、學徳兼備せる醫博人物として敬意を表し、茲に推奨す。

## 木場 武雄

△帝都診療界に於て、内科殊に胃腸病の大家として木場武雄博士の噴々たる名聲を聞くや既に久

矣。博士の經營せる木場内科醫院は、現に赤坂區青山南町六ノ四二に結構高壯なる陣を張り、内科に相應しき内部の設備を整へ、博士自ら診療に勵精努力し日々繁忙を極む。博士は京大系の内科學者にして、内科界現代の權威京大教授辻寛治博士の愛弟子として知られ、大學院在學中恩師の指導を受くる所厚く、特に内分泌學の蘊奥を究め、所謂京大派の名醫博たるに恥ぢず。該博なる學識と共に多年實地の經驗を積み、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮し、特に其の最も得意とする胃腸病に至りては他の追隨を許さず、打診の好評は博士の溫厚篤實なる性格と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、既に獲得せる地盤は牢固として動かす、今や超然として抜くべからざる位地を占む。

△博士は鹿兒島縣立鹿兒島中學校、五高を経て、大正四年十一月京都帝大醫科大學を卒へ、同年十二月任陸軍見習醫官、熊本歩兵第十三聯隊入營、同五年七月任陸軍二等軍醫、補都城歩兵第六十四聯隊附、同六年六月補東京第一衛戍病院附、同七年八月西伯利事件從軍出征、同八年七月補陸軍士官學校附兼教官、同九年六月任一等軍醫、補姫路騎兵第十聯隊附(此間以別命同隊御在隊見習士官賀陽宮恒憲王殿下奉侍)、同年十一月大正四年乃至九年戰役の功に依り叙勳六等單光旭日章及金壹千圓を授け賜ふ、同十年九月依願休職被仰付、同年同月京都帝大醫學部副手囑託、辻内科勤務、同十一年三月同大學院入學、辻教授指導の下に内科學一般研究、同十二年九月豫備役編入、同十三年三月三高校醫囑託、同年十一月大阪遞信局醫囑託、同十四年二月京都帝大にて學位受領、同年同月大學院退學、同十五年五月日赤京都支部療院内科就職、昭和二年三月日赤京都支部療院長就任、同年八月日赤岩手支部病院副院長兼内科醫長に轉任、斯間大正九年五月陸軍士官學校に於て賀陽宮恒憲王殿下同校御卒業の際御紋章入ネクタイピン壹個御下賜、同年十二月姫路騎兵第十聯隊に於て賀陽宮恒憲王殿下陸軍騎兵少尉御任官の際御紋章入木杯壹個御下賜、昭和四年十一月依願日赤岩手支部病院副院長兼内科醫長を辭し、東京市にて開業今日に至る。



△學位主論文は「甲状腺機能ト胃腸運動トノ關係ニ就テ」にして、參考論文は、(1)甲状腺機能ト過敏症トノ關係ニ就テ、第一篇甲状腺機能ト過敏症「シヨツク」トノ關係ニ就テ、第二篇甲状腺機能ト過敏症血液像トノ關係ニ就テ、(2)甲状腺機能ト免疫體產生トノ關係ニ就テ(第一回報告)甲状腺機能ト「アレキシン」產生トノ關係ニ就テ、(3)甲状腺機能ト免疫體產生トノ關係ニ就テ(第二回報告)甲状腺機能ト人工免疫トノ關係ニ就テ、(4)「インシュリン」「アドレナリン」及ビ甲状腺「エキス」ノ別出腸管運動ニ對スル作用ニ就テ、(5)砂時計胃ヲ伴ヘル脊髓病ノ一例等なり。

△感想の一片を吐露して曰く「醫者といふ職業は他の商賣と違つて直接患者の生命に關係を持つ重大な任務のあること申すまでもない故に質の良き醫者を造つて貰ひ度い、金錢で入學試験が左右せらるゝやうな學校は無い方がいゝと思ふ、現代の醫學界に於て徒らなる大學の昇格が學生の質を悪くし延いて學問は別としても醫學博士の品位に低下を認めることは識者の唱ふる所のやうであるが、更に無定見なる醫專の再興への後戻りは國家試験の餘儀なきにまで至つて粗製惡質の事實を暴露してゐるのではあるまいか、而も試験に依つて振ひ落されたる、所謂非醫者の行動の社會殊に患者に對する影響を懼るゝのである」云々、以て博士の抱負の一端を窺はる。

△博士の出身地は鹿児島市西千石町にして、明治十九年木場休次郎の長男に生る。學究的温厚の紳士にして、年齒當に知命に達し、元氣旺盛、精力主義を標榜して日々診療に勵しみ、努力奮闘日も尙足らざるの概を示す。殊に臨床家としては學識、手腕、人格共に圓熟の佳境に入りて一段の貫祿を備ふ。若し夫れ其の性格を打診すれば、守愚不覺世途險、無事始知春日長とも評すべきか。一度び其の嚙咳に接せんか、態度悠々、應待殷勤、圓滿主義にて、春風駘蕩と云つた風の朗快さを懐かしめ、話題豊富相手の心理を掴んでかその言葉は心良イリズムとなり、自ら親しみを感じしむるの徳を有す。讀書家にして文學趣味の人也。

## 樋口助弘

△東京慈惠會醫科大學教授にして、内科的物療學の權威たる樋口助弘博士は、九州帝大派に傑出せる物療學者にして、母校の恩師高山正雄博士指導の下に血清化學を専攻して學位を得、後ち獨逸に留學するや、ラケール教授につきて物療學を、ホルツクネヒト教授につきてレントゲン學を研究して其の濫輿を究め、歸朝後助教を経て現職に就くや、其の濫輿を披瀝して熱誠克く學生の指導に當り、勵精恪勤相俟つて益々其の精彩を發揮する所あり。今や専門領域に於ける斯學の新進教授として學界に重きを爲し、獨り學内に於ける中堅たるのみならず、物療學界の爲め萬丈の氣焰を吐き、氏の躍如たる將來あるを語るに足る。現に日本レントゲン學會評議員並に幹事として、一面又此方面に活躍する所あり。

△氏の學歴及び閱歷を概括すれば、第六高等學校を経て、大正十一年九州帝國大學醫學部を卒へ、直ちに北里研究所に入りて秦佐八郎教授より細菌血清學の一般概念を授けらる、次で九大醫學部に轉じ高山正雄教授の元に血清化學を修めて昭和二年二月學位を受領し、次で獨逸國に留學して物療學及び、レントゲン學を専攻す、歸朝後再び九大醫學部に入り、金子内科教室に歸學して金子廉次郎教授に就き内科學を修む、昭和五年暮東京慈惠會醫科大學助教として赴任、同七年教授を囑託され物療學を擔當し今日に至る。斯間昭和九年第九回日本醫學會第二十九分科會(レントゲン學)の宿題報告を擔當して別記の論文を發表せり。

△學位主論文は「人ノ血球凝集素並ニ血球溶解素ニ就テ」にして、外に參考論文三篇あり(1)自家血球凝集素及ビ自家血球溶解素ニ就テ、(2)人ノ同種血球溶解素ニ就テ、(3)免疫反應ニ於ケル類脂肪體ノ意義等なり。他の論文三十數篇中最近のものを擧ぐれば(1)特發性食道擴張症、(2)小腸狹窄、(3)慢性蟲樣突起炎ノ「レ」線治療知見補遺、(4)「レ」線診斷隨錄、(5)醫學「レントゲン」學ノ用語統一ニ就テ、(6)以毒攻毒ノ症例ニ追加ス、(7)小腸狹窄殊ニ其「レ」線所見ニ就テ、(8)所謂 Cold Quartz 燈ニ就テ、(9)初期肺結核ニ於ケル病理解剖學的變化ノ「レ」線學的考案等々あり。又既發表中の



『蟲様突起ノ「レントゲン」學的研究』は宿題報告にして最も重要な一篇なり。

△新潟縣南魚沼郡湯澤村の出身にして、明治二十九年生る。學園を出で、以來、研學切磋、大學教授としてその今日ある生立は、既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なし。當年漸く不惑有二、思想健實、意氣揚々として研究心に燃ゆ。今は唯だ至誠以て醫學教育の爲に、自己の使命を果たさんとする熱誠の士にして、純真なる學究肌の紳士として高邁なる人格を備ふ。眞面目なる性格にして毀譽褒貶を意に介せず、自抑淡々、能く人と交はり、又能く學生を指導愛撫す。東京市澁谷區榮通一ノ三八に住む。

白木 武

△胃腸病の大家を以て自他共に許すところの白木武博士は、白木醫院を自ら經營して東京市豊島區巢鴨三ノ一に門戸を構へ、内科を専門とす。特に胃腸病科に至りては、氏の最も得意とする所にして他の追従を許さず、好評噴々の裡に年次堅實なる地盤を築き、前途の發展測り知るべからざるものあり。學系より言へば、氏は東京醫專出身の内科學者にして、長崎醫大より學位を獲得せる臨床醫博として錚々たるもの也。

△氏の學歴及び閱歷を概括すれば、大正七年東京醫專專門學校卒業、直ちに吳秀三博士經營の音羽養生所に勤務の傍ら、東大醫學部傳染病研究所等に通ふ、同八年秋南胃腸病院に轉勤の後、同十二年五月長崎醫科大學助手となり、淺田一博士に師事し、主として植物性神經系統の研究に専念す、昭和三年三月學位受領、同年十月上京佐々木秀一博士經營の生々研究所に入り、主として血清學方面並に植物性神經系統の研究に努め、旁々内科診療に従事す、同九年末辭して現住所に醫院開設以て今日に至る。斯間主として吳秀三博士、南大曹博士、淺田一博士、佐々木秀一博士の指導を受け内科を専攻す、特に胃腸病科を最も得意とす。

△學位主論文は「地下ニ於ケル死體ノ運命」にして四篇より成る。參考論文は(1)脚氣ノ本態ト交感神經(六篇)、(2)家

雞交感神經異常ト腸内壓ノ動搖、(3)家雞交感神經異常ニ際シテノ脈搏膝部反射及體温ノ動搖、(4)運動制限ノ家雞交感神經ニ及ボス影響、(5)脚結紮ノ蛙交感神經ニ及ボス影響、(6)酒精ノ植物性神經系ニ及ボス影響等六篇なり。就中「植物性神經系統」は氏が會心の著にして、最も重要なものと見るべき也。

△神奈川県中郡伊勢原町伊勢原三三五白木啓の次男にして、醫博白木正の兄也。明治二十七年を以て生れ、當年漸く不惑有四。顧みれば學園を出でて以來、臨床家として研學切磋、多年の經驗を積み、克く今日あらしめたるは克己力の強き人たるを想はしむ。今は年壯の意氣と共に手腕益々冴え、最も得意の時代にて、向上發展の全盛時に在り。湘山子と號し、文藝に興味あり。家庭には妻田鶴との間に一男一女あり。兄弟兩博士の健康と共に將來の幸福を祈る。

中村安雄

△長崎縣西彼杵郡瀬戸町一〇七に内科、外科を以て著名なる中村醫院あり、院長中村安雄博士の經營にして、醫員塚本陽一あり、レントゲン室、外科手術室其他内部の設備整ひ、數十人の入院病室を有し、當地方一流の病院として一勢力を爲す。氏は長崎醫專出身の錚々たる臨床家にして、内科、外科を専攻せるも、特に氏の最も得意とするは内科なり。嘗て母校の内科に次で京都帝大外科に學び、獨逸留學より歸朝後、長崎醫大醫學化學教室にて研究の結果、學位を獲得せる臨床醫博たるの名に恥ぢず、今や當地方診療界に於ける重鎮として氣を吐きつゝあり。

△氏の學歴及び閱歷より言へば、明治三十八年長崎縣大村中學校卒業、同四十三年長崎醫學專門學校卒業、爾後大正三年迄母校内科教室に於て内科學研究、次で同六年迄京都帝大醫學部外科學教室にて外科學研究、それより同十二年迄本籍地にて開業、同十三時獨逸國留學、昭和二年歸國、同年長崎醫科大學醫學化學教室にて研究、同三年以後本籍地にて開業、同三年四月學位を受領す。斯間長崎醫專教授田中民夫博士に内科、京都帝大教授猪子止才之助博士に外科、



同尾崎良純博士に薬理學、伯林ウイルヒヨウ病院ウオルゲムト教授に生化學、長崎醫大教授富田雅次博士に生化學の指導を受けた。

△學位主論文は「Über die Bildung der organischen Basen bei der Entwicklung des Eies,」にして参考論文には

- (1) Über das Verhalten der Lipuse und über Vorkommen von Phosphatase, Sulphatase und Carboxylase in der Haut.
  - (2) Über den Zuckerabbau in der Haut.
  - (3) Über den Zuckerabbau in Zentralnervensystem des Menschen.
  - (4) Beiträge zur Kenntnis der Natur des nach Einnahme von Chlorophyll in Urin auftretende Porphyrin
- の四篇あり。

△感想に曰く「近時醫學博士獲得者の數益々多くなりし事は眞に學界の慶事とすべし。以前には博士と云へば大臣對等に尊敬せられ、又憧憬せられた時代もある、今や其の博士の大洪水で聽て其數萬に達すべし、玉石混淆、其中から優秀品も劣等品の品分けも仲々容易のものではあるまい、博士人物批判亦難い哉である。近來は世人の博士に對する信頼は益々低下して來た、之その品質の低下にもよるならんも、博士と云ふ稱號が往々にして營業上に利用せられ一般を惑はす罪にもある事だ、博士たるもの各自々省せねばならぬ。博士としての人物たるや元より一世の碩學として、又病人を診療する權威者として學德兼備の人でなければならぬ事は云ふまでもない。「博士」は榮譽の象徴であつて營利の具に使用してはならぬ、勿論醫學博士數は今や一萬に達せんとす盛なりと云ふべし。やがて日本の醫師は博士を以て埋まるべし、追ては竹籤の整理と共にその居所もなくなる時が來はせぬか」云々。

△現住地たる長崎縣西彼杵郡瀬戸町の出身、醫師小島居逸民の二男にして、明治十九年生る、醫博小島居才吾の實弟也。學者肌の人にして研究心に富み、純眞にして眞面目なれば、研究室にてコック／＼作業する事には獨得の長所あり

醫師としては内科醫として一方にメスを持つ事は、又博士の博士たる特技なるべし。強ひて言へば、世事に疎く、或は交際下手の嫌なきか。讀書家にして又旅行を好む。家庭には妻久子との間に二男二女あり。



佐藤 小五郎

△松岳、ドクトル、メヂチーネ佐藤小五郎博士の經營にかゝる佐藤病院は、京城府永樂町一ノ二に在り、内科、外科、小兒科を専門とする私立病院にして、昭和七年新築成り、延坪一五〇坪、十室ベット二〇、X光線其他内部の設備完備す。院長外副院長、醫員各一名、看護婦數名等にて、日々遠近よりの外來患者輻輳し、病室常に満員の盛況を呈す。氏は愛知醫專出身の篤學者にして、嘗て獨逸に留學するや専らミュンヘン、ベルリン、インスブルツ各大學に學び、歸朝後京大教授清野謙次博士指導の下に血清細菌學を專攻し、京都帝大より學位を獲得せる臨床醫博として名聲を博せり。内科、外科、小兒科を專攻せるも、氏の最も得意とするは内科なり。

△明治三十八年愛知醫專卒業、直ちに縣立愛知病院診療醫補となり、翌年任診療醫官、翌年北越嵐溪病院院長就任、同四十一年渡鮮仁川府にて開業、同四十五年渡歐、専らミュンヘン大學にて研究後、ベルリン、インスブルツ大學等に學びミュンヘン大學にてドクトル號受領、大正四年仁川府仲町に病院開設、産婆看護婦養成所併置、同十年同地醫師會長二期重任、同十四年京都帝大教授清野博士に就て研究、昭和三年五月學位受領、同時に同大學に於て内科研究、同四年京城府本町二丁目に開業、同七年現住所に病院新築移轉す。斯間内地にては熊谷幸之輔、長松將之助、清野謙次、辻寛治、眞下俊一、松尾巖の諸教授、外地にては V. Tappeiner, V. Müller, V. Praunder, R. V. Angerer の諸教授に就て研究せり。

△學位主論文は「Haemolytische Komplement (健病、胎、妊娠)」にして、参考論文は(1)横紋筋特異性ニ就テ、(2)實驗的貧血時及ソノ恢復時ニ於ケル血液ノ變化並ニ補體ノ消長 (3) Subcutane Bauch Contusion mit quetschung des milzleies



(4)溶菌性補體ノ研究、(5)凝集價ト Complementニ關スル知見補遺(ちふす、ばらちふすABC)(これら、赤痢、白色黄色葡萄球菌)、(6)網狀織内皮細胞ニ關スル知見補遺、(7)鐵劑ノ血液及血清ニ及ボス影響等なり。  
△福島縣本宮町に本籍を有し、明治十年須賀川町に生る、鈴木俊安の五男にして、代々醫を業とする長兄佐藤玄忠の家督を相続す。一開業醫より發奮して、常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、終に興學の素志を貫徹して克く今日あるをあらしめたるは、立志傳的頂門の一針として可也。高齡今や耳順に達し、元氣旺盛にして、終始一貫、仁術の最善を盡す上に其の熱誠なること今も猶昨に渝ることなし。平生の行動、性格より觀て、學德兼備せる老大家として的人格者たるを首肯せしむ。松岳は其號也。盆裁を好み、草花を愛して業餘を樂しむ餘裕あり。家庭には妻イクとの間に一男二女あり、皆在學中なり。

## 柳橋元利

△仙臺市本荒町三に於て内科開業、特に呼吸器科を標榜してサナトリウム式設備を完備せる病室十二を有し、當地診療界の爲め多年努力精進しつゝあるは柳橋元利博士也。博士は明治三十九年仙臺醫專卒業直ちに軍醫となる、爾來十七年在職、其間滿洲勤務十二年に及ぶ。大正十三年秋田衛戍病院院長を最後として軍職を退き東北帝大醫學部熊谷内科に於て研究、昭和三年六月醫學博士の學位を授與せられ、同年七月以來現地に於て開業今日に至る。斯間主として東北帝大教授熊谷岱藏博士に就き親しき指導と薰陶とを受けたり。現に豫備陸軍二等軍醫正の印綬を帶び、從五位勳四等の位勳を有す。

△學位主論文は「免疫血清ノ溶血阻止作用ニ就テ」にして、外に(1)胸膜炎ニ關スル研究(患者七百人ニ就テ)、(2)「クローブ」性肺炎ニ關スル研究(患者二百二人ニ就テ)、其他合計九篇の論文を參考として提出せり。其の研究方面も、腎臟及呼吸器病に關する色々の種類に亘り居れり。

△感想に曰く「世相日に險惡、醫師亦其圈外に立つこと能はず、然れども何時の世と雖、理想の社會實現するものに非ず、安心立命こそ眞に理想安住の境地に外ならずと信ず」云々。

△秋田縣南館町の出身にして、明治十六年生る。其の今日ある學歴及び閱歷は氏が前半生史よくこれを語るが如く、殊に其の厚志篤學に至りては氏が面目の躍如たるものあるを想はしむ。多年軍醫界に活躍して幾多の功績を残せるは言はずもがな、臨床的實地の經驗を積み獨特の手腕を有す、特に其の最も得意とする呼吸器科に至りては自信を有し他の追隨を許さずとの評判也。壯齡今や知命に入る五歳、精力旺盛にして學識、手腕、人格共に爛熟して老大家の域に入り、多年の聲望と相俟つて超然たる位地を占む。讀書家にして精研今猶卷を離さず、又克く品性の陶冶に努む。家庭には妻、長男は醫師、熊谷内科に研究中、他に一男二女あり。

## 中條資俊

△在青森縣東津輕郡新城村大字石江第二區癩療養所北部保養院々長從四位勳四等中條資俊博士は明治四十三年以來、不斷の努力と熱誠とを捧げて、終始一貫、癩療養界の爲め奮勵貢獻する所あり、その多年の功績は言はずもがな、猶將來博士の活躍に待つもの更に大なるものを期待せらる。氏は千葉醫專出身の細菌學者にして、研鑽多年、特に癩の専門領域に就て實地の經驗を積み、嘗て歐米に留學するや、主としてライブチヒ大學病理學研究所長フツク教授に就て學び、歸朝後論文を慶大醫學部に提出して、學位を獲得せる名醫博たるに恥ぢず、今や癩の老大家にして斯界の權威として囑望せらる。

△學歴及び閱歷より言へば、明治三十四年千葉醫學專門學校を出で、母校附屬病院井上内科に醫員勤務、井上善次郎博士に就て二ヶ年内科研究、同三十六年内務省血清藥院技手に就職、同三十七年内務省傳染病研究所助手就任、斯間北里柴三郎博士に師事して研究、同四十三年第二區癩療養所北部保養院々長兼醫長に就任、大正十一年内務省より歐



米へ出張を命ぜられ、ライプチヒ大學病理學研究所に學び、同十三年歸朝、昭和三年六月學位受領、同九年叙勳四等授瑞寶章、同十一年六月叙從四位、以て今日に至る。

△學位主論文は「組織肥胖細胞ニ就テ」にして、參考論文は(1)流血中ニ於ケル癩菌ノ出現頻度ニ就テ、(2)先天性潜伏癩ニ就テ、(3)癩ノ血清學的診斷法ニ就テ、(4)初生兒癩ニ就テ、(5)「チャノクプール」ヲ以テセル癩ノ治療成績ニ就テ、(6)胎盤癩ニ就テ等なり。

△感想に曰く「我醫學の現代は明治や大正初年代に比べて大に潑刺味が無くなつたのは識者の信する處であり、又其筈であらうと言ふのは何と云つても我醫學の大は西歐殊に獨逸などに負ふ處で、明治年代に於ける西歐醫學の爆發的進歩、即病理、細菌、免疫、衛生學等の發展が他學科を風靡したのに引張られて筈を負ふものが續出し、従つて斯學界の新輸入の刺戟に躍つた時代も漸くにして過ぎた、即先進國に傑士なく加ふるに戰禍に疲れて醫學處でない中に却つて國際攻防に刺戟を受けて兵器科學に片進み勢ひ人命を司配する醫學も馳緩時代となつたものだらう」云々。

△本籍は山形縣米澤市西仲間町五五五二にして、明治五年其地に生る。學究的温良の老紳士にして、その今日ある輝しき博士の前半生史には、氏の面目の躍如たるものあるを憶はしむ。高齡今や耳順に入る六、嬰鑠として壯者を凌ぎ一意専心、癩療養の爲に自己を忘れて熱心奉仕し、以て自己の使命を果たさんとする處に、氏の尊とき生命あり光輝ある將來ありと云ふべし。謙遜家にして自己の識學を衒はず、自抑淡々、遠慮が過ぎるほどに思はれる。極めて嚴肅主義にして几帳面の方なれば、徹底的に物事を成遂げ飽迄も抛け度くない氣性なり。趣味としては盆栽を樂しみ、又繪畫を愛好す。家庭には妻はる、養子五六、婦千枝子の外二人の愛孫あり。親戚には竹田運次郎(甥)、大富英信(養子五六の兄)、平林幸郎(千枝子の父)、中條盛芳(義弟)等々あり。青森縣東津輕郡新城村大字石江北部保養院官舎に住む。

## 伊勢良男

△日本赤十字社山口支部病院長として多大の聲望を負ひ、常に此方面の治療に奮勵活動しつゝあるは伊勢良男博士也。氏は九大派の臨床醫博として錚々たるものにして、内科を専門とし、特に其の最も得意とする消化器病に至りては、多年の研鑽努力と相俟つて博士獨特の手腕を有し、打診の正確なることは既に定評ある如く、氏の温厚篤實なる性格と相俟つて益々人望を博し、今や鴻城刀圭界に於ける内科の大家として拇指を屈せらる。

△學歷及び閱歷より言へば、東京府立第三中學校、第三高等學校を経て、大正二年九州帝國大學醫科大學を卒へ、直ちに母校第一内科教室に勤務、教授稻田龍吉博士の指導を受く、大正六年より同十五年まで臺灣總督府醫院醫長として臺南醫院勤務、大正十五年より昭和四年まで九州帝大大學院學生として高山正雄、金子廉次郎兩教授指導の下にて研究、昭和六年三月學位受領、同七年より同十年まで高知病院内科長勤務、同十年十月日赤山口支部病院長に轉任、以て現在に至る。

△學位主論文は「實驗的肝臟機能障礙時ニ於ケル血液並ニ尿中ノ「ビリルビン」及ビ膽汁酸含有量ニ就テ」にして、外に參考論文二篇あり、(1)腸ノ試験的食餌ニ就テ、(2)常習便秘患者ニ於ケル腸ノ「レントゲン」線検査所見等なり。

△氏は東京市四谷區須賀町二四に本籍を有し、明治十九年伊勢錠五郎の二男として東京市に生る。學究的温和なる好紳士にして、眞面目なる臨床家に相應しき性格を備へ、圓滿なる人格者也。壯齡今や漸く熟すると共に、圓熟せる手腕は益々冴えて一段の貫祿を備ふ。而かも日新月歩の學術に心を寄せ、常に研究と醫療とに趣味を集中し、精研修養相俟つて醫道の本分を盡さんとする所に、氏の尊き使命あり將來ありと云ふべし。但だ道樂としては、時に暇を得れば圍碁を樂しむ位のものなり。家庭には妻、男子二人、女子二人あり。山口市伊勢小路に住む。



**劉先登** △北平國立北平大學醫學院に、内科學教授として劉先登博士あり。氏は九大系の内科學者にして斯學の御大小野寺直助教授の門を巢立ちたる愛弟子として知られ、恩師指導の下に、皮蛋の製造中起りたる化學的變化、食用としての價値を究む、就中皮蛋の細菌、蛋白質の血清學上に於ける性状、消化の難易、鹽類の含量及び皮蛋成熟する原因等に就いて研究の結果、榮譽ある學位を得、九大派の學流を汲みたる名醫博たるに恥ぢず、今や代表的内科學教授として獨り學園に重きを爲すのみならず、民國醫學界に於ける重鎮として氣を吐き、多大の期待を以て前途を刮目せらるゝ重要人物也。

△氏の學歴及び閱歷を概括すれば、東京宏文學院、第六高等學校（大正三年六月卒業）を経て、大正七年十二月九州帝國大學醫學部卒業、直ちに同醫學部副手囑託となり、同九年庫倫官醫院長、同十一年天津日本施療醫院長を経て、同十三年北平にて開業、同十五年國民革命軍總司令部軍醫處統計科上校科長、昭和二年南京市立鼓樓醫院内科小兒科主任、同三年九州帝國大學醫學部附屬醫院醫員、同醫學部副手囑託、同五年九月河北大學教授、同六年八月北平國立北平大學醫學院内科學教授となり、同六年十二月九州帝國大學にて學位を授與せられ今日に至る。

△學位論文は「皮蛋ノ研究」が主論文にして「臍形ト左利」が參考論文なり。

△氏は中華民國湖北省宜昌縣の出身、劉壬林の次男にして、明治二十一年（前清光緒十四年）生る。賦性純真にして高潔、志操堅實なる學者肌の人にして、民國を代表すべき立派なる學究的紳士としての人格者也。その今日ある氏が華々しき前半生史を緝けば、氏が面目は躍如として其間に一貫し、壯齡今や熟して當年知命に達す。精力家にして、濼刺たる研究心に燃え、深遠なる學識と、圓熟せる手腕とを以て學壇に起ち、學生指導の爲め諄々として説き、熱あり力ある眞面目なる態度はよく學生間に感激を興へ、常にその人格を敬慕せしむ。春秋猶豊富にして、希望に滿つ前途洋々たるの秋、民國醫學界の爲に切角の自重加餐を祈ると共に、民日醫學の親善提携上、一層の努力盡す。率あらんことを翹望して止まざる也。北平宣武門内後王公廠甲八號に住む。

### 名越猛熊

△帝都診療界の中樞にして、醫院割據の環境たる神田區九段坂下俎橋際に名越診療所あり、名越猛熊博士の經營する私立醫院にして、内科、産婦人科、泌尿器科を標榜して専門の領域を明かにし、病室、産室其他内部の設備完全に成る。博士は醫術開業試験出身の篤學者にして、暫く靜岡縣に開業、村醫校醫として地方衛生に盡す所ありしが、後ち傳研にて研究の結果、東京帝大より學位を獲得せる年壯の名醫博也。診療界に躍進して以來、拮据開業漸く四年を閱するに過ぎざれども、「醫は仁術也」をモットーとしての氏が熱誠努力と、多年經驗に富む獨特の手腕とは、診療手術の好評と相俟つて益々民衆の人望を吸収し、年次繁榮と共に牢固たる地盤を築きつゝあり。

△氏の學歴及び閱歷より觀れば、徹底的臨床の人にして、中學卒業後、鹿兒島市赤星外科産婦人科病院に勤務すること七年、大正元年上京、栗本又五郎博士に就き内科研究、同五年警視廳檢疫委員、靜岡縣衛生課囑託を経て、靜岡縣に内科開業、同十五年上京、傳染病研究所講習を経て、同研究所第二病棟に入り、昭和六年一月東京帝大醫學部に論文提出、直ちに泉橋病院産婦人科に入り、後日本橋區濱町更生診療所産婦人科主任となり、同七年三月學位受領、同八年十一月現住地に開業今日に至る。専攻は内科、産婦人科にして、特に呼吸器を最も得意とす。斯間主として赤星雄熊、栗本博士、宮川教授の指導を受く。

△學位主論文は「ヱイタミン」缺乏食餌ヲ以テ飼養セル固有宿主(犬)ニ經口的及び經皮的ニ感染セル犬十二指腸蟲仔蟲ノ運命ニ就テ」にして四篇より成る。外に參考論文として「リグラ」裂頭條蟲の蛙體及び廿日鼠體内ニ於ケル移行徑路ニ就テ」の一篇あり。

△感想に曰く(一)研究室を出ると、新らしき醫學的出來事に對して一層敏感度を増す事。(二)臨床も貴重であるが、



凡ゆる臨床醫學を基礎醫學に根底を置かざれば何等の價値なき事。(三)訪問市井の一醫人より研究三昧が愉快であら  
一、又基礎醫學の發達は臨床醫學隆盛の前提であつて、各教室に蝟集する醫人が多い程、他日には其治病の上に倍舊の  
段階を形作るものである。然し現今の豫備的臨床期間は如何に俊才逸足の徒でも少し短期間に過ぎざるか、吾人凡  
庸の徒としては内科十年、外科十年の年月を閑みする方が適確度を増すにはあらざるか。(四)醫業難の今日、今更醫  
業權擁護も日暮れて道遠し、吾人は郷里より各縣三人の選良を議會に送り、吾々同胞の生活基準に適合したる治療費  
を得て吾人の生活戦線を堅守せねばならない。而して豫防、衛生、診療之れに關する機構は醫學に關する限り醫者が  
やるべきが當然すぎる程當然であらう」云々。

△鹿兒島縣熊毛郡西之表町西之表の出身にして、明治二十年生る。縣下知覽の本家より分家して、十代華やかなりし  
六代迄の墓に詣で、は、四代の衰微に聊か鼓舞され、尾大振はざる境地を脱せんと、青雲の志を抱いて上京發奮せる  
氏が、その今日あらしめたる厚志篤學の跡は、歴然として氏が前半生史に輝き、頂門の一針として銘すべき也。漢籍  
に趣味を有し、顛川と號す。謙遜家にして街はず、恬澹として名利に拘泥せず、唯々學究的醫人として忠實ならんこ  
とを斯し、至誠以て終始一貫せんとする熱誠の士也。家族は六人にして一家圓滿也。

## 深澤 亥佐雄

△滿洲國牡丹江陸軍病院寧安分院長として滿洲野に活躍しつゝある陸軍一等軍醫深澤亥佐雄博士  
は、千葉醫大及び陸軍々醫學校出身の内科學者にして、千葉醫科大學佐々内科に於て内科學研究の結果、學位を獲得  
せる少壯醫博也。多年陸軍々醫界に精勤努力して至誠奉公の念に燃え、今やその蘊蓄を傾倒して特獨の手腕を自由に  
發揮し得る立場に在りて、日も尙足らざる奮闘振りを示し居れり。一面又日滿親善上與つて力あるは刮目に値す。  
△更に學歴及び官歴を概括すれば、大正十三年四月千葉醫科大學專門部卒業、同十四年八月陸軍々醫學校卒業、昭和

二年より同六年迄陸軍衛生部士官學生として千葉醫科大學佐々内科教室に於て内科學研究、同九年四月學位受領。斯  
間主として柏戸留吉教授、佐々貫之教授の指導を受く。大正十三年六月任陸軍三等軍醫、叙正八位、昭和二年四月衛  
生部士官學生として内科學一般研究を被命、同年八月任陸軍二等軍醫、叙從七位、同五年八月任陸軍一等軍醫、叙正  
七位、同九年四月滿洲事變の功に依り叙勳五等瑞寶章及賜金下賜、同十年八月叙從六位。斯間勤務としては歩兵第二  
聯隊見習醫官を振出しに、騎兵第十三聯隊、歩兵第二十七聯隊、錢二氣球隊を経て、東京陸軍糧秣本廠廠員として國  
庫食物衛生に寄與し、名古屋陸軍病院内科診療主任より渡滿現在に至る。

△學位主論又は「骨筋筋」ド「ス」ニ關スル研究』にして、(一)健人ニ於ケル手腕屈及伸筋ノ伸展抵抗測定ニ就テ(二)  
錐體外路性疾患ニ於ケル筋伸展抵抗測定ニ就テの二篇より成る。參考論文には(1)胸膜炎ノ治療法特ニ人工氣胸療法ニ  
就テ、(2)骨髓性白血病ノ脾臟摘出ニ就テの二篇あり。

△感想に曰く(一)日本は由來島國であつた、従つて大陸に國境を持つとなると勢ひ神經過敏になる、そのくせさて實  
際を見ると國境で不覺をとるのは日本許り、長嶺子事件でもその他でも損をしてゐるのはこちら許りだ、早々この點  
は成長したいものだと思ふ。(二)實業家や政黨者流の大臣もよいが袖の下で囹圄の人となる者が多い大臣や元大臣か  
らだけは斯ういふ人を出したくない。云々。

△氏の出身地は山梨縣北巨摩郡上手村四五〇にして、明治三十二年深澤佐吉の六男に生る。年齒未だ三十有九、少壯  
の意氣と共に研究心益壯にして、思想健實、報國の念に燃ゆ。今や多年の經驗と相俟つて學識、手腕、人格共に圓熟  
の域に達し、拮据勤勉、得々として奮闘活躍の全盛時に在り。人と爲り純真潔白にして謙讓禮あり、自抑淡々として  
人を愛し又能く後進に親しむ。山梨六郎はペンネームにして、スポーツを趣味す。家庭には妻及び二男二女と共に團  
圓の樂しみあり。夫人節子は三島中洲門下の逸才河野宇三郎の次女にして、京都第一高女在學中より大毎歌壇に女流



歌人の譽高く、歌集『たらちね』編著中なりと聽く。滿洲國濱江省寧安陸軍倉官に住む。

牧 有 義

△帝都私立病院中の一勢力たる瀧野川區西ヶ原の小峰病院に牧有義博士あり、内科、神経科の診療に精進して多大の信望を博す。氏は金澤醫學出身の秀才、銀時計組の一人にして、慶大より學位を獲得せる臨床醫博として其學識、手腕を認められ、研鑽多年、實地の經驗に富み獨特の手腕を有す。今や其の特技を自由に發揮して餘す所なく、氏の最も得意とする躍進時代に在り。

△顧みて氏の學歴及び閱歷を概括すれば、大正五年五月金澤醫學專門學校を首席にて卒業、卒業の際品行方正、學業優等に付銀時計を授與され、又病理學成績優等に付故小原芳雄獎學賞を授與せらる。自大正五年六月至六年五月同專門學校研究生として醫化學研究、其後富山腦病院、長谷川病院に勤務す、自大正十年一月至十四年六月王子腦病院勤務、神經、精神病學を修む、自大正十四年一月至昭和二年八月本籍地及び高岡市に於て醫術開業、昭和二年九月より財團法人小峰研究所、王子腦病院及び小峰病院に於て神經、精神病學を研究、昭和九年五月學位受領、現在小峰病院に勤務、内科、神経科を擔任し内科主任たり。専門は内科、神経科にして、斯間主として小峰茂之博士、齋藤玉男博士、植松七九郎博士の指導を受く。

△學位主論文は「ひきがへるノ諸臟器組織水素いおん濃度ノ季節的變化ノ觀察、並ニ溫度變化ノ之ニ及ボス影響ノ實驗的研究」にして、參考論文六篇あり、(1)精神病者の血液群型ニ就イテ、(2)ひきがへる(Burfo vulgaris formosus)ノ血液並ニ腦重量ノ季節的變化(川本信之、小峰茂三郎共著)、(3)A Psychiatric observation of late earthquake Catestrophe of Tokyo and its vicinity (S. Komine and A. Maki)、(4)微毒「スゴロヘータ」接種「マウス」腦ノ動物實驗的並ニ組織學的研究、(5)Hemiballismus ノ一例(三浦倍榮共著)、(6)へみばりすむすノ一例 特ニ之レガ病的生理學的ニ就イテ等

尙ほ氏の最近に發表せる論文には(一)「バセドウ氏病性精神病」、(二)「コカイン」妄覺病の二例、(三)「緊張性興奮を呈せる」ムコーズ「菌腦膜炎等あり。

△富山縣射水郡能町村吉久の人、牧宗平の二男にして、明治二十五年生る。當年漸く不惑に入る六、學究的温厚の紳士にして、高邁なる品格を備へ、眞摯なる臨床家として、終始一貫せんとする信念の下に奮闘活躍する所あり。生來眞面目にして誇張的の事を好まず、誠意誠實をモットーとして醫は仁也を以て本分とす。趣味としては研究と診療のもののあるのみ。家庭にはきの子夫人との間に三男一女あり、將來の希望に充ちて朗らか也。東京市瀧野川區上中里町一八四に住む。

箭頭 正 男

△滿洲國吉林省公署技正より昭和十一年七月二十三日付を以て濱江省公署技正に轉じ、目下濱江省に於て活躍しつゝあるは箭頭正男博士也。氏は南滿醫學堂出身の篤學者にして、内科特に結核を最も得意とし獨特の手腕を有す。又た細菌學の造詣深く、特に九州帝國大學醫學部細菌學教室戸田教授の指導を受け、「チフス」菌毒素に關する學位論文を完成し、滿洲醫大に提出して教授會審査の結果、學位を獲得せる少壯醫博として、今や滿洲醫界に氣を吐き、特に豫防醫學及び衛生界の爲め奮盡貢獻する所あり。

△氏の學歴及び閱歷を概括すれば、昭和二年四月奉天南滿醫學堂卒業、同年六月南洋廳醫員拜命、ヤルード醫院勤務同四年五月南洋廳醫員依願辭職、同時に愛知縣西加茂郡小原村にて醫院開業、同五年九月醫院閉鎖、同年十月滿洲醫科大學副手拜命、微生物學教室研究勤務、同八年九月滿洲醫科大學副手依願辭職、滿洲國吉林省公署勤務、同九年五月學位授與せられ現在に及ぶ。

△學位主論文は「チフス」菌毒素知見補遺」にして、參考論文は(1)結核菌類脂肪體ノ免疫ニ就テ、(2)結核菌毒素ノ研



究の二篇なり。氏の論著中「結核菌毒素ノ研究」は最も得意のものにして、他に(1)結核菌ノ抗酸性脱却ニ就テ、(2)結核菌體諸成分及死菌「ワクチン」ノ免疫學的研究所等主要なるものの外論著澤山あり。

△感想に曰く(1)滿蒙に於ける風土病研究機關の設立を要望し、(2)國立結核研究機關の設立を要望す。云々。

△氏は愛知縣瀬戸市北六一五に本籍を有し、明治三十五年愛知縣西加茂郡小原村に於て生る。年齒未だ三十有六、學究的少壯の紳士にして若き意氣に燃え、潑刺たる研究心を有し、何事にも眞劍にして誠心、誠意、誠實を以てす。人と接するに謙讓克く自抑して誇らず、淡々として己を虚らし、親切にして同情に富む、蓋し氏の性格の反映する所にして、醫務家に相應しき氏の長所と見るべき也。學究以外には旅行を趣味とす。家庭には妻鈴子(名古屋金城女子專門學校英文科出身)との間に長男正顯、次男基紹あり、平和にして朗らかなり。滿洲國濱江省公署警務廳衛生科に勤務す。

### 山田憲一

△兵庫縣有馬溫泉場(有馬町一〇〇五)に内科専門を以て有名なる山田内科院あり、院長山田憲一博士の經營にかゝり、開業拮据日向淺きも、内科専門醫院としての内部の設備と、なひ、氏が熱心にして全心全力を捧げての診療振りと、適確なる打診の好評とは、近時著るしく大衆の人氣を博し、遠近よりの外來患者日々輻輳するの盛況を呈す。學系より觀たる氏は、大阪醫大出身の内科學者にして、嘗て獨逸ブレスラウ大學にて研究の後、歐米各國を視察し、歸朝後大阪帝大醫學部にて研學の結果、學位を獲得せる臨床醫博として錚々たるもの也。

△更に學歴及び履歷を概括すれば、大正十五年三月大阪醫科大學卒業、同年四月同大學副手、同年十二月一年志願兵として歩兵第九聯隊入隊、昭和四年三月任陸軍三等軍醫、同年四月大阪醫科大學助手、叙正八位、同六年五月獨逸國ブレスラウ大學藥物實驗治療學教室に入り、ラーサー教授指導の下に研究、同七年十二月歐米各國視察歸朝、同年同月

大阪帝大醫學部副手、阪大總長楠本長三郎教授の指導を受く、同九年六月學位受領、同十年四月現住地にて開業、同年同月有馬尋常高等小學校々醫囑託、以て今日に至る。

△學位主論文は「ロダン」中毒機轉ニ關スル研究」にして原著獨逸文より成る。外に參考論文五篇あり(1)植物神經毒並ニ麻醉劑ニ依ル筋化學的現象(獨文)、(2)有脾並ニ別脾家兎ニ「メジノロセーヌ」(赤色骨髓製劑)注入ニヨル血液像ニ就テ、(3)神經系疾患ニ於ケル中間新陳代謝、(イ)健康人及ビ筋萎縮性側索硬化症ニ於ケル中間新陳代謝、(4)(ロ)フリードライヒ氏病及脊髓癆ニ於ケル實驗、(5)(ハ)進行性筋「ジストロフィー」症ニ於ケル中間新陳代謝等なり。

△感想に曰く「醫師自身の權威高上に努むべく、尙且治療する人もせらるゝ人も何等物質的不安なからしむるが如き治療法の案出を望む」云々。

△本籍は兵庫縣有馬郡山口村上山口八五一にして、明治三十三年生る。學究的濃厚なる少壯紳士にして、年齒未だ三十有八、學志を出で、以來、その今日ある氏の前半生史を顧みれば、眞摯なる臨床醫博として氏の面目を語るに充分なり。今は奮闘活躍の分別盛にて、漸く圓熟せる手腕は氏が最も得意の時代に入り、若き意氣と共に熱と力を以て自己の使命を果たすに汲々として餘念なし。氏の長所と見るべきは生來几帳面の人にして、常に能く整理して物事を整頓し置く良き癖あり。寫眞と切手の蒐集に興味を有す。家族は妻、男子三人、女子一人にて良家庭は靄々たり。

### 黒川均

△東京市神田區紺屋町四四に黒川醫院あり、内科を専門とし特に胃腸病を以て著聞す。院長黒川均博士は東北帝大(醫學專門部)の出身にて、慈惠醫大より學位を獲得せる内科界近來の名醫博にして、開業拮据既に十有七年に及び、堅實なる地盤は打診の好評と共に年々歳々繁榮をいや増し、今や超然として群を抜き成功の位地に在り。



△氏の學歴及び閱歷を略述すれば、明治四十年四月千葉縣立安房中學校入學、同四十五年三月同校卒業、大正元年東北帝大醫學專門部醫學科入學、同五年五月同醫學科卒業、直ちに東京市京橋區木挽町南胃腸病院勤務、同九年十二月同病院辭職、同十年四月現住所に醫院開設、同十五年四月泉橋慈善病院病理科に入學、昭和二年十二月同病院同科退學、同五年二月東京慈惠會醫科大學研究科入學、同九年一月同大學研究科修了、同年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は「數種内分泌腺製劑並ニ植物性神經毒ノ肝臟機能ニ及ボス影響」にして、外に參考論文として、(1)くろゝるめたん化合物ノ肝臟機能ニ及ボス影響、(2)くりくろゝる・とりぶろゝむ並ニとりよどめたんノ肝臟機能ニ及ボス影響、(3)數種めたん屬化合物ノ肝臟組織ニ及ボス影響、(4)脾臟ノ肝臟機能ニ及ボス影響、(5)めたん族化合物ノ抽出蛙心ニ及ボス影響等四篇あり。

△感想に曰く「十有七年間神田の一隅に於て一開業醫として専心患者の診察に當るのみ記すべき感想なきを遺憾とす」云々。

△千葉縣安房郡九重村黒川彌太郎の二男にして、明治二十七年生る。一開業醫として、群雄割據の神田にスタートして以來、既に十數年の歴史と共に今日の聲望を負ひ、牢乎として拔くべからざる地盤を築き上げたもの、成功と云はざるべからず、而かも其間臨床の傍ら學位を獲得せる不撓の精神と、不斷の努力に依りて克服せる研究の成果とは氏が仁術の精華を發揮する上に錦上更に華を添へたるの感あらしむ。當年不惑に入る漸く四、精力家にして今は最も得意の時代に入り、意氣揚々として常に醫務に精進し、刀圭多忙にして亦他を顧みるの暇なし、その今日あるも亦偶然ならざるを想はしむ。性來眞面目にして派手を好まず、懇篤にして謙讓の徳あり、その相應しき態度は臨床家にとりて賢明と云ふべし。

## 安井謙一

△京都市右京區嵯峨中山町三三に於て、結構大ならざるまでも、内科的診察並に治療を主とし理學的療法の設備を完成せる外、土地の關係上小外科手術の設備をも完成せる安井醫院あり、院長安井謙一博士の經營にして、開業拮据日向淺きも、孜々營々として氏が熱心なる經營振の眞摯なると、博士獨特の手腕による診療手術の好評とは、その今日あらしめたるものにして、繁榮歳と共に堅實なる地盤を擴大獲得しつゝあるを觀る。氏は京都府立醫大出身の新進にして、内科及び外科を以て立ち、特に得意とするは内科なるも、内、外科を通じて研鑽多年の經驗を有す。殊に京都帝大大學院在學中は、教授戸田正三博士指導の下に衛生學を専攻し、大學院卒業を以て學位を受領せる少壯醫博として氣を吐き、今や氏が最も得意時代に在るが如し。

△學歴及び閱歷を概括すれば、昭和四年京都府立醫科大學卒業、直ちに母校内科教室に勤務、翌五年九月更に母校外科教室に轉ず、同六年九月京都帝國大學大學院入學、衛生學教室に於て研究に従事す、同九年九月同上退學、母校外科に復歸す、同年十一月學位受領、同十年一月現住地に醫術開業す。斯間淺山忠愛教授及び飯塚直彦教授に内科を、望月成人教授及び横田浩吉教授に外科を、戸田正三教授に就て衛生學を専攻せり。

△學位主論文は「大腦ノ直接加熱ニヨル體溫調節力ノ變化ト其後遺症、並ニ鬱熱及ビ凍死ニ對スル甲状腺ノ影響ニ就テ」にして五篇より成る。參考論文は(1)熱痲痺(Hive Erschöpfung)ニ對スル甲状腺別出ノ影響、(2)甲状腺摘出ニヨル蛋白代謝ノ變化並ニ其加熱ノ影響、(3)鬱熱時頸動脈結紮ガ腦溫並ニ呼吸ニ及ボス影響ニ就テ、(4)血液中ノ炭酸瓦斯含有量ニ及ボス持續的加熱ノ影響等なり。

△感想に曰く「近時社會衛生思想の進化に伴ひ、醫師の立場は從來とは大に變化せり、従つて吾々醫師も亦世の進歩に遅れざる様、特に社會醫學の方面に理解を有せねばならない。疾病の診斷並治療の正確を期すべきは勿論であるが吾々の對照を患者のみに極限せず、進んで健康者に對する好指導者たらねばならない。即ち學校教育に於ける、又工



場内に於ける保険衛生に對し、更に廣くは國民全體の體力増進に常に關與すべき義務を有するものと信ずる」云々、三思傾聽すべき乎。

△氏は兵庫縣朝來郡生野町新町一二五安井喜一の長男、明治三十七年生れの少壯也。年齒未だ三十有四、若々しき意氣に満ち、思想健實にして潑刺たる研究心を有す。性來眞面目にして誇張的の事を好まず、一意専心、「醫は仁術也」をモットーとして誠實と親切とを盡し、又克く常に意を社會醫學上の指導に務め、以て健康増進上努力貢獻する所あり。業餘の趣味としては謠曲を楽しみ、カメラを好くす。家庭には良妻光榮ありて圓滿也。

平島今朝義

△宮崎市別府町一〇九に内科、小兒科、レントゲン科を専門として評判の平島内科あり、平島今朝義博士の主宰主營する私立醫院にして、専門に必要な内部の設備遺憾なく整ひ、博士自ら日々診療に精進して倦むことなく、其の眞摯にして熱心克く誠意誠實を以てせる態度と、博士獨特の手腕に待つ打診の好評とは、濃厚篤實なる性格と兩々相俟つて益々遠近の人望を高め、今や越然として當市一流の位地を占む。

△氏の學歴及び閱歷より言へば、大正六年新潟醫專卒業後、直ちに同附屬病院皮微科に入局し高橋明博士に私淑し、次で一年志願兵として熊本歩兵第十三聯隊に入隊、大正八年三月再び母校新潟醫專に歸り、第二内科助手を命ぜられ澤田教授の下に研究、大正九年八月故郷なる宮崎縣兒湯郡木城村に於て醫術開業する事十三年、再び京都帝國大學藥學教室に於て尾崎良純博士指導の下に研究する事三年餘、同大學小兒科教室及び市立宇多野結核療養所等に實地研究をなす、次で昭和十年三月醫學博士の學位を得て宮崎市に開業す。

△學位主論文は「培養組織ニ就テノ水銀劑ノ研究」にして、外に參考論文七篇あり、(1)「フィブルプラスチン」培養ノ生長ニ及ボス諸種「ナトリウム」鹽ノ影響並ニ此等藥物ニヨル該組織ノ形態學的變化ニ就テノ研究二篇、(2)「フィブル

プラスチン」培養ノ生長及び形態ニ及ボス醋酸鉛ノ影響、並ニ該藥物ノ蓄積作用ニ關スル實驗的研究、(3)「フィブルプラスチン」培養ノ生長及び形態ニ及ボス「ストリヒニン」ノ影響並ニ該藥物ノ蓄積作用ニ關スル實驗的研究、(4)興味アル部分的内臟轉錯症ノ一例、(5)肺微毒ノ治驗二例ニ就テ、(6)破傷風ノ治驗例ニ就テ、(7)日本人ノ包莖ニ關スル統計的觀察等なり。

△感想に曰く「醫師の過剰生産は相互の生活難を招來し、従つて醫師相互間の患者招致の競争を出現するに至り、従つて其下劣なる者に至つては種々の拙劣なる行動に及ぶものあるを観る、是が爲めに現代醫家の人格地位次第に引下げられ一般社會より次第に蔑視せらるゝに至る、たとひ蔑視せられざるも一般人の醫師に對する尊敬の念の無くなりしは實に慨嘆に堪へざるものなり」云々。

△出身地は宮崎縣兒湯郡木城村にして、明治二十六年粟田砂吉の二男に生れ、同村平島武男の養嗣子となる。臨床家に相應しき性格の持主にして、精研と修養と相俟つて常に自ら品性の陶冶に勉め、學究的濃厚の紳士として崇高なる人格を備ふ。學園を巢立ちて以來、その今日あらしめたる博士の前半生史を顧みれば、研學の精神に燃えたる克己心と堅忍力行の跡を偲ばしむるものあり、唯だ強ひて言はしむれば、或は決斷力に乏しき缺點なかりしか。今は唯だ忠實なる國手として醫道の本分を盡し、敢て競争の渦中に投ぜず、超然として天職たるを楽しみ、以て重き使命と爲す。讀書家にして水鳥又は鈴南と號す。謠曲と盆栽とを趣味す。家庭には養母、妻、三男、二女ありて、團樂裡は常に霽々たり。

矢島將雄

△名古屋市東山寮醫務囑託たる矢島將雄博士は、千葉醫專出身の錚々たる臨床家にして、内科及び皮膚科、性病科を最も得意とす。正六位勳五等にして陸軍一等軍醫(豫備役)の印綬を帶ぶ。經驗豊富にして、切磋



研學の結果、京都帝大より學位を獲得せる臨床醫博として其手腕、學識を認められ、今や老大家たるの域に達し、超然として一段の貫祿を備ふ。

△學歴及び閱歴より言へば、明治三十六年十一月千葉醫學專門學校卒業、大正四年九月陸軍一等軍醫にて豫備役に編入せられ、正六位勳五等の叙勳を受く、大正五年二月より昭和四年四月まで南滿洲鐵道株式會社職員に任命、大連醫院及び撫順醫院に勤務す、昭和四年十月名古屋市醫員を命ぜられ今日に至る、昭和四年十二月以降同十年一月迄名古屋醫科大學病理學教室にて研究す、同十年四月學位を授與せらる。此間主として名古屋醫大教授林直助博士、同木村哲二博士、同大庭士郎博士の指導を受く。

△學位主論文は「實驗的海狸塵埃吸入病肺臟ノ病理解剖並ニ是レト肺結核トノ關係ニ就キテ」にして、參考論文十篇あり、(1)家兎ニ肉腫ヲ移植シタルモノ、血液像ニ就キテ、(2)家兎移植肉腫ノ形體的所見及ビ Metastase ニ就テ、(3) *Astaria lumbrioides* ニ關スル一般研究 特ニ該蟲卵及ビ其發育孵化ノ實驗並ビニ該蟲體ノ毒素及ビ蟲體內ノ細菌ニ就テ、(4)十二指腸迄病變ヲ波及セシ腸「チフス」患者ノ屍體剖檢例 其他六篇省略。

△感想に曰く「毎年四月に開會せらるる醫學各分科會は今尙餘りにお祭騒ぎの感(遊山氣分、廣告氣分)あり、一層眞面目にする必要あらん。醫師會は開業難にして餘り廣告を必要とする、即ち個人診療所經營難あり、醫師過剩なり醫學校の取締りを嚴にして卒業醫師に對し國家より醫術開業の場所指定等をなす(醫業國營説)(衛生省建設の事)」云々。

△出身地は名古屋市中區廣路町大久手八八にして、明治十三年亡父矢島金一郎の長男に生る。眞面目なる臨床家として、終始一貫、醫師の本分を盡し、以て仁術の精髓を發揮せんとするが、氏の理想にして、又實行なり。素とノ氏は躬行實踐主義の人にして、忍耐力の強きこと人後に落ちず、何事も徹底的に成遂げずんば止まぬ所に長所あり。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、業餘常に讀書を愛し精研修養に餘念なし、時に暇を獲れば克く散歩して健康に注意す。親戚としては義兄に鹿兒島控訴院檢事正宮崎國吉、義兄に陸軍歩兵大佐(後備役)村手彦増、娘婿の伯父に名古屋市長大岩勇夫等を擧ぐべく、家庭にはまよう子夫人と長男將一(明倫中學卒業)及び澄子(十四歳)あり。名古屋市中區廣路町大久手八八に住む。

村瀬 一雄

◇名古屋醫大派の一勢力と見るべき新進の村瀬一雄博士は、名古屋市醫員として名古屋市中區廣路町大久手八八に生る。眞面目なる臨床家として、終始一貫、醫師の本分を盡し、以て仁術の精髓を發揮せんとするが、氏の理想にして、又實行なり。素とノ氏は躬行實踐主義の人にして、忍耐力の強きこと人後に落ちず、何事も徹底的に成遂げずんば止まぬ所に長所あり。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、業餘常に讀書を愛し精研修養に餘念なし、時に暇を獲れば克く散歩して健康に注意す。親戚としては義兄に鹿兒島控訴院檢事正宮崎國吉、義兄に陸軍歩兵大佐(後備役)村手彦増、娘婿の伯父に名古屋市長大岩勇夫等を擧ぐべく、家庭にはまよう子夫人と長男將一(明倫中學卒業)及び澄子(十四歳)あり。名古屋市中區廣路町大久手八八に住む。

◇名古屋醫大派の一勢力と見るべき新進の村瀬一雄博士は、名古屋市醫員として名古屋市中區廣路町大久手八八に生る。眞面目なる臨床家として、終始一貫、醫師の本分を盡し、以て仁術の精髓を發揮せんとするが、氏の理想にして、又實行なり。素とノ氏は躬行實踐主義の人にして、忍耐力の強きこと人後に落ちず、何事も徹底的に成遂げずんば止まぬ所に長所あり。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、業餘常に讀書を愛し精研修養に餘念なし、時に暇を獲れば克く散歩して健康に注意す。親戚としては義兄に鹿兒島控訴院檢事正宮崎國吉、義兄に陸軍歩兵大佐(後備役)村手彦増、娘婿の伯父に名古屋市長大岩勇夫等を擧ぐべく、家庭にはまよう子夫人と長男將一(明倫中學卒業)及び澄子(十四歳)あり。名古屋市中區廣路町大久手八八に住む。

◇名古屋醫大派の一勢力と見るべき新進の村瀬一雄博士は、名古屋市醫員として名古屋市中區廣路町大久手八八に生る。眞面目なる臨床家として、終始一貫、醫師の本分を盡し、以て仁術の精髓を發揮せんとするが、氏の理想にして、又實行なり。素とノ氏は躬行實踐主義の人にして、忍耐力の強きこと人後に落ちず、何事も徹底的に成遂げずんば止まぬ所に長所あり。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、業餘常に讀書を愛し精研修養に餘念なし、時に暇を獲れば克く散歩して健康に注意す。親戚としては義兄に鹿兒島控訴院檢事正宮崎國吉、義兄に陸軍歩兵大佐(後備役)村手彦増、娘婿の伯父に名古屋市長大岩勇夫等を擧ぐべく、家庭にはまよう子夫人と長男將一(明倫中學卒業)及び澄子(十四歳)あり。名古屋市中區廣路町大久手八八に住む。



の識學を衒はず、恬澹として毀譽褒貶に介意せず、至誠以て自己の職務に忠實を盡し、精研修養相俟つて、明日の療養界に待つあらんとする熱誠の士也。趣味としては讀書を唯一の樂しみとし、俳句を好くす。春秋猶頗る豊富にして前途益々有爲多望なるの秋、切角の自重加餐を祈るや切也。名古屋市南區龜城町三ノ一に住む。

**仲俣 謹一郎**

△北海道根室町大字松ヶ枝町二ノ十二に内科専門を以て著聞する仲俣病院あり、院長仲俣謹一郎博士の主宰主營する診療所にして、内科専門としての必要なる設備を整へ、博士自ら診療に勵み多忙を極む。「醫は仁術也」をモットーとする氏の眞摯にして熱心なる經營振と、博士獨特の手腕に俟つ打診の好評とは、遠近より蜚集する人望と相俟つて、繁榮歳と共に不動の地盤を築き、今や超然たる位地を占む。學系より見たる氏は、九大派の臨床醫博として大なる存在であり、内科を専門とし、特に氏の最も得意とする肋膜炎に至りては、多年の經驗に富み他人の追隨を許さずとの定評あり。

△學歴及び閱歷を概括すれば、長野中學校、第二高等學校を経て、大正六年九州帝國大學醫學部を卒へ、直ちに同學部武谷内科教室に入室、武谷教授指導の下に内科學專攻、同九年根室町有光病院内科醫長として赴任、同十五年現地に開業、昭和八年三月母校大學院に入學、同十年五月學位論文教授會通過、同年六月學位を授與せらる。斯間主として武谷廣教授、小川政修教授の指導を受けたり。

△學位主論文は「プロテオゾーム」ノ感染、治療及び藥物抵抗性ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文、(1)肋膜炎ノ豫後ニ關スル研究、(2)流行性感冒ノ凝集反應ニ就テの二篇あり。

△感想に曰く「醫師は故なくして患者の診療を拒むことを得ず」の條文は醫師法中より除いて貰いたいと思ふ。誰も故なくして往診に應じないものも無からうに、この名文がある爲めに時々善良な御醫者様のみが引つかゝつて氣の

毒な目を見ることを遺憾に思ひます。醫者だつて親戚の不幸又は婚禮に招かるゝことも自家に病人の有ることもあるから醫者自身の病氣以外にも故はいくらもあることせう」云々。

△出身地は長野縣上水内郡中郷村にして、明年二十三年仲俣理亮の長男に生る。當年不惑に入る八、多年の研鑽修養と相俟つて、學識、手腕、人格共に圓熟して一段の貫祿を備へ、元氣旺盛にて努力主義也。性來熱情家にて同情心に富み、少し憐ればく持ちかけられ、ば直ぐ信じてゲルドを出したがる性質なり、蓋し氏の長所にして時に或は短所ともならんか。溪秋はペンネームにして、文學趣味豊かなり、音樂を好み、聯珠は二段にて、又將棋を能くす。親戚には海軍々醫大佐神林美治博士(兄弟分)あり、家庭は俊子夫人との間に三男三女あり、子女孰れも學術優秀。夫人は美音の持主にして時々博士の伴奏にて獨唱す、途行く人も足を停むるとか。氏は又兄弟仲のよき人にて「弟妹のためなら千金又惜しからず」と云ふ主義なり。令弟曉夫は東洋大學卒業後横濱市役所に勤務中なりと聽く。病院には畑事務長以下拾名の職員あり、渾然一體、院内恒に春風駘蕩の感あらしむ、職員も皆、永年勤績のもののみなり、蓋し氏の性格の反映する處亦大なるものあるを想はしむ。

**宮崎 速雄**

△朝鮮木浦府昭和橋通に宮崎病院あり、内科を以て著聞し斷然頭角を抜く、院長宮崎速雄博士の經營に係り、副院長として鴨川知周博士あり。學歴及び氏が奮闘の跡を顧みれば、明治四十四年長崎醫專卒業後、直ちに母校内科教室に留まり、大正二年九月より朝鮮總督府鐵道局鐵道醫たりしが、同六年八月朝鮮鐵道の滿鐵移管と同時に滿鐵京城管理局鐵道醫となり、次で木浦鐵道病院經營者兼院長たり、然るに大正十四年四月滿鐵管理解消に付朝鮮總督府より改めて鐵道醫務を囑託せられ今日に至る、即ち鐵道に終始一貫せり。其間大正四年四月より向一ヶ年間、學術研究のため東京及京都地方へ出張を命ぜらる、翌年秋頃より木浦フランス病院長ドクトル、リーリングダム



と親交を重ね、彼に日本語を教へ、氏は英語醫學を學習しつゝ、智識を交換すること三年有餘に及べり。更に昭和五年六月より同九年十二月迄京城帝大醫學部病理學教室に於て、徳光美福教授指導の下に病理學を專攻し、翌十年六月京都帝大より學位を受領せり。昭和十年四月より鐵道醫務の傍ら宮崎病院を開設し一般診察に従事しつゝあるが、多年の經驗聲望と相俟つて、博士獨特の打診の好評は益々人氣を煽り、著しく發展の盛況を呈す。

△學位主論文は『血液殘餘窒素ニ及ボス腎臟「ホルモン」ノ調節作用ニ就テ』にして、參考論文五篇あり、(1)含水炭素新陳代謝ニ及ボス腎臟「ホルモン」ノ調節作用ニ就テ、(2)血液「コレステロール」ニ及ボス腎臟「ホルモン」の調節作用ニ就テ、(3)「カルシウム」代謝ニ及ボス腎臟「ホルモン」ノ調節作用ニ就テ、(4)心臟瘤ニ就テ、(5)膠腫性腦膜炎ヲ惹起セル眼網膜膠腫ノ一例等なり。徳光教授の所謂「ネフルホルモン」の研究に關する限りに於ては、氏の論文は先鞭的優越感を覺ゆるものなり。

△感想に曰く『僕には息子が一人ある、成る可くんば父の業を繼業せしめたいが可愛相だから思ひ切らう——其理由は、(1)修業年限が長くてしかも腦力と體力とを要する、(2)其割合に社會的地位の酬ひられない事、(3)何れの官邊に在るも伴食的左翼に居り、市井にありて勤嚴自重すれば門前雀羅を張り、所謂流行醫たらんとせば期間的卑屈に陥る。現代世相の然らしむるものとはいへ次の「ゼネレーション」は蓋し杞憂に堪えぬものがある。惟ふに生産過多と稀少價値の減退に因する所以か呵々」云々。

△氏は香川県高松市西濱町五三醫師宮崎政彌の養嗣子にして、明治二十年生る。學究的温厚の紳士にして、眞面目なる臨床家として多年鐵道界に活躍し、漸く圓熟せる手腕と不撓不屈の精神とを以て、今や正々堂々、自由に闊歩して獨自の地盤を擴大獲得しつゝあり、氏の得意や想ふべき也。意志強固の人にして、強きに向つて飽く迄屈せざる特質を有し、徹底的に成遂げずんば止まぬ方なり、蓋し氏が長所にして時には又それが短所ともならんか。想外と號して書道に堪能なり、又佛典並に漢學に興味を有し造詣する所あり。常に又品性の陶冶に志し、精研修養相俟つて、仁術の最善を期せんとするが、氏の理想にして又實行主義也。親戚としては義兄に倉敷中央病院副院長兼内科部長松原良一博士、義弟に香川県平井町松原病院長岡野雄吉博士、義弟に東京府北多摩郡小平村昭和病院長向井光次博士等を擧ぐべく、家庭には一男五女あり。

#### 木下政市

△神戸市林田區二葉町八丁目八一に内科を専門とする木下醫院あり、院長木下政市博士の經營にして開業古く、多年の聲望と共に牢乎たる地盤を有し、加ふるに多年蘊蓄せる博士獨特の手腕は益々其の特色を發揮して餘す所なく、好評噴々の裡に繁榮をいや増し、今や超然として抜くべからざる地位を占む。氏は日本醫學校の出身にて、醫師試験よりスタートとして研鑽多年の經驗を積み、克己研學の結果、京都帝大より學位を獲得せる迄の厚志篤學は、立志傳的臨床醫博として氏の面目の躍如たるものあるを語るに足る。

△學歷及び閱歷より言へば、明治四十五年五月日本醫學校卒業、大正二年五月醫師試験合格、同年七月より同四年六月迄私立病院に勤務、同四年七月現地に開業、昭和二年四月より翌三年三月迄日本醫科大學にて研究、大倉保次教授の指導により内科專攻、同六年十月より京都帝國大學醫學部法醫學教室に於て、小南又一郎教授の指導を受け法醫學研究、同十年七月學位を受く。

△學位主論文は「骨發育ノ法醫學的觀察」にして、參考論文は「學齡兒童掌指骨端化學核ノ左右的發育關係ニ就テ」外九篇あり。

△出身地は廣島縣安佐郡深川村下深川六〇四にして、明治二十一年木下榮次の二男に生る。一開業醫より發奮克く今日を成せる氏の閱歷は、既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。當年漸く知命に達し、元氣旺盛にし



て、一意専心、醫道の本分を盡すに餘念なく、今や圓熟せる手腕は益々冴えて一段の貫祿を増し、大衆より多大の信望を負ふて最も得意の時代に在り。氏は熱心なる信仰家にて、常に宗教に趣味を集中して自ら品性の陶冶に勉め、自抑淡々として人を愛し、親切と誠意誠實を盡し、以て自己の使命を完ふするに汲々として亦他事を顧みざる熱誠の士也。家庭には母、妻、嗣子(小學生)、甥(醫專學生)とありて朗らかなり。

## 平塚 隆

東京市杉並區阿佐ヶ谷五ノ一九に内科を専門とせる聖愛醫院あり、殊に胃腸病科、呼吸器病科、血行器病科を以て著聞す。院長平塚隆博士の主宰主營する私立醫院にして、極めて家庭的に相談相手になる程度にて助手も何も置かず、月末になればお禮として請求書に適當する返禮を受くるのみにて、極めて原始的なる醫院なれば、博士獨特の手腕と相俟つて大衆の評判良く、いや増す繁榮と共に堅實なる地盤を擴大しつゝあり。

△氏の學歴及び閱歷を概括すれば、大正十一年千葉醫學專門學校卒業、同十五年任陸軍三等醫、同年聖路加國際病院勤務、昭和二年より同七年まで東京慈惠會醫科大學病理學教室助手、同七年より現住所に於て開業の餘暇前記教室にて研究、同十年七月學位受領、同年十月より同十一年六月迄東京市結核療養所にて臨床研學を爲し、同年七月より加藤博士經營の結核療養所たる淨風園に勤務研究中也。斯間主として橋本寛敏博士指導の下に内科を、木村哲二教授指導の下に病理學を專攻し、特に呼吸器病科を最も得意とす。

△學位主論文は「肝硬變ノ統計的組織學的研究」にして、外に參考論文は、(一)肝臟ノ格子狀纖維ニ關スル綜説、(二)肝臟ノ格子狀纖維ニ關スル逐齡的研究、(三)レンネツク氏萎縮性肝硬變症ノ脾臟ニ關スル組織學的研究、(四)特殊食餌飼養ニヨルらつて前胃の腫瘍狀變化ニ就テ、(五)結核ノ臟器分布ニ關スル綜説、(六)結核屍ノ臟器内病變分布ニ關スル統計的研究の六篇あり。

△感想に曰く「自分は茨城縣那珂郡鹽田村に生れ祖父長益、父宗庵共に醫師にして幼時より醫家の薫陶を受けた譯であるが、父が自分が十二歳の時亡くなり經濟的にも精神的にも充たされぬ生活であり今日迄不遇と戦ひ殆ど苦學力行して來たといひたい程であつた。今より數年前聖路加病院橋本博士の助言により一般内科といふよりは呼吸器病科を選択する事を注意せられ、又單に治療にたづさはるのみならず精神的に働きかけるといふ意味から結核方面の研究を志し先づ結核屍の調査を始め、今春までに出來たのが前記結核に關する論文二篇である。目下淨風園に在りて比較的早期結核患者の氣胸療法を目標に於て研究しつゝあるが之は結核豫防上、又治療上内科醫家にとりて須要なる問題であると確信する次第であります」云々。

△氏は茨城縣那珂郡鹽田村大字長澤戸主平塚眞の弟にして、明治三十二年生る。一醫師よりスタートせる氏は、無一物にて研究を始めてより、その今日あるを得たるは只管木村教授の指導薫陶によるものとして常に感謝し、今後呼吸器病科を更に研究し、現代に於て比較的治療の手が閑却せられたる結核方面にて専ら活動せん事を期し、一大負擔を以て自己の天職と爲せり。一面又氏は熱心なる基督教信仰家にて「信仰は合理的な醫療をこぼつものでなく信仰は醫療を成就するものである、正しき醫療の上に、信仰を加へることは、鬼に金棒である、眞の信仰は凡てを完成させて餘りある」あるとの信念の下に、醫學の力と併せて信仰療法とを以て、仁術の本分を盡すことに堅き自信を持ち。睦じき家庭には妻節子との間に二男一女ありて平和也。

## 柴田 純一郎

△八幡製鐵所病院内科に柴田純一郎博士あり。九州帝大派の新進にして歐米に出張すること一年半、恩師小川政修教授指導の下に結核の免疫反應に關する研究をなし、母校より學位を獲得せる所謂九大系の學流を汲める新人物也。研鑽多年、實地の經驗と共に學理の深奥を究め、今は學識、手腕、人格相俟つて圓熟の域に入り、



特に博士の最も得意とする結核に至りては獨特の評判あり、多年の聲望と相俟つて多大の信望を博す。

△更に氏の學歴及び閱歷を概述すれば大正六年九州帝大醫學部を卒へ、小野寺内科副手を拜命し、大正九年八幡製鐵所病院囑託醫師となり、昭和三年製鐵所警官(高等官六等正七位)、同年四月歐米各國へ出張を命ぜらる、昭和七年高等官四等正六位に進み、昭和九年製鐵所民營と共に退官、製鐵所技師を拜命して今日に及ぶ、昭和十年醫學博士の學位を授與せらる。

△學位主論文は「結核ノ免疫反應ニ關スル實驗的研究」にして、(1) Untersuchungen über die Komplementsfindung und Tuberkulinreaktion mit dem HCG-Stamm im Vergleiche zu einem virulenten Tuberkulosestamm (2)「サポニン」加培養結核菌、強毒結核菌及び其「アルコールエキス」免疫血清ノ補體結合反應比較研究、(3)「サポニン」加培養結核死菌強毒結核菌及び其「アルコールエキス」ヲ以テセル家兔免疫血清ノ喰菌現象比較研究、(4) BCG 死菌、有毒牛結核死菌及び其「アルコールエキス」ヲ以テセル家兔免疫血清ノ喰菌現象比較研究、(5) BCG 生菌及び死菌免疫家兔血清ニヨル喰菌現象比較研究の五篇より成る。外に參考論文として(一)十二指腸蟲驅除ノ臨床的研究、(二)四鹽化炭素ヲ以テ爲セル十二指腸蟲驅除ニ於テ脂肪食ノ影響及び下劑投與ノ有無ニヨル効果ノ比較研究の二篇あり。

△出身地は新潟縣古志郡榎尾町の産にして、明治二十年生る、柴田正樹の長男也。學究的溫厚の紳士にして、臨床家として多年の經驗に富み獨特の手腕を有し、今は少壯の意氣と共に最も活躍の時代に在り。性來眞面目にして阿諛迎合を好まず、謙遜にして自己の識學を衒はず、淡々として己を虚うし、誠實と親切とを以て其の職務に勵み、以て仁術の最善を盡さんとするは、即ち博士の主義にして實行なり。テニス、植木草花、魚取り、旅行に興味を有す。八幡市高見町七丁目社宅に住む。

### 安原 俊郎

△千葉縣千葉郡陸村吉橋八一二に内科専門を以て開業せる安原醫院長安原俊郎博士は、千葉醫大派の新進にして、内科界現代の權威たる千葉醫大教授佐々貫之博士に就きて内科學を專攻し、母校にて學位を獲得せる少壯醫博也。學究生活より勇退して以來、診療界に躍進して獨立の舞臺に起ち、開業拮据日尙淺きも、熱心と勵精とを以て日々診療に勵しみ、誠實と親切とをモットーとして仁術の最善を期す。玲瓏たる打診の評判は極めて大衆向を以て迎へられ、近時著しく發展振りを示しつゝあり。

△更に氏の學歴及び經歷を略述すれば、静岡高等學校第一回の卒業生にして、昭和五年千葉醫科大學を卒業するや、直ちに同大學佐々内科教室に入り内科學專攻、昭和十年七月同大學にて學位を授與せられ、同年八月同教室を辭し現住地にて内科開業、今日に至る。

△學位主論文は「臑反射ニ關スル研究(前脛骨筋伸展反射ノ觀察、殊ニ共同長性測定ニ就テ)」にして、外に參考論文として「横隔膜神經捻除術ノ肺結核ニ對スル治療成績」あり。但佐々内科教室に於ては「臑反射ニ關スル研究」は既に他に三氏あり、氏の研究はカツコ内に其の内容を示せるものにして、氏獨特のものなり。

△感想に曰く「年毎に醫者の數は殖える、組合病院や、實費診療所やが各地に出來上つて行く、これからの開業醫には色々と苦勞が多くなる。患者にもあれやこれやと、醫者の選擇に苦勞するものが多くなつてゆくだらう。醫者ばかりでなく、患者にも苦勞の多い時勢になりさうにも考へられる。此の苦患の時代の開業醫の態度は? 生やさしい氣持では神經衰弱は必然、順にも逆にも「立處皆眞」の言葉も味得せねばなるまい。趙州和尚の「使得十二時」の境地も手に入れねばなるまい。醫者で坊主を兼業したら丸儲以上の儲。蓋し妙案と共鳴して下さる御仁はあるまいか」と。△氏は千葉縣東葛飾郡大柏村柏井、岡本竹之助の三男にして、明治三十五年生る。學究的溫厚の紳士、現下禪門の巨匠、飯田撫隱老師に參すること久しく、而も年齢未だ三十有六の少壯也。性來凡帳面にして一物と雖も苟くもせず、



眞面目にして阿諛迎合を好まず、居室に「慈心妙手」の一幅を掛け、「立處皆眞」を標榜して親切と誠實とを以て起つ、其の態度の眞摯にして誠實なる所に博士の長所を見る。氏の手腕と人格とを以てせば、今後の修養と相俟つて大いに前途の發展を期待せらる。「井蛙」はペンネームにして文筆に親しむの癖あり。

### 高田六郎

△吳海軍病院部員にして内科長たる海軍々醫中佐高田六郎博士は、大正五年千葉醫專卒業後、直ちに海軍に入り、軍醫中少尉時代に海外派遣艦の乗組として日獨戦争當時、印度洋方面に軍艦矢矧、最上が流行性感冒に襲はれたる折、死線を越えて努力活躍せり、越えて大正十年、十一年軍艦淺間にて世界一週の途路、病を得て以後海上勤務より遠ざかり、大正十五年海軍々醫學校高等科學生を首席にて卒業し銀時計を下賜せられ、續いて二ヶ年間内科学を同校に於て専攻、以後内科臨床の實際に経験を重ね、其の傍ら軍隊の結核に關する研究をなし、昭和六年軍醫中佐に進級、吳海軍工廠醫務部部員、吳海軍共済組合病院副院長を経て現職にあり、昭和十年八月千葉醫大に於て學位を授與せらる。斯間指導教授は杏掛海軍々醫學校教官、阪大今村教授にして内科を専攻し、特に内科臨床結核を最も得意とす。

△學位主論文は「集團的喀痰検査ノ研究並實施 附同法ニヨル發見結核患者ニ就テ」にして、外に参考論文として(1)海軍初年兵ニ於ケル「ツベルクリン」反應ト肺臟「レントゲン」寫眞トノ對照的觀察、(2)乳腺肥大ヲ伴ヘル男子ノ生殖器外脉絡膜上皮腫ノ一例ニ就テ、(3)平時ノ海軍兵脚氣ト結核、(4)肺臟「レ」線寫眞ノ毛髮線ト「ツ」反應トノ關係、(5)懸重力ニ關スル研究、(6)「ストロンゴロイデス」ステルコラーリス「症」ノ臨床的並ニ解剖的所見一例等六篇あり。

△感想に曰く「軍醫の生活は日常の診療に藥價とか報酬とかを考へずにはバスタを盡して從事出来る點が愉快だと思ふ。醫は仁術なりと云ふ意義が最も良く發揮出来る條件を具へて居るのだから後は自分の心掛け次第である」云々

と。

△出身地は茨城縣眞壁郡下館町にして、明治二十六年生る、高田正修の六男也。年齒漸く不惑有五、少壯の意氣益壯んにして潑刺たる研究心を有し、多年の経験と相俟つて學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、今は働盛にて最も活躍奮闘の時に在り。生來眞面目にして至誠奉公の念に厚く、謹直、忠勤の士として推獎するに吝ならざる也。孤松はペンネームにして俳句を能くす、運動に興味を有し庭球其他のスポーツを好む。家庭には妻、男子三人、女子一人あり、一家團樂の裡は朗らかなり。吳市東愛宕町六十四番地に住む。

### 西山正雄

△帝都診療界に於ける胃腸病科の一勢力たる、京橋區木挽町二ノ一七南胃腸病院に新進の西山正雄博士あり。氏は大正十四年日本醫學專門學校を卒へ、直ちに胃腸病科界の權威、南大曹博士の主宰主營にかゝる南胃腸病院に勤務、その間昭和二年一月より三月まで北里研究所にて微生物學及び傳染病學講習を修了、同八年南胃腸病院を辭し、千葉醫科大學細菌學教室に専攻生として入學、教授緒方規雄博士指導の下に細菌學を専攻、同十年四月卒業して南胃腸病院に復歸す、同年八月學位を授與せられ今日に至る。内科を専攻し、特に胃腸病を最も得意とす。研鑽多年の経験と相俟つて博士獨特の手腕を有し、今や其の特技を發揮するに自由の立場に起ち、打診の好評と共に内外多大の聲望を博す。

△學位主論文は「人及各種動物消化管ニ於ケル「スピロヘータ」ノ研究」にして、右論文の一部は之を獨譯して「獨逸醫學中央雜誌」に發表せり。外に参考論文として「膽石様症狀ヲ呈セル蛔蟲症ニ就テ」の一篇あり。

△感想に曰く「今後の我々は宜しく *Arzt und Mediziner* でありたい。又醫者の多數になれる今日、我々は互に徳義を重んじて醫師に與へられたる重大なる使命を完全に遂行したい」云々。



△出身地は千葉縣東葛飾郡川間村中里にして、明治三十五年西山正一郎の長男に生る。眞摯なる臨床家に相應しき性格の持主にして、學究的タイプの好紳士として英邁なる品格を備ふ。その今日ある閱歴は既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なく、年齒未だ三十有六の少壯にして、新進の意氣と熱と力とを以て、專念醫道の本分を盡すに餘念なく、拮据勤勉、精研修養相俟つて常に自ら品性の陶冶に力め、以て希望ある將來に大に期する所あらんとす。生來負け嫌ひの性有り、一度び思ひ立ちたる事は徹底的に成遂げすんば止まぬ質也。學究以外には語學の研究に興味を有し、運動としては大弓を好み心身を鍊る。春秋猶頗る豊富にして、前途一層の發奮努力を要するの秋、切角の自重加餐を祈るや切也。東京市王子區岩淵町一ノ三八五に住む。

### 大谷周一

△慶大派の新人にして、醫學博士界の先覺者故大谷周庵博士の次男たる大谷周一博士は、亡父の遺志を繼ぎて内科を専攻し、目下慶應義塾大學醫學部内科助手として研究に没頭しつゝあり。年齒未だ少壯にして研究心に燃え、新進有能の學究として、潑刺たる前途を囑目せらる。學歴及び閱歴より言へば、氏は昭和三年慶應義塾大學醫學部卒業後、直ちに聖路加國際病院内科に勤務し、橋本寛敏博士に就て新陳代謝方面の研究指導を受け、昭和四年九月母校の内科助手となり、爾來大森憲太教授指導の下に研究を繼續中なり、昭和十年八月慶應義塾大學より學位を受領せり。斯間主として指導を受けたるは西野忠次郎教授、平井文雄教授、大森憲太教授、加藤元一教授等なり。

△學位主論文は「基礎新陳代謝ト心臓ノ勞作ニ就テ」にして二篇より成る。參考論文八篇あり、(1)赤血球容積ト赤血球沈降速度ニ就テ、(2)血液量測定ニ就テ、(3)伊豫櫻井石風呂ニ就テ、(4)オリザトキシニン人體實驗、(5)バセドウ氏病ノ統計的觀察ト診斷及治療ニ對スル卑見、(6)運動選手ノ基礎代謝ト心臓勞作ニ就テ、(7)デルモグラフィーノ「ラテントツアイト」ニ就テ、(8)脊髓空洞症ノ症候群ヲ有スル一例等。その他論著の主要題目として研究せる業績は、(1)バセドウ氏病ノ沃度療法ノ意義ニ就テ、(2)バセドウ氏病ノ治療ニ就テ、(3)バセドウ氏病ニ對スル「ロレチン」ノ作用ニ就テ、(4)バセドウ氏病ノ食餌療法、(5)基礎代謝測定ノ價值ニ就テ、(6)血液循環ト血液量測定ニ就テ、(7)バセドウ氏病患者ノ呼吸ニ就テ等以下略。

△氏は東京市澁谷區南平臺町四六に本籍を有し同所に住す。故大谷周庵博士の次男にして、明治三十八年生る、北里研究所附屬病院長大谷彬亮博士の弟にして、滿州醫大教授瀨戸八郎博士の義兄也。眞面目なる性格にして、物に熱中し易く、例へば讀書中、又は何か思索中は他人が話かけても知らずにあることが多く、又徹底的に物事を成遂げすんば止まぬ方なり。學究以外の趣味としては將棋、寫真などを好む。親戚には京大教授清野謙次博士、大阪帝大助教授清野博士、高安病院長高安道成博士等何れも叔父に當る、家庭には一男一女あり。東京市澁谷區南平臺町四六に住む。

### 李永春

△朝鮮群山府外開井里に在る株式會社熊本農場慈惠診療所長として李永春博士あり。當農場は篤農家熊本利平場長の經營に係り約四千町歩の水田を所有す。所在全鮮中最も肥沃せる全北萬頃平野の中心地にして所屬小作人口約二萬を擁す。當診療所は昭和十年四月より熊本利平社長の特志により小作人生活安定の一助として設立せられたるものにして、小作人及び其の家族に對し一切無料診療を行ふ、診療所本部の下に四ヶ所の支所あり。博士は當所の開設以來當所長として就任し、「醫は仁術也」をモットーの下に勵精努力し、誠意誠實を以て患者に親切を盡し以て自己の天職なるを樂しむ熱誠の士也。

△學歴及び閱歴より言へば、大正十二年官立平壤高普を卒へ、一時育英事業に携はりしも後專檢を経て、京城セブラ



ンス醫專に入學、昭和四年三月卒業、約二ヶ年間同校生理學及び病理學助手を勤め、後黃海道公醫拜命、二ヶ年間開業、昭和八年四月母校病理學講師被命、尹日善教授指導の許に専ら病理學研究、同十年四月株式會社熊本農場慈惠診療所長に就任今日に至る、同年八月京都帝國大學に於て學位を授與せらる。斯間主なる指導教授はセブランス生理學教授 Van Buzsiki 博士、及びセブランス病理學教授尹日善博士にして、病理學を專攻し、内科を専門とす。

△學位主論文は「ニコチン」ト性「ホルモン」トノ關係ニ關スル實驗的研究」にして、原著英文、全五篇より成る。參考論文は十五篇あり、(1)朝鮮人女學生ノ月經初潮ニ就テ(英文)、(2)家兎あなふいらきしノ血糖量ニ及ボス影響ニ關スル研究、(3)朝鮮人肺活量研究(其二)中學校男女生徒ノ肺活量ニ就テ、(4)同上(其二)初等學校男女兒童ノ肺活量ニ就テ、(5)同上(其三)健康青年男子ノ肺活量ニ就テ、(6)ほるもんノ家兎血液像ニ及ボス影響(英文)、(7)人類腫瘍ノ動物移植ニ關スル研究、(8)類べらぐら症ノ一例ニ就テ、(9)悪性腫瘍ノ血糖量ニ及ボス影響ニ關スル研究、(10)いんしゆりんノ過敏症ニ及ボス影響ニ就テ、(11)健康朝鮮人ノ血糖量ニ就テ、(12)孤主性肋膜炎沈着症ノ一例檢例、(13)耳下腺黒色肉腫ノ一例(英文)、(14)朝鮮山間地方ニ於ケル反復種痘ノ善感率ニ就テ、(15)蛔蟲ニヨル腸閉塞ノ一例檢例等なり。

△感想に曰く「醫術の發達を期せんが爲には盛んに醫學の研究をせねばならない。我朝鮮に新醫學の入つたのは既に半世紀前の事であるが、今日實地醫業に携はる人は可なり多いが醫學研究に至つては全く心細い、半島醫人の一員として痛切に此感を深くする。農村衛生研究所、榮養研究所、結核研究所、癌研究所其他一般醫學研究機關の出現を希望して止まない、そしてどしどし若き學徒の研究熱の醸成を期したい」云々。

△氏の出身地は平南龍岡にして、明治三十六年李宗鉉の五男に生る。篤學者にして、熱心なる研究家を以て知らる、その今日あらしめたるは既に博士の閱歴よくこれを語りて餘蘊なし。而かも年齒未だ三十有五の少壯にして、滿々たる意氣と共に精研修養を怠らず、輝しき半島診療界のため將來大に期する所あらんとす。賦性懇篤篤實、臨床家に相應しき温良なる品格を備へ、學究的タイプの好紳士也。研究と醫業とに趣味を集中して亦他を顧みず、時に暇を得れば旅行を楽しむ位なり。朝鮮群山府外開井里に住む。

前田 孝雄

△廣島市幟町一六〇に新興の前田内科醫院あり、特に胃腸病科、呼吸器病科、レントゲン科を以て異彩を放ち其の特色を發揮す。院長前田孝雄博士は、長崎醫專の出身、長崎醫大より學位を獲得せる臨床醫博にして臨床的實地の實驗に富む、特に其の最も得意とする専門領域に就ては、學識、手腕相俟つて益々其の特技を發揮するの域に達し、今や好評噴々の裡に多大の聲望を負ひ、遠近よりの外來患者日々輻輳するの盛況を觀る。

△學歴及び閱歴より言へば、大正十二年長崎醫學專門學校卒業、同十四年九月開業、昭和七年四月長崎醫科大學藥理學教室副手となり、同九年六月同大學角尾内科學教室副手に轉ず、同十年九月學位を授與せられ、同十一年二月再び現住地にて開業今日に至る。斯間主として長崎醫大赤松教授、寺坂教授に就て藥理學を、同角尾教授に就て内科學を專攻せり。

△學位主論文は「Thymol 屬及び Carvacrol 屬諸種化合物ノ血壓呼吸ニ對スル作用並ニ Adenalin 血壓上昇作用ニ對スル之等化合物ノ反對作用ニ就テ」にして原著は獨逸文より成る。即ち Über die Wirkungen von Verschiedenen Verbindungen aus der Thymol- und Carvacrolreihe auf den Blutdruck sowie auf die Atmung, zugleich über deren Gegenwirkung gegen die blutdrucksteigernde Wirkung des Adrenalin 此れなり。外に參考論文六篇あり、題名省略す。

△廣島市幟町一六〇は本籍地にして、此所に住す、前田常次郎の二男にして、明治三十三年廣島市に生る。醫師としてスタートして以來の氏は、その最も得意とせる内科を標榜して、多大の希望と抱負とを以て臨床に起ち、幾星霜かの間常に學を鍊り腕を磨くに餘念なかりしも、而かも自己の進歩に慊らず、一度び醫業を廢して學究生活に入り、努



力研鑽數年の後學位を得、克己奮闘克く今日を成せる厚志篤學は、立志傳的にして特筆に値す。當年未だ三十有八の少壯にして、臨床家に相應しき性格を備へ、今は若き意氣と不動の熱意とを以て、仁術の意義を實現化する上にベストを盡し、以て尊き使命に向つて邁進努力しつゝあり。讀書家にして常に精研と相俟つて品性の修養に力め、時には撞球を楽しみ、煙草を嗜しむ。春秋猶豊富にして、前途洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。

竹村 榮

△京畿道立安城醫院長として活躍し、朝鮮診療界に重きを爲すは竹村榮博士也。學歷より言へば、昭和二年京城醫學專門學校出身の内科學者にして、卒業後、朝鮮總督府醫院第二内科醫務副手、京城醫學專門學校講師を経て現職に任ぜらる、昭和十年九月學位を授與せられ今日に至る。斯間昭和二年卒業後内科醫として診療のかたはら、昭和五年より京城帝國大學醫學部微生物學教室小林晴治郎教授指導の下に研究せり。氏が熱心なる診療振りと、親切丁寧なる博士獨特の打診の好評とは、兩々相俟つて民衆の信望を博し、同院の發展上經營宜しきを得、名實併せて名院長としての實績を挙げ其の手腕を認めらる。

△學位主論文は『所謂赤痢「アメーバ、チステ」排泄者ヨリ得タル四核性「チステ」ノ病原性ニ就テ』にして(第一回第三回報告)の一篇三冊より成る。外に参考論文九篇九冊あり、(1)「トリコモナス・カヱイヒ」(Trichomonas caviae Davaine, 1875)及「トリコモナス・ヴァギナリス」(Trichomonas vaginalis, Donne, 1837)ノ培養ニ就テ、(2)蛔蟲體腔液及ビニ・三藥物ノ蛔蟲卵發育ニ及ボス影響ニ就テ、(3)「エントアマーバ・ポーヴィス」(Entamoeba bovis)ノ形態並ニ培養、(4)我教室ニ於ケル外来及ビ入院患者五〇〇名ノ糞便検査成績、(5)過酸症、胃及十二指腸潰瘍ニ對スル硅酸「アルミニウム」療法ニ就テ、(6)田邊、千葉氏法ニ依ル「エントアマーバ・ギンギヴァーリス」ノ培養ニ就テ(共著)、(7)「エントアマーバ・ギンギヴァーリス」感染ノ統計的觀察並ニ培養「アメーバ」ノ「ニ・三藥物及温熱」ニ對スル抵抗力ニ就テ(共著)、(8)兵庫並ニ廣島兩縣下ニ於ケル赤痢「アメーバ・チステ」排泄者ノ可能的存在ニ就テ(共著)、(9)兵庫並ニ廣島兩縣下ヨリ龍山師團ニ入營シタル新兵士ノ糞便検査成績(共著)等なり。

△感想に曰く「内鮮融和をモットーとして親切丁寧に診療を實施せんとす」云々。  
△長崎縣對馬嚴原町字今屋敷六九四竹村忠作の長男にして、明治三十九年生る。年齒未だ三十有二、賦性穩健着實、眞面目なる學究的臨床家として、その今日あらしめたる醫學要素は、やがて將來を益々大ならしむる基礎たるべし。今は奮闘活躍の時代にて、活氣滿々、漸く壯熟せる手腕と撓まぬ熱誠努力を以て、一意専心、半島診療界の爲に精進盡力し、以て内鮮融和を期する上に貢獻する所あり。潑刺たる半島診療界の前途益々多望なるの秋、博士の力に俟つもの亦少からざるを想ふや切也。折角の健闘を祈る。朝鮮京畿道安城道立醫院官舎に住む。

佐野 龍雄

△新潟縣佐渡郡金澤村に保證責任利用組合佐渡病院あり、佐野龍雄博士は當病院長として終始活動し、多年の聲望、手腕と相俟つて大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあり。斯種病院中、當病院は當地方に於ける唯一の治療機關として善用せられ、斯道の爲に多年勵精奮盡しつゝある、博士の努力や甚だ多とすべき也。學系より言へば、氏は東京帝國大學醫學部出身の新進にして、内科を専攻し、昭和二年三月大學卒業以來、母校の吳内科に入局、教授吳建博士指導の下に研究に従事し、昭和十年十月學位を受領す。今や臨床醫博として氏が獨特の手腕は益々展び、至誠以て公に奉じ、仁術の本領を發揮するに最善の努力を捧げつゝあり。

△學位主論文は「顔面神經ニ關スル知見補遺」にして、二篇より成る。参考論文無し。  
△感想に曰く「私は東大卒業後十餘年間帝都で日を送つた。一昨年始めて農村に入った。而も特殊の組織と經營に據る病院を創めて見た。之によつて私は新しい且つ貴い經驗と體驗を得つゝある。吾々には醫術、醫療を普遍し且つ



徹底すべき任務と責任を負ふて居る。其が爲にはあらゆる階級の人々にもつと醫學常識の涵養を計ると共に更に大切なる事は患者の醫療費を考慮に入れなければならない。此の二つの點を良く具體化する事によつて一般の人々は從來よりも一層深く醫術の恩恵に浴する事を得、夫に醫學の先哲、大先輩にも聊酬ゆることが出来るであらうと思つて居る」云々。

△出身地は福井縣今立郡河和田村小坂にして、明治三十六年佐野龍藏の長男に生る。年齒未だ三十有五の少壯なれば意氣満々たる若さにて、今は貴とき體験と相俟つて、學識、手腕、人格共に漸く熟達の域に入り、至誠公に奉ずる信念の下に、醫術の恩恵に浴せしむべく全力を注ぎ、以て自己の天職たるを樂しむ熱誠の士也。賦性謹肅にして温情あり、謙遜にして尊大振なく、自抑淡々として人を愛する床敷き態度は其の人格を敬慕せらる。新潟縣佐渡郡金澤村に住す。

武田 健次郎

△山形市十日町四八六に内科を標榜して新規開業せる武田内科醫院あり、院長武田健次郎博士の經營にして、新築せる醫院は内外共に最新の設備を整へ、孜孜營々として博士自ら診療に勵しみ、正確にして懇篤親切なる診療振りは、博士獨特の手腕と相俟つて、好評嘖々の裡に著しく人氣を博し、開業日尙淺きにも拘はらず、繁榮と共に漸次堅實なる地盤を擴得しつゝある前途は頗る囑目に値す。氏は東北帝大派の新進にして、内科界現代の權威たる加藤豊治郎教授の直門として知られ、十ヶ年間恩師の指導を受くること厚く、今や少壯醫博としての學識手腕を認められ、診療界に躍進して以來、益々其の特色を發揮せんとする自由の活舞臺に在り、氏の得意や想ふべき也。

△學歴及び閱歷を反覆して摘載すれば、大正九年三月山形縣立山形中學校卒業、同十二年三月山形高等學校理科乙類卒業、昭和二年三月東北帝國大學醫學部卒業、直ちに東北帝國大學副手となり、醫學部加藤内科教室勤務、同七年

四月同大學助手に任じ同教室勤務、同十年十月學位を授與せられ、同十一年五月依頼同大學助手を免ぜらる、同年六月以來現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「尿生成ニ及ボス非等張鹽溶液ノ影響ニ就テ」にして原著獨文より成る。參考論文は、(1)健康及ビ病的毒腎ニ於ケルとりばんぶらうノ濾過並ニ再吸收ニ就テ、(2)尿排泄ニ及ボスえふどりんノ影響、(3)發熱ニ於ケル血液膠質滲透壓ノ状態ニ就テ、(4)健康及ビ壞死ねふろーゼ性毒腎ニ於ケル腎上皮細胞ノこんごーろーどニ對スル透過性、(5)健康及ビ病的毒腎ニ於ケル腎上皮細胞ノくれあちにんニ對スル透過性、(6)尿排泄ニ及ボス植物神經毒ノ影響、(7)甲状腺機能障礙家兎ニ於ケル水分分布ニ就テ等にして、原著は皆獨文より成れり。

△感想に曰く「過去の研究室生活と現在の生活を省みるとき醫學界の前途益々多難なるを痛感す。又曰く「診療は醫學者にして同時に良き醫者たるもののみにより始めて萬全を期し得らるとの言の益々適切なるを思ふ」云々と。△氏は現住地たる山形市横町二〇一の出身、武田健夫の二男にして、伯父莊三郎の醫業を繼ぐ、明治三十四年生る。年齒未だ三十有七、學究的濃厚なる少壯紳士にして、その今日ある閱歷は既に博士の前半生史にある如く、今や眞摯なる臨床家として立つ。新進の意氣と共に學識、手腕、いよゝ圓熟の域に入り、今は最も躍進向上の時期に在り、猶春秋に富む前途は洋々たるものあるを大に期待せらる。賦性穩健篤實、名利に恬澹として、一意専心、人事の最善を盡して仁術の爲に終始せんとす、以て其の高邁なる人格を察せらる。

黒田 靜

△日鐵八幡製鐵所病院副院長從四位勳五等黒田靜博士は、既に世人周知の如く、二十數年一日の如く、至誠一貫、扶植せる多大の聲望と相俟つて、勵精恪勤、今猶昨と渝らず奮盡努力しつゝある熱誠の士なるが、斯間産業治療界の爲め貢献せる功績は決して鮮しとせず、猶將來斯界の振興發達上大に博士の盡力に須つ所益々大なる



るものを期待せらる。顧みて氏の學歴及び閱歷より言はしむれば、明治四十年十二月京都帝國大學福岡醫科大學を卒業、直ちに同大學第二内科教室に入りて研究に従事し、同四十三年六月製鐵所病院副院長に轉じ、大正十二年二月より歐米に於ける産業衛生機關を視察し、翌十三年四月歸朝、昭和十年十一月九州帝國大學に於て學位を授與せられ以て現在に及ぶ。斯間主なる指導教授は九州帝大教授中金一博士及び同武谷廣博士にして、内科學を専攻し、特に産業の臨床病理學に多大の興味を有し深く造詣する所あり。

△學位主論文は「製鐵業附帶粉末加工工場ニ於ケル塵肺ノ衛生學的及び臨床的考察」にして、參考論文七篇あり、(1)胃運動機能ノ藥學的的研究(獨文)、(2)「トルオール」中毒動物ノ各臟器ニ於ケル配布ニ就テ(獨文)、(3)重工業ニ於テ高過ガ身體ニ及ボス影響ノ臨床的觀察、(4)製鐵業ニ於ケル腸内寄生蟲ノ統計的觀察、(5)本邦ニ於ケルなな縲蟲ノ補遺、(6)トムゼン氏病ニ就テ、(7)メニエール氏病ノ一例等なり。

△感想に曰く「非常時と云ふ辭は醫師にも醫學にも決して他山の石でない。現在の醫弊とは古人の志を繼ぐ者少く、西洋醫學に心酔した爲である。日本の醫者は昔から學德備つた先生、先覺者であつたが、今の有様はどうだ。醫は須らく醫道を奉ずる者であつて欲しい。醫學者も臨床家も共に醒めよ、私は大學と云はず、民間と云はず、學德兼備の醫人の續出を渴望して已まぬ」云々。

△出身地は和歌山縣那賀郡麻生津村にして、明治十四年故黒田虎之助の長男に生る。醫道の本分を盡す眞の醫人として起ち、その今日あるは既に博士の閱歷に、氏の面目の躍動し居るを見る。壯齡今や知命に入る七、精力家にして至誠奉公の念に燃え、精研修養相俟つて自ら品性の陶冶に力め、以て自己の天職を全ふせんとする所に、博士の尊き使命と共に長所を見出さる。學德兼備の博士人物として敬意を表すべき也。八幡市高見町四丁目日鐵社宅に住む。

## 韓 得 堉

△半島診療界に於ける名實相伴ふ名病院長として噴々たる名望を博し、民衆より多大の信頼と尊敬を受けつゝある韓得堉博士は、曩に朝鮮平安北道厚昌道立醫院分院長より轉任して、現在は道立新義州醫院寧邊分院長として活躍を續け、氏が得意の内科を擔任しながら指導監督の任に當る、其の責任も亦重且つ大なりと云ふべし。學系より見たる氏は、愛知醫大出身の新進にして、勝沼内科にて巢立ち、名古屋醫大より學位を得、篤學の醫博として半島醫學界の爲め氣を吐ける、朝鮮出身者中の代表的學者也。

△顧みて氏の今日ある學歴を検討すれば、立志傳的範を示すに足る篤學者として特筆に値す。即ち朝鮮の片田舎たる本籍地に於て一ヶ年間漢學を學び、新學問の必要を悟りて同地韓興學校に入學し、献身的教育者にして宗教家たる同校長禹龍鎮(現在尙同校々長たり)の訓育を受け、大正九年三月同校を卒業す(當時尙朝鮮に於ては新學問反對の時なり)、時恰も家勢貧困にして、而かも早く父を失ひ、暫く農業に従事したるが、家兄の絶對なる理解と努力の下に、同年九月平北五山中學に入學し、約二十里間の汽車通學と、自炊其他有らゆる難行苦學を續けて同中學を卒業するや、向學の精神鬱勃として禁ずる能はず、溢るゝばかりの熱望漸く成つて上京、培材高等普通學校五年に編入し、翌年同校を卒業す、幸にして家運も挽回して稍や樂になり、大正十四年四月愛知醫科大學豫科入學を好期に日本内地留學の途に上り、豫科三年を経て昭和七年本科四年を卒業す。爾來勝沼内科學教室にて助手として四年間、勝沼精藏教授の指導を受けて内科學を専攻す、昭和十年七月恩師勝沼博士の推薦により朝鮮平安北道厚昌道立醫院分院長として就任し、同年十二月學位を授與せらる、同十二年一月道立新義州醫院寧邊分院長に轉じ、以て今日に至る。

△學位主論文は「網狀赤血球型移動係數ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究」にして、參考論文なし。

△感想に曰く「専門醫として分業すぎると、人間全體に對する統括的觀察にやゝもすれば疎となりがちなり、醫師は人間全體を治癒し向上させるべきを分業的専門醫として常に此の點を留意し蘊蓄すべきだと思ふ。又醫師對社會に對



しても醫師は人間として社會よりあまりかけ離れない様、常に自分を戒めながら自分の専門に精通すべきではないかと考へる」云々。

△本籍地は朝鮮平安南道平原郡公德面長財里にして、明治三十八年韓鴻燁の次男として平安南道に生る。栗溪と號す學究的少壯の紳士にして、氏の今日ある篤學は薄志弱行者の克くする所にあらず、博士の前半生史を繙けばよく之を語りて餘蘊なからしむ。年齒未だ三十有三、少壯の意氣益壯にして、研究心甚だ旺盛也。殊に氏の特徴とすべきは、氏の感想にもある如く、醫師は人間全體を治醫し向上させるべきを分業的専門醫とし常に留意し、又人間として社會よりあまりかけ離れない様常に自分を戒めながら自分の専門に精通すべきと云ふ點にあり。性格は眞面目にして忍耐に強く、人に對しては親切也。趣味としては音樂、蹴球、庭球を好む。家庭には母堂、兄弟三人、子供一人ありて圓滿也。朝鮮寧邊道立醫院分院官舎に住む。

### 岸川忠見

△佐世保市泉町五七に内科、呼吸器科を専門とする岸川醫院あり、院長岸川忠見博士の經營にかゝる内科専門醫院にして、特に呼吸器科を以て著聞し一流の地位を占む。開業拮据日尙淺きも、新装せるレントゲン器械、ラヂオテルミー、人工太陽燈、赤外線、其他病的検査に必要な諸器具を備へ、入院患者收容九室あり、内容の充實と相俟つて打診の評判益々高し。氏は長崎醫專に次で海軍々醫學校の出身にして、豫備海軍々醫大佐の印綬を帶び、久しく海軍々醫界に活躍して臨床の經驗に富む、特に其の最も得意とする呼吸器科領域に關しては、臨床醫博の名に恥ぢず學理と相俟つて獨特の手腕を有す。

△學歷及び閱歴を概括すれば、大正元年十月長崎醫專卒業、同年十二月任海軍少軍醫、海軍々醫學校普通科學生被仰付、同二年六月同教程卒業、同十年十二月更に海軍々醫學校高等科學生被仰付、翌十一年十二月同教程卒業と同時に

同校選科學生被仰付、内科及び細菌學專攻、同十三年十二月同教程卒業、同十四年十一月補練習艦隊出雲軍醫長、同十五年六月より昭和二年一月迄地中海沿岸各國、北及東アフリカ諸國巡航、同六年十二月任海軍々醫大佐、同七年四月以降長崎醫大教授竹内清博士の指導を受く、同十年十二月豫備役被仰付、同十一年一月學位を授與せらる、同年四月以降現住地にて開業今日に及ぶ。

△學位主論文は「結核喀痰ノ形態學的研究並ニ其臨床症狀トノ關係」にして、參考論文は「特發性胸膜炎ノR線學的研究」の外七篇あり。主として咳痰及び胸膜炎に關する研究が主要題目なり。

△感想に曰く、(一)嘗に醫界のみならず、日本の社會が未だに外人崇拜熱の盛んなるを遺憾とす、例へば日本人の發明發見に對しては極めて冷淡にして、外人の發明發見を誇大し、崇拜し喧傳するの風習、今尙外人の夫れに比し極めて盛んなる如く感ず、遺憾至極なり。(二)將來臨床醫家として活躍すべき人が態々臨床から離れた題目を選び、學位獲得後直ちに開業し世間の非難を來すもの多きが如し、開業する人はモット眞剣に臨床醫學に就て研究發表せらるゝ様切望に堪へず。云々。

△長崎縣北高來郡諫早町下本明一八三岸川作太夫の長男にして、明治二十二年其地に生る。夙に海軍々醫を志して以來、切磋研鑽、その今日をあらしめたものにして、年齢今や知命に入らむとす。而かも元氣益々旺盛にして、既に鍊磨圓熟せる學識、手腕を以て起ち、榮譽ある餘生を擧げて診療界の爲め一貫せんとする勇氣や壯とすべく、至誠以て自己の天職と爲す。樂天家にして小事に拘泥せず、多くの娛樂を有し功利に恬澹たり。趣味としては園藝に親しみ勝負事を好む。家族は七人にて三男二女あり。

### 西依九五

△八幡市日本製鐵病院内科に新進の西依九五博士あり。九州帝大派の一勢力と見るべき新人にし



て内科を専門とし、特に神経病科を最も得意とす。氏の學歴及び閱歷より言へば、佐賀縣三養基郡田代小學校、中途同郡基山小學校に轉じ、福岡縣立中學明善校、松山高學校理科乙類（昭和二年卒業）を経て、昭和二年四月九州帝國大學醫學部入學、同六年三月同學部卒業、直ちに同學部武谷内科に入局、同十年九月廣谷内科は楠内科と改稱、同年十二月學位受領、同十一年二月楠内科を辭し八幡市日本製鐵病院に就任今日に至る。斯間現名譽教授武谷廣博士及び現教授楠五郎雄博士指導の下に、主として内科特に神経病に關する臨床的方面的研究を爲せり。學究生活より實地治療界に轉向して以來、日尙淺きも、適所に適材を得たりとの適評は、氏の面目を語りて餘りあり。

△學位主論文は『進行性筋「デストロフィー」症ノ病理組織學的知見補遺』にして、參考論文五篇あり(1)「ヒステリイ」性胸鎖乳頭筋間代性痙攣ノ一例、(2)小腦腫瘍ノ一例、(3)悪性腦底腫瘍ニ因ルト思ハル、多發性腦神經麻痺症例、(4)藥物ノ胃腸運動ニ及ボス中樞性作用ニ就テ、(5)氣管枝喘息ノ「アレルゴリツクス、マスク」療法ニ就テ等なり。就中主論文の『進行性筋「デストロフィー」症ノ病理組織學的知見補遺』は、氏が會心の作にして博士獨特のものと推獎すべき也。

△感想に曰く(一)將來實地醫家として立つ人とする者への論文テーマは、實地醫家として將來役立つ如き範圍に定められたく、特殊な研究は學者に委せられたく思ふ、でないとい屢々醫博に對して實地醫家の腕が云々される事になる、實地醫家向テーマは深きものより廣きものゝ方可ならんか。(二)醫者が必要もなき注射をする事は遺憾である。(三)新聞雜誌の醫療醫藥に關する記事、廣告等に對しては當局に於て可然公正なる専門智識家を置き嚴重なる取締を要す。國民保健醫療國策につきては速かに當局の關心を望む」云々。

△本籍地は佐賀縣三養基郡田代町大字柚比に在り、西依一六の二男にして、明治三十八年廣島縣三次町に生る。實地醫家として起ち、至誠以て醫道の本分を盡さんとする所に、氏の尊き使命ありと言ふべく、年齒未だ三十有三の少壯に

して、清進の意氣と共に手腕益々冴え、今は奮闘力旺盛にして勵精格勤學日なし。氏が平生の主義とする所を見るに、他人の悪口はその面前で云ふ事にし、蔭では努めてその人の長所を説く事にして居る、本人が居れば自分の批評が當らねば取消し得るが、蔭口は本人が知らぬから當ずとも取消し得ぬからだと言ふにあり、或はそれが爲にか往々人の恨を買ふことなしとせず、蓋しそれは氏の長所であり、又短所とも思はれる。旅行と玩具とに興味を有す。家庭には兩親、妻及び二愛女あり。八幡市東山町二ノ一〇一五に住む。

### 山本幹雄

△豫備陸軍軍醫監從四位勳二等山本幹雄博士は、石川縣江沼郡大聖寺町財團法人江沼病院院長を最近勇退して以來、浦和市鹿島臺一八一五に在住して自適悠々たり。氏は金澤醫專の出身にして、内科を専門とし、特に呼吸器病を最も得意とする、金澤醫大派の臨床醫博として錚々たる人物也。顧みて氏の學歴及び閱歷より言へば、明治三十七年金澤醫學專門學校卒業後陸軍に入り、同三十八年五月任陸軍三等軍醫、爾來累進衛戍病院長、軍醫部長等を経て、昭和五年八月任陸軍軍醫監、補廣島衛戍病院長、同七年八月退職、同年九月より日本醫科大學研究科へ入學、同十年十月迄同大學細菌學教室、傳染病研究所及び陸軍々醫學校防疫學教室等にて研究、猶陸軍在職間任地に近き大學、主として東京帝大、新潟醫大、千葉醫大、金澤醫大、九州帝大醫學部、工學部等を見學乃至通學して各種の指導を受け、昭和十年十二月金澤醫大にて學位を受領せり。斯間主として須藤憲三教授、中村八太郎教授、林篤教授、後藤七郎教授、小野寺直助教授、西澤行藏教授及び工科の西教授等の指導を受けて各方面を研究せり。昭和十一年暮財團法人江沼病院々長を辭す、將來現住地たる浦和市に於て開業の日を期待せらる。

△學位主論文は「假性結核細菌ニ關スル研究」にして、外に參考論文七篇あり。其他主要論文十數篇あり、その主要題目を略するも、論文中氏の得意のものは、假性結核細菌が「チフス」菌に類似の症狀を呈し、免疫學上極めて類似



の作用あると、本菌に對する「バクテリオ」「ファージ」を最新の方法によりて始めて證明せし事實を有し、尙醫科器械の防銹法を研究し、日常取扱に至便なる方法を立案し、又「レントゲン」影像の濃度標準を定め記載に便なる如く影度計を立案提唱し、又吾人の觸覺鍊磨による麻痺領域の觸定法なる事實を宣傳して脚氣等の麻痺領域を他覺的に判定する方法を鼓吹せり、又兵員在營二ヶ年の當初と退營前の二回同一兵の「レントゲン」所見を對照し、其結果「吾人生活體は病變を超越したる現實の健康度を保有し得るものなり」なる事實を立證し、吾人の病床診斷は病變の診斷にあらすして其の人の診斷なることを警告し、治病に當りては病氣を治すに非ずして其人を癒やすにあることを提言せし等是なり。

△感想に曰く「若き學者中には自己専門以外の智識慾に乏しきの感あり、大都會大病院に在る間は支障なきも若し片田舎に孤立せんか、其廣き智識を要すること多かるべきを思はるべし。開業醫中には自己の隆盛を熱望するの關係上か策を弄する劣悪なるものあるを憾む。實地家一般としては器械若くは一定の装置による検査に信賴し過ぎる傾向多し、視觸打聽診等の技を研究演練するの士に乏しき憾あり」云々。氏は石川縣江沼郡月津村字月津新ホ一番地植木吉在門の長男にして、明治十四年月津に生れ、故ありて醫四世の山本家を繼ぐ。その輝しき閱歷は言はずもがな、高齡今や知命に入る七、精力家にして今は老大家として格段の貫祿を備ふ。久しく軍隊生活にて鍛へ上げたれば、性格自ら謹直嚴肅にして而かも溫情に富む、殊に學術並に趣味等に企圖せし事項は、徹底的に研究を成遂げずば止まぬ所に、氏の長所を見出さる、酒、煙草、勝負事を好まざる關係上、未知の人とは容易に交るの機に乏し。號して楨堂（結城蕃堂命名）、梅邦（大西金陽畫伯命名）と云ふ。多趣味の人にして和歌、漢詩、繪畫、生花、盆石、謠曲等、敢て人後に落ちず。家庭には夫妻、一男、五女（内三女既婚）あり。浦和市鹿島臺一八一五に住む。

前田 清一郎 △日赤富山支部病院内科に新任せる前田清一郎博士は、東京醫專出身の内科學者にして、特にレントゲン科を最も得意とし、學位は東京帝大より獲得せる新進醫博なるが、氏の學位主論文は現在多方面の研究に引用され、實に興味ある研究業績として、其の學問的價値は既に學界に認められ、各方面に於て大に重要されつゝあり氏は最近まで東京帝大醫學部眞鍋物療内科教室及び財團法人東京顯微鏡院に於て研究續行中なりしも、學究生活より診療界へ轉向して以來、多年の蘊蓄を傾倒して今や自由に自己の手腕を發揮し得るの位地に着き、勵精恪勤、孜々として邁進努力しつゝある前途は、多大の期待を以て囑目せらる。

△學歷及び閱歷より言へば、神田區大成中學校（大正十一年三月卒業）を経て、大正十五年三月東京醫學專門學校卒業、直ちに母校附屬病院放射線科助手を囑託され、昭和二年四月同放射線科主任となり、同五年六月東京醫學專門學校放射線科助教授拜命、同六年三月東京帝大醫學部物療内科教室に於て眞鍋教授指導の下に内科、レントゲン線學の研究を進む、同十年十二月學位請求論文は（主査）眞鍋、（副査）橋田、高木三教授の下に東京帝大醫學部教授會を通過し、同十一年二月學位を授與せらる、同十一年十一月以降東京帝大醫學部眞鍋内科教室勤務の傍ら、財團法人東京顯微鏡院に勤務して研究續行中なりしが、同十二年二月日赤富山支部病院へ赴任今日に至る。斯間主として指導を受けたるは眞鍋嘉一郎教授にして、外に海軍少將高橋通磨博士の指導に負ふ所亦多し。

△學位主論文『人體氣管枝ニ於ケル蠕動運動ノ「レントゲン」線學的研究』に對し著者曰く、氣管枝内に分泌せられたるか又は注入せられたる物質は如何なる機轉により氣管枝内より排出せられるやに關しては從來より餘り考究せられず、只僅かに咳嗽により或は顫毛上皮細胞の作用により當然排出せらるゝものとせり。然れども氣管枝に關する今日の知識を以て尙ほ詳細に之を検索すれば斯く簡單に取扱ふべきものに非ず。即ち第一に小氣管枝に咳嗽刺戟を起さざることなり。Lorey 氏も注入造影劑が細氣管枝より氣管分岐部附近迄上昇し來るとき初めて患者は咳嗽を發すと。



余が例に於て肋膜肺氣管枝痙を有する實驗例に於ては更に此の感を深くせり。第二に氣管枝粘膜炎の顫毛上皮細胞の機能考察するに、顯微鏡により初めて見得らるゝ極めて繊弱微細なる顫毛が其の數に於て多しと雖も、恰も稻穂の上を風が吹き去るが如く速かに異物を排出し得るとは動物實驗(牛の氣管枝)に於てすら不可能なり。況や粘稠力(「グリセリン」の五倍)強き造影劑の大量を速かに排出し得るとは推察すら許されず。以上の主要點のみに就て論ずるも氣管枝には自然的に自己防衛のため尙ほ何等かの作用を有することに余は想到せざるを得ず。茲に於て氣管枝造影法(造影劑 Ipiodol-Lafay)の施行に際し詳細なる「レ」線透視觀察、「レ」線立體寫眞及び「レ」線連續寫眞撮影をなし仔細に之を検索するに、氣管枝には筋組織により收縮運動の存在する以外に運動性狹窄症候を呈する蠕動様收縮波動が自働的に出現し而も氣管枝の走行に一致し小氣管枝より大氣管枝へと波及し、氣管枝幹に於ては明かに外部に向て排出的に收縮する運動を認め得たり。而も蠕動様收縮波動は常に一樣の強さと一定の時間を以て氣管枝末梢部より氣管へと進行し其の結果速かに大量の造影劑を排出し得る機能あるを證明せり。斯く氣管枝壁に存する筋組織が此の異物排出の主要なる一任務を果すものなりや、又之れに關係するものは如何なるものやと考へ、氣管枝全般に至る微細なる構造殊に筋組織の配列及び神經分布状態を多數の文献に徴するに(Stoehr, Reinberg, Lorey, Baluberg, Spert)氏等の氣管枝組織の微細解剖學的所見よりして、氣管枝には遙かに末梢部に至る迄も良く發達せる弾力性強き筋肉を有するを證明し毛細氣管枝肺胞道すらも尙ほ豊富なる筋組織により圍繞せられることも明かとなり、又之等は一定の緊張力を有し Rhythmische Bewegung を營むことも證明せられたり。且つ問題になる氣管軟骨輪はO字状をなし、此の間隙には弾力纖維が密に附着し狹窄狀に收縮し得ること、小氣管枝の軟骨は倭小となり遂には全く消失することも明かとなり。次に Mueller, Mollga, Braeucker, Larsell, Stoehr, 岩間氏等の氣管枝神經の解剖學的所見、殊に Eshwyan, Bearden, Dixon, Brodie, Weber, Januschke, Kuenmel und Braeucker, Golla und Syme, Glasser, 伊藤、石間、吳、Witzelund, Kaess, Kuppis 氏等の氣管枝運動神經の生理學的所見よりして、氣管枝には迷走神經と交感神經が分布すると同時に氣管枝壁に於ては甚だ廣汎なる神經叢(之れも亦收縮性及び擴張性纖維を有す)が走行するを見且つ氣管枝壁には多數の特殊なる神經節の存在するを證明せられたり。故に實驗的に分布せる神經の末梢を刺戟するときは氣管枝腔の擴張又は收縮を見るを得べく、而して此の場合に於ける氣管枝は蠕動運動を行ふに非ずして全氣管枝が同時に收縮するか或は擴張することは説明を要せざる所なり。然れども氣管枝粘膜炎の刺戟が中樞神經に無關係なる多數の小なる神經節を順次に徑て反射作用の發起するは考へ能ふ所にして、此の反射作用が氣管枝筋組織の蠕動様收縮波動を惹起するものなりと考ふるも不可なるべし、其理論の正しきを知りたり。(以下省略・東醫學園時報第九號より抜抄)詳細は東京醫學會雜誌第四三卷第十二號に發表あり。外に參考論文十九篇あり、題名省略す。

△感想に曰く「現代の醫學は各方面に亘り其の進歩發達は實に驚くべきものなり。殊に放射線科學は其の診斷に治療に劃期的業績を多數示しつゝあり、小生は只斯學の研究に日尙ほ足らざるを嘆ずるのみ」云々。氏が人體氣管枝に於ての研究は既に「レントゲン」學成書にも記載さる如く氏が世界最初の研究業績として氣を吐けるもの也。

△熱心なる研究家にして、殊に從來の氣管枝の研究に一大革命を興へ、而かも眞鍋教授の推奨により、日本は勿論歐米にも未だ曾てなき、貴重なる研究業績を正々堂々發表して多大の利益と共に興味を喚起せるは、私學不振の叫ばれてゐる今日、氏の研究心の熾烈なるを壯とし其の成功を祝すべき也。梅莊山人は氏のペンネームにして、讀書と研究とに多大の趣味を有し、又書畫、刀劍を愛好す。東京市本所區堅川町一ノ四に本籍を有し、明治三十四年前田富八の長男に生る。年齒未だ三十有七の少壯にして、今や診療界に躍進せる氏が前途の展開は頗る刮目に値す。

## 原田福象

△練習艦隊軍醫長たる海軍々醫大佐原田福象博士は、慈惠醫專出身の内科學者にして殊に呼吸器



科を専門とし、海軍々醫學校其他にて研鑽多年、終に人工氣胸を應用せる胸膜炎の研究を完成して、慈惠醫大より學位を獲得せる名醫博也。氏の歴史を緋けば、學志を出で、海軍々醫界に出仕して以來、二十有餘年一日の如く、終始一貫、至誠以て國家に奉じ、勵精恪勤、今猶昨に渝らず奉公の念に燃ゆ。海軍々醫界の現代を彩る中堅人物たるを囑望すべき也。

△顧みて氏の略歴を概括すれば、明治四十四年三月私立曉星中學校卒業、大正四年八月東京慈惠會醫院醫學專門學校卒業、同年九月醫師登録、同時に東京慈惠會醫院内科勤務、同年十二月任海軍少軍醫、海軍々醫學校乙種學生被仰付、大正五年六月補横須賀海兵團附、同年十二月第一艦隊扶桑乗組被仰付、北支那方面警備に當る、同六年八月石見乗組被仰付、同年十二月任海軍中軍醫、第一特務艦隊對馬乗組被仰付、南阿弗利加ケープタウン方面の作戦及び通商保護に従事す、同七年十二月補海軍機關學校附、同八年七月第一艦隊第三十二驅逐隊軍醫長心得被仰付、露領沿岸警備に當る、大正九年十一月大正四年乃至九年戦役の功に依り勳六等單光旭日章並に金八百圓を授け賜ふ、同年十二月任海軍々醫大尉、補第三艦隊千早軍醫長、同十年二月補横須賀海軍工廠附、海軍共濟組合病院醫員を被命、同十一年五月練習艦隊警手乗組被仰付、世界一周各國の衛生機關を視察す、同十二年二月補警手軍醫長兼分隊長、同年五月補吳海軍病院部員、呼吸器科並傳染病科勤務、同年六月兼補海軍兵學校附、同年十二月海軍々醫學校高等科學生被仰付、同十三年十二月補海軍火藥廠醫務部々員、海軍共濟組合病院醫員を被命、同十四年三月露領方面出兵に關する業務の勤務に依り金百六拾五圓賜與せらる、同年十二月任海軍々醫少佐、海軍々醫學校選科學生被仰付、二ヶ年間に科學研究を被命、昭和二年十二月補海軍火藥廠醫務部部員、海軍共濟組合病院院長代理を被命、同五年一月補第二艦隊妙高軍醫長兼分隊長、同年十二月任海軍々醫中佐、補海軍工機學校軍醫長兼分隊長兼横須賀海軍病院部員、呼吸器科長を被命、同七年十一月補海軍砲術學校軍醫長兼教官、同十年十一月任海軍々醫大佐、補練習艦隊軍醫長、同十一年二月學位受領、

從五位勳三等なり。

△學位主論文は「人工氣胸ヲ應用セル胸膜炎ノ研究」にして、參考論文(1)海軍火藥廠ニ於ケル銅工活版工(飯作業)ノ健康状態調査報告、(2)網狀織内被細胞機能ノ研究、(3)臨床症狀ト剖檢所見ト極メテ能ク一致セル酸化炭素中毒症ノ一例(4)過去五年間ニ發生セル潛水事故ニ因ル傷病ニ就テ、(5)昭和七年三月軍艦長門赤痢流行時施行セル大消毒並細菌検査臨床症狀報告、(6)血液型ヨリ見タル海軍兵ノ氣質體格罹病學業成績並機關科各種練習生ノ適性ニ就テ等六篇あり。

△感想に曰く「再度米國を視察し彼の地に於ける第一世は勿論第二世の日本を想ふ念の切なるを知り、吾等内地に於ける同胞は益々日本精神の修養に努めざる可からざるを痛感せり」云々。

△岡山縣淺口郡大島村原田貫平の長男にして、明治二十七年生る。學究的純眞の士にして、その今日ある閱歷は燦然として異彩を放てり。年齒漸く不惑有、少壯豁達、意志鞏固にして至誠奉公の念に厚く、切磋研學、孜孜として今猶餘念なし。生來眞面目にして謙讓の徳を備え、淡々として己を低うし、寛厚能く人と交はり又能く部下を愛撫す。旅行、寫眞を趣味とす。家庭には敏子夫人、繁、澄子の一男一女あり。東京市中野區天神町六に私邸あり。

### 宇佐玄雄

△京都市東山區本町十二丁目臨濟宗大本山東福寺經營の三聖病院院長として宇佐玄雄博士のあるは世人周知の如し。氏の圓熟せる手腕と、高潔なる人格とを以て、氏の理想とせる「説得療法」の爲め不斷の熱誠努力を盡し、以て氏が尊き使命とせる神經衰弱症治療の貫徹を期し、至誠たゞ公に奉ぜんとする熱誠の士たるは注目し、吾人大に敬意を表せざるを得ず。氏が學歷及び閱歷より討究すれば、氏は明治四十一年七月早稻田大學文學部哲學科卒業、同年九月より同四十三年九月まで同研究科に在學、同四十五年四月臨濟宗東福寺派三重縣山溪寺副住職となる、大正二年十二月臨濟宗東福寺派二等教師に任ぜられ、山溪寺住職となる、同四年三月臨濟宗東福寺派管長の命



に依り布教感化に資するの目的を以て精神病學及び病的心理學研究の爲め、同年四月東京慈惠會醫院醫學專門學校に入學、同八年三月同校卒業、同八年九月東京帝大醫學部附屬醫院精神科勤務を命ぜらる、同十年七月同醫學部精神病科學教室介補を囑託せらる、同十一年十一月より京都市にて醫術開業、同十三年六月前記山溪寺住職を辭す、昭和二年十二月頭書の三聖病院院長として就任今日に至る、同十一年三月京都帝大にて醫學博士の學位を授與せらる。

△學位主論文は「感覺殘像ト心的態度トノ關係ニ就イテ」にして、外に參考論文として、(一)森田氏神經質療法ニヨル治療成績、(二)強迫幻視ニ就テ、(三)森田氏ノ所謂發作性神經症治療例、(四)説得ニヨリテ治癒シタル神經病ノ治療例、(五)森田氏ノ所謂神經質ノ強迫觀念ト意志薄弱性素質ノ強迫行爲ニ就テ、等五篇あり。

△感想に曰く「俗に神經衰弱といふ病氣は、神經の衰弱でも疲勞でもなく、實はその人の精神傾向素質即ち生れつきの氣質であつて、その氣質とは簡単に云へば、自己内省が強く、常に自分のことを省み、身體上の些細な感じにもすぐその方に注意を向けるといふもので、例へば頭痛や頭重でも、普通の人ならば絶えず周圍の事柄に氣が紛れて居るから、格別氣が付かないが、この氣質の人は自分の感じに注意を向けるから、些細な不快や苦痛を氣にするやうになるのである。此の些細な感じを氣にするといふことは、その程度や種類に従つて、或は死の恐怖、疾病恐怖、毒物の恐怖、災害、縁起の恐怖や取越苦勞となり、或は心悸亢進發作、不安苦悶發作、眩暈卒倒發作、運動麻痺發作等の發作性の症狀ともなり、頭痛、頭重、頭内朦朧、身體倦怠、耳鳴、注意散亂、記憶力減退、多夢、食思減退、不眠等の症狀を起すやうにもなるのである。然るに此等の症狀は實は器質的のものではなく、何れも主觀的のもので、單に心の執着から起るものであるから、その治療法は當然精神療法でなければならぬ。昔から病といへば藥といふ諺があるが本病には藥は有害無要であつて、服藥は病氣を治すよりも益々之を増悪させるものである。即ち單に局所的の症狀に對する姑息的の症狀療法ではなく、患者自ら修養し、體得自覺によつて完全に治癒するものである。吾々の神經質に對する精神修養療法は即ち之である」云々。

△明治十九年三重縣阿山郡布引村に生る、當年知命に入る二歳、早大出身の文學士中最初の醫學博士にして、その今日ある厚志篤學は特筆に値し、氏の前半生史を繙く者をして感激せしむるものあり。賦性謹肅にして溫情に富み、今は唯だ親切なる宇佐國手として、愛と熱とを捧げて仁術の本分を盡し、民衆より多大の信頼と尊敬とを受け、説得療法の絶大なる効果を禮讃されつゝあり。京都市東山區本町東福寺三聖病院構内に住む。

#### 帆足 作次郎

△大分縣別府市鐵輪六八六に在る帆足内科醫院は、院長帆足作次郎博士の經營にして、溫泉治療に適應する設備を完備し、多年氏が九大溫泉治療學研究所に於て研磨せる手腕と熱誠とを以て、博士自ら日々診療に勵精努力しつゝあり。學系より言へば、氏は熊本醫專出身の内科學者にして、特に急性熱性傳染病を最も得意とし、臨床家としては既に多年の經驗に富み、獨特の手腕を有す。一度び開業を廢して再び學究生活に入るや、九州帝大溫泉治療學研究所研究生として切磋研學の結果、此の一生面より躍出せる臨床醫博として名聲を博し、今やその蘊蓄を傾倒して斯科界の爲め氣勢を昂げつゝあり。

△學歷及び閱歴を概括すれば、大正四年熊本醫學專門學校卒業、同年七月以降熊本縣立病院谷口長雄博士(今は故人となれり)に師事して内科學を專攻す、同五年六月熊本縣立病院内科醫員を命ぜられ、同八年同院を辭す、同九年一月門司市仲町七丁目にて開業し、昭和七年四月研學の爲め一時醫業を廢止す、同年六月九州帝國大學溫泉治療學研究所に入りて研究生となり、同十一年三月學位を授與せらる、爾來現住地にて再び開業今日に至る。斯間主として高安慎一博士、松尾武幸博士の指導を受く。

△學位主論文は「溫泉作用ヲ受ケタル皮膚溫度研究」にして、外に參考論文三篇あり、(1)飲用鑛泉ノ食餌性過血糖ニ及



ボス影響、(2)含鐵鑛泉ノ保存ニ就イテ、(3)超短電波ノ應用ニ關スル一、二研究等なり。就中「含鐵鑛泉ノ保存ニ就イテ」は氏の最も得意とせる主要論文と見るべき也。

△出身地は福岡縣鞍手郡小竹町にして、明治二十三年本籍地に生る。原志篤學の人にして、克己研學の素志を完うして克く今日をあらしめたり。當年漸く不惑に入るハ、學識、手腕、人格共に熟達して一家を成し、超然として一段の貫祿を備ふ。性格は眞面目にして表裏なく、誠意、誠實を以て親切を盡し、學究的温厚の紳士としての徳望を有す。書道を趣味とし書を能くす。家族は九人にて一家團欒たり。

市村丑雄

△岡山縣玉島町河賀崎七四二ノ一に於て内科醫院開業、市村内科醫院長として活躍しつゝある市村丑雄博士は、第六高等學校を経て、昭和二年岡山醫科大學を卒業せる新進にして、卒業後専ら柿沼内科に於て、柿沼教授指導の下に内科學を専攻し、昭和十一年四月學位を獲得せる少壯醫博也。開業早々、拮据經營日尙淺きも、新裝せる内部の設備を整へ、博士自ら診療に當面して日々精進し、「醫は仁術也」をモットーとして最善を盡す所あり。學究生活を巢立ちて今やその蘊蓄を傾け、氏が獨特の新手腕を發揮するに自由の獨立舞臺に在り、今後の躍進と相俟つて將來の發展を待望せらる。

△學位主論文は「中間代謝ニ關スル實驗的研究」にして、四篇より成る。參考論文四篇あり、(1)猩紅熱ノ稀有ナル合併症ニ就テ、(2)顯粒性白血球缺乏症ニ就テ、(3)「ロダン」氏代謝知見補遺、(4)尿中「ヒドロキノシ」及び「ブレンツカテキン」ノ定量法並ニ家兎尿中含量ニ就テ等なり。

△感想に曰く、(1)現代科學の中、別けても例外的事項の豊富な生物學の研究がチャイナリズム的傾向に墮さざる様注意すべきであると思ふ、(2)醫師界に於ては仰理的團決精神が、醫業施行の方法論に於て緊要であると思ふ。

△岡山縣和氣郡鶴山村新庄五四二に本籍を有し、市村半三郎の長男にして、明治三十四年臺灣臺北に生る。年齒未だ三十有七の少壯にして、新進たる意氣と共に漸く圓熟せる學識、手腕、人格は、兩々相俟つて益々臨床醫博たるの技能を發揮し、今は最も得意の時代に入りて洋々たる前途を有す。性來實直にして短氣なれば、動やもすれば外交的非難を受くるやの嫌なしと雖も、而かも診療に臨む態度の眞摯にして熱心なる點は博士の長所と見るべき也。鐵牛はペンネームにして、藝術一般に興味を有す、學生時代よりの讀書家にして、常に精研修養相俟つて自己の向上に餘念なし。親戚には醫博松枝新、醫博三上富太、文博笹川臨風等あり。家庭には母と妻子四人あり、一家團欒として圓滿なり。

大橋要人

△滿洲出動中にて、滿洲國濱江省牡丹江松岡部隊に在りて、目下飛行聯隊に勤務中の陸軍三等軍醫正大橋要人博士は、岡山醫專出身の生化學者にして、最も得意とするは内科なり。醫專卒業後陸軍々醫界に投じ、多年臨床方面の實地經驗と併せて學術の研究に専念没頭し、岡山醫大にて清水多榮教授の指導を受け、生化學を専攻して學位を獲得せるは言はずもがな、陸軍々醫界に於ける活動家として其の學識、手腕を稱せられ、今や多年の蘊蓄を傾倒して滿洲野に活躍し、主として航空衛生に必要な諸施設に與つて努力貢獻する所あり。

△氏の學歴及び閱歷を略述すれば、大正三年岡山縣天城中學校卒業、同八年岡山醫學專門學校卒業、同年陸軍三等軍醫任官、昭和九年陸軍三等軍醫正任官、同十一年五月學位を授與せられ、同九年四月勳五等を賜ひ、同十一年五月正六位に叙せらる。

△學位主論文は「生體内酸化作用ニ及ボス胆汁酸ノ影響ニ就キテノ研究」にして、其一胆汁酸ノ血液「カタラーゼ」ニ及ボス影響ニ就テ、其二胆汁酸ノ臟器及體液内還元「グルタチオン」量ニ及ボス影響、其三脾臟剔出家兎ノ肝臟及血液内還元「グルタチオン」量ニ及ボス胆汁酸及脾臟「エキス」ノ影響の三篇より成る。外に參考論文四篇あり、(1)肝ノ糖原



質合成機能ニ對スル腦下垂體越幾斯及「ヒヨール」酸ノ作用、(2)飢餓家兎ノ肝内糖原質合成機能並ニ尿水素「イオン」濃度ニ及ボス胆汁酸ノ影響、(3)飢餓時ニ鬱積黃疸時ニ於ケル尿ノPH値ニ就キテ、(4)人體腸管内ニ於ケル「ブルガリア」乳酸桿菌ノ運命ニ關スル研究等なり。

△感想に曰く「非常時日本の學界に要望する所は區々たる小學閥を排し、尙一層各學界の連繫を密にし協調を保ち、科學的國力の増強を圖るに在りと信ず」云々。岡山縣兒島郡興除村大字内尾の出身にして、明治二十八年大橋文平の二男に生る。氏が軍醫としてスタートして以來、陸軍々醫界に活躍せる多年の功績は言ふまでもなく、その今日ある閱歴は既に氏の前半生史よくこれを語りて餘蘊なし。今は年壯の意氣と共に奮闘活躍の時代にて、氏が理想とせる「科學的國力の増強」をモットーとして、精神修養と相俟つて益々國家に盡さんとする熱意とその氣魄は大に壯とすべし。性格溫厚にして情に脆く、無慾淡々たり。趣味は讀書と圍碁を樂しむ、嗜好としては酒及び煙草を少量づゝ用ゆ。家族は兩親、妻及び子供五人、團欒たる家庭は圓滿也。滿洲國濱江省牡丹江松岡部隊官舎に住む。

◇  
**米原忠徳** △帝國生命保險株式會社名古屋支店醫務主任たる米原忠徳博士は、慈惠醫大派の保險醫學者にして生理學及び内科の造詣深く、多年生命保險界に活躍し、特に動的體格検査法に就き研究を進めつゝある少壯醫博也。謙遜なる氏は會々その抱負の一端を吐露して曰く「醫者であり乍ら商會社に勤めてゐる、これは生産利殖と仁義道德と科學と宗教とは、必ず平行するものであると云ふ信念の許に日々活動研究中である」云々と。精神修養と相俟つて、斯界の指導啓發に努力邁進つゝある前途は大に刮目に値す。

△學歴及び閱歴より觀れば、大正十年三月鳥取縣立米子中學校卒業、同年四月東京慈惠會醫科大學豫科入學、昭和二年三月同大學學部卒業、直ちに芝區三田四國町鈴木胃腸病院勤務、同三年三月同院辭職、同年四月帝國生命保險株式

會社醫務課健康増進部醫員勤務、同五年十二月東京慈惠會醫科大學研究科に於て勉學の爲め特に右休職を承認せられ尙ほ研究中は研究費を補助せらる、同六年一月同大學研究科に入學、浦本政三郎教授指導の下に生理學專攻、同八年十二月同研究科修了、同時に帝國生命保險株式會社健康増進部醫員復職、同九年一月同社名古屋支店醫務主任を命ぜらる、同十一年五月學位を授與せられ今日に至る。專攻學科は生理學、内科、保險醫學にして、斯間帝國生命醫務課長平松濤平博士、鈴木病院院長鈴木重寛博士、慈大教授浦本政三郎博士の指導を受けたり。

△學位主論文は「單一神經纖維及筋纖維標本ニ就テノ研究」にして、(1)單一筋纖維標本ノ作製及此標本ニ就テノ生理學的組織學的觀察、(2)單一神經纖維標本ノ作製及該標本ニ就テノ生理學的組織學的觀察の二篇より成り、副論文なし。△感想に曰く「現代醫師は兎角社會大衆の幸福と、否生活と隔絶せる優地位を保たんが爲に汲々としてゐる、醫師も社會構成上の一員だ、「醫者と大衆と共にあれ」と云ひ度い、そして現代に處する氣持は「唯觀自然」である」云々。鳥取縣西伯郡幡郷村大字諸木五五米原弘徳の二男にして、明治三十四年生る。學究的溫厚の紳士、年齢未だ三十有七の少壯にして、その今日あるは既に博士の閱歴よくこれを語りて餘す所なくも、意氣旺盛にして研究心に富み、今は奮闘活躍に堪え、最も得意時代にて、拮据匪勉、一日として寧日なし。賦性高潔、禪の研究に興味を有し、自ら品性の陶冶に力む。家庭には老母と妻鶴子とあり。名古屋市東區田代町坂ノ上九八ノ一四に住む。

### 岩本茂樹

△長崎醫大派の一勢力たる新人にして、内科を専門とし、特に呼吸器病並に神經病を最も得意とする岩本茂樹博士は、下關市七田病院(院長七田龍雄博士)西部診療所主任として、内外多大の信望と重大なる責任を擔ひ、刀圭多忙の裡に日々勵精活躍しつゝあり。當診療所は現代式洋風、新興下關市の西部中心地に存在し、入院設備も完備し、遠近よりの外來患者常に輻輳す。診療科目は内科、外科にして醫員三名、看護婦四名、見習二名あ



り。岩本博士はその得意とする内科を擔任し、氏が獨特の打診は、院長七田博士多年の聲望と相俟つて噴々たるものあり。當診療所今日の繁榮を見るもの、氏が熱誠努力に負ふ所亦看過すべからざるものあり。

△學歴及び閱歷より言へば、大正十四年山口縣立岩國中學校卒業、昭和三年山口高等學校卒業、同七年長崎醫科大學卒業、直ちに同大學生理學教室に勤務、次で同附屬醫院第一内科に勤務、同十一年六月學位受領、同年四月同大學を辭し下關市七田病院に就職今日に至る。斯間長崎醫大緒方大象博士に就て生理學を、同學長角尾晋教授に就て内科學を專攻す。

△學位主論文は「迷路生理ノ研究補遺」にして四篇より成る。參考論文六篇あり、(1)經口的投與造影劑の膽道内侵入ヲ來セル十二指腸狹窄症ノ一例、(2)眼内液ト血清トノ關係ニ就テ(全二篇)、(3)尿ノ性別的差異(全二篇)、(4)各種運動ノ尿酸化還元壓ニ及ボス影響等なり。

△感想に曰く「我國現代醫學界は既に理論的研究方面に多大の進歩を遂げ居るも、實際的即ち治療的方面の統制ある研究不十分なるの感あり。醫學特に内科學は小生一生の目的であり事業である故、唯小生の微力及び難きを遺憾とするも、内科學を愛し特に其治療方面の進歩發達を希ひつゝ、之に幾分の貢獻をなさんと努力しつゝあり」云々。

△學究的熱心なる臨床家としての氏が長所を求むれば、論理的、批判的に判斷して行動する點にあるが如し、嚴正以て事を行ひ公平を期すと云ふ主義にて、虚心坦懐、卒直なる性格の一端を窺はれる、又その反面に現はるる、性格より見れば、妥協性に強すぎ、平和(平穩)を愛しすぎ、お人好過ぎる點などは、或は氏の短所と言へば短所かも知れぬが、「醫は仁術也」の本分に副ふ一部の現はれとして氏の賢明なるを想はしむるものあり。趣味としては謡曲を好む。山口縣玖珂郡高森町泉町の出身、岩本清馬の長男、明治四十年本籍地に生る。年齒未だ三十有一の少壯にして、内科學を以て終始し、學究的に生きんとする熱誠家也。前長崎醫大學長林都彦博士、現滿鐵開原病院長大橋芳彦博士は共に

に亡父の實弟なり。家族は母、妻、長女のみにて、本人共都合四人の家庭は圓滿也。下關市西大坪西中島町に住む。

### 高橋義男

△石川縣珠洲郡飯田町に内科専門を以て著名なる高橋病院あり。院長高橋義男博士の經營する診療所にして、新裝せる内部の設備と共に、博士獨特の手腕は、適確なる打診の好評と相俟つて、益々近郷の人氣を吸引し、歳と共に繁榮いや増す盛況に在り。氏の學歴及び閱歷より言へば、金澤二中四年終了、四高を経て、昭和三年金澤醫科大學を卒へ、爾後京都帝大醫學部眞下内科副手に次で、京都市立病院醫員となり、後現地にて開業今日に至る。斯間京都病院長伊澤爲吉博士の指導を受け、昭和十一年六月京都帝大より學位を受領せり。専門は内科にして、特に傳染病學を最も得意とす。

△學位主論文は「腸チフス」胃液ノ性状ニ就テ」にして五篇より成る。參考論文は、(1)「アグラモロチトール」ノ成因ニ關スル實驗的研究(四篇)、(2)自律神經纖維ノ變成時期ニ就テ、(3)腸チフス」ニ於ケル神經筋肉ノ興奮性、(4)腸チフス」ノ赤血球沈降速度の外數篇あり。

△石川縣金澤市上本多町川御亭十六に本籍あり、高橋溪次郎の三男にして、明治三十七年宮城縣に生る。眞面目なる臨床醫博として今日あるは、研鑽努力の結果にして、輝しき氏の閱歷よくこれを語りて餘蘊なし、而かも年齒未だ三十有四の少壯にして、潑刺たる前途を有し、今は奮闘盛にて、漸く壯熟せる手腕は益々冴え、若き意氣と熱と力とを以て奮勵努力し、以て仁術の最善を期せんとする所に、氏が尊き使命あり、大なる將來あるを待望せらる。性格は篤實溫厚にして、臨床家に相應しき性格の持主たるを首肯せらる。研究と治療とは氏の最も趣味とする所にして、他に何等の道樂を求めず、精研修養相俟つて自己の天職を全うせんとす。幸に自重加餐を祈るや切也。



柿本 新太郎

△大阪府泉北郡大津町宇多九五七に柿本醫院あり、内科、小兒科を以て著聞す。院長柿本新太郎博士の經營にして、内科は博士自ら擔任し、小兒科は妻道子擔任す、開業拮据既に十二年に及び、内容の充實と相俟つて打診の評判高く、堅實なる地盤は年々歳々擴張して近郷に及び、今や當地方を風靡するの盛況を呈す。氏は大阪高醫の出身にして豫備陸軍一等軍醫の印綬を帯び、大阪帝大より學位を獲得せる臨床醫博として名聲を博し、蘊蓄せる多年の經驗と相俟つて獨特の手腕を有す、その今日の聲望と成功とを贏得たるもの亦偶然ならずとせず、蓋し斯間博士夫人が女醫として内助の功亦大なるものあるは看過し能はざると共に、博士の爲に其の幸福を祝すべき也。

△學歷及び閱歷より言へば、堺中學を経て、大正三年大阪府立高等學校卒業、同年九月陸軍見習醫官、同四年陸軍三等軍醫に任官、爾來和歌山歩兵六十一聯隊、名古屋衛戍病院、野砲第四聯隊、大阪衛戍病院等各地に歴任、斯間一等軍醫に昇進す、大正十三年願に依り休職、同十五年豫備役被仰付、同年六月現地に開業今日に及ぶ、斯間昭和七年七月以來大阪帝國大學醫學部に専攻生として入學、故中川知一教授及び久保秀雄助教指導の下に生理學専攻、同一年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は「肺臟血管灌流量ニ對スル數種藥劑並ニ諸臟器抽出液ノ作用ニ就テ」にして五篇より成る。參考論文は(1)蛙靜脈内ニ注入セル「リンガー」氏液ノ肝重及ビ心搏動數ニ及ボス影響、(2)知覺神經刺戟ノ脾液分泌ニ及ボス影響、(3)蕁心筋各部自律運動停止ニ要スル「カルシウム」量及ビ「カリウム」量、(4)蛙、龜等ノ摘出靜脈竇、心房、心室ニ於ケル最大及ビ至適伸力 (Maximale und optimale Dehnungskraft) ニ就テ、(5)脾臟循環ニ關スル知見補遺、(6)脾活動ニ伴フ脾細胞内 Kation 顆粒ノ配分ニ就テ 等六篇あり。參考論文中の(4)は博士の最も得意のものなり。

△感想に曰く「醫育を統一し、醫師の人格を陶冶し、學識を廣め、以て社會人より昔日の如く、醫師尊敬の念を抱かしむる事は患者の病症經過の上に良果を齎らすは勿論、一般社會衛生の指導者として最も必要な事と愚考せらる。

現時一般に醫師は自らを卑しめて居る様な傾向なきや、一例を舉ぐれば、素人經營の醫院或は病院に少しく月給よきの故を以て直ちに之に走るが如き、醫師と云ふ資格がなければ患者の診療は絶対に出来ないものであるから、何も下働きをして甘い汁を所謂素人資本家に吸はるゝ必要はないではないか、醫師一人も應募しなかつたら病院は成立しない筈、従つて素人經營の病院や、組合立病院の簇出はない筈、即ち醫師自身が開業難の種を蒔いて居るのに等しい。私は現代醫師特に青年醫師が醫校を卒業するや否や、餘りに早く金儲けばかりに逸る傾きなきか、何も永年苦心して修得した醫術を安賣する必要は毫もないと思ふ。即ち醫育を統一し、人格を陶冶し、學識を廣め、以て醫師一般の自重を望んで止まぬ」云々。

△大阪府泉北郡大津町我孫子三三三に本籍を有す、柿本丑松の長男にして、明治二十二年大阪府南河内郡錦郡村に生る。醫育を統一し、醫師の人格を陶冶し、學識を廣め、以て醫師の自分を盡さんとするは、即ち氏が理想にして躬行實踐主義也。多趣味の人にして、書畫骨董を愛し、謡曲、仕舞、俳句などを業餘の樂しみとす。家庭には七十三歳の母堂ヨシエを始めとし、女醫妻道子との間に一男三女あり、一家團欒として朗らかなり。

鳴海 康仲

△弘前市品川町鳴海研究所長、兼鳴海病院副院長たる鳴海康仲博士は、學歷より言へば、東京醫學專門學校大正十一年の出身にして、昭和七年四月東北帝國大學醫學部藥物學教室に入り、八木精一教授指導の下に藥物學を専攻す、同十年八月右教室を退き同學部山川内科教室に入り、山川章太郎教授に就て内科學の指導を受く、同十一年七月學位を授與せられ、同年九月山川内科を退く。専攻學科は内科、婦人科、藥物學にして、特に呼吸器病科、婦人性病科を最も得意とす。

△鳴海研究所の沿革を言へば、明治二十九年十二月弘前市上土手町に鳴海醫院開院、大正十一年十一月現地に移轉、



大正十三年三月木内研究所長木内幹博士指導の下に創設し、細胞酵素學及び生物學の研究を始め、昭和二年四月弘前市未曾有の大火に遭遇し、建築物全く烏有に歸せしも、更に敷地を擴張し、同年十月新築完成す、同四年四月救護部を設け一般災害に出動救護に努む、同六年二月鳴海研究所附屬製薬部を設く、同七年三月合名會社鳴海研究所を組織し醫院を附屬せしむ、同年五月母の遺言に依り救療部を設置し、救療券を發行して貧困者の救療に努む、同八年四月藥物學研究部を新設す、同年十一月スポーツ醫事相談部を設く、同九年七月附屬鳴海醫院を病院組織に變更す、同十一年七月附屬病院増築工事完成す。

△鳴海病院の内容を概述すれば、診療科目は内科(呼吸器科、胃腸病科)、小兒科、外科(内臓、整形外科、肛門病科)性病科、婦人科、皮膚科、耳鼻咽喉科、X線科、理療科等に別れ、綜合病院たるの内容を具備す。院長は鳴海定五郎(博士の父)、副院長は鳴海康仲博士にして、科長として鳴海修、鳴海顯の兩弟ある外、助手として福士龍太郎、井上繁雄、村木新九郎、藥局長鳴海官藏、事務長大條信雄等々あり。父子協力共營の下に和衷協同して、よく各自の本分を盡し、各々その技能を發揮して院務の發展に勵精努力する所あり、輝しき歴史と共に名實伴ふ一大病院として盛大なる今日を築き上げたもの、亦敢なしとせず。

△更に顧みて博士の履歴より検討し見るに、消防醫の必要あるを説き進んで消防囑託醫となり、災害に際して出動し消防組員は勿論罹災者の救護に當る、昭和十一年五月六日弘前市會の決議により、弘前市長より感謝狀及び銀盃壹組を贈られて表彰せらる。また青森縣警察醫務囑託醫となり性病豫防事業に従ふ。數回に亘り市會議員、縣會議員の候補に推されたるも堅く辭してうけず。現に縣醫師會代議員として組合病院善導論を提つさげて醫業統制に盡力し、近くは内ヶ崎書記長も匙をなげたる北津輕郡醫師會紛争解決に自ら投じて暗躍し遂にその解決を見、又弘前中學校の大ストライキに際し、縣學務部の維持と師弟道德の確立を期して自らその渦中に投じ、單身岩木山麓鐵温泉に赴き壹千の

生徒に道義論を説き、遂に道德的教育的解決をなして世間の耳目を驚かしたるが如き、常に道義論を囑して社會の一異才として尊きその存在を認められ、社會より多大の感謝と尊敬とを受けつゝあり。

△學位主論文は「貝母ヨリ得タル三種「アルカロイド」家兎ニ及ボス作用ニ就テ」にして、原著は獨逸文なり。参考論文は(1)貝母ヨリ得タル三種「アルカロイド」ノ蛙ニ及ボス作用ニ就テ、(2)田螺粉末及ビ芥子末腹壁適用尿分泌ニ及ボス影響ニ就テ、(3)「ケンポナシ」ノ利尿作用ニ就テ、(4)錯酸「ナトリウム」及ビ焦性葡萄糖「ナトリウム」ノ腸ニ及ボス作用ニ就テ(以上獨逸)、(5)高陪根中毒ト稱スル牛皮消根中毒ノ一例 等五篇あり。氏の論著中「受胎周期性ニ就テ」は氏の最も得意とするものにして、氏の獨特の快著と見るべき也。

△感想に曰く「醫は仁也、仁即ち誠也」これこそ、わが日本醫道の眞髓でありその根幹である。洋の東西を問はず、學術の精粹を抜きこれを統ぶるに仁を以てする、所謂大乘醫術こそ、爾今に於ける吾等の指針でなければならぬ。經濟を基幹として醫者たらんと欲する者益々多ければ、従つて人間の生死を目前にして打算的醫術に捉はれ易き者簇出し、百弊是より生ずるは理の當然ならん乎。醫は須らく濟世救民の精神を以て培はるべく、誠なくして何んぞ日本醫術の存在あらん哉。「一子相傳」の往昔を追慕する時、現代醫育機關の「品格陶冶」に心せられんことを望むや切なり」云々、三思傾聴に値す。

△現住地たる弘前市醫師鳴海定五郎の長男、明治三十年生にして、令弟四人共一家揃つて醫師也。博士の今日ある赫灼たる氏が前半生史を繙けば、氏の面目の躍動たるものあるを想はしむると同時に、その蔭に厭くことなき父の愛と、限りなき母の情の然らしめたるものあるを偲ばしむ。昭和十一年十月十六日博士の學位獲得祝賀會の催さるゝや(參會者五百名)、その席上に於ける博士の謝辭の一端に曰く「開業の傍らに於きまして學位を頂戴することを得ましたことはこれ畢竟恩師木内博士八木、山川兩教授並に學兄高瀬博士を始めとし皆様方の日頃の御指導御鞭撻の賜でありまし



て私は皆様に對しましてかね、敬意を表し且つ深く感謝してゐた次第で御座います。：本日この赫々たる光榮は斷じて康仲一人の享くべきものでは御座いません、是は私の父と亡き私の母の享くべき光榮であると信じて疑ぬものであります」云々と、謙遜なる氏の恩師思ひと、父母に對する孝行に篤き人と爲りの一片を窺はる。醫術も亦愛であり、熱であり、誠でなければならぬ信念の下に、大和醫道の確立を期して濟生救民の業に精進することは、氏の最も尊き使命とする所也。感激性に強きは氏の長所にして、時に亦短所ともなることあらん。讀書家にして常に日新の研鑽に志し、又克く自ら人格向上の陶冶に努む。スポーツは又格別趣味とする所にして、斯道の指導振興に盡す所あり。家族としては父定五郎六十九歳にて健在、母まつは五十四歳にて死亡、悼惜の情禁ぜざるものあり。妻八重子との間に三男一女あり、弟寛及び妻君枝、弟修及び妻しな、弟顯及び妻喜美江、三弟共皆醫師なり、末弟詮は東京醫專在學中、妹貞子、義弟官藏(藥劑師)及び妻はる等々、團欒たる家庭は幸福にして、一家の譽れに輝く。

### 藤原憲文

△福井縣武生町林病院内科醫長として多大の聲望を擔ひ、縣治療界の爲め盡瘁活躍しつゝあるは藤原憲文博士也。本院は病床約五〇を有し、福井縣下有數の近代的設備を誇る各科綜合病院にして、縣刀圭界の重鎮林一治博士の創設經營にかゝり、醫務は院長を始め藤原博士の外に井上、小泉兩學士を擁し、堅實なる基礎の上に日々盛業を續けつゝあり。藤原博士は京都帝大派の一勢力と見るべき臨床醫博にして、内科を専門とし、特に消化器系統疾患を最も得意とす。氏の大學院在學中は、京都帝大教授松尾巖博士に師事して斯學の蘊奥を究め、多年の經驗と相俟つて獨特の手腕を有す。今や氏が技能を發揮するに自由の立場に在れば、將來展開する所又測り知るべからず△學歴及び閱歴より言へば、大正六年三月香川縣立高松中學校卒業、同九年七月第六高等學校卒業、同十三年六月京都帝國大學醫學部卒業、自同十三年七月至同十五年十一月大阪府立市民病院勤務、自同十五年十二月至昭和三年七月

青森縣上北郡百石町立病院長在職、自同三年七月至同八年九月日赤高松支部病院内科副醫長在職、同八年十一月京都帝國大學院入學、醫學部松尾内科研究室にて松尾巖教授の指導を受く、同十一年八月學位受領、同年四月福井縣武生町林病院内科醫長に就任現在に至る。

△學位主論文は「肝臟機能異常時ニ於ケル「ロダン」形成ニ關スル研究」にして、參考論文二篇あり、(1)肝臟機能ニ及ボス燐ノ影響ニ關スル知見補遺、(2)厚發性肝臟癌ノ統計的臨床觀察等なり。他に主要論文としては、(一)濕疹ニ對スル紫外線及び硝酸銀併用療法、(二)胃下垂症ノ體操療法、(三)咯血ト濃厚枸橼酸曹達、(四)腸管内殺菌收斂藥「ゲンノボン」ノ藥効批判、(五)脾臟ニ發生セル惡性腸瘍ノ一例ニ就テ等あり。

△感想に曰く「近時日本の醫界を展望するに醫師の都市集中その度益々激烈を加へ、これが爲農山漁村に住居する患者の蒙る不便並に損害は蓋し少なからざるものあり。此の意味に於て醫師國營に亦意義深きものと惟ふ。雖然生命の危険を冒し醫事に奔走する醫師に對し國家が生活の安定を保證せられん事を希望す。かくする事に依り一面非難を受くる搾取主義的醫師の出現をも幾分輕減し得るならんと信ず。余は聲を大にし背德不信行爲を敢てする醫師の猛省を促す次第である」云々。

△香川縣高松市工町の出身にして、明治三十一年藤原辨の長男に生る。眞摯なる臨床醫博としてその今日ある輝しき閱歴は言はずもがな、學究的温厚の紳士として高邁なる人格を備へ、臨床家に相應しき性格の持主たるは、將來を大ならしむる氏の長所と見るべき也。讀書家にして書見を唯一の趣味とし、精研修養相俟つて醫道の本分を盡すに餘念なし、又時に旅行を楽しむ。家族は母、妻、男兒一人、女兒二人にして、一家圓滿也。福井縣武生町東北府に住む。

### 山上 茂

△大阪府立桃山病院に勤務し、目下専ら傳染病の診療及び研究に従事しつゝある山上茂博士は、



小學時代よりの秀才を以て知られ、大阪醫大出身の新進にして、三十歳未滿を以て大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博として氣を吐きつゝあり。明敏なる頭腦の持主にして潑刺たる研究心を有す、年齒未だ少壯にして若き意氣と力とを以て、不休不倦、自己の研究に邁進努力し、孜々として精研に餘念なければ、餘裕綽々たる氏が將來を囑望せらる。△氏は尋常小學五年修了にて大阪府立八尾中學に入り、八尾中學四年修了にて大阪醫科大學豫科に入學、昭和六年大阪醫科大學卒業、卒業後直ちに母校生化學教室に副手として勤務、古武彌四郎教授の指導を受けて生化學を専攻し、同八年第三内科教室に轉じ、今村荒男教授指導の下に専ら結核病學の研究を爲し、同十一年八月大阪帝大にて學位を授與せらる。現在大阪市立桃山病院にて傳染病の診療及び研究に従事す。

△學位主論文は「結核動物臟器「ビタミン」C固定能力ニ就テ」にして、參考論文六篇あり、(1)實驗的結核肺ノ「ビタミン」C量ニ就テ、(2)「ビタミン」Cノ腦脊髓液移行ニ就テ、(3)再生房水ノ「ビタミン」C量ニ就テ、(4)血清沃度酸値ヲ下降セシムルニ、三物質ニ就テ、(5)結核動物血清沃度酸値ニ及ボス「レゾルチン」「フロログルチン」ノ影響ニ就テ、(6)實驗的結核ニ對スル「フロログルチン」ノ治療的效果ニ就テ 等なり。

△大阪府南河内郡植生村向野四四九の出身、山上宗一の長男にして、明治四十一年生る。頭腦明晰の士にして、熱心なる研究家として知られ、年齒未だ三十歳の若年にして、今猶研究續行中の修養時代なれば、聽て躍進せんとする前途の大成頗る刮目に値するものあり。今は唯だ忠實なる醫師として診療と研究とに没頭して他事を顧みるの暇なく、努力研鑽日も尙足らざるの概あり。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、精研修養相俟つ常に自ら品性の陶冶に勉め、實直にして書生氣分の朗快さは人に親しまるゝ徳を有す。妻道子は佐多愛彦博士の三女にして一男あり。大阪府中河内彌刀村小若江三八に住む。

## 外科

### 内臓外科、整形外科、腎臓外科、蟲様突起外科、軍陣外科

#### 大野良藏

△大阪市西區南堀江木棉橋南に外科大野病院あり、院長大野良藏博士の經營する所、煉瓦建の結構巍然として街角に聳え、滋味ある外觀美は自ら内容の充實を表示し、手術場、手術用機械、科學的診療科等の施設整ひ間然する所なし。専門は外科一般特に内臓外科は博士の最も得意とする所にして、院長自ら診療に勵み手術臺に起つ、其の玲瓏たる手腕と、應待にも如才なき社交振りは、大野外科の今日の人氣を博せる所以にして、日本治療界に於ける私立病院中斯科の霸王を以て稱せらるゝも亦偶然ならざるの感を深うす。博士は九大系外科界の長老今の名譽教授三宅(速)博士の高弟にして、多年恩師に師事して造詣する所あり、其の學識深遠にして獨特の手腕を有する點に於ては既に嘖々たる定評あり。加ふるに副院長として斯道の新進松田邦三郎博士克く院長を補佐し、聲望兩々相俟つて益々向上隆盛の域に在り、著者は改めて博士の成功を祝福すると共に更に向後の活躍に期待して止まず。

△博士は福岡縣二日市町日本最古の築城大野城に城主たりし而も南朝忠臣として有名なる大野式部大輔乘資郷の遠裔にして乗孝と云ひ、明治二十三年を以て生る。熊本五高を経て大正六年九州帝大醫科を卒へ、一年間稻田(龍吉)教授の下に内科を研究し、後三宅(速)教授の指導を受けて外科學を専攻し、同十二年七月九州帝大より學位を受領す、翌十三年大阪大野病院院長として元井上病院を繼承し、昭和三年改竣増築して以來今日に至る。

△學位主論文は「急性出血性膀胱瘻及ビ膀胱中毒症ノ病原研究並ニ其免設的豫防及ビ治療法ニ就テ」にして、參考論



文は、(1)胃酸性と腺分泌トノ關係、(2)蛋白質ノ溶血現象ニ及ボス作用、外ニ歐文一篇あり、  
 △「學術の研究につき一般實地家が目覺めて全般的に向上せしめたる希望を有す。又醫界に對しても此醫業非常時をリードする手腕ある名會長の出現を望む」云々とは、博士の希望の一端を吐露せるものなり。著者は病院改築の竣工近き頃訪問したる事あり、内外頗る多端なるにも拘はらず、親しく院長室に迎へられ、初めて其の風貌に接したり、凛々としたる中に社交的圓滿さを藏し、恬澹として自己を飾らず、談論風發頗る快活さを感じ、其の濃厚にして氣品高き所に敬慕すべき深き印象を残せり。讀書家にして殊に俳句に興味を有し、菅公廟天拜山に因みて天拜と號す、其の文筆の雅健又た稱讚に價す。

◇

柳 壯 一

△北海道帝大教授にして、同醫學部に於ける中堅人物として重きを爲すは、外科學の泰斗たる柳壯一博士也。博士は東大の出身、今の名譽教授近藤(次繁)博士の門弟にして、後ち慶大の長老茂木(藏之助)博士にも師事する所あり。歐洲留學より歸朝後の博士は、専ら北大の教壇に起ち柳外科今日の礎を成すに至る。

△兵庫縣洲本の士族柳壯藏の長男、明治二十三年生にして、慶應義塾幼稚舎、東京高師附屬中學校、七高を経て大正五年東京帝大醫科大學を卒ゆ、直ちに同大學附屬醫院近藤外科に勤め、同九年六月より慶大醫學部講師として外科學を講ぜり、同十一年二月北海道帝大助教となるや、外科學研究の爲め直ちに歐洲に留學を命ぜられ、同十三年三月歸朝後間もなく教授に任ぜらる、爾來醫學部に於て第二外科學講座を擔任して今日に至れり、其間大正十二年二月慶大より學位を授與せらる。

△學位主論文は「膿(Eit)ニ關スル研究」にして其比重「プロテオリゼ」膿球成分細胞等が起炎細菌の種類、切開後の日數、全身症狀によつて右左せらるるや否やを詳細に研究して、其間の知見を讀めたるものなり。外に參考論文「所謂「ポトリオミヨーゼ」ノ二例ニ就テ」の一篇あり。他に論文夥多、著書としては「繻帶學提要」「外科学治療學總論」及「氣管枝喘息」(近刊)あり。

△感想に曰く「學生に對しての講義や指導は平凡な、しかし最も大切な部分を主としてやります。六つかしい議論や不定の學說などは學生をして迷はしめる外に何物もないと思つて、この様な事は卒業後醫局での修養に資して居ります」云々。熱意のあるところに、博士の面目の躍如たるものあり。

△博士の該博なる學殖は言はずもがな、識見高邁、常識に富み、寛大能く人を容れ、社交に對するも常に禮節を缺さず、又た能く後進の提擧に力を盡す。業餘は運動と音楽と園藝とに興味を有し克く讀書す。札幌市北四條西十五丁目に自宅あり。

◇

桂 三 友

△大阪市東區京橋三ノ七一に桂外科病院あり、院長桂三友博士は、五高醫學部の出身にして、久しく臺灣總督府に奉職し、正五位勳五等を有す。其間獨逸ミュンヘン、キール大學等に學び整形外科、外科並びにエツキス光線に關する研究を爲し、其後再び歐米各地の衛生状態を視察せり。開業拮据既に十有餘年、圓熟せる手腕は其の性格と相俟つて益々民衆の信望を高め、桂外科今日の大なる存在を認めしむ。蓋し氏の理想とせる傳統的醫者の永袖式を排して簡易化せる同病院の特徴は時代の要望に適應せるものと見るべき乎。

△博士は熊本縣大津町の出身、明治十年生にして、同三十四年五高醫學部を卒業し、直ちに聘せられて清國上海居留地病院に奉職し、翌三十五年五月臺灣總督府臺北醫院醫員に任ぜられ、間もなく同院第二病棟主任となり、同四十四年五月臺灣總督府醫學校助教兼務、同四十二年二月日赤臺灣支部醫院醫務囑託、同四十四年臺北醫院外科部長、同年臺灣蕃匪討伐の功に依り叙勳六等、同年十二月總督府より獨逸へ留學を命ぜられ、大正三年十二月歸朝復職、臺北



醫院理學的治療科長に次いで、任總督府醫院醫長兼總督府醫學教授、同十二年二月京都帝大より學位受領、同年三月再び命を受けて歐米各地を視察し翌十三年四月歸朝す、先是依願免官となり歸朝後、大阪市電氣局病院醫務を囑託せらる、翌十四年十二月以來開業、一般外科の診療に従事しつゝあり。

△學位主論文は「ウエルシ菌ニ就テ及之ニ因スル瓦斯壞疽ノ實驗的病理」にして參考論文なし。他に、(1)人工氣胸術ニ就テ、(2)肺結核ニ向ツテ人工氣胸術ノ臨床的注意、其他發表せる論著多し。

△感想に曰く「心の富は無限に求めよ、物質上の富は分に應じ食えれば足れり。父の遺訓清かれと思はぬ人はなけれ共濁り易きは心なりけり」と。又曰く「醫界に今少し獻身的大人物の輩出が望ましい」云々。

△立派な體格の持主にして常に馬を愛し、又た獵銃を好む。賦性淡泊にして能く人に接し、敢て學者を氣取る態度なく、嫌味のない肌ざはりが誰にも好感を抱かしむる博士の特性と見るべきか、又博士に面識ある著者の打診を以てせば、世の中を苦にせぬこと、唯己を全うして以て天命を待つ主義で、何事も徹底的でなければ氣に喰はぬ質で、人も之れを求めんとして時に損ずることがある、但しそれが長所であり又短所ともなる、殊に理財慾に乏しきことは最も指摘すべき點かと想はる。

### 七田龍雄

△下關診療界は近時醫博人物に富む、就中外科を以て斷然頭角を抜けるは七田龍雄博士也。博士の經營する七田外科病院は、市の中央西南部町に堂々の陣容を構へ、外觀と併せて内部の充實を期し、病床數二十五、レントゲン装置、其他紫外線、赤外線等々の施設完備す。博士は九大系の外科學者にして、母校より學位を得、特に内臟外科は最も得意とする處なり。外科界の泰斗三宅速教授の高弟として、多年恩師の指導を受け、又た法醫學は教授高山正雄博士に師事して造詣する所あり。研鑽多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して、最も活躍の全盛時に在り。

△佐賀縣小城郡小城町大字岩藏七田利三の五男、明治二十五年生れにして、佐賀縣立小城中學校、五高を経て、大正七年九州帝大醫科大學を卒へ、同八年任陸軍二等軍醫、補近衛歩兵第四聯隊附、同九年九州帝大大學院入學、同十一年任一等軍醫、同十二年大學院退學と同時に近衛輜重兵大隊附被仰付、同年十二月學位受領、同十四年二月病氣に依り依願豫備役被仰付、九州帝大醫學部副手として再び三宅外科に勤め、同時に附屬醫院醫員を被命、同年二月健康恢復と共に青森縣立病院外科皮膚泌尿科部長として赴任、昭和二年大阪市外科井上病院(院長大野良藏博士現大野病院)副院長となる、同四年二月現地に開業今日に至る。

△學位主論文は「血液凝固ニ關スル臨床的並ニ實驗的研究」にして、參考論文は「慢性腸重積症(特ニ診斷)ニ就テ」の一篇あり。其後の論文として、(1)肝臟レントゲン放射ニ依ル止血的效果、(2)十二指腸乳頭部癌腫(二例)ニ就テ(3)疼痛等は博士會心の作と見るべき也。

△多趣味の人にして謡曲、テニス、ゴルフ、乗馬、其他戶外運動を好み、日常刀圭多忙の裡にも克く保健に意を注ぐ殊にスポーツに對し醫者は率先實社會をリードすべき責務ありと信じ、現に下關市體育協會副會長及下關庭球協會長をつとめ、スポーツ醫學研究會を設立し國民將來の保健上大に奉仕する處あらんとするが如きは推獎に値す。春秋猶豊富、年壯の意氣益々壯なる秋なれば、洋々たる前途の活躍を望むや切也。

### 首藤守彦

△大阪市東區高麗橋三丁目、並に此花區今開一丁目に外科を以て著聞する首藤病院あり、斯道の俊敏首藤守彦博士の經營する所也。内部の設備と相俟つて打診、手術の好評高く、殊に其最も得意とする内臟外科に至りては、綿密なる頭腦、周到なる手當を以て斯界其の人ありと推稱せらる。博士は東大系大正四年組の出身にして



母校の恩師佐藤(三吉)博士の指導を受くる事厚く、大阪醫大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△大分縣大分郡阿南村の人、首藤勘八の長男、明治二十一年生にして、静岡縣立掛川中學校、六高を経て、大正四年東京帝大醫科を卒へ、直ちに副手として佐藤外科教室に勤め、同六年助手となり、傍ら女子醫專講師として外科學を擔任す、同七年恩賜財團濟生會大阪府病院外科醫長となり七年間勤続す、大正十二年關東大震災にあたりては大阪府救護班長として、其の手腕著名なりき、同十三年四月學位受領後、開業首藤病院を設立經營今日に至る。

△學位主論文は「胸腺ニ關スル研究」にして、(1)胸腺摘出ガ家兔脚氣様疾患ニ及ボス影響、(2)胸腺ト「ビタミン」トノ關係、(3)胸腺ニ於ケル一種ノ網狀組織ニ就テ、の三篇より成り、胸腺の機能と胸腺の組織學的檢索にして學界に重きを爲す。参考論文は、(1)畢丸胎兒腫ニ就テノ知見補遺、(2)移植術ニ就テ、(3)盲腸「ヘルニア」ニ就テなるが、其他内臓外科に關する論著は甚だ多し。

△「人生は常に誠實にやればよろしいので職業の如何を問はず終始一貫誠實を以て信條となし反省と躍進をすべきである」とのモットーは、即ち博士をして其の今日あらしめたるものと斷言するを得ん。文學的趣味豊富にして、殊に山を愛し、自然に親しむの風流あり、其號時中は文才の人として知らる。其の業餘また能く讀書毎夜深更に及ぶと云ふ。年齒不惑に入る八、元氣甚だ旺盛にして最も得意の時代あり。現代博士界中、臨床家として尤も將來を囑目せらるる重要人物なりとす。

西川 義英

△北海道帝大教授として醫學部第一外科に西川義英博士あるは言を俟たず。博士は六高を経て、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手囑託、附屬醫院勤務、同四年七月同大學助手拜命、同七年二月岡山醫專講師、及岡山縣病院醫長として赴任し、同年四月任同校教授、同九年十一月外科學研究の爲滿一ヶ年獨、英、

和へ在留を命ぜられ、同十二年九月歸朝す、同時に岡山醫大教授兼附屬醫學專門部教授拜命、同十三年六月學位受領、翌十四年普通試驗委員を命ぜらる、同年十月北海道帝大教授拜命今日に至る。

△學位主論文は「Zur Pathologie der Kleien Hirn brücken winkel-Tumoren」にして、外に参考論文として、獨文の原著二篇あり、學位は東京帝大より獲得せり。其他論著夥多、就中、(1)頭蓋靜脈管ノ「エックス」放線映像ノ臨床上意氣ニ就テ、(2)所謂腰薦痛ノ診療ニ就テ、(3)精系捻轉及畢丸獨捻轉ニ就テ、等は獨、邦文中の一部分なり。

△感想に曰く「讀書萬卷とか濟衆施藥とかは支那人の形容詞である「劍は一人敵なり」で、そう多數の患者に自ら刀は執れぬ、幸に職を學府に奉じ、研究、學生及び教室員指導の任に當つてゐる、此等の諸士が各地に於て善く努力し診療上正しく清く萬全の策を樹つる様切望する。又實績を擧げてゐるを喜ぶ」云々。博士は和歌山縣海草郡雜賀村西川信一郎四男にして、宮内省侍醫西川義方博士の弟也。明治二十一年生れなれば當年不惑有八、愛讀家にして旅行を趣味す。性來謙讓にして博學を衒はず、虚心坦懷、淡々として只管己れを虚らし、至誠一貫、唯だ天職に誠實勤勉を以てし、克く後進を愛撫す。妻榮子との間に一男一女あり、家庭圓滿なり。札幌市南十條西一丁目に住む。

中村 男也

△大阪鐵道病院長中村男也博士は、東京帝大醫科の出身にして、明治三十六年卒業後母校の外科教室に勤め、同三十八年十二月迄恩師佐藤三吉博士指導の下に外科學を專攻す、其間同三十七年三月大學院入學、同三十八年一月任同醫科大學助手、同三十九年四月より四十年二月迄郷里に於て開業、同四十年三月より四十四年一月迄公立彦根病院勤務、同四十四年一月より大正四年三月迄縣立岐阜縣病院勤務、同四年三月神戸鐵道病院勤務、同年九月在外研究員を命ぜられ、同十二年十二月歸朝、同十三年七月學位受領、次で神戸鐵道病院長を歴て現職に任せられ今日に至る。



△學位主論文は「マウス」体内ニ於ケル溶血性連鎖球菌ノ性質」にして、参考論文は、(1)「ゲラチン」ニ因ル「バクテリオファージ」作用ノ阻止、(2)「リゾチム」作用ニ就テの獨逸文原著なり。學位は東京帝大より獲得せり。  
 △長野縣上高井郡須坂町の人、明治十一年生る。學究的眞面目なる紳士にして、謹嚴なる風貌の裡に高邁なる品格を備え、名利に淡なり。大阪市住吉區天王寺町三二五三ノ三に住む。

◇ 石山福二郎

△岡山醫科大學外科學教授石山福二郎博士は、新進なる九大系の外科學者にして、特に内臟外科は最も得意とする處なり。博士は東京市日本橋區吳服橋通四丁目に本籍を有し、石山萬之助の二男にして、明治二十六年東京市に生る。獨逸協會學校中學、一高を経て、大正七年九州帝大醫科を卒へ、直ちに助手として第一外科教室に勤め、三宅速教授に師事す、同九年助手となり、同十三年七月九州帝大より學位を受領す、同年任助教授、昭和四年歐洲留學を命ぜられ、主として伯林大學「シアリテ」ザウエルブルック教授につきて、各種臟器手術の胸腔臟器機能に及ぼす影響を研究し、昭和七年歸朝、臺北醫專教授たりしが、同九年二月現職に任ぜらる。外科學會評議員として多年盡力する所あり、昭和七年第三十三回日本外科學總會に出席、「廣汎性肺虚脱」に關する研究を發表し學會の注意を喚起せり。

△學位主論文は「膽汁ノ十二指腸内排出ニ際スル膽囊機能ノ實驗的研究、特ニ膽囊壁ニ存スル「ヒヨリン」様物質ト「アドレナリン」トノ關係ニ就テ」にして、参考論文としては、(1)畢丸移植ノ臨床的並ニ實驗的研究、(2)三叉神經痛ニ對スルガツセル氏神經節別出術ニ就テの二篇あり。研究方面にては内臟外科中特に胃腸、膽道疾患に興味を有し、殊に膽道疾患に對する研究論文多く、就中胆石症につきては三中教授と共著の大篇あり、其他論著三十有餘種に及ぶ。  
 △感想に曰く「醫育統一、會て叫ばれ又一度實現せる醫育統一が再び専門學校出現により破れたるは遺憾に不堪」

「各學會に設備完全なる演說會場を設立したし」云々。希望としては、(1)眞の意味に於ける各科特に内外科の提携による完全なる治療法の出現、(2)外科的治療成績の向上、(3)歐米外科界に對する指導的地位の確立等なりと云ふ。運動家にしてスポーツに多大の趣味を有し、柔道四段、又た俳句を好くす、性格は直情徑行學究的人也。岡山市大和町一五に住む。

◇ 鈴木諒爾

△海軍火藥廠醫務部長海軍々醫大佐鈴木諒爾博士は、埼玉縣入間郡三ヶ島村の人、明治十九年生にして、一高を経て、京都帝大福岡醫科大學に入學、大正三年九州帝大醫科を卒へ、同年海軍中軍醫に任ぜらる、同六年大軍醫に進み、同九年日獨戰役の功に依り双光旭日章を賜ふ、同十年依命九州帝大大學院に入學、整形外科教室にて二ケ年間住田教授指導の下に研究す、同十二年任軍醫少佐、同十三年七月學位受領、同十四年海軍々醫學校教官兼監事に任命、昭和二年任軍醫中佐、同三年一月叙勲四等、同年二月軍令部出仕と同時に歐米出張、を命ぜられ、同四年一月歸朝、同年二月佐世保海軍病院部員、同年十一月戰艦陸奥軍醫長、昭和五年十二月軍醫學校教官兼監事、昭和六年十二月任軍醫大佐、海軍燃料廠醫務部長に補せられ、昭和七年十一月海軍火藥廠醫務部長の現職に轉補せらる。  
 △學位主論文は「種々ノ年齢ニ於ケル人體管狀骨々端部骨長徑成長附所謂正常内化骨ノ本態ニ就テ」にして、参考論文は、(1)人體胸部ノ廓發育狀態ト肋骨長徑成長トノ關係ニ就テ、(2)骨移植並ニ成形手術ノ興味アル實驗例ニ就テ、(3)眞性侏儒「ナノメシア、プリモルデアーリス」ノ一例ニ就テ、(4)距骨々折ノ數例及び其療法ニ就テなり。學位は九州帝大より獲得せり。現に神奈川縣平塚市海軍火藥廠集會所に住す。

◇ 河合五郎

△靜岡縣三島町四三六に私立三島病院あり、院長河合五郎博士の經營にして外科を以て著聞す。



博士は慈惠醫專出身の外科學者にして、北海道帝大の重鎮今裕教授に師事して免疫病理學を專攻し、學位は北海道帝大より獲得せる斯科界の篤學者也。今や手腕、聲望相俟つて其の地方を風靡する勢力を有す。

△明治二十五年北海道空知郡瀧川町に生る、愛媛縣士族友田正五男にして、東京府士族河合光雄の養子となり現姓を冒す。大正六年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに同校助手拜命、今教授指導の下に病理學研究、同七年十二月同教室を辭し、北里研究所副助手を命ぜられ秦部長の下に細菌學研究、同九年六月北里研究所を辭し、東京市京橋區外科林病院に醫員として同十一年四月迄勤務、再び東京慈惠醫大助手を命ぜられ細菌學研究、同年七月同醫大講師囑託、細菌學實習を擔任す、同十二年九月震災のため北海道帝大病理學教室研究生として今教授の下に免疫病理學の研究に従事し、翌十三年四月同大學講師拜命、同年七月學位受領、同年十月辭す、爾來私立三島病院長として今日に至る。

△學位主論文は「「エビデルモトキシン」ノ病理學的研究」にして、表皮細胞毒の皮膚溶解作用あるを究め、且つ之が胃粘膜細胞に對して有毒なるを實驗し、火傷後胃潰瘍發生の原理を採明せるもの、參考論文は、(1)内國製「リゾール」類似品ノ効力比較試驗、(2)多數ノ「スピロヘータ」ヲ證明セル多發性粟粒護腫ノ一例、(3)實驗的「ショック」ノ血液像、外四篇あり。静岡縣田方郡三島町四三六に住む。

### 細見 憲

△陸軍二等軍醫正細見憲博士は、現に東京陸軍々醫學校教官に在り、得意の外科を擔當す。博士は九大系の外科學者にして、大學院在學中、恩師後藤七郎教授指導の下に外科學を專攻し、母校より學位を獲得せり。△學位主論文は死組織移植に關する實驗的並に臨床的研究にして、動物實驗の成績を基礎として人體に於て死體を缺損部に、死神經を神經缺損部に移植し、死筋膜を強直關節の授働手術に、又死腫を直腸脫患者の肛門輪狀狹窄法に應用し、臨床例十七例に於て良好なる成績を收め得たり。外に參考論文は、(1)外傷性肉腫ニ就テ、(2)ペーシェット氏乳

子病ノ一例、(3)胃腸鉗子ニ就テ、(4)興味アル腹内石灰化性腫瘍ニ就テ、(5)犬ノ膽道成形術後ニ發生シタル胃及ビ十二指腸潰瘍ニ就テの五篇あり。

△京都府天田郡細見村細見愛太郎長男、明治二十七年生れにして、京都府立一中、三高を経て、大正八年九州帝大醫學部を卒へ、同九年六月任陸軍二等軍醫、同十年九月九州帝大大學院學生として後藤七郎教授指導の下に外科學專攻、同十一年八月任一等軍醫、同十二年九月休職、同十三年五月待命、同年七月補歩兵第二十四聯隊附、同十四年一月學位受領、大正十五年より昭和四年迄獨、佛、米に留學す、歸朝後補陸軍々醫學校教官、軍陣外科學を擔任す。

△性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、偏に恩師先輩の助力を感謝し、淡々として己れを虚らす、能く人を愛し、又克く後進の指導に力む。其の態度の眞摯にして奥床しきところに博士の人格を窺はる。研究以外には劍術を趣味し又野外運動を好む。家庭には良妻美代子あり、弟は京大出の理學博士にして現に海軍燃料廠研究部主事たり。東京市淀橋區西大久保三ノ三〇に住む。

### 前田 和三郎

△慶大教授にして整形外科學の主任たる前田和三郎博士は、京大系の錚々たる外科學者にして、曩に歐米留學より歸朝後、直に熊本醫大教授に任ぜられたるが、在職二年の後、更に新設の整形外科學教室の主任として迎へられ、將來大に慶大に活躍せんとする新人物也。

△大阪の人、明治二十七年生にして當年漸く四十有二歳也。大阪府立北野中學校、三高を経て、大正九年京都帝大醫科を卒へ、直に助手として外科學及び整形外科學教室に勤め、同十一年助手となり同教室に勤續す、同十二年之を辭し大學院入學、足立(文太郎)、鳥瀉(隆三)、伊藤(弘)三教授指導の下に外科學及び解剖學を研究す、同十三年鳥瀉教授の命により慶大醫學部助手として理學的診療科に入り、藤浪(剛一)教授の指導を受け「レントゲン」學研究、



同十四年京都帝大へ歸學、同年二月京都帝大より學位を得、大學院退學、同時に京都帝大醫學部講師となる、同年文部省在外研究員として外科學、整形外科學及び「レントゲン」學研究の爲米、佛、獨へ一ヶ年在學を命ぜられ、同年末歐米視察を終へ鳥瀉外科學教室へ歸學す、同十五年任熊本醫大教授、整形外科學擔任、猶同學理學的診療科教室兼任を命ぜらる、昭和三年慶大醫學部に轉じ、整形外科學教授として現在に至る。

△學位主論文は「腸管疊積症ニ關スル實驗的研究補遺」にして、第一、二回報告より成る。參考論文は、(1)本邦人十二指腸ノ局所解剖學ニ就テ(獨逸文)(2)胃腸吻合術及胃切除術後ニ於ケル「レントゲン」像ノ外科學的考察、(3)輸尿管ノ深部ニ存在セル膽石摘出術ニ關スル研究、(4)伊藤教授「クリニック」ニ於ケル腹水治療の四篇なり。

△「有爲の門下を養ひ日本の整形外科學の發展を計りたし」といふ抱負の下に、博士は初め外科をおさめ、後整形外科に轉じ、之に精進せる學者にして、其學生を教導するに諄々敢て倦まず、其職を醫學教育に奉じて以て天職と爲す純學者肌の人也。趣味としては戶外運動、殊に游泳とボートとを最も好み、時に又音樂に親しみ風流を樂しむの餘裕あり。東京市麻布區本村町二二五に住す。

### 赤松 得二郎

△金澤市仙石町五に赤松外科外病院あり、院長赤松得二郎博士は東大系の外科學者にして、豫備陸軍一等軍醫正の印綬を帶び、正五位勳三等を有す。陸軍々醫學校教官鶴田軍醫總監に師事して、外科學を造詣する所あり。學位論文は中華民國山東省に於ける「カラ、アザール」流行の狀況を調査し、其臨床的及生物學的研究を論じたるものにして、學位は母校より獲得せり。

△岡山中學校、六高を経て、明治四十一年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに陸軍見習醫官となり、同四十二年六月任陸軍二等軍醫、補歩兵第四十一聯隊附、四十四年六月補普通寺衛成病院附、同年十二月任陸軍一等軍醫、補工兵第十

一大隊附、大正元年八月陸軍々醫學校外科專攻學生被仰付、同二年七月補歩兵第四十三聯隊附、同三年七月陸軍々醫學校修業、同七年六月任陸軍三等軍醫正、補京都衛成病院附、同八年六月補歩兵第五十一聯隊附、同年十月兼補津衛成病院長、同九年四月青島陸軍病院長兼青島守備軍民政部御用掛被仰付、同十一年八月任陸軍二等軍醫正、補金澤衛成病院長、同十四年四月學位受領、同年八月任陸軍一等軍醫正。

△學位論文は「山東「カラ、アザール」ニ就テ」にして、參考論文なしと雖も、他に、(1)撓骨環狀靱帶不全脱臼ニ就テ、(2)膝關節十字靱帶及側靱帶斷裂ニ就テ等の外發表せる論著相當多數ありと聞く。

△博士は岡山縣小田郡矢掛町赤松莞爾二男、明治十五年生る。赤松純一博士の弟にして、赤松翁一博士の從兄也。多年陸軍の醫界に活躍せる功績は言はずもがな、診療界に進出して以來日猶淺く、開業据拮漸く數年なるも、開業醫として今や牢乎たる地盤を有し、其の今日あるは博士の前半生史これを語りて餘蘊なし。當年知命に入る四歳、元氣旺盛にして學識、手腕、人格共に圓熟の域を超越して一段の貫祿を加ふ。雲生はペンネームにして、文學趣味に富み、古醫書を愛讀し、漢學殊に支那時文に堪能なり、又た圍碁、將棋、水泳などを好む。妻生浦との間に二男五女あり、良家庭を爲す。

### 土屋 直義

△九州診療界の中樞たる福岡市東中洲町に土屋外科病院あり、院長土屋直義博士の經營にして、内部の設備整ひ、多年の聲望と相俟つて門前常に盛況を呈し、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有す、蓋し成功と云はざるを得ず。博士は熊本醫專出身の外科學者にして、九大教授中山(森彦)及び後藤兩博士に就きて外科學の蘊奥を究め、又病理學は同中山(平次郎)及び田原兩博士の指導を受け、九州帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。

△大正元年熊本醫專卒業後、直ちに九州帝大第二外科教室に入り中山森彦博士に師事す、同二年十月鐵道院鳥栖治療



所主任として赴任し、同三年九月福岡縣三井郡小郡町に開業す、同十年十月九州帝大病理學教室に入り中山平次郎及び田原淳兩博士に師事し、爾來二ヶ年間内分泌腺の研究に従事す、同十二年末再び第二外科教室に轉じ、後藤七郎博士の下に同十四年六月迄外科學を專攻し、同年五月學位受領し、爾來専ら診療に従事す、昭和六年には暹羅皇帝が米國よりの歸途同伴、暹羅國に衛生視察に赴き更にビルマ、印度、マレイ半島に足跡を印す。

△主論文は「耳下腺ノ機能ニ關スル研究」と題し耳下腺と他の諸臓器との關係及び該腺機能に就て諸方面より實驗的研究を試みたるものなり。参考論文としては、(1)膀胱ノ別出或ハ障碍ガ中樞神經組織並ニ肝臟組織ニ及ボス影響ニ關スル研究、(2)セルトリ氏細胞核ニ就テの二篇あり。著書としては日本に於ては勿論、外國に於ても未だ出版を見ざる「醫療機器學」あり、頗る廣範のものなり。猶古來よりの内服藥たる硫酸「マグネシヤ」を主劑として外國藥を創製し、大阪武長より社會に提供し甚大なる効果を擧げつゝあり。

△福岡縣三井郡小郡村土族土屋秀民次男、明治二十一年生る。當年不惑に入る八歳、年壯氣鋭、學究的溫厚の紳士にして、臨床家として多年の經驗に富み、今は腕の牙え盛なれば、最も重望せらるゝ得意時代に在り。人と爲り穩健にして篤實、人に對するに應答の禮を重んじ、理解あり同情に富む、其の篤き聲望を博せるも、蓋し其の性格の反映なるを思はしむ。文學趣味豊かにして文筆の才あり、蒼城を號とす、また刀劍を愛し旅行を好む。

### 清水 亮

△清水亮博士が院長として主宰經營しつゝある渡島外科病院は、函館市(蓬萊町五十番地に在り)に於て最も古き歴史を有する外科専門病院として著名なるが、昭和九年三月當市未曾有の大火に罹災後、舊位置に於て復興、従前通りの名稱を以て病院の建築成り内部の設備を完備せり。博士は金澤醫專出身の外科學者にして、北海道帝大より學位を獲得せる篤學の士也。斯間北海道帝大にては兒玉教授に細菌學を、田所教授に生化學を、泰及び西

川兩教授に就て外科學を專攻せり。特に蟲様突起外科及び腎臟外科に最も興味を有し特獨の手腕を有す。

△博士は大正三年金澤醫專を卒へ、直ちに一年志願兵として第一師團歩兵第一聯隊に入營、五年三月退營と同時に金澤醫專衛生細菌學副手となる、同七年任陸軍三等軍醫、同八年任金澤醫專助教授、同十年任北海道帝大助手第一外科教室勤務、同十四年北大醫學部講師となる、同年六月學位受領、昭和二年北海道岩見澤町立病院長として就任す、同五年二月獨逸外科學界の情況視察の途に上り、伯林市を中心として獨逸各都市著名なる大學、公市立病院外科を見學し、次で佛、英を廻はつて、同年秋歸朝し、同年十一月より函館市に於て最も古き歴史を有する渡島外科病院を繼承し其の院長として今日に至る。

△主論文は「外科的領域ニ於ケル赤血球沈降速度並ニ其本態的研究」にして、参考論文は、(1)眼球臟器ノ生物學的研  
究、(2)流行性感胃ノ細菌學的研究、(3)定蹠ニ發生セル汗疱様皮膚病ヨリ得タル絲狀菌ニ就テ、(4)大動脈瘤ノ比較病理  
解剖學的研究、(5)血清蛋白質ノ理化學的變化ヲ基準トスル酸滴定試験の五篇なり。

△感想に曰く「これからの臨床醫家たるものは、須く自からの持つて居る學位だとか、或は肩書だとか云ふ氣持をか  
なぐり棄て、實力をもつて技能を發揮せしめ病人に對しては一刀を加へ、一針を施すにも自己の精魂を打ち込んで事  
に當り、以て濟生の誠を盡す様に心掛くべきであらう。私は常に所謂完成された醫者とは、眞の健康と、強い信仰心  
と而して絶えざる努力をもつて自分の技能の向上を計り、經驗を重ねる事に精進する人であらねばならぬと思つて居  
る」云々。至言なる哉。

△博士は東京市淺草區東三筋町に本籍を有し、清水重高長男、明治二十四年生る。年齢漸く壯熟して多量の分別を有  
し、臨床家としては最も重望せる年輩にあり。益々内容を充實させて病人の幸福を計り度いと希望を有し、猶多く  
の資金があるならば、獨逸のポツツダムにあるクリュツベルハイムの様なものを造つて見たい抱負を持し居れり。貴



公子然たる風貌を具へ、温厚にして眞摯なる態度は人に敬慕せらるゝ所以なるべし、運動趣味の人にして殊に競技の見物を好むと云ふ。

中村愛助

△東京市中野區櫻山町五〇にて外科専門を以て開業せる元陸軍々醫學校教官陸軍三等軍醫正中村愛助博士は、九州帝大出身の外科學者にして、陸軍々醫學校にては軍陣外科學を專攻、當時より學位論文を研究完成し、次で嘗て獨逸に留學するや、柏林大學外科學教室にてピール教授の指導を受け研鑽大に得る所あり、歸朝後又母校の恩師後藤七郎教授に師事して、學位論文提出、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△博士は三高を経て、大正四年九州帝大醫科大學を卒へ、同五年二月陸軍々醫志願、同九年任陸軍二等軍醫、同六年陸軍々醫學校入學、同八年同校卒業の上補東京第一衛戍病院附、同年十二月歐洲出張を被命、主として獨逸にて研究英、佛兩國を經由して、同九年十二月歸朝す、再び第一衛戍病院外科室勤務、同十一年三月補龍山衛戍病院附、同十三年三月補廣島衛戍病院附、同年九月内地修學の爲め休職の上、九州帝大醫學部後藤外科に入り、作業完成の上、復職を爲し、同十四年六月學位を受領す、同年八月補東京第一衛戍病院附、兼陸軍々醫學校教官、次で東京第二衛戍病院附、陸軍々醫學校教官を経て、昭和三年現職を去る、爾來現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は「肺臓外科ニ關スル實驗的研究」參考論文は、(1)外科手術用絹絲ノ一般性質ト組織内ニ於ケル運命及ビ周圍組織ニ及ボス病理的變化ニ關スル實驗並ニ臨床的研究、(2)前論文補遺、(3)外傷性腸管破裂ノ症例ト其ノ處置ニ就テ、(3)上顎内皮細胞腫全切除ノ一例の四篇なり。其後他に發表せるもの尠からず、最近實地家、學生の爲外科書を著述公刊せり。

△感想に曰く「現代學界に於ける所謂官僚主義は、學術の蘊奥を極めたり斯學向上には偉力はあるが、大先輩學者たるもの

の自己勢力扶植傳播に傾くやの傾向弊風を認め遺憾に思ふ、學界一方に立つの士は宜しく純眞なる學究の士でなければならぬ、その境遇と學者のバックなるもの如何に關係はない筈である。醫師が非常に多い、研究の根源に立つて實地に之を應用するのが醫師の役目である、醫學の性質上仁術を施行する此の醫師は、現在生活上や醫學上大變弱い、不利な地位に置かれてある様に見へる、自分は眞の醫家として醫學なるもの眞意「仁術なる」言葉に合ふ様に處して行きたい、往々に見られる、客引き態度や、自己宣傳、他學者の誹謗無智なる患者に對する勝手な行動等は眞正面より之を排撃し、苦しめる病者に向つて衷心より、正しく救つて見たい誠意は醫師實地醫家をして、やがては社會一般より敬慕せらるゝ位置に到らしむるであらう」云々。

△東京府北多摩郡昭和村に本籍を有し、明治二十二年生る。引締りたる體格にて、凛々しき風貌に學者らしき威嚴を存し抑すべき温情を藏す。一度び其の聲咳に接せんか、敢て城壁を設けず、謙遜にして少しも自己の才學を衒はず、恬淡として談話を好み、應待眞摯にして明朗なる態度は頗る好感を覺えしむ。松塘はペンネームにして文才あり、洋書を好くす、劍道及び柔道にも堪能にして敢て人後に落ちず、また刀劍を愛し多く秘藏して鑑賞を樂しむ。年齒當に不惑に入る七、年壯氣銳にして春秋猶豊富なれば、幸に自重加餐を祈るや切也。東京市中野區櫻山町五〇に住む。

伊藤幸憲

△現代外科界の大家として浪速杏林界に久しく其名聲を馳せ、現に自己經營の大坂築港病院（港區四條通り二ノ一七）院長として、私立病院中に大なる存在を認められつゝあるは、醫博伊藤幸憲其人なるは、既に何人も識る所なるべし。顧みて其今日ある博士のプロフィールを打診するに、博士は岡山醫專出身の外科學者にして、岡山醫大より學位を獲得せる篤學の士、嘗ては米國に遊び其地にて病院を經營し、或は紐育市コロンビヤ大學大學院に入學して教授クランクに師事し、後ちボストン市ハーバート大學大學院に轉じて外科病理學教室に入り、カウン



ルマン教授及びウォルバツハ教授の指導を受け、次で渡英してロンドン大學のユニバーシティ、カレッジ、ホスピタル醫科大學外科教室に入り、チヨキス教授指導の下にて研究せるなど、歴々として其研鑽努力の跡を語るに餘蘊なし。既にしてその玲瓏たる手腕と相俟つて盛大なる今日の成功を贏ち得たるもの亦偶然ならざるを想ふ。

△博士は大阪府立北野中學校を経て、大正二年岡山醫專を卒へ、直ちに岡山縣病院外科教室勤務、同四年外科助手醫長拜命、同五年四月朝鮮元山府立病院副院長、同七年十一月渡米加州スタクトン市に於て日本病院經營、同九年六月コロンビヤ醫科大學大學院入學、同十年一月ハーバード醫科大學に轉じ、同十一年二月渡英、ロンドン大學にて同十二年二月迄研究、傍ら四ヶ月間獨、塊、佛、伊、瑞、其他歐洲各國を視察し同年四月歸朝す、直ちに岡山醫大病理學教室に入り田村教授の下に同十四年十月迄研究を續け、同十四年七月學位を受領す、同十五年以來大阪私立築港病院を經營す、次で東區高麗橋一丁目至高麗橋醫院を増設經營する所ありしが、昭和五年二回の大患に罹りて以來本院の經營を畏友小野醇吉博士に委託し、爾來四星霜の後健康全く舊に復したるを以て、昭和九年五月以來僚友相原義一博士と共同し分院伊藤外科泌尿科院と稱し、同醫院に於て再び從來の如く、外科泌尿科専門にて醫業に従事することとなれり、但し斯間大阪築港病院の方は從前通りにて變ることなく今日に至れり。

△學位主論文は「骨膜並ニ骨髓ノ移植ニヨル骨再生ニ就テノ實驗的研究」にして、獨逸文の原著なり。外に參考論文として獨逸文の原著五篇あり。

△感想の一片を述べて曰く「醫政に關與せざる自分は自分の専門の外科を以て熱心と親切を以て患者に對し報酬は患者の貧富に應じて決定なし居れり。開業に對しては日本の現狀は不可なり、宜しく米國の如くに各醫師は單に「オフキス」を有するのみにして一般開業醫の自由の出入なし得る病院の經營を取るべきなり。尙各大學を今日以上に開放して一般開業醫の自由研究の便宜を計られたし」云々。

△博士は大阪市の人、明治二十三年生る、年齒不惑に入る六歳也。漸く壯熟して一段の重望を加え、臨床家としては最も腕の冴えたる全盛時代に在り。學究的濃厚の紳士にして、居常禮儀節文を重んじ時務に缺くることなし、一度其の風貌に接せんか、舉措悠々として通らず、快活にして恬淡たる態度は好感を與へ、又一掬の温情は更に敬慕の念を深からしむるものあり。趣味としては第一にゴルフ狂、外に謡(觀世)、俳句(ホトトギス派)、碁などに親しみ、讀書を愛す、又時に旅行を樂しむ。自宅は兵庫縣武庫郡甲東園に在り。

◇ 宮路善久

△滋賀縣蒲生郡中野村(八日市中野)に外科専門宮路病院あり。院長宮路善久博士は京大派の外科學者にして、母校の恩師猪子止才之助、伊藤隼三、鳥瀉隆三博士等の指導を受くる所多く、母校より學位を獲得せる名醫博也。顧みて其の學歴より博士の年歴を公開すれば、東京中學、二高を経て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ直ちに同大學副手として附屬醫院に勤務、同十一年任同大學助手、引續き附屬醫院に勤務す、十四年八月學位受領、同年依願免本官、同時に京都帝大醫學部講師囑託となり、外科學教室に勤む、同年依願解囑、津市立病院外科部長に任ぜられ、昭和三年辭職直ちに歐米視察を爲し、歸朝後頭書の現住所に開業今日に至る。

△主論文は「特殊溶解現象研究」にして、(1)鶏赤特殊溶解血現象、(2)鶏白血特殊溶解現象、(3)特殊溶解素ノ生産ニ必要ナル免疫元の三篇より成る。參考論文は、(1)「アンチモン」ノ靜脈内注射ニヨル「フライリア」症ノ治驗、(2)「アンチモン」劑ニヨル「アメーバ」赤痢ノ治驗、(3)血清蛋白ノ血清學的證明法ニ就テ、(4)惡性淋巴腺腫ニ就テの四篇なり、他にも論著夥多。

△感想に曰く「迷信とか頑迷とか或は認識不足の爲め折角救命的な進歩せる現代の醫療が拒まれること屢々あり、遺憾至極である、吾々は一般民衆に醫學的常識を認識せしむることが現時治療界の急務でないかと思ふ」云々。然かあ



らしめ度きものなり。滋賀縣蒲生郡中野村醫師宮地直一嗣子にして、明治十八年京都府須知町にて生る。當年知命有一にして學識、經驗、人格共に爛熟し一段の重望を加ふ。性來田園生活に興味を有し、日常刀圭多忙の裡に又た閑日月あるを楽しむ。賦性濃厚篤實、患者に對し、又人に接するに親切と、同情と、理解とを以てす。

◇  
**藤田宗一** △東京市澁谷區圓山六五に在り、外科専門を以て喧傳する藤田病院は、藤田宗一博士の私立病院也。開業拮据十年有餘、既にして牢固たる地盤を有し、博士獨特の手腕は益々其の特技を揮ひ、明敏にして利屏なるメスの好評と相俟つて人氣を吸收し、今や遠來よりの外來患者輻輳すと云ふ。博士は東大系の外科學者にして、恩師鹽田教授指導の下に斯學の蘊奥を究め、又傳研長與教授の下に實驗病理學を專攻し、母校より學位を獲得せる近來の名醫博也。

△學歷及び閑歴より言へば、三高を経て、明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに醫術開業試驗附屬病院に於て鹽田教授指導の下に外科學研究、同四十五年三月醫術開業試驗委員拜命、大正二年七月より約二ケ年間三重縣尾鷲病院に就職、同四年二月同院を辭し上京再び醫術開業試驗附屬病院に於て外科學研究、同十一年七月より東京帝大傳染病研究所病理學教室に於て長與教授の指導を受け實驗病理學研究、同十四年五月同所退學、同年十月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は「畢丸内分泌ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文「メツケル氏憩室ニ因スル腸絞扼物ノ興味アル治驗例」の一篇あり。他にも論著夥多。著書には「臨床紫外線療法」あり。

△感想に曰く「國家が非常時であると共に、杏林界亦非常時である。國家の國民保健衛生に對する施設不備加ふるに一定の體系を備へず、その根本方策の那邊に存するやを知るに苦しむ。近時内務省に於ては國民保健法案を立案して、

之を議會に提案すると稱し、逕信省に於ては簡易保險局に於て疾病保健を立案せりと稱し、農林省管下には産業組合を動員して組合病院の設立を助成す。之等何れも地方農村疲弊の源を除去せんと努むるもその方策たる多岐多端にして統制を缺き、國家としての醫事衛生に對する根本方針を知るに苦しむ。宜しく衛生省を設立して國家行政の重要事たる醫事衛生の根本策を樹立しその方途の萬全を期す可し」云々。三思傾聽すべき也。

△香川縣大川郡津田町藤田文祐養嗣子にして、明治十八年生る。資性濃厚、眞面目にして、學者タイプの風貌凛々として威嚴を存し、高邁なる品格を備ふ。平生刀圭甚だ多忙にして席を温むるの暇なしと雖も、元氣旺盛にして日夜倦むことを知らず、孜々として熱心に診療に精進し、患者に對するに誠意誠實を以てし、飽く迄親切を盡す點に博士の特徴を窺はる。書見を業餘の楽しみとし、俳句を能くす、雨琴は其號也。氏は又多年醫師會のために盡瘁し現時澁谷區醫師會長として同業間にその重きをなし、又一面日本醫師會醫政調査委員、及び東京府醫師會理事として杏林界多難の局面に立ち、業餘の閑を空うせず専ら醫事公共の爲に努む。趣味としては、謠曲に對する趣味は一段にして素人天狗の一人なりとの定評あり。家庭には妻樂子との間に二男二女あり。

◇  
**兒玉周一** △東京慈惠醫大助教兒玉周一博士は、大正六年東京慈惠醫專を卒へ、直ちに同學生理學、醫化學教室助手に任命せられ、同七年より八年十二月迄東京病院外科醫員勤務、同九年より十三年迄東京帝大附屬傳染病研究所研究生、同十三年三月渡米留學、同十五年六月渡歐、同年末歸朝、同時に東京慈惠醫大講師となり、次で助教に任命せられ、東京病院並に慈惠會醫院外科を擔任す、其間大正十五年一月東京帝大より學位を授與せらる。

△主論文は「膽汁分泌機能ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)非經口的ニ注入セル肝細胞乳劑ニ因ル肝臟ノ検査、附諸臟器ニ及ボス影響ニ就テ、(2)肝膽ノ分光學的研究ニ就テなり。鹿兒島市醫師町兒玉利實の三男、明治二



十五年生る。博士の夫人阿里子は東京帝大名譽教授故河合鍾太郎博士の次女にして、京都帝大教授市河三祿林博は義兄に當る。春秋猶豊富、前途有爲の資、幸に自重加餐を祈る。東京市澁谷區千駄ヶ谷町原宿一七〇に住す。

伊藤 肇

△名古屋市技師にして名古屋市民病院外科部長たる伊藤肇博士は、既に世人周知の如く外科界の大立物にして、京都帝大名譽教授たりし故伊藤隼三博士の嗣子にして、大正六年京都帝大醫科を卒へ、直ちに同大學副手を歴て、八年任助手、同年附屬醫院看護婦講習科講師囑託、十一年任京都帝大助教、醫學部勤務、十四年看護婦産婆養成所看護婦科講師の囑託を解かる、同年依願免本官、南滿洲鐵道株式會社職員を命ぜられ、滿鐵大連醫院外科醫長として赴任す、十五年三月京都帝大より學位受領、昭和四年六月滿鐵大連醫院を辭し鳥取市に亡父の遺業を繼承して伊藤病院を經營す、同六年三月伊藤病院を鳥取市に寄附す(以後市立鳥取病院として經營されつゝあり)、同年四月大阪財團法人田附興風會北野病院科長を囑託され、同時に京都帝大醫學部講師を囑託さる、同年五月醫學部講師並に北野病院科長を辭す、同時に任名古屋市技師、名古屋市民病院外科部長を命ぜられ今日に至る。

△主論文は「ワクチン」、「ワクチン」上澄及び「ワクチン」含菌體ノ免疫學的研究」にして、參考論文は、(1)特發性總輸管擴張ノ一例ニ就テ、(2)呼吸固定性ト肝臟腫瘍、(3)嚥下時運動性ト甲状腺腫、(4)甲状腺結核ニ就テ、(5)原發性外傷性皮膚接種結核ニ就テ、(6)結核性胸圍塞性膿瘍ノ手術法ニ就テ、(7)同上、(8)陳久性膿胸ノ治療方針ニ就テ、(9)無菌的手術後皮膚縫合ニ際シ排液「タンボン」挿入ノ可否ニ就テ、(10)氣管枝喘息ニ對スル頸部交感神經切除術ノ實驗的批判の十篇なり、此他にも論著夥多。

△亡父隼三博士は東大の出身、恩賜組の首席にして、在學中より非凡の英才を以て稱せられ、嘗て獨、瑞に遊學し、歸朝後京都帝大教授に任じ、附屬醫院長、醫科大學長を経て醫學部長時代に再び歐米を視察し、大正十三年官を辭し

て京都帝大名譽教授となり、爾來鳥取市に伊藤病院を設立して専ら診療に従事し、餘生を送りつゝありしが、昭和四年五月逝去せり、可惜也。肇博士は即ち其の長男にして、明治二十五年生る。嚴父の衣鉢を繼ぎて嚴肅謹正、學者肌にして世の毀譽褒貶の如きは毫も介意せず、曩には亡父の創設せる伊藤病院を鳥取市に寄附するなど、恬澹として名利に顧慮することなし、友情に篤く同情に富み、應答の禮を重んじて時務に缺くことなし、其の眞摯誠實なる態度は故人の人格を偲ばせて敬慕の念を深からしむるものあり。名古屋市東區主税町三ノ一五に住む。

村尾 圭介

△當世博士界中稀に見る兄弟三博士の一美談として茲に擧ぐべきは村尾圭介博士、内藤八郎博士村尾千之博士の三兄弟なるべし。而かも三兄弟共揃つての謙遜家なれば、或は之を一笑に附して吾不關焉の態度を持するかは知らざるまでも、村尾圭介博士のプロフィールに就て、著者の立場より茲に聊か之を品隲せしめんか、圭介博士は明治四十二年卒業の東京帝大系の錚々たる外科學者として聞え、近藤外科より濱松市常盤の村尾醫院にて外科の診療に従事し、次で東京市中野の療養所に勤務の後横濱療養所に移り、東京市本郷區元町に在る現在の成器寮醫館創立に際し招かれて赴任し來り、爾來本寮經營の衝に當り今日に至れりと聽く。要するに氏の前半生史を一貫して多く結核治療の爲め努力盡瘁しつゝあるものと肯かせしむ。

△學位は大正十五年四月母校より獲得せるが、學位論文は「組織體外培養ニヨル最項ノ實驗」と題する博士會心の作と見るべく、其の學問的批判は既に學界に定評あれば贅せずもがな、氏が努力研鑽の跡を物語るものなり。趣味としては書畫を好み、殊に書道に堪能なりと聽く。有名なるクリスチャンにして、人格高潔、義俠に富み能く後進を愛撫し又克く人を容るの雅量有す、學究的温厚の紳士として敬意を表すべき也。出身地は静岡縣濱名郡にして、亡醫師村尾春洋の三男として明治十六年生る。長兄醫學士村尾達彌は亡父の遺業を繼ぎ、次兄は小澤徹二、長弟は醫學士磯



部晋、次弟内藤八郎醫博は名古屋市東區針屋町二丁目にて開業、末弟村尾千之醫博は神奈川縣鎌倉町に開業せり。猶聞説、東京市療養所長田澤鎌二醫博、成器寮主田澤秋作、及び田澤止郎とは義兄弟の間柄であり、千葉醫大教授伊東彌惠治博士とは従兄弟の關係ありと、多數の學者を輩出せる餘慶ある家柄といふべし。東京市世田谷區代田二丁目九六一に住む。

◇

坂田敬之

△愛媛縣新居濱町住友病院に坂田敬之博士あり、博士は東大出身の外科並にレントゲン科學者にして、陸軍三等軍醫正の印綬を帯び、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。多年陸軍々醫界に活躍して貢獻する所あり、該博なる學識と共に卓越せる手腕を有し、民間治療界に精進して以來愈々其の特技を發揮し、診療手術の好評と相俟つて益々内外の信望を博す。今や四國醫博界の中堅たる斯科の大家として矚目せらるゝも偶然にあらず。

△學歷より見たる博士は、大正五年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに陸軍見習醫官拜命、同六年六月任陸軍二等軍醫、補歩兵第六十四聯隊附、同七年八月第六師團軍醫部々員、同九年九月東大大學院入學、近藤教授指導の下に一般外科學研究、同年十月任一等軍醫、同十二年九月大學院退學復職、東京第一衛戍病院附、同年十一月大阪衛戍病院附外科主任、同十三年八月日赤大阪支部病院兼務、同十五年十一月學位受領、昭和二年夏任三等軍醫正、補京都衛戍病院附、昭和三年八月支那駐屯軍病院長として天津に赴任北支事變に活躍す、次で昭和五年八月陸軍退職後現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「胸腺X線照射ノ實驗的研究」にして、參考論文なし、他に發表の論著夥多あり。(1)胸腺ト惡性腫瘍トノ關係、(2)惡性腫瘍ト體質トノ關係、(3)結核性淋巴腺炎ニ對スルX線作用ノ知見、(4)廣蓄性尺骨神經斷裂能合ニ就テ、(5)「ペリドール」ノ肉芽發生並ニ上皮形成促進劑トシテノ效果、其他枚舉に遑あらず。

△熊本市北千反畑町の出身、醫博坂田圭一の弟也。明治二十三年生れなれば當年不惑に入る六歳、年壯の意氣益々壯にして多量の分別を有す。賦性謹直にして高潔、人と接するに快活にして愛想あり、同情に富む、殊に患者に對する態度の眞剣にして、誠實と親切とを盡す點は其の篤き聲望を博する所以と見るべき也。多趣味の人にして、研究以外には謠曲、繪畫、寫眞などを能くし、又旅行、登山、漁獵などを好む。愛媛縣新居濱町惣開に住む。



野村久中

△一宮市南石野町十五番地野村病院長として、野村久中博士の噴々たる名聲を聞くや既に久矣。博士は京大系の外科學者にして、外科界の泰斗猪子止才之助教授、故伊藤隼三教授の愛弟子として知られ、多年恩師の指導を受けて造詣する所あり、後に又愛知醫大教授林直助博士に就きて病理學を研鑽し、母校より學位を得たる斯科界の名醫博也。開業既に二十有二年を閲し、學術の研究と共に臨床に多年の經驗を有し、玲瓏たるメスの評判は益々遠近に喧傳し、繁榮歳と共に牢固たる地盤を築き、今や卓然として群を抜き一流に在り。

△博士は愛知縣一中、六高を経て、明治四十一年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學外科教室副手として猪子教授に、次で伊藤教授指導の下に一般外科學を研究す、同四十二年京都私立東山醫院外科醫長就任、大正二年一宮市にて開業、昭和三年九月現住地に新築移轉今日に至る、其間大正十二年より愛知醫大病理學教室にて林教授の指導を受け、同十五年十二月學位を授與せらる。

△主論文は「家鴨腫瘍ノ實驗的試食ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)名古屋市ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計ニ就テ、(2)愛知縣下ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計的研究、(3)岐阜大垣市ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計ニ就テ、(4)岐阜縣下ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計的研究、(5)家鴨腫瘍ノ飼食的試驗第一報告の五篇なり、其他少からざる論著